

# 一人の男とガールズバンド達

AZAZEL

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

静かな日常を望み、それを夢として生きて行こうとする一人の男

然し、どうやらそうもいかなさそうな彼の日常

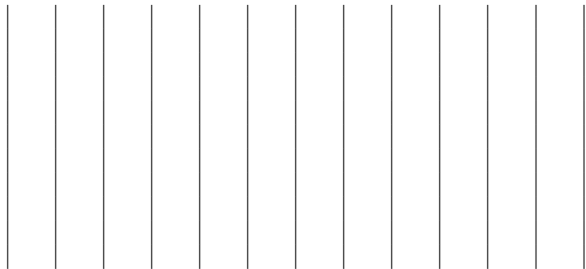
そんな中でもどうにか静かな日々を過ごそうとする彼の話

# 目次

9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話	本編	イラストオ	番外
107	95	83	70	57	45	32	19	5			1

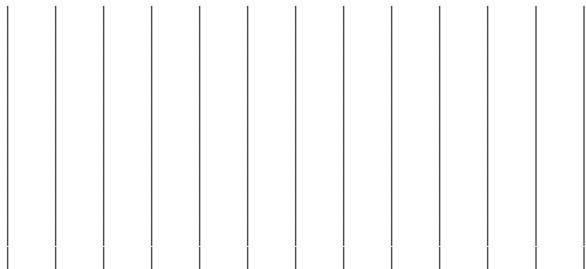
2話	2話	2話	1話	1話	1話	1話	1話	1話	1話	1話	1話	1話
279	266	253	240	227	215	201	185	171	156	145	134	122

3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2 2 2  
5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3  
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



439 427 414 401 388 377 365 352 340 328 316 303 291

4 4 4 4 4 4 4 4 4 3 3 3 3  
8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6  
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



600 587 575 563 551 539 527 515 503 488 476 463 451





## 番外

## イラストオ

はいどうも、作者のAZAZELデス

まあ題名からお察の方も多いでしょうが…なんとね、今回ね…超絶嬉しい事に幸貞君の絵を描いて貰っちゃいました

超感謝、ドウゲザして崇め奉ってもいいくらいと言うかささせてくれ  
ていう訳で←にあるので見て下さい

この絵を描いて下さったのはミラティブという配信アプリで仲良くさせて頂いてる方に描いて頂きました

マジ神、超神……いや本当に有難い（語彙力）

多分、御本人のTwitterにも上がっていると思っただので自力で探して下さい……名前を出していいかは御本人に確認が取れてないので

そして本編どうしたクソ作者と思っただ方々、只今作者は就活に直結する大事な中間テスト中なので

これ落とすとかなりヤバイのでマジで勘弁して下さい

テストが終わったらスグに書くのでお兄さん（お姉さん）許して下さい！

はい、という訳です……本編はスグに書くからね？勘弁してね？（執拗い）

ていうかこれって1000文字なきや投稿できないんですね……何話したらいいか分からない

正直イラストしか上げる積りしか無かったので相当困ってる作者です

そうだ、もう一つの方も上げておきましょう……これはいずれ本編に出そうと思ってるやつです



扱いとしてはストラップです、どのタイミングで出すかは未定です

あと何かリクエストとかがあったら是非活動報告欄にコメントをお願いします（執拗い）

いやまあ、正直な話ね？リクエストとか難しいだろこの作品ってのは何となくわかっています

もしアレだったらifルートとかでも構いませんのでどうかこの作者めにネタを分けて頂けたら幸いです

はあ、あと300文字も何を書けというのやら……ヤンデレの話でもしましょうか？

え？止めとけって？じゃあ止めます…ならミラティブについて少し話しましょう  
知っている方もいると思いますが、Mirrativというアプリがあります

このアプリを使うと誰でも簡単にスマホからLIVE配信したり他の配信を見たり  
で出来ちゃうアプリなのです

最低限のネットマナーを守れば基本的にみんな優しいです、但しマナー違反者には結  
構容赦が無い人達もいますので使う際にはご注意ください

さて、こんなグツグツダダな作者の話を聞いて頂き本当に有難うございます…今日『頂  
き』って文字多いな

んなことアどうでもいいんだよ、本当にグダグダで申し訳ありませんでした

では皆様、『二人の男とガールズバンド達』いつもお読み頂き有難うございます  
これからもよろしくお願い致します

## 本編

## 1 話

将来の夢は何か……そう聞かれれば『平穩で静かな日々を過ごしたい』、そんなどつかの爆殺魔じみた事を言っていた

決して俺は手を見て興奮したりはしないのでそこんとこ宜しく

唯、俺は昔からそんな事を思いながら……そして目指しながら生きてきた

平穩で、静かで……それが夢であり目標であったから

「お願い！この通りだから!!」

「絶対嫌だね、断固拒否する」

「お願いだよ！アタシと幸貞ゆきさだの仲じやくん！」

「い・や・だ、何と言われようが絶対にお断りだ」

自己紹介が遅れたな、俺は導寺峠どうじょうづげ 幸貞

どこにでもいるような普通の男子高校生の根性を捻じ曲げて性根を腐らせた様な男  
さ

それでもって俺の前にいるのは幼馴染、今井リサ

めっちゃギャルっぽいが普通に良い奴である

「大体、何で俺なんだよ…他に適任者が居ただろうが」

「だって幸貞、頭いいでしょ？それにお金の回し方とかチョー上手いし…絶対マネージャーに適任なんだって」

「マネージャー位だったら他の奴でも成り立つっての」

「アタシの身近には幸貞しかないの、お願い！」

「何度言われようが絶対にやらないからな」

何をこんなにせがまれてるかと言うと…最近、リサはRoseliaと言うバンド始めたらしい

そのマネージャーをやってくれと頼まれたのだ

因みにそこにはもう一人幼馴染がいるのだが、やりたくない理由の内面倒臭いからの次に挙げられる理由がそれだ

「本当にマネージャーが欲しいんだったら他を当たりな」

「むく…：ケチだなあ」

「俺は平穩で静かな日々を送るのが夢なんだよ、面倒事に巻き込まれてたまるかよ」

「まだそんなジジ臭い事言ってるの？」

「喧しいわ、じゃあ俺は帰るからな」

何か言いたげな顔を全開に出したりサを完全無視して家へ帰る

現在、親父と母親は単身赴任で家にいない……まあ仕送りは毎月送られてくるし量がかなりえげつない

家では姉二人と暮らしている

ああ、そんな事よりまた明日も学校だア……巫山戯やがってこの野郎め

因みに俺の通う学校は花咲川学園高校、最近まで女子校だったのだが試験的に共学となっていた

頭もそこそこで家から近いし共学の試験生に選ばれば豪華特典も付いてくる、こりゃ受けるしかないっしょ

そんな事を思ってた頃が自分にもありましたよええ、俺は別に出会いを求めて花咲川に行つた訳では無い……まあそれなりに女友達増えたよ？但し大半の奴は相手するだけ面倒臭い

「たあだあいいまあ」

「何そのやる気の無いただいま……おかえり」

「いいだろ別に、そんな気分なんだよ」

「またリサちゃんから誘われたの？ いい加減に諦めて話に乗ったらいいじゃない」

「お断りD A、面倒ごとに首を突っ込むのは嫌いなんだよ」

今話しているのは下の姉、導寺峠 華蓮かれん

俺とは違ってやれば出来てしまう秀才型、身内鼻肩無しに美人でスタイルいいと思っ  
ている

因みに俺はやったら出来そうだけどやらない奴である

まあ不思議な事に彼氏を一回も作ったことがないのである

まあ姉と言っても、俺より数分生まれるのが早かったただけなので年齢は同じ

「本当、アンタの性格って誰に似たのかしら？」

「さあね、そんな事どうでもいいだろ」

「……まあそうですね、姉さん帰ってきたら晩御飯にするから」

「へー」

という訳で一番上の姉が帰ってくるまで部屋に籠る事にしました

まあ音ゲーやってるだけなんですけどね

30分たった頃に姉が帰って来た

「ただいまー、ちよつと遅くなっちゃってゴメンね〜」

「いいよ別に、着替える序に幸貞呼んできて」

「はいよー」

という会話が聞こえたのでそろそろこの部屋に姉が来るな

「幸貞ー！姉が帰ったぞー！」

「うるせえ」

「あでっ！」

思いつ切り近くにあつたタオルを姉に向けてぶん投げる

此奴は導寺峠 あきな 晶奈…導寺峠家の長女であり、華蓮と同じ位に美人である

そしてこの人はやらなくても出来る天才型

姉妹揃ってハイスペックなのは勘弁して下さい、俺は一体誰の血を引き継いだのやら

「ご飯出来るから降りてきてだつてよ」

「はいはい、了解しましたよ」

飯食つてさっさと寝よ……あ、勿論風呂は入るよ

翌日

「じゃあ行つてくんね」

「いつてらーしゃあああいい」

「ウゼエ」

「酷い」

「コントやつてないで早く行きなさいよ」

「今のは晶奈が悪いだろ」

「遅れるわよ、早く行きなさい」

「へーい」

という訳で学校へ向かいますか

あー面倒臭いなー、何が面倒かって面倒なんだよ（語彙力）

「あ！幸貞君だ！」

「はい出たー、面倒臭いの出たー」

「いきなり酷い!?!」

「なあなあ香澄ちゃんや？人が学校面倒臭いつて思つてて心が折れそうな所にトドメを刺しに来るのはどうかと思うなー」



「ええ!？」

「何言つてんだよお前、そんなもんお前次第だろうが」

はい正論頂きましたね

初めに話しかけてきた娘は戸山香澄、やたらと元気で俺の周りをチヨロチヨロチヨロチヨロしている

次の娘は市ヶ谷有咲、金髪ツインテでツンデレは鉄板だよ

あと二人ともPoppin' Partyというバンドをやっている

「半分冗談だよ、悪いな」

「半分は本気なんだな…」

「学校面倒臭いは本音つて事だよ、それじゃ先行くから」

「あっそう、また後でね」

「へいへーい」

因みに香澄は「あ!ちようちよだ!!」とか言つてフラフラどつかへ行つたので有咲に任せた

てかガキかよ

さあ、少し歩いてスグに校門へと着きました

急いで教室に向かわな「幸貞くーん!」ければ……

「あー人違い人違い、幸貞なんて人は此処にはいませーん」

「何が酷くない!？」

「俺は丸山彩なんて人は知らないのこの辺で」

「ちよ、ちよつと待つてよ〜!!」

「……はあ、何か用ですか？丸山先輩」

「私の扱い酷くないかな〜…」

「この人が一つ上とか信じたくない

丸山彩、*pastel*\**palette*と言うとアイドルバンドのリーダー兼ボーカ  
ル

「ねえねえ、今日お昼一緒に食べない？」

「他の人誘えばいいじゃないですか」

「いいじゃんいいじゃん、一緒に食べようよ〜」

「じゃあジュースおごつて下さいね先輩、それじゃ」

「え!?!ちよつと待つてよ!?!」

逃げる様にすササツと走る、一直線に教室へ向かった

やつと俺の安全地帯へと入れる…ここに来るまでかなり疲れたんだが、もう帰つて宜しいか？

あ、ダメだ…お昼行かないと多分泣かれる

「はあ、面倒臭いなあ」

「おはよう、幸貞」

「近い近い、花園さん近い」

目の前に顔がサムズアップされた、ビックリするから止めてくれ

花園たえ、あたまわるい香あたまわるい澄と同じ位にバンドに所属する天然(?)な娘

「急に横から出てこないでくれ、心臓に悪い」

「おたえ」

「断る、たえ」

「おたえ」

「たえ」

「おたえ」

「たえ」

「おたえ」

「たえ」

「………ねえ、いつまで続けてるの?」

「どちらかが折れるまで、甘く見るなよこういう意味不明な所では俺のメンタル強度は

「百べえだ」

「面倒臭いし性格悪いよそれ」

「この娘は山吹沙綾、たえ（おたえ）コイツ直接脳内に：!？」

「まあそんなこたアどうでもいい、まあ上のヤツと同じバンド

「そんでもって商店街にある山吹ベーカリーってパン屋の娘

「まあ面倒臭いので俺は早めに退却しマース」

「あ、逃げた」

「結局逃げるのね」

「そそくさと自席へと逃げる、メンタルは耐久できるけど面倒臭いが勝つな

「ああ、お昼面倒臭い」

「ちやんと食べなきやダメだよ？」

「そういう事じゃないんよ沙綾さん、流石に俺でも食べる事まで面倒だとは思わない」

「あ、そうなの：：じゃあどうしたの？」

「何その『あ、意外』みたいな言い方は：はあ、丸山先輩に昼飯誘われたんだよ」

「良かったじゃん、アイドルと昼食取れるんだよ？」

「いいや良かないね、俺は一人黙々と食べたいんだ」

「だから友達できないんじゃないのかな？」

「別に要らんだろ友達、出来て得する事あるか？」

「そういう所が悪いと思うなあ」

だつてあんなの薄い言葉ひとつで成り立つてるボロボロな建前だろ？ そんなもの作る必要ないつて

まあこんな捻くてるから屑なんだよね、そこははつきりわかんだね

「ああそうだ、チヨココロネに合うハーブティー作ったからりに渡したい」

「お、新作？分かった」

紙袋を鞆から取り出し沙綾へと渡す

りみつてのは牛込りみ、まあこの流れから言うとお察し香澄達と同じバンド

確か上の学年にお姉さんが居たような気がしたけど、あまり知らない

因みにりみちゃんもチヨココロネ教徒である、それはもう凄まじい…その為前に『チヨココロネに合うハーブティーでも作ろうか？』つて言つたらめつちやお願ひされ  
た

正直に言つて可愛かつた

「あ、そろそろチャイム鳴るね…そう言えば香澄来てないね」

「朝から蝶々追いかけてるよ、多分有咲が捕まえに行つた」

「あ…香澄をね、じゃあ私は席に戻るね」

「んー」

ホームルームや授業なんかは特にこれといってなかった

ああ、敢えて言うなら遅刻ギリギリに香澄が滑り込んで来たぐらいだろう

有咲も大変だなあ（他人事）

だってこの後が大変なんでもん仕方が無いだろ

という訳でお昼がやってまいりました

「ゆつきさっただくーん！」

「はい脳内ピンク先輩お呼びでしようか」

「本当に私に対して酷くなくいい!？」

「幸貞、相変わらずだね」

「あー!彩せんばーい!」

「香澄ちゃんーん!」

今の内に逃げようかな、今だったら行けるよな…よし行こ「あれ?どこ行くの幸貞？」

わああ、沙綾さんタイミングウ

「あ!逃げないでよ幸貞君!」

「チツ、さては狙ったな沙綾」

「ご名答」

「本当だったのかよ畜生」

「じゃあ行こー!」

ちよつち待つてちよつち待つて、流石に手を繋ぐのは不味いんじゃないでしょうか?

貴女アイドル、私一般人: Do you understand?

そんなことを言う暇もなく引つ張られて行く

「何処まで行くんですか?」

「中庭だよー、今日は温かいし外で食べよう!」

「へーい」

引つ張られるまま中庭へと連れ出された、真ん中にちよつち木が生えておりそれを囲むようにベンチがある

まあそこで食べるんだろな

「あ、見えてきた」

「ああ、そうですね……ん?」

ふと、ベンチに座る女性が見えた

長く煌めく金色の髪、どつからどう見ても日本人には見えない綺麗な顔立ち(ガッツリ日本人)

……成程な、そういう事が

「あら、彩ちゃん来たのね」

「うん！ちゃんと幸貞君も連れてきたよ、千聖ちゃん！」  
「そうみたいね」

嵌めやがったな脳内ピンクめ、こんちくせう



## 2 話

「じゃあご馳走様でした」

「ええ!？」

「まあ待ちなさいよ幸貞君」

速つ、いつの間に俺の近くへ：阿修羅閃空でも使ったのかね？

肩を掴まれ、そちらの方へ顔を向けると

「お久しぶりね、ゆ・き・さ・だ・君」

「こんにちは女王様、俺はモダ○ン5でキルレ上げなきやいけないから帰りますね」

「誰が女王様よ、まあ元より逃がすつもりはサラサラ無いけどね：貴方さつき彩ちゃん  
と手を繋いだでしょ？」

チツ、脅しに入りやがった：はあ、こうなったら面倒臭いからなあ

癪だが従うか

「はいはい、一緒に食べればいいんでしょ？」

「あら、話が早くて助かるわ」

仕方無いので嫌々ながらベンチへ腰掛ける：すると左に白鷺先輩、右に丸山先輩が座

る

「何この嬉しくない両手に花

「じゃあ食べましょう」

「そうだね、いっただつきまーす！」

「はあ、何故この配置」

「何か言ったかしら？」

「イイエ、ナンデモ」

言うとは碌でもない事になりそうなので黙っておくことにした

手持ちのサンドイッチを膝の上へ出しラップを広げ、口へ運ぶ

「それで、俺を呼んだってことは何か話すことがあるんでしょ？」

「私が単純に貴方と昼食を取りたいって選択肢は無いのかしら？」

「有り得ないですね、存在し無いですよそんなもの」

「…まあ理解が早くて楽だけど、イマイチ詰まらないわね」

「それで、本題は？」

「単刀直入に言うけど、私達のマネージャー…いいえ、お手伝いでもいいの…なる気はな

い？」

何度目だろうかね、このお誘い

残念ながら俺の答えはいつだって同じで変わることがない

「お断りします」

「……はあ、だろうと思つたわ……ならこれだけ教えて頂戴」

「何ですか？ 答えられる範囲なら答えますよ」

「今の私達に足りない物つて、何かしら？」

「足りない物ですか？」

「そう、初めて貴方に歌を聞いて貰つた時に貴方が言つた事よ……私達には何か足りない  
いって」

あー、そういうやそんな事を言つたな

香澄經由で丸山先輩と仲が良くなって（一方的）、それでもつてセンスある！とか香澄  
が豪語するもんだから聴いてくれて言われた時のか

「それで、何かしら？」

「んー、本当に足りない物を分かつていない……つてのが足りないんじゃないですかね？」

「それだと質問の反復なのだけれど？」

「いやだつて考えてみて下さいよ、俺は貴女達じゃない……考えを聴くことが可能だとし  
ても完全に理解することなんて到底不可能なんですから、本当に足りないものは自分し  
か分かりませんよ」

まあ、こんなの答えを出すという道を避けるための言い訳みたいなものだけどね

「でも口出しをしたのは貴方よ？」

「まあそれはそうですね、でも俺が答えを出したところでそれは俺の考えであつて貴女達の考えじゃない……それじゃ意味が無いんじゃないんでしょうか？ 結局のところ自分を自分で何処まで理解出来るかつて話ですから」

「……言いくるめるのが上手いわね、貴方」

「信念も誇りも捨てて身軽になつた人間の考えつてやつですよ」

「トコトン駄目人間なのね……まあいいわ、己は己で磨けつてことね」

「まあそういう事ですよ、それで納得して下さい」

「仕方無いわね」

取り敢えずお昼を乗り越えることが出来た俺氏、一先ず安心できる

いやーあの女王様相手にどれだけ持ち堪えられるかと思つたが、案外上手くいったな  
さあて午後の授業頑張つてさっさと帰ろう

なんて事は出来ませんでした、なんでや…何がいけないや…

「幸貞くん！私達のセッション聞いてよ！」

「嫌だね、俺は早急に駅前のゲーセンに行つてC□UNIT□Mやらなきやいけないんだ…あと少しで金レートなんだよ邪魔をするなア」

「え〜いいじゃん〜、一曲！一曲だけだから！」

「嘘おつしやい、一曲で終わつた試しが無いだろうが」

香澄が俺の腰から離れません、コイツ何気に力強いんだよ

しかもサラツとたえまで俺を羽交い締めにして引き戻そうとしてきやがる

何素知らぬ顔してんだよお前

「H A ☆ N A ☆ S E、俺はゲーセンに行きたいんだ」

「うう〜！一曲だけだから〜…お願い!!」

「そろそろ諦めたら幸貞、私腕疲れてきた」

「なら離せばいいんじゃないでしょうかたえさん、そしたら万事解決だ」

「おたえ、さんはいつ」

「だが断る、たえ」

「おたえ」

「たえ」

「おたえ」

「たえ」

「おたえ」

「たえ」

「またやつてるの……コラ香澄、そろそろ離してあげなよ」

「おお、ナイス沙綾様……俺もそろそろ腰の力がやばくなってきた頃だったんだ

「ええ、沙綾はいいの？ 幸貞君程適任者はいないんだよ？」

「本人が嫌がってるのに無理矢理はダメだよ」

「うう……はーい」

「はあ、明日腰筋肉痛かな……結構きつい」

「また気が向いたら言っつてね幸貞、待ってるから」

「そうかい、まあいつ気が向くか分からんけどな」

「そう言っつて教室を出て行っつた、目指すはゲーセン一直線

もう誰にも俺を止められねえぜ

そんな事を思っつた時期が俺にもありましたよ……校門の前にリサが立っつていたの

だ

「あ！やっと来た、もー待ちくたびれちゃったよ〜」

「じゃあ帰ればよかったんじゃ無いツスカねりサさん」

「むー、そんな言い方する事ないじゃん幸貞」

「こりゃ失礼、言葉選びは苦手だね…それで何用かね」

「久し振りに一緒に帰ろうかなーって思ってたね」

「え、でも俺これから駅前のゲーセンに…」

「ん？何？」

「イエナンデモ」

何で俺の知り合い女性陣は皆怖いんでしょうか、やっぱり男は尻に引かれるのがオチなのか…

「……それで、お前の後ろにいる銀髪の美少女さんは誰かね？」

「えーっと、あはは…」

苦笑いを浮かべながらバツの悪そうな顔をするリサ

最初から気ままずくなるの分かってるなら二人で帰ればよかったのに、何を血迷ったのかね

「久し振りね、幸貞」

「ああ、随分と見ない内にまたクールになったな…友希那」

もう一人の幼馴染み、湊友希那がリサの陰に立っていた

俺とコイツは別に仲が悪い訳では決して無い、だが昔から俺はコイツが苦手だった…  
付け加え前に俺が言った言葉により更に関係がギクシヤクというか気まずくなっている

どう考えても自業自得ですなはい分かります

「ていうか、友希那がいるなら二人で帰ればよかつたんじやないか？」

「リサがどうしても貴方と帰りたいていうから、仕方無くよ」

「あ、そう…じゃあ帰るぞ」

だがその後、皆喋ろうとしなかった…というか迂闊に喋れない

（おいリサ、お前がこの状況を招いたんだからどうにかしろよ）

（ええ!?そ、そんな事急に言われても…）

アイコンタクトでリサへそう訴えかけるが、あまり期待できそうにないな

チツ、元凶のクセに

（後で覚えてなよ?）

心読まれてーるね、おおくわばらくわばら

共通な話題とかもないし…まあバンドの話はしない方がいい、また面倒臭くなる



この空気：思った以上にキツツいなあゝ

私には幼馴染みが二人居る

一人は今井リサ、昔から人に気の使えるいい友人だわ：今のRoseliaだつてリサの支えは大きい

だから感謝するべき親友であり、大切なバンドの仲間

そしてもう一人、導寺峠幸貞

幸貞もリサと同じ頃から一緒にいた、第一印象はかなり大人びていた子供とは思えない程に物静かで冷静沈着という言葉がピッタリだった

高校までは特に何も無く静かに過ごしていたと思う

高校になって、私がバンドを始めた頃：一番最初は昔からの友人に聞いてもらおうと思っていた

リサはバンドメンバーなので、残っているのは彼だけだった

演奏後は「良かった」としか言わなかった…しかし私はどうも気になって帰り道に感想を更に追求した、そして彼が言った言葉

「バンドとしても演奏としても申し分無い程に完成されている、だが一体感が足りない」「一体感？」

「ああ、お前達の目標は何だ？ FUTURE WORLD FES. に出る事か？ならばメンバー全員がその目標だけに向かって歩いていくのか？」

「私達は同じ志を持って集まったのよ、同じ目標を目指して歩いているの…馬鹿にしなさい」

「本当にそうか？ そう思っているのならお前らはまだまだ甘い、全員がお前のように一つの目標へと志せてはいないな…別の問題を抱えてそちらにも悩んでいる…それじゃあ同じ目標を持つてるとはいえねえな」

一息付き、また口を開く

「お前らにとつて友情ってなんだ？ 絆ってなんだ？」

「いきなり何よ…長い付き合いから生まれる信頼感じゃないかしら」

「ほー、成程…ならお前らにそれはあるか？」

「…何が言いたいのかしら？」

「信頼感…絆…友情…こんなモノ言葉一つで言い表せてしまう程に脆く弱い繋がりだ、他人に自分達が持つその繋がりがどれ程強いモノだと示すには言葉なんかじゃ伝わらねえな…ま、あとはバンド仲間達と話し合って決めてくれや」

そう言いながら背を向けて歩いて行く…しかし、途中で足を止めてこちらに振り向いた

「ああそうだ、水色の髪した女の子…あの子は気を付けた方がいいぞ、ありや両刃の剣だ」

そう言い残して帰った

それから暫く時間が経ち、彼のお陰かバンドとしても私達個人としても成長した

彼の助言通り、一度集まり目標への話し合いをした…そして一つの目標へ全員の姿勢を向ける事が出来た

そして恐らく彼が危惧していた紗夜について、妹との付き合い方が分からず悩んでいたという事も分かった

それについても少し進歩があり、少なからず昔よりは前に進めたと思っっている

そして私は幸貞を Roselia へ勧誘した

「幸貞、Roselia に入ってみる気はない？」

「…俺がお前のバンドへか？」

「そう、貴方のお陰で私達は更に成長する事が出来た……でもまだ上を目指して歩む積もりよ、だから貴方の力を貸して欲しいの」

「悪いがその誘いは断らせてもらおう」

迷う素振りもなくそう断言した

「理由を聞いてもいいかしら？」

「理由ねえ……気を悪くさせたら濟まん、俺はお前が苦手なんだ」

正直に言つて衝撃だった……彼から苦手意識を受けたことではなく、彼が苦手意識を持つことに

「……私、貴方に何かしたかしら」

「ああいや、そういう訳じゃないんだ……別に俺はお前の事を嫌つてる訳じゃない、少し苦手なんだ」

「……そう、なの」

「お前の音楽へ向く姿勢も、音楽へ掛ける情熱も全て認めているしむしろ尊敬する……だが、それでも俺はお前がどうも苦手だ」

彼はそれだけ言うと、背を向けて帰ってしまった

私自身を否定されたような気がした

しかし、不思議と嫌な気持ちは湧いてこなかった：寧ろ心がまた熱くなった  
いつか必ず彼に私達の音楽を：そして私自身を認めさせる、そう心に強く思った

## 3話

かれこれ沈黙を保ちながら歩くこと数十分、矢張り欲というのはいくらも我慢出来ない道のりのに駅前通りが帰り道から見えてしまう…そして自動的にゲーセンが目に入ってしまうのだ

「……なあ、やっぱゲーセン行ってきていい？」

「え？あ…う、うん…そう言えば校門でそんな事言ってたもんね」

「悪いな、どうもゲーセンが目に入ると欲が抑えられないもんでな」

「いいよいいよ、無理言ったのはアタシだし…あ！そうだ！アタシもついて行っていい？」

はい？何を仰ってるんだねこの娘は

何が楽しくて俺と一緒にゲーセンへ行こうと思ったんだよ

「何言ってるんだよお前、俺は音ゲーしかやらないから来てても詰まらんどぞ」

「いいのいいの！一回幸貞がその音ゲー？って言うのをやっているとこ見たいし！」

「それは私も少し興味があるわね」

何を仰ってるんだね友希那さん、貴女そんなタイプじゃないと思ってたのは俺だけな

のか？

「ほらく、友希那も興味あるって言うし……いいでしょ？」

「……はあ、この時間帯は馬鹿な奴等が多いから気を付けろよ……特にお前から周りと比較りや綺麗なんだから」

「へえ………へ？……うえ!？」

「……!？」

「何急に、どうした」

「い、いいいいいま……き、綺麗って」

「おう、言ったけど」

「………貴方、鈍感よね」

え、ああ……まあよく周りからは「鈍いなくお前」と言われるけど

何せ肺気胸やってかなり進行してたにも関わらず剣道・水泳と肺に負担かかる運動ばかりやってたからな

医者行つてビックリだよ、あと一歩で死んでたかもしれないってさ

本当笑い事じゃないよねハハハハハ

「何かよく分からんけど、取り敢えず行くぞ」

妙に顔の赤い二人に首を傾げながらゲーセンへ向かう

「幸貞って唐突にああ言うことサラツと言うから狡いよね」

「まあ、それが彼だから」

「ん？何か言ったか？」

「ううん、なくんにも」

「ええ、別に何も」

何か白々しいんだが、まあこういう話を根掘り葉掘り聞くのは良くないと思うから聞かないが

という訳で着いてC○UNIT○Mに直行、この時間帯は空いてるからレンコンし放題だぜ

てな訳でやりまショウタイム

「お〜！凄いな幸貞!!」



「ああああああ l m i s s ったアアアアア……もう最悪だよべらんめエ、こん畜生が」  
「何か幸貞が情緒不安定なんだけど、大丈夫？」

「大丈夫だ、問題ない」

「そ、そう……」

最悪だろ全く、まあ今のやつはそこまでフルコンしたい曲って訳でも無いし別にいいけど

「お前らなんか飲むか？付き合ってくれた礼に奢るけど」

「え、でもアタシが勝手に付いてきただけだし悪いよ」

「リサの言う通りよ、別に奢ってくれなくても……」

「まあ黙って奢られる、男が気前張ってんだから大人しく聞いとけ」

「……はあ、じゃあアタシは紅茶で」

「しょうが無いわね……私はお茶でいいわ」

「はいはい、じゃあちよつと待ってロツテのトップ」

自動販売機は確かあの角だよ……紅茶か、午○ティーでいいか

お茶は△鷹でいいか、あれ美味しいし……あ、でも確か友希那って苦いの駄目だっけ  
しゃーないな、○ーい○茶にするか

……はっ、俺の面倒センサーが反応した

これはまさかりサと友希那が馬鹿共に絡まれてるとみた、置いてこなきやよかった  
角から出ると案の定、頭の悪いようなDQN（偏見）に絡まれていた

「なあイイだろ姉ちゃん達、俺達と遊ぼうぜ？」

「いやあの、私達友達待ってるんで」

「それってもしかして男友達？ そんな奴より俺達と遊んだ方が絶対楽しいって」

「そうそう、俺の音ゲー見てるより遊んできた方が楽しいよ」

「……ねえ、何でサラッとそっち側にいるの？」

「え、だって面倒だし……こっちの方が楽だと思って」

「幸貞、最低よ」

「ちよ、友希那さん酷いッス」

「あん？……うおお!!? いつの間に!?!」

DQN達（偏見）の後から援護射撃していたのがバレた

友希那様がまるで養豚場の豚を見る目で俺を見てくる、やめてくれ……何か目覚めそうだから

スつと二人の後ろへ回り込む

「いやー悪いね君達、コイツら俺の連れなんで」

そう言いながら二人の肩を掴み、自分の方へ寄せる

俺の方が背が高いので頭の上から顔が出る

そして心做しか二人の耳が真つ赤なんだが…何かごめんね

「おいおい独り占めはズリーんじゃねえの？」

「そうだけ、一人貸してくれよ」

「何言つてやがる馬鹿共、コイツらは高えぜ？」

二人の肩を引き後ろへ下がらせる

「貸してもらいたきや手前の身体で払いな」

五人の内、真ん中に立っている男の顔面に俺の足がめり込む

瞬間…鈍い音と共にその男は後ろへ吹っ飛んだ

「な、何しやがる!!」

「ちよつと幸貞!!」

「まあまあ黙つて見てんしやい、何の問題も無いから」

「何の問題も無いって貴方、そう言う問題じゃないわよ」

「んー？学校にバレるってか？まあ取り敢えず見てなさいって」

前に視線を戻すと一人が殴り掛かって来ていた、馬鹿は単調で扱いやすい

本当に助かるね

「主は言いました、自分の右頬が打たれそうになったら…右手で受け流し相手の右頬へ

左ストレートを打ち込み、すかさず右脚で相手の左頬に蹴り込みなさいと……なんてね」

また一人顔面に蹴りを受けてダウン

コイツら弱過ぎじゃねえか、何かこつちが虐めてるみたいじゃねえかよ（煽り）  
「ほらほらどうした、もう尻尾巻いて逃げんのか？ 詰まんねえな」

「嘗めてんじゃねえぞテメエ!!」

また一人突っ込んでくるので顔面へ大振りの蹴りをお見舞する

また大きく吹き飛び、地面へ伸びる

「俺は手前らの事を嘗めちやいなさい、嘗める価値なんか微塵にも無いからな」

残り二人の顔を鷲掴みにし、力を加えていく

若干ミシミシと嫌な音が聞こえるがそれは気の所為気の所為

「いだだだだだだだ!!」

「ぎやあああああ!!あ、頭が割れるう!!」

「情ねえ声出しやがって、男ならもつとシヤキツとしろ馬鹿野郎」

一発つつ膝蹴りを鳩尾へとブチ込み、床へ放り投げる

それと同時に店内へ怒号が響き渡る

啞然としていた二人は唐突の大音量に肩をビクツと揺らす

「おいゴラア餓鬼共!! 店ん中で喧嘩するなって何回……ん? なんだ幸貞か、何奴ボコしたんだ?」

「ようおヤツさん、コイツら」

「あ! コイツら前に当たりクジの商品が入ってるショーケースブチ壊した奴らじゃねえか! お手柄だな幸貞!」

「ん、まあ喧嘩ふっかけたのは俺だけだね」

「んな事はどうでもいいんだよ、結果的に良けりやな……そこで腰抜かしてる嬢ちゃん達は? お前のコレか?」

そう言いながら小指を立てる、おヤツさん……表し方が古いぜ

「そんな訳ないだろ、幼馴染みだよ幼馴染み」

「随分と別嬪な幼馴染みを持つてんな幸貞、この幸モンめ!」

「はいはい、それより自己紹介でもしたらどうだおヤツさん」

「それもそうだな、俺は鬼牆おにがき 玄四郎げんしろうってんだ宜しくな!」

見た目はどう足掻いてもヤツさんなおヤツさん、このゲーセンの店長である

大柄で声もデカく野太い上に顔まで厳ついときたもんだ、初対面の人は確実に「あ、この人ヤバイお人だ」と思うかもしれない

が、おヤツさんは普通に気前のいいオッサンである

そして俺の通うこのゲーセンには世間一般で言う不良馬鹿共と言われる奴等が沢山いる

だから人は余り近寄らない、まあいつも音ゲー台空いてるから不良様々なだけだね  
「よ、よろしくお願いします」

「宜しくお願いします」

「いやーにしても幸貞にこんな別嬪な幼馴染みがいるなんてなあ、しかも二人もよお」

「その話はもういいだろ、てかもうそろそろ帰るぞお前ら」

「あん？もう帰んのか？なら今度来た時に500円分奢つてやる」

「いつも悪いなおヤツさん、じゃあな」

「おうー！」

因みに帰り際、入口付近に不良共が屯していたのだが俺が近づくと「ああ！幸貞さん  
チィーーツス!!」と言つてどいてくれた

この前ボコした奴等だわ

「何か幸貞、番長みたいだね」

「今の時代に番長とかいるのかね、流石にもう時代遅れだろ」

「あはは、それもそうだね」

その後は二人と他愛もない話をしながら家へ帰宅した

家に帰つてからは特に無かった……いや、敢えて言うなら晶奈が「ねえねえ!!どつち

が本命なの!? ねえねえ!!」と煩かったので蹴り飛ばした  
てか何の話?

翌日（休日）

やっヴァイ、ゲーセン行き過ぎて金が無いや

これどうしようかな…あつそうだ（唐突）バイトでも始めようかな

コンビニは…あ、ダメだリサがいる…一緒の所はちよつと勘弁

後は…沙綾のところもいいかなつて考えたけど、他の奴らに見られたら面倒だな

時給いい所は…お、Circle? ライブハウスか

…自分から音楽に関わりに行くあたり俺も馬鹿だよなあ

「君が幸貞君で良いのかな?」

「はい、よろしくお願いします」

てな訳で面接受けに来ましたよはい

やっぱ金には負けるよね、しょうがないね

このまりなさんって人、めつちや綺麗やな

「えっと、音楽の経験とかある？」

「いえ、無いですが幼馴染みが音楽をやっています…多少の事は分かります」  
「機材とか扱えたりする？」

「扱えますね」

リサとか香澄とかあとピンク<sup>影</sup>頭とかがたまに頼んでくるからね

「……よし！君採用！」

「はい……え？早くないですか？」

「機材扱える人材は貴重だし、何より男手が欲しかったからね！」

との事で早速今日からお仕事が始まるそうです（現在9時）

それでいいのかなりなさん、まあいいんだけども

「取り敢えず今日は予約があるバンドがあるからセッティングとか頼める？」

「やる事さえ分かれば問題ないです」

「うん！よしよし、やっぱり男手がいると楽だね〜」

上の話と全く関係ないがさつきまりなさんから聞いたんだがこのライブハウスはどうやらガールズバンドが多いらしい、というかブームらしい

そうなのかい、と思いつつセッティングを始める

このアンプ調子悪くないか？線とか接続関連じゃないとするとアンプ自体に問題が



あるのか

いま工具つて持って来てたっけな、荷物の中に簡易工具があつた筈だが  
工具を持ってきて少し作業しているとまりなさんが来た

「どうー？上手くやつて……つてうわ!!何してるの!？」

「あ、どうも……いやアンプの調子が悪そうだったので、少しメンテしてます」  
「で、でもあと一時間で来ちやうよ!？」

「十分で終わるんで問題ないです」

「え！嘘!?!速すぎじゃない!？」

それから十分

「後はこの辺をチヨチヨイとして……はい、終わりました」

取り外していた部品を全てつけ直し、試運転をまりなさんにしてもらう

「す、凄い……前より音が綺麗になつてる」

「よし、じゃあ取り敢えずセッティングは終わりですかね……次の仕事は……」

「幸貞君!!」

「な、何でしょうか」

「ウチで正式に働かない？」

「えっと、それはここに就職するという事ですか？」

「そう、勿論答えは急がないからしつかり考えて…それに高校を卒業してからでいいから」

「わ、分かりました…取り敢えず考えときます」

まりなさんの目がガチだった、ここに就職かあ…バイトの時給から見ると正社員の給料は悪くは無いだろうけど

まあ、急がなくていいって言われたし…じっくり考えるか

「受付の仕方はこんな感じかな、まあ基本的に予約の人が確認して鍵渡すだけだから難しくはないかな」

「接客は出来なくは無いので、多分大丈夫です」

ていうか受付は基本的に暇らしい、楽な仕事もあったもんだな

てか本当に暇だった、予約のバンドが来るまで誰も来なかった……が、問題なのは来たバンドというのが

「えっ！幸貞君ここで働いてるの!？」

「香澄！あんまデカい声出すな…ってマジか!？」

おおジーザス、なんとという事だ……いやてか完全コイツらがバンドやってんの忘れてた俺の所為だなん

## 4 話

しかし、まさか予約のバンドがコイツらとは思ってもいなかったZ E

「本当に幸貞だろ、バイト始めたの？」

「よう沙綾、まあ最近金欠気味なんでね」

「うちで働いてくれればよかったのに、そしたら色々面白そうだったんだけどなあ」

「一回考えて『無いな』って判断を下したから」

「何かそれ酷くない？」

それに基本的に俺って接客したくない派なんだよね、どうも苦手なんだよね

まあ下手くそって訳じゃないし出来ないわけじゃ無いから…ま、多少はね？

「まあそれより、はいこれ鍵」

「あ、どうも…じゃあ頑張つてね、ほら行くよ香澄ー！」

渡した鍵の部屋へ向かう…と、その前にチヨココロネ教徒のりみちちゃんがこちらへ来た

「あ、あの…ハーブティーありがとう…ごさましたっ！」

「ああ、どういたしまして…チヨココロネとどうだった？」

「凄く合いました！本当に美味しかったです！」

「おうそうかい、じゃあバンド頑張つてね」

「は、はいっ！ありがとうございます！」

そう言つて走つていった

あのチョコココロネ狂信さえなければ完全に美少女だと思ふんだよね

暇だな…新聞でも読むか

近くの棚に音楽雑誌やらと何故か新聞が刺してあつたので、それを少々拝借しようかな

少し時間が経ち、次の予約者が来たようだ

「すみませーん、予約してたものなんですが」

「はい、では名前を教えて頂きたいのですが」

「羽沢で予約してると思っています」

「羽沢…：…ありました、ではこちらの鍵です」

「ありがとうございます！皆行くよー！」

またガールズバンドなのかな、てか羽沢つて…確か商店街に羽沢珈琲店つてあつたよな、あそこの娘さんなのかな？

てか待つて何あの娘、背高つ…凄いな女の子なのに、そしてイケメンだなルックスが

話が少し聞こえてきたのだが、どうやらメンバーがあと一人来てないらしい遅刻か、まあ大目に見てやれよ…ん？自動ドアの向こうで走っている女の子が見える、あの娘かな

ちよつち待つて…何あれ、嘘だろデカッ

いや何がって、もう…デカいんだよ（語彙力）いやてかデカイ（説明不要）

もう走つてると揺れる揺れる、凄いなあの娘…まあジロジロ見てるのは失礼だろうか  
ら新聞へと視線を戻す

赤いメツシユが入った娘に怒られていたが、スグに部屋へ移動した

それからは大分暇だった、客は来ないし予約者もさっきのグループで最後だったよう  
で来ない

ずっと新聞読んでるつても詰まらないのとある資格の過去問集を読みながら頭  
の中で解いていた

「幸貞君お疲れ様、今日は初日だしもう上がっていいよ」

「あ、お疲れ様です」

「どう？仕事の方は」

「まあ大丈夫ですね、心配な事は無かったですし」

「そっかそっか、それは良かったよ…あ、そうだ…今度はいつ来れるかな？」

「そうですね…正直言つて毎日暇なので、行けない時だけ連絡します」

「本当に！それは助かるな」

「じゃあ俺はこの辺で」

「うん！お疲れ様！」

何だかんだあつたが、この仕事は中々いいな

天職っぽかつたし…暫く頑張つてみよう

帰宅

「おかえり、どこ行つてたの？」

「ただいま…俺、バイト始めたから」

「えっ…ふーん、そうなの…まあ頑張つてね」

「一瞬だけ『え？出来んの？』みたいな目で見るとやめて貰つていいっすかね」

「そんな事オモツテナイヨ」

「片言になつてんぞおい」

実の弟に対して酷くないかね華蓮

俺だつてなあ、やれば出来る事だつてあるんだよ（震え声）

晶奈には『幸貞がバイト？風邪でも引いたの？』と、割とガチめに心配されたので頭に唐竹割りを撃ち込んでおいた

翌日

はい学校ですね、一面倒臭いね

通学路じゃ天災に遭遇しそうになるし、かと思えば学校付近で金色の異空間に鉢合わせそうになるわと大変だったんだよね

「その内ピンク頭か女王様に出逢いそうで怖いなあ、早く避難しないと」

「ユキサダさん！おはようございます！」

「うおっ、何だイヴか：驚かせんなよ」

若宮イヴ、丸山先輩達と同じアイドルバンドに所属している

元モデルらしくスタイルすごい（語彙力）

あとフィンランドとの HALF だそうだ、白髪が似合っていたので初めはロシアかと思っていた

「おはよう、相変わらず元気みたいだな」

「はいっ！そういえば先程、彩さんが探していましたが：何か用事があるのででしょうか？」

「多分しようもない事だろうから気にしなくていいと思うよ」

「そうですか?」

無垢つていいよね、相手するにあたって凄い楽な気持ちで接することが出来るから

言っておくが無垢と馬鹿は違うからな、そこら辺は勘違いしないでくれよ

「それじゃあ俺は教室に行くから、またな」

「分かりました!また私達の音楽を聴いてくださいねっ!」

「ああ……まあ、気が向いたらな」

「はいっ!」

いつ気が向くかは分からないけどね、そう思ったが口には出さなかった

取り敢えず教室に行こう

その後は特に無かったかな、うん……いつもの授業風景だったよ

香澄が居眠りして、当てられ有咲に助けを求め有咲が渋々救いの手を差し伸べるとい

う風景

まあ俺も寝てるから何とも言えないケドネ

それでもつて放課後、バイトに行くか……そしてさつき思い出したんだが、Rose

liaもガールズバンドじゃね?いやいやでもライブハウスは他にもある訳だしウチ

をピンポイントで使ってるなんてことは無い……と、いいなあ(懇願)



「こんにちは、まりなさん」

「あ！こんにちは幸貞君、今日も宜しくね」

「はい、それで今日の仕事は何でしょう」

「機材とかは私がやっちゃったから、受付お願いできるかな」

「分かりました」

という事で、ある資格の過去問題集を読みながら暇を潰していた

数十分経った辺りで予約者の人が来た

「あのー、上原で予約してたんですが…」

「上原さんですね、こちらの鍵になります」

あ、この娘あれだ…凄い子だ

間近で見ると本当に凄いなコレ…何をどう育てたらあなるんだろうな

「君もガールズバンドをやってるんですか？」

「はい！after glowって言うんですけど…知ってますか？」

after glow…夕焼けか

んー……：なんかリサから聞いたことあるような無いような

「すみません、ここ最近音楽にあまり触れていなくて」

「ああいえ！気にしないでください！そういえばお兄さんは最近入った人ですか？」

「はい、昨日からバイトで入りました導寺峠幸貞といいます」

「私は上原ひまりです、これから宜しくお願いしますね…あつ！メンバーが来たのでまた今度お話ししましょう！」

「はい、では頑張ってください」

あの赤いメツシユが入った娘…どっかで見たことあるような気がするんだよなあ  
なんとなく引つかかるような…まあいいか

過去問へと視線を戻し、さらに数十分が経った

お客が来た

「すみません、氷川で予約していた者です」

今一番聞きたくない名前が飛び込んできて裏方へ走り出したくなった

「……つて、導寺峠さん!？」

「……………ヒトチガイジヤナイデスカネ」

「そんな訳無いじゃないですか、私はこれでも人の顔を忘れたことはありませんよ」

「よし分かった鍵渡すから早く行ってくれ、リサとか友希那とか来る前に早くほら早く  
ハリーハリー」

「そ、そんなに急かさなくても」

「それじゃ一旦俺裏方下がるから」

「いや、それを私に言われても……」

取り敢えず何とかなつたかな、アイツらが来る前にとつと裏方に下がって避  
よー！鍵借りれたー？」

何でいつもこうタイミングが悪いのかな、俺もしかしてタイミングに嫌われてる？

「はい今井さん、今借りれましたよ」

「じゃあ早く行こ……う……え？」

ここれもう逃げていいですかね？俺頑張ったよね？もうゴールしていいよね？

「ゆ、ゆゆ幸貞!？」

「リサ、あまり大きな声を出さないで頂戴……周りに迷惑がかかるわよ」

「あ、ごめん……じゃなくて！幸貞が！」

「幸貞？彼がどうかした……の……」

「ジブン休憩入りますので何かあればまりなさんに聞いて下さい」

早口でまくし立て、走って裏方へ逃げる

ヤバイヤバイヤバイ……途轍も無く面倒臭くなつてしまったよこの野郎め

冷や汗が止まらない、若干鼓動も早くなつていた……アイツらにバレるのは一番不味い  
だろお……唯えさえ音楽関連でギクシヤクしてるってのにこんな場ライブハウス所で鉢合わせは不  
味いだろ

ああもう本当、俺の静かな暮らしは何処へやら……時給に釣られて働き始めた俺が悪  
いんだけどさ

「おつかれー…ってうわあ!?!だ、大丈夫!?!」

「は、はははは…やっていける自信が無くなってきました」

「ええ!?!何があったの!?!」

「ああああもうやだア…おうち帰りたい」

「落ち着いた?」

「はい、本当に済みませんでした…」

「それで何があったの?もう予約の人もないし私でよければ聞くよ?」

ああ、貴女が女神か…

「あの、実は……」

一先ずまりなさんには俺には幼馴染みが二人いて、同じガールズバンドに所属している

俺は若干ではあるが音楽から逃げていた節がある為、ここで働いているのがバレた今…後が怖すぎて二人に顔が出せない

と言うか、ここでアイツらが練習してるとなると「ちよつとセツシヨン聴いてアドバイス頂戴」って言われるのが増えるかもしれないし最悪の場合は強制連行される

という事を話した

「あー成程ね」

「それに俺、一人の方にはお前のこと苦手宣言してるんで尚更顔向け出来ないってことなんですよ」

「別にアドバイスくらいはいいんじゃないかな?」

「いや、それをしてしまうとアイツらが更に諦め悪くなって俺に付き纏うので絶対に嫌です」

そんな面倒事は真つ平御免被りたい

俺は、俺の夢は…静かで平穩に暮らしたいんだから

「何かすみません、俺の事なんか気にして下さって」

「いいよいいよ! 困った時はお互い様ってね…それに悩みがあるんだったら相談に乗る

「からさ、いつでも話してよ」

「まりなさんの女神力半端ない、何この人いい人過ぎでしょオ

俺はなあ、幸せの山を使って不幸の谷を埋めたいんだよ

不幸のドン底が無ければ、幸せの絶頂も無い…そんな平坦な人生を送りたい

劇的じゃなくていい、刺激的でもなくていい…唯ひたすらに静かに生きていきたい  
さあて、取り敢えず頑張りますか

## 5 話

頑張るとか言ったものの、どうすればいいか分からない俺氏

取り敢えず今は受付に座って新聞を読んでもす

はあ、今日のシフトは閉店までだからなあ……こんな個人的な事で早退するのも如何なものだと思っし

「幸貞さん！ 鍵返しに来ましたー！」

「はいお疲れ様、夜道には気を付けろよ……特に香澄」

「はーい！」

「……有咲よろしく」

「……何が……」

「だってお前保護責任者だろ？」

「何でそうなるんだよ！」

はいはいそんな事言つてたつてどうせ香澄のこと見張つてんだろ？ 有咲ちゃんのツンデレは見飽きたからこの辺で流しておく

五人揃つてライブハウスから出ていく……とスグに香澄が石にツマづきかけていた

そして案の定、有咲に怒られている…それを宥める沙綾と後ろで苦笑いを浮かべるりみちゃん

おい花園、お前なんでこつち見てんだよ

見んじやねえよ

はあ…やつぱりよく分からんな彼奴は、天然なの？それだとしてもアレは異常だと思  
うんだが

まありみちゃんというチヨココロネ教徒が居る時点で何も言えねえんだけどね

「お兄さーん、鍵返しに来ましたよー」

「ああ、お疲れ様です」

凄いやつ…基ひまりちゃんが鍵を返しに来た、どうやら *after glow* の方も終  
わったようだ

「お、お兄さん？ひまりちゃんいつからそんなに仲良くなったの？」

「さつきちよつと話したんだ、昨日からバイトで入ったんだって」

「そうなんですか、私は羽沢つぐみっていいいます…よろしくお願いします！」

「もしかして商店街にある羽沢珈琲店の娘さんですか？」

「そうです、若しかして居らしたことがありますか？」

「まだ無いので、今度行ってみようかと思つてたところなんです」



「そうなんですか！そしたら是非来て下さい！」

そんな話を話していると、後からイケメン女子と赤いメツシユが入った娘…そして銀髪ふわふわした娘がこちらへ来た

「つぐとひまり、随分と仲良さげじゃないか」

「あ、ゴメンね皆…ついつい話し込んでしまった」

「いいよ別に…それより、おに…さんは誰？」

「昨日からバイトで入りました導寺峠幸貞といいます、よろしくお願いします」

そろそろ皆疑問に思ってくる頃かと思うから言うが、基本的に初対面の人に対して俺は敬語を使うのでそこるところよろしく

「私はく青葉モカです、よろしく…あ、好きな物はく山吹ベーカリーのパンです」  
「それ言う必要あったか？」

苦笑いしながらそう指摘するイケメン女子、てかちよつと待てよ…この声は聞いたことがあつたような気がする

「若しかして曰く「違います、宇田川巴だ…よろしくな？」アツハイ」

アレおかしいな、声的に伝説のババアかと思つたんだが…どうやら人違いのようだ  
俺あの声結構好きなんだけどなあ、間違えたかな？

え？これ以上はタブー？何言ってるか分からないけど止めておくか

「ほらく、蘭も自己紹介したら〜?」

「分かってるよ、美竹蘭…あとむず痒いからアタシには敬語使わなくていいから」

「あ!私も敬語じゃなくていいですよ!」

「OK分かった」

「早っ」

「正直な話、あんまり敬語得意じゃないんだなこれが」

美竹…:美竹か…:あ、引つ掛かってたこと思い出したわ

「君あれか、美竹のおヤツさんところの一人娘さんか」

「…父さんを知ってるの?」

「ああ、偶にお茶してるくらい仲だよ」

まあお茶するって言っても紅茶じゃなくて緑茶だけどね

と言うか、余り多くは無いがそれなりにお宅の方へお邪魔させてもらっていたのだが  
見事に一度もエンカウントしなかったと考えると…最早奇跡だな

見た目はおヤツさん程ではないが結構厳ついよな、お母さんは美人だったわ

「いやしかし、世間は狭いもんだな…まあ時間も遅いし夜道に気をつけて帰りな」

「はい、じゃあ今度私の店にいらしてくださいね」

「時間が出来たら行ってみるよ」

「じゃあお兄さんも仕事頑張つて下さいねー!」

ふう、もう時間も遅くなってきたな……後はイツらだけか、残ってるのはああああ、帰ろうかな……でも戸締りしなきゃいけないし

「あ、あの……」

でもなあ、逃げたら明日が大変だろうしなあ……学校が同じって逃げ場無いよな

「えつと……ゆ、幸貞さん?」

何かこう考えてると学校休みたくなってくるな、もう心折れそうなんだけど

「あ、あの!!」

「うおおい……あ、ゴメン燐子ちゃん……考え事してた」

「い、いえ……大声出して……すみません」

この娘は白金燐子、人見知りが凄い……あと何気にスタイルも凄い

引つ込み思案気味だがオンラインゲーム内では結構喋る、Roseliaに居る最年少の娘とやってるらしい

俺も一度やったのだが、アレはダメだ……のめり込み過ぎて一時期ゲーム内ランキングで一位に君臨していた時があった

流石に『あ、これ廃人になるな』と思った為、引退した

「これ……鍵を返しに来ました」

「ああ、練習終わったのね…お疲れ様」

「は、はい…ありがとうございます…あの、それで…友希那さんが後で来て欲しいって…」

「…マジで？」

うつせやろ、こんな怖い呼び出しある？

何だろう、最近女子からの呼び出しでいい思いをした事がない（1、2話参照）  
行かなかつたらそれはそれで面倒だな…しようがねえなあ

「分かった、今から行くよ」

「はい…私と今井さん…あこちゃんは、先に帰ります」

「おう、夜道には気をつけるようにな」

「ありがとうございます」

そう微笑んで外へ出て言った

何あれ天使、クツソ可愛いんだけど

りんりに癒されたから頑張れる気がしてこなくもないな、うん

「居るか友希那」

「ええ、居るわよ…早かつたわね」

「まあ別にこれといって仕事もないし…それで、何の用かね」

「自分自身じゃもう分かりきってるんじゃないかしら？」

「おうおう言ってくれるねえ、それじゃあ俺の返答も分かりきってるんじゃないのかな？」

「だから貴方を呼んだのよ」

「どうゆう事かね…よく分からんな」

「それはどうゆう意味かね？」

「今週末、私達はここでライブをするの…それを観て、感想を頂戴」

「そういや、まりなさんがそんな事を言っていたな」

「確か他にもガールズバンドが出るんだったよな」

「……へえ、そうなのか…まあそれぐらいならしてやるよ」

「あと貴方の基準で構わないわ…私達に評価を付けて、もし貴方の納得する評価が私達に付いたなら…Roseliaのサポーターになってもらおうわ」

「…それを俺に言うってことはそれなりの自信と覚悟があるって事でいいよな？」

「当たり前よ、私達はもうとっくに覚悟なんて決めてるの」

「……なら、お手並み拝見といこうかな」

「それにその日はこの手伝いをしなきゃいけないし、丁度いいか」

「言いたい事はそれだけか？」

「ええ、時間を取らせて悪かったわね」

「気にすんな、こちとらも暇なんだから……それで、紗夜から何か言いたいことはあるかね？」

ビクツと扉の向こうで肩を揺らす紗夜

俺は結構こうゆうのには敏感なんでね、人の気配とかは割と分かる

「……気付いていたんですか」

「まあ、燐子が紗夜の名前を言っただけでなかったのもあるし……それ以前に俺相手に隠れようとするのが甘いな」

「何者ですか貴方は」

「屑」

「自分で言います!?!」

「自覚を持つてる屑人間程タチの悪い輩はいないぜ?」

まあ無自覚な屑もそれはそれで厄介だけどね

最早あれだよな、天災だよな

「それで、紗夜は何で盗み聞きしてたのかね」

「ぬ、盗み聞きって……まあ確かにそうですね……私は単純に湊さんが心配で……」

「ほおう、心配とは?」

「いえ、練習の時からそうだったんですが…何やら相当な覚悟をしていたので…何か  
と思っただんです」

「さ、紗夜！」

「俺をライブに誘う為にそんなに覚悟しなきゃいけないの？俺ってどんな扱いな訳？そ  
んな告白する訳でも無いのに」

「こっつ、告白なんてしないわよ！」

な、なん…だと

あの鉄仮面地味た友希那が焦っているだと…

「おい顔真つ赤だぞお前、いい写メ貰ったな」

「どれですか？」

「これ、よくね？」

「後で送って下さい」

「止めて、今すぐ消しなさい」

「ところがどっこい止められない止まらない」

「早く消しなさい」

「申し訳ございませんお客様、もうそろそろ閉店のお時間ですのでお帰り願えませんか  
ね？」

「……………」

「いやあ、ちよつ…苦しいっす、友希那さん」

胸倉を掴まれ締め上げられた

しかも目のハイライト消してるんだけど、すげえ怖い

「分かった分かった消すから」

「早くしなさい」

「はいはいって……………あ、間違えてリサに送っちゃった☆ちよつち待て話し合おうじゃないかええ？暴力じゃ何も解決しないゾ」

「何故幸貞さんはそれも湊さんを煽れるのでしょうか」

「そんなの簡単な事さ、昔から知ってる友人程弱点を知り尽くしている相手は居ないということさ」

「いやまあ実際、友希那が超絶猫好きだというのも幼馴染じゃなかったら想像すら出来ないだろう」

まあ猫を愛でながら自分でも『ニヤー』とか言ってる姿見た時は鼻から萌えが吹き出そうになったよ

「ほら画像消したからさ」

「…まあいいわ」



お許しが出了、だが甘いな友希那

あの短時間の間に画像のバックアップを取ることなんて俺にとつちや朝飯前だぜ  
後で紗夜に送っておこう

「ほれ、そろそろ時間も遅いしはよ帰りな」

「はあ、疲れたわ：帰りましょう紗夜」

「お疲れ様です、では行きましようか」

「夜道にはお気を付けてお嬢様方」

ふう、なんとかこの時間も乗り越えられたな：にしても、彼奴から俺をライブに誘うとは意外だな

「幸貞くん？何処にいるのー？」

おっと、美人さんがお呼びだ

早く駆けつけるのが紳士の嗜みってやつだぜ

「何でしようかまりなさん」

「あ！いたいた、そろそろ閉めるから戸締りの確認を手伝って欲しいの」

「分かりました、じゃあ俺は正面の方を確認してきますね」

「それじゃあ私は裏を見てくるから、宜しくね」

取り敢えずここの仕事もなんとかかなりそうだな、この調子で頑張ってくか

そして週末、え？早過ぎる？あんまり気にしない方がいいぞ

「幸貞君チラシいる？」

「貰っていいですか」

「余ってるしいいよ、はいこれ」

えーっと、どこが出るのかなーと

poppin, party, after glow, Roselia, pastel

\*paletteってマジか…アイドルも来るのかこれ

えー次は…ハロー、ハッピーワールド…か、コイツらも来るのか

後は…glitter★green？これは知らないな、初めて聞いた

「まりなさん、このグリッターグリーンって知ってますか？」

「ああ、その子達はね…確か幸貞君が通ってる花咲川の先輩達らしいよ」

「へえ、そうなんですか」

何だろうか、途轍も無く面倒臭い事になる未来がみえる…はあ、頑張ってみるか

## 6話

さてと、機材やらなんやらの仕事は終わったし：暇だな

「ユツキー!!!」

「危ねっ」

飛び込んできた天災をひらりと躲す、何事も無かった様に取り敢えずスタジオから出ようとする腰に抱きつかれる

何だお前ら、揃いも揃って俺の腰に何か恨みでもあんのかよ

「ひっどーい！女の子が自ら飛び込みに行ったのに避けるなんて！」

「知るか、俺に常識が通用すると思ったら大間違いだぜあと離れろ」

「やーだもーん、アタシを避けた罰だ！」

「歩きづらい」

「じゃあおんぶして？」

「意味わかんないてか登るな」

こいつ蝉みたいに引つ付きやがったよ

ああ、こいつは前に言った天災：基天才の氷川日菜、天才故の考えがあるので時偶槍

を放つことがある

酷い時は爆弾を素知らぬ顔してプチ込んでくる、後始末が大変なんだよね

「日菜ちゃん！どこ行ったのー?」

「丸山先輩、これどうにかして」

「あ、幸貞く…つてうわっ!?!日菜ちゃん!?!」

「そういやよく考えるとこの天災も俺より一つ上じゃね? うっわマジかよ、嫌な事  
実再確認しちゃまったじゃねえかよ

「ちよつと女王様呼んできて」

「千聖ちゃんの事そろそろ名前で呼んであげてよ…取り敢えず分かった」

まあ考えておこう、唐突に千聖とか呼んでみて反応を…あ、駄目だ

足蹴にされる未来しか浮かんでこねえや

「ねーねー、よく考えるところ…アタシってユツキーの一つ上だよな?」

「何だよ急に…お前が二年生ならそうじゃないのか、というかだからどうしたんだよ」

「何で彩ちゃんは丸山先輩なのに私の事は『お前』とか、『天才』とかでしか呼ばないの  
?」

おい、字が違うぞ

天才じゃなくてお前は天災の方だから

「せめて名前で呼んでよー、ほら日菜って」

「氷川妹」

「そんなのやーだー！日菜って呼んでよー！」

「喧しいぞ駄々っ子め、そろそろ本番前なんだからバンドの所に行けって」

「呼ぶまで離れないもん」

「うっそでしよお前、何の拷問だよこれ」

「ほらはーやーくー！」

「煩いつての、ほら女王様がご到着なされたぞ」

「誰が女王様よ」

笑顔を浮かべながら若干青筋を立てる女王様

流石アイドルいついかなる時も笑顔を忘れないその精神に感服するぜ

「日菜ちゃん、貴女はアイドルなんだから行動は少し考えてから動いてちょうだい」

「うん！だからしつかり人目につかないようにここまで来たよ」

「そうゆうことじゃねえよ、てかお前は忍者か」

「と言うか日菜ちゃん、そろそろ打ち合わせをするから来てくれなきゃ困るんだけど」

「ちえー…：しようがないなあ、ちゃんとアタシ達も見てよね！」

「はいはい観るよ」

それだけ言うと女王様に手を引かれていった

俺の周りにいる女の子って何であれも元氣ハツラツな小学生みたいなのが多いのかな（例、香澄）こっちは脳味噌まで小学生だけだな

「さてと…そろそろ始まるのかな、行くか」

両開き扉を開け、中へ入り後ろの角へもたれ掛かる

ライブ会場って久しぶりに来たが、やっぱり盛り上がり様は凄いいよね

最初は確か香澄達か、友希那達までは時間があるし…いや、仕事も無いし観てくか  
ライブ会場の明かりが落ち、ライブが始まる

うん、香澄は香澄なのが一番いいな

なんと言うか…元氣なバンドだったわ、あれはアレで Roselia やパスパレと違った良さがあるな

次は after glow か、説明には王道ロックだっけな

随分と判定がシビアなのを選んだな、詰まらないやつはトコトン詰まらない

はてさて見せてもらおうかな

ほう、これまたRoseliaとは違った方面のロックだな

これはこれで面白い…それぞれの個性が活かされてるな

次は……ああ、パスパレか

どのぐらい成長してるか…とか偉そうな事は言えねえな、曖昧なアドバイスしか出してないのに



うん、まあ悪くないよな

途中で日菜が俺に気が付き、ウインクを送ってきたが手で払っておいた  
アイドルバンドとはまた珍しいもんを作ったよなあ、当初は色々とおつたらしいけど  
上手くいってるみたいだし

えー次は………ああ、ハロはびねはいはい  
グリッターグリーンってのが大トリやるのか

駄目だ、視線がどうもミッシェルに集中する

いやだつてさ……あんなにいたら嫌でも見るでしょ、美咲ちゃんいい仕事してるよ  
次Roseliaか、まあ聞いたら裏方に戻ろうかな

ああ、駄目だ……どう足掻いても自分が嫌な奴になる

屑だ……愚図だ……そして馬鹿だ……だからいつまでも俺はアイツが苦手なまま

なんだ

本当、自分が嫌になつてくる

気が付けば俺は会場から出ていた、自分でも分かるくらいに変な顔をしている

これじゃ駄目だな、暫くは友希那達に顔見せられねえや

頭が痛い……気持ちも悪い、気分は最悪過ぎる

それから少し裏方の方で横になつていた、気分は大分良くなつてきた

「はあ……そろそろ受付に戻るか」

「幸貞君、大丈夫？」

「え、ああ……大丈夫ですよまりなさん、御心配お掛けしました」

「無理しないでね？」

「はい、もうすつかり良くなりましたから」

受付の椅子に腰掛け、少し天を仰ぐ……ふう、何とか大丈夫だな

そういうや友希那に感想と評価言わなきゃいけないんだっけか、その内自分からくるかな……今は動く気にならない

「幸貞、大丈夫？」

「あー？ああ、リサか……俺は至つて普通だぞ」

「嘘つき、アタシ達の演奏聴いてる時の幸貞……何かすつごい苦しそうな顔してたよ」

「…何だ、見てたのか」

「どうかしたの？何かあるならアタシが聞くよ、力になれるか分からないけど…それでもアタシは幸貞の力になりたいの」

「……………外行くか」

「まりなさんに許可を貰い、circleから少し離れた場所にある公園へ二人で向かった」

公園には人つ子一人居らず、閑散としていた

「さて、何から話そうか…一先ずは今俺の現状でも教えておくか」

「……………話したくなかったら話さなくてもいいんだよ？」

「気にすんな、俺からここに連れてきておいて話さねえなんて馬鹿な事はしないさ」

今の俺は、特定の感情というモノが嫌いだ

『恋愛、友情、信頼、情熱』等の感情が大が付く程に嫌いで嫌悪感しか湧いてこない

昔から人の気持ちには敏感な方で、今では滅多に無いものの少し前迄は少しでもそんな感情を感じ取ると吐き気がする程に気分が悪くなった

言葉で簡単に言い表せてしまう感情、大してそんな事を思っていないくとも声に出して発してしまえばそう思ってるものだと相手を勘違いさせる事の出来る

だから、この感情が大嫌いで仕方が無い

「…と、まあ取り敢えずはこんな感じかな」

「ごめん…本当にごめんね…」

「何でお前が謝る、これは俺の勝手な意見でしかも相当捻じ曲がった価値観だ…別に前が謝る必要なんてどこにもない」

「でも、アタシはずっと幸貞と一緒に居たのに…少しも気付く事が出来なかった、気付いていたらアタシにだって何が出来たかもしれないのに」

「…大体、この価値観が出てきたのは中学入ってスグだ…あの頃はお前も友希那も色々大変だっただろ」

「で、でも…」

「まあいいから続きを聞きなさいな、何でそんな価値観が生まれたか話すから」

俺には二人の姉がいた

長女の晶奈は何もやらなくとも何でも出来てしまう所謂、天才と呼ばれる奴だった

次女で双子の姉である華蓮は努力することが大好きだった、それ故に努力だけで晶奈と並ぶ程に何でも出来た…所謂、秀才だ

そして俺は、晶奈と同じ天才型だった…スペックは劣るが、それでも周りから見れば充分にハイスペックだった

しかしそれは小学生まではよかった…問題は中学に上がってから

俺は晶奈や華蓮と同じ中学に入った、勿論リサと友希那も一緒のな

そして俺はこの時初めて受けた言葉が『お前もやっぱり凄いな、まあ姉達の方が出来ていたけどな』

悪意が無いのは分かっている、だがどうしてもその言葉が受け入れられなかった  
そして、今の俺が出来上がるキツカケとなった事

親友だと信じ、信頼し：互いを理解し合い情熱をブツけ合える仲間だと思っていた奴等から『お前相変わらず凄いな：でもやっぱ、お前の姉ちゃん達の方が凄いな』

その瞬間、俺は空っぽになった

結局、コイツらも俺のことを分かかってはいなかった：うわべだけの言葉で成り立っていたボロボロで薄っぺらい関係だった

それから俺は習い事を全て辞めた

姉に連れられ始めた剣道、柔道、空手、弓道、総合格闘技：その他にもあったがもう忘れた

俺がどれだけ頑張ろうと、俺に対して評価が下る訳じゃないことが分かった今：やる価値が無くなった

勿論、親父や母さん：晶奈と華蓮にはどうしたのかと心配された

尋常じゃない程の習い事だったが、今まで嫌な顔一つせずに習っていた俺が唐突に全

て辞めたいと言ったから当然と言えば当然だ

晶奈と華蓮には『私達がいけなかったの?』とか『私がいるから嫌なの?』と聞かれたが、俺は別に晶奈と華蓮が嫌いな訳じゃない

俺への評価が出ないなら、やる価値がないと思っただけなのだから

俺は小学生の頃から『平穏な日々』が夢だった、やる価値がないならやる意味が無い上に夢の障害になると判断したからだ

そして俺は、人の感情を信じなくなった…加えて、それに対して嫌悪感すら覚える様になった

「友希那の歌へかける情熱や、お前らへの信頼感…それらは本物だと分かっている…：だがな、俺はどうしてもその感情については気分が悪くなる」

「だから、友希那が苦手だって言ったの?」

「ああそうだ、その感情が本物であれ嘘であれ…俺にとつては側に生理的に受け付けられないものをドンと置かれるのと同じだ、その感情自体が生理的に受け付けられないのだから」

「…幸貞……」

「まあ、こんなの世間一般からしてみれば屑みたいな考え…つておい、急になんだよ」

突如、リサの腕が俺の首へ回り抱き締められた

そして……リサは泣いていた

「おいリサ? どうしたんだよ急に」

「……気付いてあげられなくて、ごめん」

「あのなあ、俺は別にその事で傷付いたとか引き籠もりになつたとかそういう話じゃないんだぞ? まあ多少の感情不信にはなつたけどさ」

「ううん、そういう問題じゃない……昔から近くにいたのに、幸貞の気持ちに気が付け無かつた事が情けなくて……」

「こー言つちや何だが、その時にもしお前が気付いたとしたら友希那はどうなつてた? お前の支えがあつたから今の友希那とあの情熱があるんだろ、結果オーライ万々歳じゃねえか」

「……幸貞はもつと自分を大切にしなさい」

「はいはい、善処しますよ」

さて、あいつらもどうやら聞いてた様だな

態々自分から言いに行く手間が省けたと考えるか、面倒な事になつたと考えるか  
取り敢えず今はリサのアフターケアだな



## 7 話

「ほら泣くなつて」

「うん、ごめんね」

取り敢えずリサを首から離し、指でリサの涙を拭つてやる

そして両手で頬を挟み、視線をこちらに向ける

「いいか？昔の俺はもう居ない、今の俺は今が作つてる……だから余計な事を考えずにお前はお前の今を生きて自分を作れ、後は友希那とか R o s e l i a の面倒も見てやれ……いいな」

「う、うん……分かった……あと、その……ち、近いから」

「ん？ああ悪いな」

耳まで真つ赤だな、何かごめんね

ふう……今から c i r c l e 戻るのが、何か面倒臭くなつてきちやつた

「この事は友希那に話した方がいいのかな……」

「それについては心配しなくていいぞ、アイツとその他二人程聞いてたから」

「えっ!?!じゃ、じゃあアタシが幸貞に抱き着いたのも……ううううう」

「え？何どうしたよお前」

両手で顔を覆い地面へしやがみこんでしまった、心做しかさつきよりも顔が赤くなつてる気がする

「取り敢えず戻るか」

「……………うん」

circleに戻る…が、ドアの前で立ち止まる…：俺の面倒センサーが反応したぜ  
こいつアクセエ、面倒な臭いがプンプンするぜえ

「どうしたの幸貞？」

「いや、ちよつと…ね、先行つてて」

「え？あ、うん」

取り敢えず中に入ろう、じゃ無ければ始まるもの始まらない

フロアには香澄達ポピパと、もう一つのガールズバンドが立ち話をしていた

誰だろうか、アレがチラシに書いてあったグリッターグリーンってやつなのかな？

「あつ！幸貞君！私達のライブ見てた!?!」

「よう香澄、ああ見てたよ…お前らしくて良かったよ」

「ホントに!?!ヤッター!」

「うわ!?!ちよ！抱き着くな香澄!!」

まあいつも通りの光景です。ね分かります、ツンデレ口では嫌とか言つても本当は嬉しいの分かつてんだぜ？

だからそんな微妙な目でこつちを見ないでくれ

さっきの話を聞いていた他二人の内一人が有咲である、俺の事をどう見ていいかわからなくなつてるな

「ふーん、君が幸貞君か」

「えーつと…失礼ですが何方でしょうか」

「ああゴメンね、私は牛込ゆりつていうの…宜しくねっ」

そう言つてウインクを飛ばしてきた、何この人可愛い……が、それと同時に面倒臭いな多分

と言つか牛込つて…

「若しかしてりみちゃんのお姉さん？」

「ピンポン大正解！」

「そうでしたか、俺は導寺峠幸貞といいます」

「りみから聞いているよ、いつも楽しそうに君の事話すから最初は恋人でも出来たのかと思つちやつたよ」

「お、お姉ちゃん！」

「H A H A H A、そんな訳ないじゃないですか」

「え、私は結構アリだと思ってるよ？」

「それはどうも、俺はいつでもフリーですから」

「お、言うね」

本当に姉妹なのだろうかこの人達は、ゆりさん滅茶積極的やぞ

引つ込み思案なりみちゃんとは真反対だな…よく考えればウチの奴もそうか、晶奈とか俺と真反対だし

「あ！それよりさ！君の作るハーブティーすっごく美味しんだよ！」

「それはどうも」

「だから今度私にも作ってくれない？」

「リクエストして頂ければいつでも作りますよ」

「ホント！じゃあ今度お願いするね」

そう言つてまたウイंकを飛ばしてきた、あつぎと

さては天然だなこの先輩、まあ花園たえとかいう最強の天然には敵わなさそうだけど「じゃあばいばい」

どうやらこのあと用事があるとかでゆり先輩とバンド仲間の方々は先に帰った

「ご、ごめんね幸貞君…お姉ちゃんが」

「別に謝られることはされてないって、今度お姉さんにハーブティーのリクエスト聞いておいて」

「うん！ありがとうございます」

「気にすんな……で、有咲……ちよつとお話しようか」

そう声をかけるとビクツと肩を揺らした、完全に油断していたようだが俺が逃がすと思ったら大間違いだぜ

「有咲と何かあったの？」

「いや、そういう訳じゃないぜ沙綾さん……まあ少し話すだけだから」

「よく分かんないけど邪魔なら行くね、ほら行くよ香澄達ー」

流石沙綾、いつでも気を使えるって素晴らしいね

そんな訳で今の状況は有咲と俺二人きりの状態、ここから何が始まるかって別に告白ではない

というかそんな雰囲気じゃねえ

「それで、どつから聞いてたのかな」

「……け、結構最初の方から……お前が昔話始めるあたり」

「本当に最初じゃねえかよ、まあいいや……で、お前はどうしたいんだよ」

「そんな事言われても……私だってわかんねえよ」

「だろいな、じゃあ別にそれでいいんじゃないかねえのか？別に答えを出す必要性なんて何処にもないし誰も求めてない」

「は？な、何言ってるんだよ……お前の事でもあるんだぞ？」

「と言うか正直な話面倒臭いからいつも通りでいろよ、俺が何であれお前はお前だろ……一々ちよつと暗い過去聞いたくらいで態度変えられてもこつちが困る」

「……はあ、お前らしいな……考えてた私が悪かったよ」

「そうだろ、じゃあお前も早く帰って身体休めろよ」

さて、有咲とは話したが……まあもう御一人様は多分大丈夫だろうけど、今度一回話しとくか

取り敢えずまりなさんところ行かなきゃ

「あ、お帰り幸貞君」

「すみません、仕事大丈夫ですか？」

「うん！出ていく前に幸貞君が殆ど終わらせてくれたからね……そ・れ・で・く？彼女さんとはどうだったのかなあ〜？」

「彼女？……ああ、リサは唯の幼馴染みですよ」

「え!?! そうなの!?!」

そんなに驚く事でも無いんじゃないや……俺に彼女が出来たら多分、どつかの国が無くなる

と思うよ

だつて彼女とか面倒臭いじゃん

「えーそうなの、随分と仲良さげだったからデキてるのかと思つただけどなく」

「そんな訳無いじゃないですか、それに俺はモテませんよ」

「ホントに？ 幸貞君モテそうだけどなあ、若しかしたら気付いてないだけかもよ」

「そうですかね、自分で言うのもなんですが俺は結構人の感情には敏感ですよ」

「ふふ、そう思つてるのは自分だけかもよっ」

「……まあ、結局人の心なんてものは計り知れませんかからね」

「それもそうだね、じゃあ後はライブの片付けだけだから頑張っちゃおう！」

片付けはものの数分で終わった、「今日は忙しかったし、もう帰つていいよ」とまりなさんからスマイルを頂いたのでお言葉に甘えることにした

……のはいいんだが、そう言えばまだ友希那に会つて無いな

会つた方がいいのやら、会わない方がいいのやら……まあ行くか

「……つて、ようりサ」

「あ、幸貞……今なら友希那は一人で控え室にいるよ」

「そりやどうも、他の娘達は？」

「あこと燐子は先に帰つて、紗夜は日菜に捕まつてると思うよ」

「紗夜に関してはご愁傷様だな、じゃあちよっくら行つてくる」

どうせ友希那の事だから俺の話聞いてかなり考え込んでるんだろうよな

控え室の椅子に座り右手を顎に当て俯きながら何かを考え込んでいる友希那を見た

「よう友希那さんや、少しいいかね」

「っー……ええ、構わないわ」

「……まあ、その様子だと予想通りに考え込んでたな」

「……な、何のことかしら」

「おいおい、昔からの仲だろ？俺が人の気配や感情に敏感な事は知ってる筈だろ、と言うかここまで言ったら何が言いたいか分かるよな？」

友希那は目を逸らし、視線を合わせようとしなかった

明ら様過ぎるだろ友希那さんや

「……いやまあね？俺もこれ『あ、コレ話すタイミングま不味つたな』とは思ったけどさ、まあいずれば話す積りでいたし」

「……私は、貴方に対してどうすればいいのかしら」

「どうすればって、別にどうもして貰わなくていいんだけど……と言うかさ、別にお前が気にすることでも無いんだよね」



正直な話、コレって俺の心情問題だし…結局の所は俺がどうにかするしかないからね  
「はい、じゃあこの話はお終いな…結論から言えば今まで通りでいろ、じゃなきゃ俺が困る」

「…まあ、貴方らしいと言えば貴方らしいわね…何だか考え込んでいた自分が馬鹿みた  
いよ」

「俺の事で悩むとか、そんな暇があるなら歌詞の一つでも考えてた方が有意義だぞ」  
「貴方はもう少し自分を大切にしなさい、自分で言う程貴方は屑じゃないわよ」

「そいつはどうも」

という訳で、この話はここで御開としました

重い話とか俺苦手なんだよね、空気に付いていけない

「たでーま」

「お帰り、夕飯もう出来るから手洗ってきなさい」

「うーい…あれ？晶奈はどうした」

「友達とご飯行くから要らないんだってき、何でも金持ちらしいよ」

「……ふーん、そうかい…何となくだけど碌でもない事を話してる気がする」

「そうかしら？…そうそう、迎えに来た車が白塗りのリムジンだったんだよね」

「ん？…んんん？…白塗りの…リムジン…マジで言ってるのか？」

「どうしたのよ、鳩がタネマシンガン受けたような顔して」

「どんな顔だよそれ、何と無くその車に見覚えがあつてね…しかも悪い方で」

「そう、まあ災難に遭わなければいいわね」

嫌な予感しかないしなあ、やだなあもう面倒臭いなあ

と言うか華蓮さんは随分と人事だな全く、まあ俺もそうゆう時は人事で済ませるから

何とも言えないけど

明日は…日曜か、昼まで寝るか…起きてモダコ○5をするか

最近やつとステ7武器を解放できたから無双したいんだが…起きたくないから寝る

か

「幸貞、貴方は明日どうするの？何か予定とかある？」

「いや別に、昼まで寝てるつもりだけど」

「そう、お昼私から友達と遊ぶから適当に食べてね」

「……てか友達いたんだね」

「貴方と一緒にしないで貰える？ 私は貴方より性格いいのよ」

「どの口が言ってるんだか、まあお昼は適当に済ますよ」

「悪いわね」

「気にすんな、いつも作って貰ってたから」

「そうなると家では俺と晶奈が居れば二人か……でも大概アイツは日曜日遊びに出掛けるからな」

「昼は確実に居ないか、となると一人か……外で済まそうかな」

「はいという訳で皆様おはようございます」

「お昼ですね、時計の針は十二時を回っております……身支度して食べに行こう」

因みに予想通り晶奈は出掛けてた、その方が楽で助かる

さてと、駅前まで行つて何か食う

そんな訳で移動中……あら？アレは女王様と花音ちゃんじゃないか

あ、女王様が気が付いた……ん？何かこつちに走つて来てんだが

「丁度いい所に居たわね幸貞君、少し助けてくれないかしら」

「事と次第によつてですかね」

「簡単に説明すれば今から来るガラの悪い連中を追つ払つてくれると助かるわ」

「……何したかは聞かないでおくが、あんまり馬鹿共は挑発してやるなよ」

「あら、何のことかしら？」

読めんだなあこれが、どうせ女王様が馬鹿共を言葉責めして逆上させたんだろうな  
取り敢えず、食前の運動と行きますか

## 8話

そして数秒経つと、如何にもチャラチャラした連中が怒り心頭な様子でこちらへ三人程走ってきた

「見つけたぞクソアマ!!」

「覚悟は出来てんだろうな!？」

「こいつら?」

「そうよ」

うつわ、頭悪そうだなクイツら：見るからにDQN感が半端ないんだけど

ここのまで来ると逆に可哀想になってくるな

つーかどんな煽り方したらここのまで怒るんだよ

「そこどけテメエ！後ろの女に用があんだよ！」

「落ち着けよ馬鹿、こんな所で大声出すなみつともねえ」

「うるせえ!!いいからどけて言ってるんだよ！」

一人のDQNが俺の肩に掴みかかる……が、そう簡単に掴ませる俺だと思ふなよ

肩に伸びた腕を掴みこちらへ引っ張る、ツマづいた勢いで倒れかかるDQNの鳩尾に

膝蹴りを一発

悶えるDQNにもう一発、顔に喧嘩キックをお見舞い

「触んなよ、DQNが伝染るだろうが」

「な、何しやがる teme!!」

「何って、蹴っ飛ばしたただけだが？それに運がねえなお前ら…ここが何処だかわかって喧嘩売ってんのか？」

「は？何言ってるんだお前」

そう、ここは俺の行きつけゲーセンの真ん前…つまり少し騒げば不良君達が出てくる訳で

「何処の誰だか知らねえがうるせえぞ、集中出来ねえだろうが」

五、六人程の不良共がゾロゾロと店の中から顔を出す

その内、先頭にいたリーダーらしき奴が

「あ、幸貞さんこんにちは!!」

「よう、タイミングが良いなお前ら…ちよつとコイツらシメといてやれ」

「ん？こいつらに何かされたんですか？」

「まあ少し絡まれてな、面倒だから後は宜しく頼むよ」

「それはいいですけど…既に一人ボロボロじゃないですか」

「勇敢にも立ち向かった蛮勇の残骸さ、路地裏にでも引つ張ってけ」

「了解ッス、おらお前らさっさとしろ」

轟沈した一人は脚を引き摺られ、残り二人は強制連行されるように店の裏へと連れていかれた

「……はあ、ほら終わったぞ」

「貴方、実は番長なのかしら」

「そんな訳、前にリサにも言われたわ」

「あ、あの……ありがとうございます」

「ああ、気にすんな……お前らは何してたんだ？」

電車の乗り継ぎが下手くそな女王様と、とんでもなく方向音痴の花音ちゃん……遠出どころかお出かけにすら向かない二人が揃って何をしようとしたのか

「貴方、失礼な事考えたでしょ？」

「さあてね、どうだかな」

「ふうん……まあいいわ、隣駅の喫茶店まで行こうとしてたのだけれど道迷ってね……それであの人達に絡まれたって訳」

隣駅って、ここから1kmも離れて無いんだけど……活動範囲狭すぎじゃねえかな

「それで女王様があの馬鹿達を煽ってここまで逃げてきた訳と」

「別に煽ってわないわよ、事実を述べたらアッチが逆上したのだから」

「へえ、そうかいそうかい」

「あら、信じてないわね」

「信じられる方が逆に凄いと思いますか?」

「…まあ、それも一理あるわね」

一理どころかド正論な気がするの俺だけか

そして俺は何故か花音ちゃんから苦手意識を頂戴している為、常に花音ちゃんは女王様の後ろに隠れている

「なんだろう、他の奴らからはどう思われようが何とも思わないが…花音ちゃんに避けられると心にくる」

「日頃の行いじゃないかしら」

「俺別に不良じゃないもん、心は綺麗じゃないが目立った行動はしてない」

「ご、ごめんなさい」

「まあ花音は元から人見知りだし、相手が男性なら尚のことよ…気にしなくていいと思おうわ」

「本当にごめんなさい…」

ふう、さてと…これからどうしようかな



「そういやまだ飯食ってないんだよな俺、腹減ってきたな

「じゃあ俺はこの辺で失礼するよ、まだ昼飯も食ってないもんでね」

「あらそうなの、なら私のご馳走しましょうか？」

「え、いや別に大丈夫だけど……」

「助けてもらった御礼をしたいし、丁度いいじゃない……ねえ花音？」

「そこで花音ちゃんに振るのはどうかと思うなあ」

「ふええ!?わ、私は……お、お礼はしたいけど……」

「何この娘カツワイイわあ、隣にいる女王様の所為で余計に引き立って可愛いなあ

「あら、今凄く失礼な事を言われた気がしたわ」

「気のせいじゃね?」

「そうかしらねえ」

目を薄くして俺を見てくる女王様、何か心まで透かしてそうで怖いなその視線

「そうそう、完全に忘れてたけどこの前公園で話聞いてた最後の一人は女王様でございます  
ます」

「まあこの人は自分で解決しそうだし、今度少し話そうかな

「……わ、私もご馳走します」

「え、その方針で決まったの?」

「花音もそう言うんだから行きましようか」

「つってもどこ行くんだよ」

「特に決めてないのならそのファミレスでいいかしら？」

「あー……まあ何でもいいよ」

という事でファミレスで御飯を奢ってもらうことになりました

店内に入ってからというもの、視線が刺さる刺さる…特に野郎共の視線が凄まじいな  
これは

時偶目が合う野郎達がいるのだが、超絶に嫌な顔されるのでお返しに嘲笑してやった  
ら顔真つ赤にしてた

「貴方さつきから何ニヤニヤしてるの」

「悦楽愉悦極楽優越、人の不幸は蜜の味…ってね」

「成程、私達を餌に周りの反応を楽しんでるのね…本当にやる事は屑ね」

「褒め言葉どうも」

「なら御礼の一貫で少し手伝ってあげるわよ、ほらフォーク貸して」

「何するんだよお前…まあいいけど」

女王様に奢ってもらったパスタを食べていたのだが、フォークを貸せとの命令が出た  
ので不思議に思いながらも手渡す

すると皿まで持つてかれた、そしてフォークにパスタを巻き付け…

「はい、アーンして」

「……成程、お前も大概だろ」

「ふふ、いいじゃない別に…ほらアーン」

「いいだろう、乗つてやろう」

女王様のアーンを頂戴したところで野郎共が血涙を流さんばかりの勢いで悔しがり始める

「花音もやる？」

「ふええ!?わ、私は…ちよつと」

「お前…そこで花音ちゃんに振るのはどうかと思うなあ（二回目）」

「あらいいじゃない、面白そうなんだし…それに花音も御礼をしなきゃ」

「いや別にこんな事で御礼しなくても、それにお前面白そうって言ったよな？隠す気ないよな？」

「初めから隠す気なんてサラサラないわよ」

ハッキリ言いやがったよ、確かに最初から隠してる素振りなんて微塵も無かったけど

「それで、どうするの花音？」

「いや、別に無理しなくても…」

「わ、私も…やります!」

あ、この娘結構流されやすいな

女王様からフオークを受け取り、パスタを巻き付け俺の方へ差し出す

「あ、あーん」

「はあ、無理しなくていいって言ったのに…まあ美味しく頂戴しますよ」

花音ちゃんからパスタを食べさせてもらうと、机を叩いて悔しがるやつがさ出る始末

H A H A H A やっぱ楽しいなあ

「今の貴方、凄く幸せそうな顔してるわよ」

「え、そう? まあ楽しいからね」

「それは何よりよ、そろそろ行きましょうか…ダーリン♪」

「うおっ」

「ち、千聖ちゃん!」

うわキツツおつと唐突の事つい本音が出てしまった

女王様はそう言いながら俺の腕へ抱きついてきた、この人も割と有るんだな

何がとは言わないけどね

「何気にお前もこの状況楽しんでるだろ」

「人の屈辱的な顔つて素敵じゃない？」

「激しく同意する」

「ほら早く行きましょう、時間は有限なのよ」

「ハイハイ分かりましたよ、花音ちゃんも行こうか」

「は、はい……つてえええ!？」

H A H A H A 可愛いこの娘、すげく可愛いわあ……愛で甲斐があるな

因みに今俺がしたのは花音ちゃんの手を握り椅子から立たせ、そのまま身体を側に抱き寄せた

「中々大胆なのね貴方」

「こうなつたらとことん楽しまなきやな、この状況」

「ふええええ!？」

「何かごめんね花音ちゃん」

最早昇天しかけてる奴までいるな、ご愁傷様……会計を済ませファミレスを出たところで離れる

「貴方との食事は大分楽しかったわ、またしましょうね」

「ああ良いとも、俺も随分と楽しめた……またお願いしようか」

「ふええ、ふえええ」

「うおっと、危ねえ」

「あらいけない、花音がショートしてるわ」

「まあアレに付き合わせちゃったからな、ゴメンね」

限界が来たのか、フラツと倒れそうになったので支えに入る：元はと言えば俺の所為だし

煙を出す勢いで顔を真っ赤にしている花音ちゃん、視線は様々な所へいき焦点があつてない

「大丈夫かー？意識あるかね？」

「う、うう…恥ずかしい」

「今度やる時は花音は抜きね」

「OK、その方が良さそうだ」

結構、歩けそうも無いので俺が背負って家まで送ることにした  
俺の所為だし

序に女王様も送っていくか

「おーい、家着いたよ花音ちゃん」

「う、うう…あれ？私…何で……」

状況把握、そしてまた赤面し始める花音ちゃんホントに可愛い

「な、ななな何で私はこんな状況に!？」

「悪い悪い、俺が悪ふざけしたら花音ちゃんが歩けそうになくてな…俺の所為だし送ったんだよ」

「へ? あ…そ、そうなんですか…あ、ありがとうございます…ごさいます」

「悪いの俺だし、気にしないで」

花音ちゃんを降ろし、ここで別れた

取り敢えず女王様送ったら家帰って…モダ○ン5やろう

そんな事を思いながら歩いていると、不意に前から白い車が走ってくるのが見えた…それも、リムジンだ

「どうしたのよ急に止まるなんて、それに顔も心做しか青いわよ」

「いや、気の所為であつてくれと願つてる」

「何の話をしているの?」

するとそのリムジンは俺らの横に停まった、ああ…やつぱりそうかア

うわあと思いながら右の掌で顔を覆う

助手席の所から黒服SPが降り、一番後ろのドアを開けると…中から蒼眼の銀髪ロングで背の高い美人が出てきた

白のスーツに白のシルクハットを被ったそいつの顔は女性らしさを醸し出す反面、何

処と無くイケメンな空気も出していた

簡単に言えば薫さんタイプ

「やあ、久し振りだね……旦那様」

「だ、旦那様？ちよつと幸貞君、貴方いつの間に……って、真顔で固まらないで説明してくれる？」

そりやお前、そもそも此奴の住んでる場所外国なんやぞ？昨日の話から察しはついてたけどそれでも固まりたくなるわ

「ははっ、如何したんだい？若しかして僕に会えた事がそんなにも嬉しかったのかい」  
 そう言つてそいつは俺の前に跪き、俺の片手を取り自分の掌へ乗せる

「会いに来たよ、僕の旦那様」

「カエレ」

「ゆ、幸貞君？大丈夫？」

「もう……何でお前ここに居るんだよ、ホント……ああもう」

「あ、あの……取り敢えずお名前をお伺いしても宜しいですか？」

「ああ、これは申し訳ない……僕は宮代みやしろアリア、宜しくねお嬢さんД О Ч Ъ」



## 9 話

「カエレ」

「ははは！そんな事を言つて、本当はユキも僕に会いたかつたんじゃないのか？」

「カエレ」

「嗚呼、その辛辣な態度もご無沙汰していて…身体に響くよ」

「○ね」

「矢張り僕は君無しでは生きられないようだよ！」

「何なのかしら、このカオスは」

そんなの俺が聞きたいわ

唐突に現れたかと思つたら毎度の如く此奴は…しかも無駄に育つた身体で抱き着

こうとするから余計にヤバイ

何だよそれ、メロンでも入つてんじゃねえのか

「抱き着こうとするなよ、暑苦しい」

「いいじゃないか、久し振りに会えた愛しき人なんだ…スキンシップくらいさせてくれ」

「お断りDA」

「嗚呼、でも僕は君の発する辛辣な言葉や暴言だけでも聞けて幸せだよ」

もうやだこの変態、生憎と俺は隣の女王様みたいにドSでは無いんだ

それに虐めてくれと言われて虐められるより、嫌がる奴を虐める方が楽しい

「もう女王様コイツあげるよ」

「何で私に押し付けるのかしら、それに私は女よ?」

「だってほら、コイツどつからどう見てもドMだし…女王様と気が合うんじゃない?」

「嫌よ、それに私は嬉々として来る人より反抗的な人を躰てあげるのが好きなの」

「流石ドS」

「誰がドSよ」

真性のドSは自覚が無いからな、まさにこの人なんじゃないのか…流石は女王様だな

「おやおや、僕を置き去りにして二人でお話かい?」

「出来るならそうしたいがな…で、何で日本に居るんだよお前」

「それは勿論、君に会う為さ…あれ以来連絡すらしてくれないのだから少し心配になっ

てね」

「誰が好き好んでお前と連絡取らなきゃいけないんだよ、仕事はどうした」

「そんなものは既に終わらせてきたさ、来月分までな」

「チツ、相変わらずお早いことで」

「何故舌打ちしたかは聞かないが、暫く此方に住むことにした」

……はあ？マジで言ってるのかよコイツ

確かに此奴の稼ぎ方はどこで出来るしけど、家はどうするんだよ……流石にウチはキツいし絶対泊まらせねえ

「お前住む所はどうする積もりだよ」

「フッフ、僕を見くびって貰っては困るよ旦那様……もう土地を買収して家を建てたさ」

「うわ流石金持ち」

「そろそろいいかしら幸貞君、結局この方は何者なの？」

「ロシアにある三大財閥の一角、正式名称『露西亜総合企業統括財体』……そのトップに当たる人の一人娘、今じゃ跡を継いで此奴がトップだよ」

「まあ僕は基本的に株投資やらで稼いだお金を組織に使ってるくらいしかして無いけどね」

それが出来る時点で頭おかしい事に気付くべきだとは思わんかね

しかも此奴が投資する株は必ずと言っていい程に大成功する、FXも初心者狩りせず  
に堂々と成り上がってく始末

頭おかしい

「そういう訳だ旦那様、暫くは毎日会えるぞ」

「御免蒙る、お前と毎日会うとか精神的にもたない……良くて年一かな」

「そうか、君はそう言うプレイがお好みか……僕を焦らして焦らして、その様子を楽しむ積りなんだね」

「お前マジで一回ブツ飛ばすぞ?」

「安心したまえ、僕はどんな君でも愛しているさ」

「氏ね」

そろそろ一回ブン殴つてもいいよね? 俺大分我慢したよ……偉いよね、凄いよね

あ駄目だ、こいつ殴つたら御褒美になっちゃう

「取り敢えず僕はまだやる事があるからこの辺りで失礼しよう、ではまた会おう」

「二度と俺の前に現れるなよ」

やつとこさ面倒臭い奴が居なくなつた、にしてもコツチに住むのか? ……面倒な要素が満載な日常なのに更に追加されたよ

いつその事この街から逃げるって手もあるけど……それはそれで面倒臭いな、特にリサ辺りが

下手したらヤンヤン病ん病んされそうだから

「取り敢えず帰りますか……悪いな女王様、ここ迄でいいか?」

「構わないわよ、疲れてる様だし早く帰りなさい」

「ああ、お言葉に甘えるとするよ」

「ただいま」

「お帰り、何か疲れてるけ如何かした？」

「まあ、白塗りのリムジンに遭遇したって所かな」

「ああそう、あの娘まだ幸貞にゾツコンなのね」

「らしいな…取り敢えず一回あのクソ親父ブツ飛ばさなきゃ気が済まねえ」

『逆玉だ！』とか言つて勝手に婚約者として提案出したのは父さんだっけ、まあそれで即時OK出す向こうも向こうだけど」

「母さんにも相談せずにな、アイツマジでブツ飛ばす」

「関節もキメていいと思うわよ」

そんな話をしてっていると晶奈も家へ帰つて来た

「たっただいまー、何の話してるのー？」

「幸貞がアリアちゃんに会ったんだって」

「あ、やつぱり？昨日言ってたんだよね」

「なら早く言えこの駄目姉貴」

「痛っ!？」

チョップを頭へと撃ち込む、そういや昨日アリアと食事してたんだっけかコイツ

まあ会いに来るって話を聞いたところで逃げられるかってなると難しいよね

「痛いなーも、そもそも昨日から私幸貞と顔合わせてないじゃんよ」

「…そういうえばそうか、晶奈が帰ってくる前に寝てた俺…朝も出てった後起きたし」

「そしたら今のチョップ理不尽じゃん!」

「知るか、甘んじて受ける」

「酷っ!」

はあ、まあ幸いな事かアイツの年齢は20歳を超えている

同じ高校に転校生が…みたいな展開にはならない事が唯一の救いか

更に読んで教師として、と言うのも無いだろう…アイツにそんな事をしてる暇が無いのは知りたくなくても知ってる

「ほらご飯出来たわよ、早く食べなさい…明日からまた学校でしょ?」

「そうでした、面倒臭い」

「私も仕事だ、面倒臭いなあ」

「姉弟して何言ってるのよ、まあ私も人の事は言えないけど」

流石家族、皆思ってる事がほぼ同じ

皆そこら辺は母さんに似たんだろうなあ、まあ唯一クソ親父の遺伝受けてるのは晶奈だろうな

そう考えるとクソ親父の遺伝子って結構弱いのが、母さんが強烈なのは何となく分かるけど

その後は特に何も無く……

翌日

「行つてきます」

「いつてらつしやーい」

「あれ？晶奈今日は遅いのな」

「何か午後からでいいって言われた、しかも出張だつて」

「ふーん、まあ大方アリアの所にも行くんじゃないのかな」

「だろ、うね、早く行かないと遅刻するよ」

「へーい」

流石はロシア三大財閥、来日……と言うより移住に近いけどもう知れ渡ってるのか

それでもつてゴマスリも早いこと早いこと……ま、知った話じゃないけどね

「あ、おはよう幸貞！」

「ん？ああ、リサ……と、銀髪美少女さんですか」

「名前で呼びなさいよ」

「そりゃ失礼」

「そう言えばさ、この街にここの家並みの豪邸ができたって知ってる？」

「あ……（察し）ふーん……（納得）」

そーいやどの位面積ある土地買ったか聞いてないな

まあそりゃそうか、下手すりゃ弦巻家より財産ある財閥の頭だもんな

豪邸建てたつて驚きはしないよな

「あれ？若しかして知ってた？」

「ああ、まあね……と言うか微塵も興味ないからどうでもいい」

「そうなの？驚くかと思っただけだな」

「取り敢えず学校行こうぜ」



という訳で二人と学校へ向かう

流石にアイツは顔出ささないか、時間帯が時間帯だしパソコンの画面と睨めっこしてんだろ

言つておくがニートじゃないからな、株価と睨めっこしてるんだよ

「はあ、面倒臭い…もう色々面倒臭い」

「いつにも増して元氣無いね幸貞、何かあつたの？」

「んー、まあ敢えて言うなら面倒事が舞い降りた…かな」

「幸貞の言う面倒事って両極端だからなく、それ本当に面倒事？」

「俺にとつてはね…まあお前が気にすることでもない」

ここまで来て気付いたけど友希那一回も喋ってないな

と言うかさつきから塀の上を歩く猫を凝視してる、そんなに気になるなら行けばいいのに

そしてそれを横目に微笑ましく見やるリサ、そして居た堪れない俺

俺は一体どんな反応をしてればいいの？

なんてことを考えてる内に学校へ着いた

「今日はバイトだから帰りは俺早いから」

「うん、分かった」

そういや予約リストの中に Roselia あったな、どの道また会うのか

教室まではピンク頭や異空間に遭遇すること無く辿り着けた

「あ！幸貞君おはよー！」

「はいおはよーさん」

「幸貞、何かやさぐれた？」

「やさぐれたんじゃなくて寝れたな、たえさん使い方間違ってるぞその日本語」

「あ、そつか……あとおたえ」

「断る」

「おたえ」

「たえ」

「おたえ」

「たえ「はいはいもうその辺にしときなつて」…ストップが早いな沙綾」

「もう先生来るんだから席に座りなよ」

いつも通りのホームルームだった、ギリギリに香澄が滑り込んできて出席簿で叩かれてた

『たたかれた』じゃない、『はたかれた』だ…滅茶苦茶イイ音鳴ってて痛そうだった

そして昼休み

「幸貞——！！！」

「うわああああ異空間が来おったぞおおお」

花咲川の異空間こと弦巻ところが何故か俺の所へやって来た

何でや、俺が何したんや…ココ最近静かに昼飯が真面に食えない

「何だよこころ、何か用か？」

「ちよつと幸貞に聞きたいことがあつてね！宮代アリアつて人知ってる？」

「あん？急になんだよ」

「昨日ウチに来てお父さんと話してたのよ、そしたら何度か幸貞の名前が聞こえて…どんな関係？」

「さあ？俺は知らないね（大嘘）」

「むむむむ、本当に？」

「ああ、本当に」

「…：何で幸貞の考えてる事はいつも分からないのかしら、本当に不思議だわ」

「どうせ俺は何考えてるか分からない得体の知れない物体ですよ」

「そ、そこまでは言っていないと思うよ幸貞君」

りみちゃんからのフォローが入ったが、まあ実際そうだろうよ

感が鋭く大抵の人間なら嘘や隠し事を見事に見抜くところが唯一俺の考えてる事だ

けは分からないと言うのだから

自分ポーカーフェイスには自信ありますんで、それだけの問題じゃないような気がするけど

「聞きたいことはそれだけよ！じゃあまたね！」

嵐の様に去って行つたな、思つたより早く行つてくれたから後は静かに昼飯が食えるな

### 放課後

さて、バイト行きますか

はい到着、え？速すぎる？そういう事は気にしない方がいいよ

えー今日の予約は……ポピパに Roselia とアフグロか、いつもの面子だな  
「やつほー幸貞、鍵借りに来たよ」

「よう沙綾、ホレ」

「ん、ありがとう…幸貞も仕事頑張ってるね」

「おう、ありがとな」

続いてRoselia

「ああ！幸貞さん！」

「おや、あこか…そう言えばここに来てから顔合わせてなかったな」

「バイト始めたんですか？」

「ああ、ちよつとゲーセン行き過ぎて金無くてね」

「そうなんですさか、そう言えばアツチの方はもうやらないんですか？」

「あ…うんまあ、またやり始めると多分今度こそ俺は廃人になる自信があるから」

「ハマってましたもんねー、でも残念ですよ…ゲーム内史上最強の人とプレイ出来なくなるって」

「まだあの記録塗り変わってないの？」

「勿論ですよ！あんな偉業は誰も成し遂げられないですよ！」

前言った俺が廃人になりかけたPCゲームの話ね

ゲーム内で超高難易度クエストと言われる『覇帝の討伐』ってのがあるんだが、ソロで五連戦を回復無しのノーミスノーダメージを成し遂げてしまったのだ

少し引き継いだ才能の無駄遣いとはまさにこの事だな、てか最早これ廃人のレベルだ

よね

「あこの憧れです！」

「そいつは嬉しいね…そろそろ時間じゃないか？」

「あ！そうですね、今度はりんりんも一緒に話しましょうね！」

「ああ、バンド頑張れよ」

「はい！」

よくよく考えるとあこってどのバンドと比べても最年少だよな

一人だけ中学生か…まあ趣味に関しては何も言うまい

続いてアフグロ

「幸貞さんこんにちは」

「ああ、こんにちははつぐみちゃん」

「いつも何を読んでるんですか？」

「これ？第三種電気工事士の過去問、まあ簡単に言えば国家資格」

「国家資格ですか…：受けるんですか？」

「まあね、今度試験があるからそれに向けてチヨロつと読んでこうかなって」

「頭いいんですね幸貞さん、凄いです！」

「はは、まあ俺なんて端くれだがな…メンバーがお待ちかねの様だよ？」

「あ！すみません、じゃあお仕事頑張ってください！」

「ああ」

はあ、平穩って…こんな感じなのかな

# 10話

今日は土曜日、日が飛んでる？ 気にするなって前にも言つたら

まあ休みの日だからダラダラしてようかと思つたのだが

「悪いんだけど幸貞、少し買ひ物に付き合つてくれない？」

「珍しいな、華蓮が俺に頼み事とは…それで何買ひに行くつて？」

「音楽CDを買おうと思つてね、幸貞の趣味は私とよく似てるから少し手伝つてもらおうかと思つて」

「ほー成程、別にそれくれらいなら構わんよ」

という訳で電車を少し乗り継ぎCDショップへ

まさかタワ〇コまで行くとは思つてもなかった、確かにここは確實だけどさ

はあく、たけえビルがいつぺえだあ

「コッチまで出てくるとは思いもよらなかつたんだが」

「言うの忘れてたわ、私基本的にCDはここでしか買わないの」

「左様でございますか」

人混みつて嫌いなんだよね、鬱陶しくて仕方が無い



そもそも都会があまり好きでは無いな、さっき言った通り人多いし色々周囲の音が煩いし

まあ良い所もあるけどね

「ありがとうね、付き合ってくれて」

「どの道暇だったから構わんよ」

華蓮の買い物が終わり店から出る、CDは三枚程購入し満足そうだった

しかし矢張り人混みつてのは慣れんな、早く帰って静かなところでゲームしたい

「すみません、少しいいですか?」

唐突に後から声を掛けられた、振り返るとそこには黒いスーツを着て眼鏡を掛けたT

HE優男みたいな男が立っていた

「何でしょうか」

「私はこちらの者でして」

そう言つて華蓮へ名刺を渡す、そして

「アイドルに興味はありませんか?」

どっかで聞いたことのある様な一言が飛んできた

やめろお前、俺それちゃんと見てないから全然分からないぞ

おっと話がズレたな、失礼

「……だってよ華蓮」「……だってよ幸貞」

保々：いや、全く同じタイミングでそう言った

「はあ？俺な訳ないだろうどう考えても」

「何言ってるのよ、アンタ顔だけはいいじゃない」

「おい、その言い方だと俺の性格が悪いみたいない言い方じゃねえかよ……まあ全くもってその通りだけどさあ」

「え、ええと……私は御二人に言った積もりだったんですが……」

若干苦笑いをしながら俺達の間に入って来た

アイドル、アイドルか……駄目だ、ピンク色の頭でピンク色の脳内をした人しか頭に浮かんでこない

あと金髪ロングの女王様が頭を支配してる、イメージ最悪だなおい

「俺も？言っておくが全く興味無いからな」

「まあ私も興味は無いわ、正直面倒な話なのよね」

二人揃って迷う素振りすら見せずにキツパリと断言する様に入れる

「まあそう言わずに、ここは一つ話だけでも聞いて下さい……お時間は取らせませんから」  
「そう言う後付の文句が一番信用できないんだよね」

「……まあ、頭ごなしに断るのも如何なものかと思うし……話だけなら聞きましょう」

「え、行くの華蓮」

「取り敢えず話だけ…ね」

「それは俺にも付いて来いと言ってるのかね？……はあ、どの道暇だからいいけどさ」

有無も言わさない笑顔を頂いたので仕方無く話だけは聞くことにした

何故だろう、俺の周りにいる女の子はこんなにも怖いのか

そんな訳で勝山<sup>かつやま</sup>章<sup>あきつら</sup>…ああ、名前は名刺から見ただ

「その名刺もう一回見せてくれない？」

「別にいいけど、何かあったかしら？」

「んー、まあ少し気になる事がね………あ、この事務所…パスパレが所属する所だ」

「それって最近有名になったアイドルバンドじゃない、結構有名な所の人のね」

はーん、そうなのか………ちよっち待ってもものすげく行きたく無くなってきた

パスパレがいる事務所とか行きたくないんだけど、頭ピンクとか女王様に捕まったら

碌でもない事になるし

よく考えれば天災がいるじゃねえか

「うっわマジか…帰っていい？」

「……まで来て帰る気？」

「アツハイ、スイマセン」

「分かれば宜しい」

うわーん、お姉ちゃんが怖いよお…昔は可愛かったのになあ、あの頃は最早遠い空の彼方…：日が経つのは早いのお

「ここが事務所になります」

うん、まあ特にこれといった特徴は無いな…言葉で表わせと言われると困る分類に入る建物です

応接室的な所へ案内された

「それじゃあ少し説明しようか」

掻い摘んで話をしよう、パスパレがアイドルバンドというジャンルを成功させた事により他の事務所からも業界進出を狙ってアイドルバンドを企画しているらしい

まあ簡単な話そのの對抗でもう一組出そうって言う狙いらしいが…

「もし俺達が楽器を弾けなかったらどうする積もりで？」

「勿論その場合はボーカルに回ってもらうか、レッスンを受けて覚えてもらう積もりです」

そう言えばパスパレも最初は皆初心者から始めたんだよな、それもそうか

まあ俺と華蓮は基本的に二時間程あれば大抵の楽器は弾けるから何の問題も無いが

：

「で、話を聞いた限りどうよ華蓮さんや」

「……因みに、バンドと言うからにはメンバーがいるんですよね？」

「はい、もう既に二人は決まっていますのですが……二人だけでは流石に少な過ぎると思いますして」

「それで私達を勧誘したと……まあ分かりました、その人達とは会えますか？出来れば演奏も聞きたいのですが」

「分かりました、では本人達を確認を取ってきます」

どうやら他の二人もこの事務所内に居るらしいな

「というかそこまでやる必要があるのか？」

「ここまで来たらやる所までやるわよ、他のメンバーがどの程度に実力があるのか……貴方も気になるでしょ？」

「律儀だねえ、話聞いて帰るつもりだったんだけど……まあ無いと言えば嘘になるかもな………ならその話に乗ろうか」

暫くすると勝山さんが帰ってきた、どうやら他のメンバーも俺たちの事を見たい様子なのでメンバー達のいる部屋へ向かうことになった

「はじめまして、私は原田 はらだ 結 ゆいと言います……よろしくお願ひします！」

「茅原田 ちほらだ いずみ 泉 いずみです、よろしくお願ひします」

………は？

勝山さんの胸倉を少しギョツと掴む、そこから一気にこちらへ引き寄せる

「なあディレクターさんや、女の子だなんて聞いてないぞ？しかも二人共…コイツは一体どうゆう事かね？」

「あ、あはは…えつと、やはり女の子だけのアイドルバンドだと同じになつてしまうので…男の子が一人くらいは居たほうがいいかと」

「成程なあ、それで男が一人しかいないと聞けば高確率で断られるから黙っていたと…ほお、いい度胸をしてるじゃねえかよええ？」

「はい、あの…本当に申し訳ありません」

嵌めやがったなこの野郎

原田と名乗った娘は茶髪のボブカット…そして流石はアイドルの卵、ルックスはそんなじよそこらの娘より頭一つ抜けて可愛い

茅原田と名乗った娘は黒髪ロングのストリート、クールビューティだね

可愛いというよりは綺麗という言葉が似合う

「別にいいじゃない幸貞、ハーレムよ？」

「貴女が良くても他の娘達が居るでしょうが、そもそも実姉を含めたハーレムとか誰得だよ…どこのラノベだよ」

「まあいいじゃない」「いや良くねえよ」取り敢えず許可を取って貰ったんだから演奏は聴くわよ」

「へえへえ分かりましたよ」

原田さんがギターボーカル、茅原田さんはキーボード

まあでも最悪この二人だけでもやれるよな、ギターとキーボードあれば割と色々出来るぜ

取り敢えずお手並み拝見しますか

「よろしくお願いしますー！」

「お願いします」

演奏が終わった

うん、あれだな…上手いよ

確かに上手いけど、それだけだね…それ以外に何も感じなかったな

「……どうやら華蓮さんも同じ意見の様ですねえ」

「まあ双子だし、考える事も似るわよ」

「あの…如何でしたか？」

「ハッキリ言うわよ、貴女達の演奏は上手いわ…でも唯上手い、それだけね…それ以外何も感じなかったわ」

流石双子、全く同じ意見だな

その言葉を聞くと二人は揃って首を傾げる

「ええと…詰まり、どうゆう事なのでしょうか？」

「まあ今の感想じゃその反応よね、少しストレート過ぎたわ…悪いわね」

「ああいえ！わたしに理解力が無いだけです、気にしないで下さい！」

「そうね、簡単に言う…正直な話、演奏や歌が上手いアイドルなんてゴロゴロ居るのよ…それも下手すれば貴女達よりも上手い人も居るわ」

「まあ詰まり、言い方は悪いがその程度だとスグに潰れるって事だよ」

「そう口を挟む、華蓮は『またそういう言い方をして』と言いたげな顔で俺をジトーツと見てきた

悪いがこれは俺の性分なんでね



「この…程度、ですか」

「ああそうさ、確かに周りから見れば上手いだろうよ…だけど芸能界で生きていこうとするならその程度…って評価になるね」

「……なら…貴方々はどうなんですか？」

「ち、茅原田ちゃん！」

「ん？俺達？」

今まで黙っていた茅原田さんが喋り始める

「そうです、私達は貴方々が勧誘される少し前からこの業界を見てきました…なのに貴方々はそれをさも知っているかの様に話すのはそれなりに自分達に自信があるからですよね？」

「自信、自信ねえ…自信なんてモノはそもそも存在しないよ、所詮言葉である上に存在した所でどうにかなる訳でもない…あつた所で何の役にも立たないモノを態々持っている程俺のキャパシティに空きは無い」

「流石私の弟、捻くれてるわね…まあでもそんな返答じゃ納得しないでしよう？だったら私達も演奏するわよ」

「え、そんなこと聞いてないよ姉さん」

「止めなさいよ急に姉さんとか呼ぶの、気持ち悪いわよ」

そんな酷い、事実に姉だから姉さんって呼んだのにこの返事だよ…まあ確かに俺も自分で言ってるで気持ち悪かったから否定は出来ない

「分かりました、聴かせてもらいます」

「原田さんもそれでいいかな？」

「は、はい…」

「で、何やるのよ華蓮さんや」

「貴方が決めていいわよ、無理矢理突き合わせてるんだし」

ん…どうしようかな、そうなるよ

「あ、貴方のやつってる音ゲーの曲でもいいわよ…ていうかそれにして、短くて済むから…

あと歌詞があるやつね」

何でもいいたか言った癖に注文出してきよったぞこの人、さっきの言葉と矛盾してる

じゃねえかよー

まあどうでもいいけど

「あつそう、じゃあMUSIC PRAYERでいい？」

「無理、私今あんなテンション高い声出せない」

「じゃあCYBER GANG」

「あれボーカル声低い普通の男じゃない、無理だわ」

何でもいいとは一体なんだったのやら、結局貴女が指示するんじゃないですかよ

「じゃあGLAMOROUS SKY」

「だからボーカル男じゃない、まあ行けなくはないけど……ていうかそれ音ゲーじゃなくない？」

「何言ってるんだよ、最近追加されたじゃねえかよ」

「……ああ、そうね……取り敢えずその話はここまでにしておきましょう、後々面倒だわ」  
何の話をしてるかは分からないが、面倒事は御免なのでここまでしておこう

「じゃあそれでいいわね」

「ああ、俺ドラムやるからギターボーカル宜しくね」

「分かったわ……と言うか、よく良く考えれば最初から私が歌う前提なのね」

「当たり前でしょ」

俺が元気に歌ってる姿とか想像してみろよ、それこそ気持ち悪いだろ

取り敢えずやりますか

## 11話

演奏が終わる、いやー久し振りにドラム叩いたけど疲れるねこれ

それに GLAMOROUS SKY って結構激しめなんだよね

「と言うか華蓮、何故に英語 Ver. で歌ったよ」

「気分かしら……これと言って理由は無いわよ」

「さいでございますか、さして……アイドルの卵ちゃん達の反応を見ようじゃないか

「す、凄いです！ボーカルも……ギターもドラムもプロ以上でした!!」

「……貴方々は、一体何者何ですか？」

「おつ、クールビューティちゃんの表情が驚愕に染まってるなあ

「これはこれで新鮮味があつて宜しいな

「何者ねえ、一般人……って言っても信じてはくれなさそうだね」

「貴方が一般人？寝言は寝て言いなさい」

「人の事言えない貴女に言われたくないね」

「……まあ、これが私達と貴女達との差よ」

「……それ程までの実力を持っているのに、何故貴方々は普通に暮らしているんですか

…

まあご最もな意見ですわな

俺と華蓮、それに晶奈も加えても一緒にバンドでも組めばそりや売れるだろうさ

まあ、実際そんな面倒臭い事なんて絶対やらないけどね…特に俺が

「逆に聞くが普通に暮らしてはいけない理由がどこにあるのかね？」

「そ、それは…」

「別に才能があるからそれを活かせなんて義務は何処にも存在しない、した所で従わないけどね」

「……才能が無い者達への侮辱だと思いたければ思えばいいわ、けどそれを思った時点で自分自身を無能と決定付たのは自分よ」

「残念ながら君達と俺達じゃ信念や性格、心情なんかがまるで違う…グループとしての仲間を見つけたいたいなら他を当たりな…ま、いざとなれば甘える事の出来る相手が見つかるといいな」

そこでまた華蓮に睨まれる

だからねえ、俺は生憎こういう性分なんだってば…それにこれくらい言っただけでいいところの娘達への為にならない

「私達は甘えたくてメンバーを集めていたんじゃない…！」

「君がそう思っているとしても、事実に他にメンバーが居ればいざとなつた時に甘える事が出来るだろ？口ではそう言つてもその状況が来た時に耐えられるのかな？」

「っ……………」

「……………悔しかつたら二人で成り上がってみろよ、そしたら話でも文句でも聞いてやるよ」  
踵を返しドアへと向かう、その途中に立っていた勝山さんの肩へポンツと手を乗せる  
「まあそう言うことだ勝山さん、やる気の無い奴等を雇つてもいい事は何も無いぜ？ここは諦めておいてくれや」

「……………はあ、分かつたよ……………素直に手を引くよ」

「話が分かる人で良かったわ、じゃなければ……………彼女達の、若しくは貴方の信念が木っ端微塵だったかもね？」

悪い笑を浮かべる華蓮、おおくわばらくわばら

ほら見る勝山さんの笑顔が見た事ないくらいに青ざめてるぞ、まあ俺も華蓮と同じ意見だけだよ

ドアを開け、外に出る

「……………おやおや、パスパレの皆さん……………どうも」

「ええ、こんにちはは幸貞君……………こんな所で会うなんてね」

あらあら、何やら女王様がご立腹……………お怒りになられていますね

それを後ろからオロオロと眺める麻弥ちゃんと丸山先輩&イヴ：あ、俺基本的に自分の学校にいる先輩以外には軽いんでそこんところよろしく

因みに花音ちゃんは別枠だから

ていうかその天災、ガン見してくんな：

「はあ…面倒臭いなあ、華蓮先帰ってて」

「いいのかしら、貴方一人でどうにか出来るの？」

「するしか無いでしょうが、それに貴女が居ても状況は変わりやしないよ」

「邪魔者は早々に退散しろって事ね、そうさせてもらおうわよ」

背を向けて手を振りながら帰っていった

いやまあ別に邪魔という訳じゃ無いけど、恐らく女王様が用事あるのは俺の方だし

華蓮が居てもやる事無いのよね

「…今のはお姉さん？」

「ああ、双子のな…それで何か用かね、女王様？」

「あの子達は一応私達の後輩なの、後輩のデビューを邪魔されて怒らない先輩は居ない

と思うのだけれど？」

「成程ねえ、なら女王様…貴女は彼女達を餓死させたいのかね？」

「……餓死？」

「餌を与えられ自立心を無くした生き物は餌を捕ることを止める、何故か分かるか？ 誰かしらが餌を持ってきてくれると勘違いするからだ、そしてやがて餓死をする」

女王様以外は意味が分かっているように首を傾げていた、まあ流石女王様だよな

伊達に芸能界を長く経験してないわ

「貴女ならこの意味が分かる筈だし、どれ程大事な事なのかも理解できる筈だ…いいや、理解が出来なかつたら貴女は今ここに居ないだろう」

「…：そうね、確かにそれは大事な事だわ…けれど、少し位は協力してあげてもいいんじゃないかしら？」

「甘いねえ、甘々だ…：そこで少しでも飴を上げてしまうと人というモノは墮落してしまう、鞭を振るうところはとことん振るわなくちゃいけない」

まあそれ以前に面倒臭いってのがあるんだけどね

平坦で平凡な人生を送りたいって言うてるのにアイドルやるとか矛盾もいい所だろ「それに俺が態々協力してやる義理もないでしょう？」

「ゆ、幸貞君！それは言い過ぎだと思ふよ！」

「言い過ぎも何も事実ですから丸山先輩、誰がなんと言おうと俺は俺の道を歩いて生きて行くんです…：俺の道だけが俺を創るのだから」

ま、世間一般的にはこういう生き方をしてる奴の事を自己中…：と言うのだけれどね



自覚がある分まだ俺はマシだと思ってるよ……いや、まあ自己中だけで害悪ではあるけどさ」

「まあ、あの程度信念を否定……と言うか刺激されたくらいで壊れるなら元からこの世界芸能界には向いていなかったってことでしようね」

「もし彼女達があれでアイドルを諦めたらどうする積もりなのかしら？」

「人生諦めも肝心ですよ？所詮その程度だった……って事が証明されるだけでしようよ、まあ自分達で決める事なんですから外野がどうこう言う問題じゃないと思うんですがね」

基本的なこういう事柄は第三者が介入すると余計に面倒な方向へ進んでいく事が多い

選択肢としては、見守るしか無い……一つしか選択肢が無いものは選択肢とは言えないけどね

「俺もそろそろ時間なので、一つお節介を焼きましようか」

「……何かしら」

「女王様、貴女は今幸せですか？」

「何よいきなり……少なくとも不幸ではないわよ」

「左様ですか、人間の人生ってのは誰しも歩めば幸福の山と不幸の谷を歩む事になる……」

貴女は今少なからず幸せの山を登っている、然し臆て山を登りきるとその先には谷が待っている」

ま、俺みたいな人生を送ろうとして無ければの話だけだね…何事にも例外つてのはあるものだよ

「谷を登る時、仲間や友人を頼るのもいいですが結局最終的に決定を下すのは自分自身ですからね？その時になったら考えればいい事ですけどね…まあ、精々押し潰されない様に……千聖」

「行っちゃった……あれ!?今千聖ちゃんのこと名前で呼ばなかった!?!」

「と言うか、未だに千聖さんの事名前で呼んでなかったんツスね」

「……あれ？日菜ちゃんは？」

「ヒナさんならユキサダさんの後を走って追い掛けて行きましたよ」

「あの、さつきから千聖さんが固まったままツスよ」

「……………つゝゝゝ!!!」

「うわあ!?!千聖ちゃんが真っ赤になってるよ!?!」

「幸貞さんの名前呼びつて結構破壊力あるツスよ、ジブンも最初ヤバかったツス」

「私もでした!」

「イヴちゃんまで……………そしたら名前で呼ばれてないの私だけ!?!」

「大丈夫ですアヤさん!ヒナさんもまだ呼ばれた事ないって言ってました!」

うわははははは

どうだ、まあ場面が場面だったけど女王様の事を唐突に呼び捨てししかも名前呼びにし  
てやったぞ

反応が見れないのが残念だが爆弾を落とせたから満足だわ

「ねえユツキー、さっきのやつの意味って何？」

「うわあおビックリしたなあ、いつの間に居たんだよお前」

「んー？さっきから居たよ？」

「あつそう、それでさっきのって…餓死の話か？」

「そうそう、アタシ良く分かんなかったからるんってこなかったんだよね」

何だよ、てつきり天災天災だから理解してるのかと思つたんだが…まあ女王様より芸能界  
歴は短いから仕方無いか

事務所のロビーにソファがあつたのでそこに座る、すると後から首に両手を回して顎  
を頭の上に乗せる天災

最早突つ込むのも面倒だからいいや

「餓死つてのは仕事でゼロの状態が続く事、それで餌が仕事の事な」

「へえ、それでそれで？」

「あの娘達が若しアイドルデビューをしたとするだろ？最初の内はお前らの影響が少な

からずあるから仕事は来るだろう…だがな、人つてのは飽きつてのが来るもんだ…その時にどれだけ自分達だけで仕事を見つつけられる力があるかって話だ」

「それで態と突き放したの？」

「そうだ」

「ふーん、本当にそれだけ？」

「他に何かあると思う」

「ユツキーが他人の為だけに言動を起こすとは思えないなーって」

「お前俺の事をなんだと思ってるんだよ…まあ事実だけど、それを話してやる義理はないね」

「えー!!おーしーえーてーよーくー!!」

「嫌だね」

「実際面倒臭いだけだからな、まああの二人ならあの程度言われただけじゃ折れはしないと思ってるけどね」

華蓮と俺のダブル攻撃を受けてなお目の中にある信念は折れてなかったからな

「ねえユツキー、ユツキーが努力してる事って何？」

「何だよ急にそんなこと聞いてきて」

「だってユツキーっていつつも人に対して意見を言う時って人よりも歩いてきた様な意

見を言うじゃん?」

「そうか?……まあ敢えて言うなら成る可く努力せずに人生を歩む事を努力してるかな」

「何それ、矛盾してるじゃん……でも何となくユツキーが言うところなあ、ふっしぎー」

「あつそ……ま、お前もそこそこで頑張つとけよ」

頭の上にある天災の頭を一撫でする、すると何故か顔は見えないがコイツが言うところのるるるるるんってなってるのが分かる

「ねえねえユツキー! もう一回撫でて!!」

「断る、次のイベントか何かでパスパレとして大成功したら撫でてやるよ」

「ホントに!? 嘘つかない!?」

「何でそんなに必死なんだよ……嘘つかないよ」

「じゃあアタシ頑張っちゃうからね!」

「はいはい、頑張れ頑張れ」

この後、事務所の受付嬢さんに天災と恋人なのかと聞かれたが全力で誤解だということとを説明した

そういう受付嬢さん、俺達がソファ座つてるところを滅茶微笑ましく見てたなあ

## 12話

さて、今日は前より一日経って日曜日だ

本当にする事が無くて暇なんだが、バイトでも行こうかと思つたのだが「休みの日は休まなきゃダメだよ？」とまりなさんに言われてしまったので行きたくとも行けない

「あゝあゝ暇だ……あつそうだ（唐突）、羽沢珈琲店でも行こうかな」

大分前に暇があつたら行くよとか言っておいて行つてないな

行く行く詐欺になつちまうじゃないか

という訳で商店街にやつて来ました、久し振りだなここに来るの

ええと……あ、こゝゲフンゲフン……少し声が裏返つてしまった様だな、取り敢えず羽沢

珈琲店へと着いた

「いらつしやいませー……あ！幸貞さん！」

「どうも羽沢さん、約束通り来たよ」

「お待ちしてました！ではそちらの席へどうぞ」

指定された席へとすわる、雰囲気いいなあこの店……落ち着ける

まあ珈琲店……詰まりはカフェみたいなもんだしな

この場合は喫茶店の方がいいのかな？まあそこら辺の細かい事はいいか

「へいらつしやい！ご注文はなににしやしよー！」

「イ、イヴちゃん！うち喫茶店だから！」

「そうだな…大将、マグロ二貫」

「幸貞さん!？」

「かしこやりやした！タイショー！マグロ二貫！」

「うえええええ!？」

何だ、イヴはこんな所でバイトしてたのか…コイツはたまげたなあ

ていうかアイドルがバイトしたら結構宣伝としては活躍するよね、まあそんな事は置いておいて…目を回してる羽沢さんをどうにかしなきゃな

「冗談だよ冗談、普通の珈琲で…あ、ブラックね」

「かしこやりやした！」

「や、止めてくださいよ幸貞さくん」

「ごめんゴメン、イヴがああ言う事言うからつついっつい乗っちゃったよね…つてか、イヴここでバイトしてたのか」

「はい、何でも日本文化を学びたいとかで」

日本文化を学ぶのに何故喫茶店というチョイスをした？相変わらずよく分からん感



性をお持ちのようで

「では、少々お待ちくださいね」

ふむ、然し二人とも美人なだけあつてウエイトレス姿が途轍も無く似合うな  
イヴに至つてはそもそもモデルだし似合わない訳が無いんだがな

何かあれだなあ、リサとか友希那辺りにメイド服でも着てもらいたいな

リサは割とノリノリで着てくれるかもしれないけど、友希那がなあ…猫耳とか付けさせたらもう完璧じゃね？リサも喜びそうだな、あと香澄とかも

そう言えば香澄の髪型ってどうなってるんだろ、常にあの猫耳の様な髪型から崩れないけどワックスとか使ってるのかな？いや女の子だから使つてはいないか

「お待たせ致しました、コーヒーになります」

「ああ、どうも」

色々と考えていたら注文した珈琲が届いた

一口啜る……あメツチャ美味しいなコレ、今まで飲んだことねえよこんなに美味しい珈琲…超美味い

「羽沢さん、この珈琲って誰が入れてるの？」

「私のお父さんです、お味は如何でしたか？」

「すげえ美味しい、冗談抜きで」

「ありがとうございます、お父さんも喜びます」

カウンターの方を見やるとoh:It's Dandyな男の人が立っていた

あの人かな、そう思っているとコチラに小さくグツと親指を立ててきたので立て返して  
ておいた

あの人だな

「それよりいいのかい？他にもお客さんがいるけど、俺となんか話してて」

「イヴちゃんも居ますし、一区切りも付いてるので多少は大丈夫です」

「そうかい、ならいいけど……」

次の瞬間、羽沢さんの後ろを通るイヴが転けた

しかもトレーに恐らく注文された品であろう珈琲を乗せたまま、すかさず席から立ち  
上がりトレーに手を伸ばす……そして珈琲が溢れる前にトレーを平行に戻しながら受け  
止める

そして空いている腕をイヴの腰へ回す、緊急事態だから許してくれよ

つか腰ほっそ、何だコイツ……ああモデルか（納得）

「……つと、あつぶねえ……これ何処のテーブル？」

「え？……あつ、ええと……アソコの方です……でもユキサダさん……」

「お前今ので足挫いただろ」

イヴの視線が指す方へ目を向けると、20代程の女性が座っていた……と言うかどうかや  
ら現場を目撃されたらしく驚いた顔をしていた

あとすっごい美人

ていうかさ、この街ってやけに美人の人多くない？美少女もいっぱい居るし……凄くね  
？

「……はあ、柄でも無いけど……少しやってみるか」

「え？幸貞さん？」

トレーを持ったまま注文をしたお客さんの所まで歩いて行く

「御騒がせ致しました、ご注文の御品です……お嬢さん」

「は、はいっ……あり、ありがとうございます……」

成る可く良質な声でやった……ていうかこの人、若干声裏返ってたな

はあ、柄でも無い事はしない方がいいな

「君、ウチでバイトしないかい？」

早っ、Dandyなおヤツさんがいつの間にか俺の肩を掴んでいた

「いや、俺別のバイトをやっているの……流石に掛け持ちは……」

「なら今日だけで構わない、イヴちゃんの代わりをやってくれないか……恐らくあの捻り  
方じゃ今日は無理だろうかから」

確かにイヴの捻り方は結構痛そうな捻り方をしていた、今日一日は無理しないで休んでいた方がいいだろう……はあ、仕方無いか

「分かりました、今日だけですよ」

「ありがとう、助かるよ……勿論お給料は上乘せしておくから」

という訳でウエイトレスに着替えてきた、やだよもお帰りたい

接客業つてのが一番俺は苦手なんだよ……常に自分ではない自分を作つてなきやならないから疲れる

何故作るかつて？素のまままで接客したらクソだと思ふよ？

そしてこの日は一日羽沢珈琲店で臨時アルバイトとして働いた

羽沢さん、さつき一区切り付いたつて言つたじゃん……メツチャ人来るんだけど、しかも殆どが女性客

え？一緒に写真？ちよつと店長この店はそんなサービスしてるんですk……え、何？サービス料も出るつて？……そ、そんな言われたらあ……やるしかないやんけえ……

「ハア、チカレタ」

「済みません幸貞さん、写真撮影までして貰っちゃつて」

「いいよいいよ、その分サービス料が発生するらしいし……貰うならちゃんとおれ位粉すき」

「本当に済みません……これ、私が入れた珈琲です」

「ああ、どうも」

うーむ、美味しいな……お父さんに負けず劣らずに美味しい

だが流石は年の功と言ったところか、深みがお父さんの方があるな

「どう……ですか？」

「美味しいよ、お父さんに負けてない位に」

「あ、ありがとうございます！」

「さてと、もう一頑張りしますか」

てな訳で閉店までフル稼働で働きました、客足が引かねえのなんの

いつまで経ってもピーク状態だよ止めてくれ全く

「ありがとう、これはお給料だ」

「はい、どうも……何か多くないですか？」

「サービス料も入って上乘せもあるから、その位が妥当だと思うが」

「……左様でございますか」

まあ貰えるモノは貰っておいて損は無いか、circleの日給を軽く超えてきたから結構ビックリしてる

一応circleはこの街で一番時給が高い筈なんだけどねえ

ま、気にしたら負けだな

「また暇な時は手伝ってくれ」

「気が向いてやる気が出て更にコンディションが良かったら考えますね」

「大分ハードルが高いね…」

しかもやるとは言っていないからな？考えるってだけで断る可能性も大いにある

取り敢えずそんな感じで羽沢珈琲店を後にした…明日学校じゃあん、面倒臭い

「ねえねえ幸貞！これ何!?!」

「何が何、何の話してるんだかさっぱり分からないんだが…主語をつけてくれ」

「ああゴメンゴメン、ちよつと急ぎ過ぎちゃった」

昨日の羽沢珈琲店でのバイト疲れを若干引き摺った月曜日、月曜というだけで気が滅入るのに疲れてるから尚更帰って寝たい

そんなことを思いながら歩いているとリサに捕まった

「昨日アタシの○w i t ○ e r に流れてきたんだけどさ、えーつと……あつた！ほらコレ」

「どれ……ああ成程、現代のSNSって怖え」

そこにあつた写真は、俺のウエイトレス姿だった

隣に恐らく投稿者であろう人が写ってるから昨日一緒に写真撮ってくれて言っていた人の何れかだろうな

まあ別に俺は気にしないが本人に確認取るとか気を付けた方がいいと思うがな

「何が嬉しくて俺とのツーショットを上げるのやら」

「誰でも上げると思うけどなあ……ほら見てここ、いいねの数凄いでしょ」

「うわ何それ気持ち悪っ、丸山先輩よりいいねとかRT来てるじゃん」

「サラッと彩をデイスらないの」

「そんな積りは無くも無かつたんだがなあ」

「若干自覚あつたんじゃん」

さあて、何の事やらな

と云うか恐らくだがこの人以外にも投稿した人は居るだろうなあ、そうなる羽沢珈琲店が一躍有名になるんじゃないか？

それはそれでいいか、結果オーライだな

でもそうなるうちよくちよく顔出さなきやならなくなるのか俺、それは面倒だわ

「そう言えばここつて羽沢珈琲店だよ？何で幸貞がウエイトレス姿に？」

「臨時アルバイトだよ、偶々その時にイヴが足挫いてな…その埋め合わせだよ」

「へえ〜そうだったんだ、凄い似合ってるよこの制服」

「そりやどうも」

そんな訳で学校到着、リサと別れて教室へ向かった

「あ、幸貞おはよー」

「おう、おはよう沙綾」

「ねえねえ、これ見た？」

そう言つてきつきとは別の投稿写真を見せてくる沙綾、やっぱり他の人も投稿してたか

「それとは違うやつだが、見たよ」

「そうだったんだ、それでそれで〜？何で幸貞が羽沢珈琲店の制服を着てるのかな〜？」

「イヴが足挫いたから臨時で入ったんだよ、一日限りの出血大サービスだよ…もう二度



とやりたくないけどね」

「え、そうなの？ウチでも接客やってもらおうかと思っただけだなあ」

「俺接客業は好きじゃないんだよ、疲れるから」

「一回だけさ、ね？一回だけでいいからやってくれないかな？頼むよ」

「それ相応の見返りがあるならやるけど、そうだな……お前んとこの制服ってどんなの？」

「え？……ええと、女の子がこれで……男の子がこれ」

「ふむ……じゃあ手伝う代わりに女子用の制服を二着貰っていいか？」

「ま、まあ全然いいけど……何に使うの？」

「それは後でのお楽しみ」

よし、材料調達出来たな

後は少し癪だがアイツに頼んで作って貰うだけだな

何するかって？内緒ってさつき言ったら、まあ俺の考える事だから碌でもない事ってのは確かだよ……自分で言うのもなんだけどね

## 13話

さて、皆様には校外学習なるものはあつただろうか

校外学習とは、学校の外へ出て色々な人やモノを見て…或いは体験を通して学びを得るという活動だ

保育園や幼稚園で言うなら遠足…小学校で言うなら社会科見学…中学校で言うなら職業体験

と、まあ様々であろう…なら高校ではどうだろうか

大学に進学する者も居れば、卒業と同時に就職する者も少なからずいる

その為にも社会というモノを見て学び、実際その時になつて自分がどう動くかを考える手助けにする為に行うものだと言は思っている

なのだが…

「高校生にもなつて何故に山登りなんてしなきゃならねえんだよ」

「激しく同意するわ、意味が分からないわね」

今俺は…校外学習とある山の麓に居る、因みにこの校外学習は花咲川学園高等部と羽丘女子学園高等部との合同で行われる

そして今俺の横にいるのは華蓮である

言い忘れていたが、華蓮の通う高校は羽丘である

「…にしても、この山…本当に本格的な登山者向けの山じゃないか?」

「あらか知らないの? 結構有名な山よここ、上級者向けって話でね」

「本当に阿呆なのか学校側は、たとえ高校生だと言えど上級者向けの山に登らすって…

馬鹿だろ、しかも九割以上が女子だぞ?」

「そうね、呆れて馬鹿とも思えないわよ」

そう、忘れてはならないのがここにいる大半…いや、保々全員が女子学生なのである

羽丘はそもそも女子学園だし、花咲川も試験的に男子学生を導入しているだけなので

現在校内にいる男子人数は俺を含めて三人

なので俺は他の男子生徒の顔を知らない、まあ元より興味も無いけど

「そう言えば貴方、友達いるの?」

「友達はどこからが友達なのかね? どこまで親睦を深めていけば友達と言えるのかね

?」

「聞いた私が悪かったわよ、機嫌直しなさい」

「別に機嫌は悪くないさ…そう言う貴女は居るのかね?」

「…まあ、居なくは無いわよ」

「左様ですか、因みに誰？」

「今向こうから来てるわよ」

華蓮が指す方へ視線を向けると、周りの空気が輝いて見えた

そして周りには黄色い悲鳴を上げる女子生徒達が一杯いた…よく見たらひまりちゃんの姿も見えるんだが

「おい、あれってまさか…」

「そのまさかよ、私としては友達になった積もりはないのだけれど…向こうが向こうだからね」

「はあ、こいつはたまげたなあ…まさかお前の友達がアレだとは」

「おや、やつと見つけたよ華蓮」

そう言つて黄色い悲鳴を上げている女子生徒達に別れを告げるイケメン…いや、イケ女かな

「濟まないね子猫ちゃん達、私には先客がいるんだ…寂しいがここでお別れだ」

「誰も一緒に行こうなんて言つてないのだけれどね」

「…何かお前、あの人を扱う姿が女王様みたいだな」

「女王様？…ああ、千聖ちゃんの事ね…そうかしら？」

「ああ、似てる」

そんな事を話していると、向こうからイケ女：基、瀬田薫がやって来た  
「お待たせ華蓮」

「別に待つてもいけないし呼んでもないですよ、瀬田先輩」

あ、そう言えばこの人二年だっけか：普っ通に忘れてたわ  
にしても我が姉ながら辛辣な一言ですなあ

「おや？ 久し振りじゃないか幸貞」

「そうですね、薫さん：相変わらずの御様子で」

「家族でお話中だったかい？」

「そう言う訳じゃ無いですから、もう華蓮連れて行つて問題ありませんよ」

「サラツと姉を売るんじゃないわよ」

「そうかい、じゃあお言葉に甘えて華蓮を借りて行こうか：では行こう華蓮！」

「はあ、もう面倒臭い」

珍しいな、華蓮が面倒臭いと口に出すのは

基本的に俺と晶奈は常日頃から面倒臭いと口に出しているが、華蓮は心で思つてはいても口に出すことは少ない

流石は薫さんつてところかな

さて、俺は一人で登ろうかな：

「あ！居た居た、おーい幸貞ー！」

「ん？ああ、リサか…どうかしたのか？」

「どうかしたかつて、普通に一緒に行こうって誘いに来ただけだよ」

「Roseliaのメンバーと登ってくればいいだろ、俺は一人で登る積りでいたんだが」

「そんな寂しい事言っていないで行こう？皆待つてるんだから」

「そう言われて腕を引つ張られる、というかその口振りのRoseliaのメンツはあこ以外揃ってるのね」

「ええ…まさかRoseliaの中に俺を入れる積もりかよ」

「いいじゃんいいじゃん、人は多い方が楽しいよ？」

「はあ、そうかい」

リサに引つ張られ連れてこられた場所には…友希那、燐子ちゃん、氷川先輩、そして何故か天災とピンク頭

「何でお前もいるんだよ」

「おねーちゃんが居るから」

「成程シスコンか…それでそのピンクは？」

「何でそんなに私の扱い雑なの!?私一応先輩だよ!?」

「そんな妄言はどうでもいいです、取り敢えず何で居るんですか」

「も、妄言つて…事実なのに…：日菜ちゃんに引つ張られて来たたら、何故かここに」  
「自分でもよく分かつてないパターンですね」

まあそんな事だろうとは思ったけどね、この天災だから丸山先輩を引つ張り回してんだらうな

「まあ取り敢えず山登り頑張ろー!」

「面倒臭い疲れた眠い寝たい帰りたい帰っていい?もう帰っていいよね?」

「ダメです導寺峠さん、これも授業の一環ですから…：自然から学ぶ事も沢山あるんですよ?」

「流石ですな氷川先輩、優等生っぷりが半端ないです」

「私は至って普通です…：導寺峠さんが不真面目過ぎるんです」

そんな事は無いと思うけどなあ…：無いと…：…：な、無いと思うけどなあ（冷汗）  
ええ不真面目ですよ私は、どうせ捻くれてる屑野郎ですとも

「あ、幸貞が不貞腐れてる」

「どうせ俺は捻くれてる屑野郎ですよ」

「さよー、幸貞傷付けちゃ駄目だよ?」

「わ、私の所為ですか?」

と、まあ冗談はさておき…登山の時間が始まりました

結構しんどそうだけどこの山道…：燐子ちゃん大丈夫かな

「この山道、思ったより険しいですね」

「さつき調べましたがまあ何せ本格登山者の人達がきつい山だって評価が付いてましたからね」

「…：何故そんな山を選択したのでしよう」

「さあ、そんな事は学校側に聞いて下さい」

「む、おねーちゃんさつきからユツキーとばかり話してる！アタシつーまーんなーいー！」

「嫌いぞ駄々っ子、少しは静かに山を登れ」

「ヤダヤダー！そんなのちつともるんって来ないもん！」

「日菜、余り騒がないで頂戴」

「おねーちゃんまでひどーい！」

「ちよ、ちよつと待って三人共！何でこんなに凸凹してる上にかかなりの急勾配な道を何事も無くスイスイ歩けるの!?!」

リサのストップが掛かり後ろを振り向くと、案の定燐子ちゃんは若干バテていた  
友希那はこれと言って息は上がって無かった、流石はボーカルの肺活量



リサは若干疲れてた

「普段から体力作りをしていればこの程度は問題ありません」

「そ、そう言う問題じゃないと思うんだけどなあ」

「しかしそれを言うなら……その有り得ない程に膨れ上がったリュックを背負っているのに私達と同じペースで着いてこれている導寺峠さんの方が可笑しいと思います」

「何だよ氷川先輩、人を変人みたいな言い方をして」

「一体それには何が入っているんですか？膨らみ方が以上ですよ」

「お昼ご飯」

「……………そうですか」

あ、面倒になったな氷川先輩

そうそう、今日のお昼は持参です……しかも頂上で皆と一緒に食べるんだとよ

何だそれ、本当に遠足じゃねえかよ

「燐子ちゃん大丈夫かね？」

「は、はい……何とか……」

「無理しないように気をつけて下さいね」

「ありがとうございます、幸貞さん」

よく良く考えると燐子ちゃんって俺の一つ上か……俺さん付けで呼ばれてただけど

まあいいか、花音ちゃんと同じで特別枠だな

リサと友希那に関してはお幼馴染だし今更感があるし多分敬語使うと気持ち悪いって  
言われるな…確実に

それから少し歩いた所に休憩所があった、そこで我が姉と再会した

「あら幸貞、案外早かったわね」

「おや華蓮、随分と早いペースだな」

「ええまあね、瀬田先輩も付いてきてるわよ…あの人割りと体力あるのよね…私の方が早いしそれ持っていこうか？」

「いいのかね？荷物持ちは行きにジャンケンで決めたが…」

「別にいいわよ、組み立てるのは貴方だし」

「そうかい、じゃあ頼むよ」

因みに華蓮も俺と同じ位の大きさがあるリュックを背負っている、そして今俺のリュックを前に抱えている状態である

「じゃあ先行くわね」

「おう、頼んだ」

そう言つて薫さんに一声掛けてから再び歩き出す華蓮

と言うか何気に貴女薫さんに一声掛けてから行くのね、律儀なこつたなあ

「おーい幸貞……あれ？リュックどうしたの？いつの間にか金華ハムに変わってる」  
華蓮が持つていった、休憩はもういいのか？」

「うん、燐子も行けるって」

「了解、じゃあ行くか」

そこから暫く歩いていて、しかし燐子ちゃんがとうとう体力の限界が来てしまったよ  
うだ

どうしようもないので取り敢えず俺が看る事にして、皆には先に行ってもらった

「何かあつたらちゃんと連絡してよ」

「了解、ありがとなりサ」

「ううん、じゃあ燐子を宜しくね」

さてと、取り敢えず休憩をとってみてから考えるか

「す、すみません…幸貞さん…私の所為で…」

「気にする事は無いよ、俺も疲れてたし」

それから数十分経ったが、どうやらまだ動けそうになかった

「ゆ、幸貞さんだけでも…先に行つて下さい」

「んー…そうもいかないんだよなあ…仕方無いか、燐子ちゃんちよつと我慢してね」

「え?…な、何を…きやつ!」

燐子ちゃんをおんぶして行く事にした、流石にここへ一人女の子を置いて行く訳にも  
いくまいよ

と言うか背中に当たる二つの双丘が柔いこと柔いこと、役得役得ウー

こう見る燐子ちゃんも中々に大きいなあ…ナニがとは言わないが

「ほ、本当に…すみません…幸貞さん」

「気にしないで、と言うより大丈夫?急に背負ったりしたけど」

「だ、大丈夫…です…す、少し恥ずかしいですが」

「ゴメンねー、でも流石に置いて行くのは男として少しアレだったからね」

「ありがとう…ごさいます」

やだ天使この娘……

暫く歩くと、切り株に座っている人を見つけた

あれは……お、男？いや女……でもズボン履いてるな

「君、どうかしたのかね？」

「あつ……え、えつと……足を挫いちゃって」

最近俺の周りで足を挫人が多いのだが気の所為か？

この前だつてイヴがアシクビラクジキマシター状態になつてたし

「友達とかは？」

「先に行つてもらつてます」

「そうかい……燐子ちゃん、ちょっと降りてもらつていいかな？」

「は、はい……分かりました」

燐子ちゃんを一時的に背中から下ろし、金華ハムを開ける

中から包帯、医療用テープ、ネット、湿布を取り出す

まずは湿布を貼つて……それから包帯を適量巻く、そんでもつて包帯をテープで止めて

その上にネットを付けて……

「はい完成、応急処置」

「あ、ありがとうございます！」

「あの…幸貞さん、何でそんなものが入ってるんですか？」

「いつ何処で自分が怪我するか分からない世の中だからね、常に持ち歩いてる」

「そ、そう…なんですか」

さて、この男？はどうするか

応急処置をしたとはいえまだ歩ける状況じゃないだろう、と言うか怪我人が出るような山を選ぶな学校

「君、名前は？」

「僕は柴岡しばおか 陽音あきねって言います…もしかして導寺峠君ですか？」

「ん？そうだけど…なんで知ってるんだ？」

「この学校って男子生徒が三人しか居ないじゃないですか、僕はもう一人の男子生徒と友達で…消去法的にそうかな…って」

「ほお、成程ね…因みに君まだ動けないだろ」

「は、はい…恥ずかしながら」

「隣子ちゃんもう歩ける？」

「はい…大丈夫です」

「よし、じゃあいくか」

「え？うわっ!？」

この柴岡君、かなり背が低い

それでいて顔が中性的な女よりの顔をしていたため分からなかったが、男のようだ  
声質まで女らしいからもう分かんないね

という訳で(？) 取り敢えず今度は柴岡君をおぶって歩いて行く

「わ、悪いよ導寺峠君！僕は置いて行って構わないから！」

「まあそう言うなって…それより導寺峠って面倒臭いだろ、幸貞でいいぞ」

「じゃ、じゃあ…幸貞君」

「そつたら俺も陽音って呼ばしてもらおうぞ」

「…うん、いいよ」

「幸貞さん…友達出来て良かったです」

「何ですかね燐子ちゃん、まるで俺がボツチだったみたいな言い方をして」

「だって…いつも一人じゃないですか」

「……………いや、そうでもないぞ…俺は一人でありたいが思った程一人になれてない」

「……………よく良く考えると…そうですね」

てかコイツ物理的に軽いなおい、ちゃんと飯食ってんのかよ

まあそれを言ったら燐子ちゃんもすっごい軽かったけど…まあ違う庄はかかってた

けどね

取り敢えず頂上を目指しますか



## 14話

陽音を背負い歩く事数十分、第二の休憩地点が見えてきた

「思つたより長かつたな、大丈夫か燐子ちゃん」

「はい…私は、大丈夫です」

「本当にすみません幸貞君」

「気にするなつて、俺も唯の気まぐれだから」

休憩地点には結構他の生徒達が溜まっていた、すると一人のイケメン君……基、男子生徒がこちらに走つてきた

「陽音！大丈夫か!?!」

「あ！裕次君!」

ああ、そう言えば友達だつて言つてたな…いやあ、俺には些細な友情でさえも眩しく見えますよ本当

若干の嫌悪感と共にだけどね、本当この性格はクソだと思つよ

「もしかして君が導寺峠君か？初めまして、俺の名前は紅崎あかさき裕次ゆうじだ…宜しくなつ!」

「自己紹介どうも、導寺峠幸貞だ…面倒だろうから幸貞で構わんど」

「じゃあそうさせてもらうぜ……あつと、ところで幸貞……もしやずっと陽音を背負つて来たのか？」

「別にこいつの体重程度なら何の問題もない、では陽音を返すぞ」

背中から陽音を下ろす

にしてもコイツイケメンやなあ、薫さんとはまた違ったタイプのイケメンだ……いやそ  
もそも薫さんは男じゃないけどね

背は俺と同じ位で割とがっちりしてるな、運動部かな？

「ありがとな幸貞！また学校で会おうぜ！」

「縁があればな、何せ三人しかいないんだから……」

「おう！絶対探してやるから覚悟しとけよ！」

マジか、じゃあ俺は全力で逃げようかな……まあそんな性格の悪いことはしないけど  
ね

え？何？……お前そもそも性格悪いだらうって？

うるへえ、余計なお世話だ

「幸貞さん……またお友達出来たんですね」

「お友達、ねえ……あれを友達と関係付けていいのか、結構な迷い所なんだがな」

「そう言う……性格の悪いことばかり言うから……お友達少ないですよ」

「俺はそれでいいと思ってるからなあ、今更これを変えろという方が無理な話ですな」  
「……私とも……友達じゃないん……ですか？」

「さあ？ どうでしょうね……貴女が思ってる通りに思えばいいんじゃないですかね、それを決めるのは俺じゃなくて貴女の心意気次第なんだから」

「……ふつつ、否定しないなら……やっぱり幸貞さんは……いい人です」

俺がいい人だなんて、天使やこの娘

もし俺がいい人なら世界に存在する保々の人が聖人じゃないかな？

「あー！ 幸貞ー！ 燐子ー！」

「おうリサ、さつきぶり」

「今井さん、ご心配お掛けしました」

「二人共追いついてよかったあ、心配したんだよく！」

「スマンな、ところで他の奴らは？」

「友希那は……あそこで蘭と話してる」

蘭って……ああ、美竹のおヤツさんとこの一人娘さんか

氷川先輩は大方、天災の相手をしてるんだろうな……丸山先輩は多分香澄とかパスパレの人達と喋ってんだろ

じゃあ俺は友希那の所にでも行くか

「よう友希那、さつきぶり」

「幸貞、追いついたのね…良かったわ」

「あつ、幸貞…さん、久しぶり」

「おう久しぶり振り蘭ちゃん…つてか同級生だし呼び捨てでいいぞ別に」

「そう、じゃあそうする」

「あら、幸貞は美竹さんと顔見知りだったの？」

「あそこでバイトしてるからな、顔見知りくらいにはなるさ」

「…それもそうね」

そりゃcircleはライブハウスですからね

と言うより、何の話をしてたんだこの娘達は

「そう言えば何の話をしてたんだ？」

「バンドについてよ」

「そうなのか」

珍しいな、友希那が他人へバンドについて話すとは…あれから成長したんだねえ友希那も

幸貞さん嬉しくて御涙頂戴だよ

「友希那〜幸貞〜！そろそろ行くよ〜！」

「おう、分かった…て事だけど友希那、行くか？」

「ええ勿論、じゃあまたね美竹さん」

「はい、また今度…湊さん」

蘭ちゃんと同別れて再び山を登り始める Roselia & more

俺と氷川先輩と天災は相変わらずのハイペースで歩き続け、途中で立ち止まったりサ達を待つということを繰り返していた

山を登り始めて数時間が経過

「結構登りますね、この山」

「そうですね…思った以上に道のりが長いですね、氷川先輩は体力の方は大丈夫ですか？」

「ええ、まだまだ余裕です」

「天災は…まあ余裕だよな」

「よっゆーだよっ！」

「はいはいそうかい、まあ問題は後ろ組の娘達ですかね」

「そうですね…こうも長く続くと流石に皆さんも疲れてきますよな」

後ろを振り向き友希那達の様子を見る、矢張りこうも長丁場だとキツイわな

本当何でこの山を選んだかね学校側よ…もつと簡単な所にしとけば良かったのに

「…お、あそこに頂上まであと1kmって書いてありますよ」

「本当ですね、漸くですか」

その事を友希那達にも伝え、リサが「あと一息だあ〜！」と気合を入れていた

にしてもこの山、行きは良い良い帰りは怖ひで言うのなら…行きは怖ひ帰りは良い良いであり<sup>マス</sup>。

詰まり登りの道がクソきつかったけど頂上に近づくに連れて足場が平になってきた

「やつと着いたか…はあ、疲れた」

「はー！やつと着いたあ〜！……わあ〜！見て見て幸貞！すっごい眺めだよ！」

「ん？ほお、こりや絶景だな」

山の頂上からは、我が街が一望出来た

空も澄み渡り太陽が輝いていた…ふむ、お天気で良かったな

「おねーちゃんおねーちゃん！すっごいよお！」

「分かってるわよ日菜…本当、綺麗ね」

景色を一望した後、どうやら俺達はかなり早く早く着いてしまったらしく周りに全く生徒がいない為ベンチやらで休憩していた

まあ主に早く着いた理由として俺と氷川先輩と天災が原因だけどね

「そう言えば氷川先輩、今回の校外学習の目的…何だが分かりますか？」

「……そう言われてみれば考えていませんでしたね、良ければ教えて下さい」

「大方、さっきの景色を見せて豊かな感性やらうんたらかたらかんたらとか言う詰まらない御託を並べる為のモノですよ」

「…はあ、言っている事は恐らく間違つては無いと思いますが…導寺峠さんが言うのと刺々しく聞こえるのは何故でしょうか」

「まあニュアンス的には悪意を持つて言ってますからね、下らない御託の為に態々こんな事されられたかたと思うと時間の無駄だと思ひましてね」

「社会に出てから豊かな感性は重要ですよ、今の内に養つておくのが最善だと思ひます」  
「今の社会、感性が重要なんて言つてる人は極わずかなほんのひと握りですよ」

「全く、そう言つた捻くれた考え方をしているから貴方は友達が少ないんですよ」

「いやいや、今の時代は最早結果が全てですから…過程なんてモノを一々見てる人なんてのは居ないんですよ、言い方が悪いですが結局はどんなやり方にせよ結果良ければ全てよし…なんですよ」

「本当に貴方という人は…はあ、何故もそんな考え方に行き着くんでしょうか」

俺の性分…つてのは心の中だけに留めておこうか、こんなモノ完全に単なる俺のエゴだからな

「感性の違いじゃないですかね？ほら、俺つて中々の駄目人間ですから」

「…人は人それぞれの考え方がありますから、私からこれ以上意見を言うのは止めておきますが…余りご自分を否定しないようにして下さい」

「俺は自分自身を否定した事は無いですよ、俺自身の事は俺が一番よく分かっていますから…まあ、自虐気味なのは認めますがね」

「貴方はご自分が思っている程駄目な人間ではありません、それは私も湊さんも思っている事です…何故そうも自身に否定的なのですか」

……自分に持つ自信自身なんてものはどうの昔に俺の中で崩れ去ったモノだ

結局、何処まで行こうと俺は俺なのだから…昔の俺はもう居ない、今ココにある自分だけが自分自身だ

結局俺はアイツらの端くれなのだから

だから俺はこれからも自分を肯定しながら否定して生きていくのだ

「矢張り、こんな捻くれた俺の意見を真っ向から自分の意見で真剣に返してくれる氷川先輩は好きですよ」

「なっ…!?す、好き!?!」

「……勿論likeですよ?」

「そ、そうですね!likeの方ですよね!」

何を焦っているんだか、俺にはチョットワカラナイデスね



まあそんな事を話してる間にその他生徒達も次々と到着し始める

そんな感じで全員が集まった、てか人数多い：てな訳でお昼ご飯の時間です

「幸貞、これ」

「はいよ華蓮さん」

華蓮から荷物を受け取り、リュックから組立式サイドテーブル付きバーベキューコンロを取り出す

脚を立て、サイドテーブルを取り付ける：もう一つのリュックから食材や木炭、ジェ燃料を取り出す

その間に華蓮はその辺から枯葉や枯木を集めてコンロの中へ入れていた

そんでもって木炭を枯木枯葉で包み、ジェル燃料を垂らしてマッチで点火

この間僅か三分

「……導寺峠さん：これは一体」

「どっからどう見てもBBQですが：如何しましたか氷川先輩」

「如何したもこうしたも何故こんな所でバーベキューなんてしてるんですか!？」

「お昼ご飯が持参でしたので、持参しました」

「幸貞、さっさと食べちゃいなさい」

「あいよ」

「じ、持参って……はあ……もう」

何やら呆れた様な諦めた様な溜息をつく氷川先輩

その間にも華蓮はドンドン肉や野菜を焼きそれをひたすら俺が食べ続ける、因みに華蓮は俺が食べ終わってから食べる

「うわっ！ユツキーのお弁当ってバーベキューだったの？あ！おねーちゃん今度ウチでもバーベキューやろうよ！」

さすが天災、発想の切り替え方が猛スピード過ぎて着いて行けないよ

「幸貞、お肉頂戴」

「はいあーん」

「あーんぐっ……美味しい」

「そうかい」

横からたえが入ってきたので焼きたてを一枚あげた、すごい美味しそうに食べるのね貴女

「お、おたえ……今の完全に関接……」

「ん？何？」

「いや、気にしてないならいいや」

沙綾が何かを言おうとして止めた、まあ花園相手だからそこまで気にしなくていいと

思うぞ

因みに花園にあげる肉を掴んだ割り箸は俺が使ったものです

「幸貞くん！私にもちよーだい！」

「はい」

「んむっ……ん〜美味しい！」

「ユツキーユツキー！アタシにもアタシにも！」

続いて香澄と天災もやって来た

なんだか餌を欲しがる雛鳥に餌付けをしてる気分になつてきたな

コイツら何の躊躇いもなく俺の使った割り箸で肉食うんだもん、まあ俺が気にしてないのもあるけどさ

それダメだろ男子

「幸貞、肉なくなつたよ」

「あいよ」

リユツクから鉄板を取り出し、バーベキューコンロの上へ乗せる

残った野菜を鉄板へ移し、麺を投下してソース掛けて鉄ヘラで麺が焦げ付かないよう焼く

はい、焼きそばですね

因みに鉄へらは俺のオーダーメイド

かなりの量を焼いたがもの数分で全て平らげた華蓮、流石俺の姉

「(づ)馳走様」

「お粗末様」

食べ終わるとすぐに片付けを初めて三分後には綺麗に片付く、コンロの出し始めから

片付け終わるまでの間に先生には一度も見られていないのでご安心を

「何事も無かったかの様に片付いてる…」

「……本当、何者なんですか導寺峠さんは…」

沙綾と氷川先輩が呆然とさつきまで俺と華蓮が食事していた場所を眺めていた

この後は特に何もなく下山してこの日は解散となった

## 帰宅

「はあ、疲れた」

「そうね、久し振りに身体動かしたから少し怠いわね」

「おつかえりー二人共」

「ただいま…珍しいわね、姉さんが夕飯を作ってるなんて」

「まあ二人共居ないし疲れてるだろうなーってね」

「うわ、晶奈が気を使うだと？明日は槍でも降るんじゃないか」

「幸貞の中で私の扱いは何なの!？」

「バカと天才は紙一重って言うだろ？お前は馬鹿の方だと俺は思ってるよ」

「お姉ちゃんに対して酷くない!？」

今日の夕ご飯は晶奈の得意料理『チキン南蛮』でした…美味しゅう御座いました

翌日は何故か休み、何でも山登りの疲れを取れだそうだ

そんな訳で一日circleで働いてました

んでもって翌日、金曜日……何で水曜校外学習、木曜休みで金曜学校来なきやいけな  
いんだよ

もう金曜も休みでいいだろ

「はあ…面倒臭い……」

「あ、おはようございます…幸貞さん」

「ん？…ああ、美咲ちゃんか…おはよう」

「幸貞さん身体とか大丈夫ですか？私昨日からずっと脹脛が痛くて」

「筋肉痛かね、使わない筋肉で使ったんじゃないか？これ上げるから後で貼つときな」

リュックから湿布を出して二枚渡す、美咲ちゃんは若干苦笑いしながら受け取った

「何で湿布なんて持つてるんですか」

「常に常備してるから、何があるか分からん世の中だからね」

「そう言う問題ですかね…まあ、ありがたく貰っておきます」

「それじゃ俺は教室行くから、またな」

「はい、また会いましょうね」

それにしても筋肉痛か、ミツシエルの中に入ってるから体力や筋力はそこそこあると思っていたんだが…

まあ登山で使う筋肉って日常生活じゃ余り意識して使う部位じゃないからね

はあ、取り敢えず今日も頑張つてこう

## 15話

とある日、いつもの通りcircleで受付をしていた

アフグロの羽沢つぐみちゃんは予約時間の十分前にはいつも着いており、大概話をしているのだが

「あの、実は幸貞さんに頼みたい事があって」

「俺に？まあ俺にでも出来ることなら別にいいが」

「次の日曜日に少し遠い所でフェスがあるんです、そのフェスは自由参加が出来る私達も出ようって言ったんですが…参加資格にマネージャー、若しくはサポーターのどちらかが居ないと駄目なんです」

「へえ、珍しいフェスもあつたもんだな…：それ若しかして俺にサポーターをやつてくれって事？」

「はい…あつ！勿論予定とかその他諸々含めて良ければなんです…」

サポーターねえ…：Roseliaのサポーターを断り続けてる手前、やっていいのかは悩むんだが…

「蘭ちゃんもひまりちゃんも出たいって言ってたんですが…」

そんな事言われて…

「ダメ…ですか？」

そんな頼まれ方をしたら健全な男子高校生には断るのは無理でしょうがよ  
天使かよこの娘…いや小悪魔？これ素だから天使だな

俺の周りに天使多すぎじゃね？俺いつ天に召されても可笑しくないんだが

「分かったよ、その日限定でアフターグロウのサポーターをやるよ」

「ほ、本当ですか！ありがとうございます！」

「もう一回言うがその日限定だからな？」

「はい！それでも全然いいです！」

場所や詳しい時間なんかは後で連絡してくれるそうなので、つぐみちゃんのLONE  
を貰った

名前を『天使』に変更しておいたのはまた別の話

その夜

えーつと…場所は…葉山つて、マジで言ってるのかよ

こつからだとかツソ遠いぞおい…しかも彼処最寄り駅ないから新逗子駅から歩かな  
きゃいけない

ていうか夏でもないのに葉山つて、まあ冬にやるよりはマシだけどさ



「俺次の日曜日出掛けるから宜しく」

「ふーん、珍しいわね…何しに行くの？」

「その日限定でガールズバンドサポーターでフェスに行ってくる」

「そう、まあ気を付けてね…何処まで行くの？」

「葉山」

「へえ、はや…葉山？何でそんな所まで…」

それは俺が聞きたいけどね、高級住宅街だけど別にこれと言って無いからなあ

あるとしたら一色くらいかな

「まあ兎に角そこまで行ってくるから」

「…まあ、何でもいいわよ」

週末

おはようございます、朝四時起きですよ四時

剣道の試合でも無いのに早起きするのは何時ぶりだろうか…基本的に休みの日は昼まで寝てるからな

眠い

さつきつぐみちゃんからLINEが入っていたのだが

『おはようございます幸貞さん！』

今日は本当にありがとうございます、朝早くからですみません（>|<）

今日一日頑張りましょう！（～？～）？』

本当…天使かよ、もう召されても文句ねえわ

取り敢えず朝飯作ろう

「あら、おはよう」

「………ん？何してんの華蓮」

「何って、見た通り朝ごはん作ってるんだけど？」

「え、ああ…うん、何で？」

「私はいつもこの時間には起きてるわよ？まあ知らないと思うけど…序だから貴方の作

ろうと思つてね」

「お、おお……そりやどうも」

流石華蓮さん、姉弟思いの良い姉さんだよ

本当誰に似たんだか……いやガチめで誰の血を引いてんだ？親父も母さんも気なんて使えないぞ

あの人達自分の事で精一杯だから

そんな訳で華蓮の作った朝ご飯を食べて家を出る、五時の電車に乗るからそれまでに駅へ向かう

因みにアフグロの皆とも駅で待ち合わせをしている

「あ！おーい幸貞さーん！」

「おはようつぐみちゃん、随分と早いね」

「それを言ったら幸貞さんも早いじゃないですか」

十分前行動、これ社会的に当たり前……行動は余裕を持って行いましょう

「それで他の娘達は？」

「巴ちゃんとひまりちゃんはそろそろ来ると思いますが……多分蘭ちゃんは時間ピッタリ、モカちゃんは最悪遅刻してきます」

おいさつき俺の言った事と真逆の事をしてる奴が二人もいるぞどうゆう事だ

まあ蘭ちゃんはや遅刻しないだろうが……あの青葉モカとか言うのは普段からのんびりしてるからなあ……まあ納得だな

それから十分後

「す、すまんつぐ！モカを起こすのに手間取って……！」

「大丈夫だよ巴ちゃん、時間には間に合ってるから」

曰くん”ん” つ……失礼、巴とひまりちゃんがモカを引っ張って来た

因みに蘭ちゃんは既に到着済み

「お兄さん今日は宜しくお願ひしますね！」

「おう、取り敢えずそろそろ行かないと電車行っちゃうぞ」

えっちらおつちらと電車を乗り継ぎなら目的地である葉山を目指す、まあ駅で言えば

新逗子駅ね

そう言えば今日行かないってまりなさんに連絡して無いな、しておくか

……………あ、返信が……え？そのフェスにパスパレも出るって？

嘘でしょ帰りたくなって来たよ僕

にしてもパスパレも色々な所で活動するようになってきたな

「あ、お兄さんこれいりますか？」

「おう、ありがとう」

ひまりちゃんから貰ったお菓子を食べながら晶奈から来ていた○INEの返事をする

「どうやらクソ親父と母さんがゴールデンウィークに帰ってくるらしいクソ親父には一発決定してるので楽しみにしてるか」

「電車移動なつがかったなあ、疲れた」

「やつと着いたー!」

「あれ〜?海つて見えないの〜?」

「ここからじゃ海は見えないな、そもそもここはまだ逗子市だから…あそこに見えるトンネル抜けたところが葉山だよ」

「幸貞さん詳しいんですね、来たことあるんですか？」

「んー…来たと言うよりは連れてこられたの方が正しいかな、こつちに知り合いが居ね」

「葉山にですか？お金持ちなんですねえ」

「うん、まあ…金持ちだね」

そして会場まで歩く事30分、本当最寄り駅が最寄りじゃねえんだよ

会場には既に幾つかのバンドが到着していた

「ああ!!ユツキー!!」

「出たな天災め…っておい、こつち来んじゃねえよ」

「とうっ!」

「危ね」

飛び付いてきたのでスルツと避ける、何事も無かった様に歩き去ろうとすると腰に抱き着かれる

何これデジャヴ

「ひっどーい!また避けたなくユツキー!」

「あれを避けるなど言う方が難しいだろうな、反射的に身体が拒否反応を示して避けたくなるんだから仕方が無い」

「日菜ちゃん！勝手に走っていかないで〜！って幸貞くん!？」

「oh…… Dejavu……丸山先輩これ連れてって」

「……って言われても、もう日菜ちゃん完全にくっ付きちゃってるよ」

いつのにか背中に登って蟬になっていた、何してんだよ天災

俺は俺で仕事あるのに

「幸貞さん、そろそろ受付に……ってうわあ!？」

「ああ、つぐみちゃん……ちよつと待っててねこれどうにかするから」

中々離れないんだよねコイツ、その細腕の何処にそんな馬鹿力があるんだよ

悪戦苦闘していると……

「丸山さん！氷川さん見つけたー?」

「あ、ここに居ますよ」

「はー良かった……何してるのよ」

「あ、どうも柿谷さん」

「ああ幸貞君！久し振りだね……って言うか氷川さん、私達受付を済ませてないんだから早く来てちょうだい」

この人は柿谷かきたに 悠香ゆうか、パスパレのマネージャーさん

前にパスパレの演奏についてアドバイスをした時に知り合った

めっちゃ美人なんだよなこの人、「元アイドルですか？」って聞いたなら「やだなあもう、お世辞を言っても何も出てこないよ」と言っていた

嘘でしょ違うの？って思ったのは今でも覚えてる

「ちえく…分かりましたー」

「じゃあまた後でね幸貞君」

「はい、では」

そんな訳で受付を済ませて暇な時間に入った、アフグロの皆とは余り関わる事が無かったからなあ…よく良く考えると本当にアフグロとは関わってないな

ポピパは高校同じだし、Roseliaはそもそも幼馴染がいるし…パスパレも何だかんだで知り合いだし…ハロハピに関してはこころが勝手に俺を連れてきて半場無理やり知り合った

「そう言えば幸貞さんって他のガールズバンドとは仲良いんですか？」

「んー…まあ何だかんだで知り合いだね、唯一アフグロには俺と友達の娘が居なかったから中々ね」

「そうなんですか、ならこれから仲良くしましょうね！」

「おう、宜しくね」

「はいっ！」



なんだこの娘、天使か？天使なのか？

ええ娘やなあ本当、沙綾もりサもそうだけどここまで心が綺麗だと見てる俺の汚さが頭になるよね

「そう言えば宇田川って確かあこも宇田川だよな？」

「ああそうだよ、あこはアタシの妹だからな」

「はえーそうなのか、世間は随分と狭いもんだなあ…：そう言えば蘭ちゃんの親父さんとも知り合いだからなあ」

「そう考えるとアフグロとも割と繋がりがありましたね幸貞さん」

「そうだね…：世間は狭いねえ」

その後、フェスが始まるまでかなりの時間がある為アフグロの皆と話した

スタッフさん達も慌ただしくなってきたところで、矢張りハプニングとは起こるものだな

「ん？彼処どうしたんだ」

「何かトラブルじゃないですかね？」

「随分と手古摺ってる様だけど…：ちよつと行つてくるか」

ピアノの近くまで行き、スタッフに尋ねる

「どうしました？」

「ん？君は……えっと、誰？」

「サポーターで来てる者です、それでどうしましたか？」

「実はピアノ線が切れてしまつて……今居る技術スタッフにピアノが得意分野の方が居なくて……」

「成程、少し失礼しますよ」

あープツリいっちやてるねえ、こりや大変だわ

背負つていたりユックの中から簡易工具箱を取り出す

「え？ちよつ、君!？」

「変えの線ありますか？」

「な、直せるのかい？」

「まあこの位なら数分で終わりますけど」

「す、数分つて……取り敢えずこれ変えの線だけど」

「はいどうも」

プツリいってるのは線を全部変えなきゃ行けないから本当はもっと掛かるんだけどね

まあ時間も時間だからさチャチャツと済ませる方法でやるか

## 数分後

「出来ましたよ、確認お願いします」

「……か、完璧です」

「それはどうも、じゃあ俺はこれで」

「き、君！」

「はい？」

踵を返したところでスタッフの男性に肩を掴まれるたので振り返る

「ウチの技術スタッフになる気はないか？」

「あー、いや…俺はそういうのに興味無いので」

「そ、そうなのか…それだけの才能が有るのに勿体無い」

「はは、済みません…ではこれで」

勿体無いねえ…こんな才能、実際のところ超えようと思えば超えられる

いい例がウチの姉である華蓮だ、彼奴は努力で天才を負かす…誰だつてやる気と努力

で天才を超えることだつて出来なくはない

唯、誰も彼も天才が相手なだけで『まあ彼奴は天才だし、俺は適わない』という先入観にまぎ入る

そう思つた時点で勝てる訳が無い、勝てる道理がない

まあ、そんな事は今はどうでもいいな……それより今日一日、友情やら信頼やらに当て続けられるが……持ち堪えてくれよ俺の精神

「あれ?どこ行つてたんですかお兄さん」

「ちよつとした手伝いをして来てね、まあそんな大した事じゃ無かつたから」

「ピアノ線を一本取り替えることが大した事じゃ無いって……凄いなアンタ」

「何だ、見てたのか巴?」

「まあチラツと話し声が聞こえただけだよ」

「そんな難しい事じゃないさ、まあ切れ方の状態にもよるけどね」

さて、そんな話をしている内にも一刻一刻と時間は進んでいく

本番三時間前、大まかなりハがあるとの事で一旦アフグロのみんなと別れる

「あ、やつほー幸貞君」

「ああ、柿谷さん」

「いやーまさかこんな所で君に会うなんてねえ」

「まあ俺もパスパレがこんな所まで活動域を広げてきている事に驚きですよ」

「小さいフェスでも出ておけばそれなりに名前は売れるからねえ、まあ意地汚い考えと言えば考えなんだけどね」

ピロツと舌を出しながら笑う柿谷さん

「ここにも天使がおったな、本当に俺の周りには天使が多い

「そういう積み重ねが大切なんじゃないですかね、今となつてはそれなりに有名じゃないですか」

「そこは有難い限りだよ、それに少なからず幸貞君の出してくれた課題も結構皆にとつては為になったのよ？」

「課題も何も、あんな曖昧な感想は課題でも何でもないですよ…唯単に俺の思つた事ですから」

「何はともあれ彼女達の為にはなつたんだよ、そこは誇るべきだと思つてね」  
誇るねえ…俺は俺が楽になる様な答えを出した積り出したからなあ

とても複雑な心情だよ今、まあ結果オーライって事かな

「何時だつて俺は俺の事で精一杯ですから、あの感想だつて俺が後々楽になる様と言つたんですから」

「それ本当？でもどう楽になるの？」

「ああいう感想は後々で俺がアドバイスを与えたり、彼女達から追求されたりという確率が少ないですからね」

「……そっか、成程：自分自身は自分だけが磨けるって意味合いだったもんね、例え幸貞君に聞いてもそれは自分だけが分かってるみたいに見えるのか」

「お見事、その通りです：まあご覧の通りそんな意味合いを含めて言っただけですから、課題でも何でもありませんよ」

「幸貞君ってやっぱり頭良いよねえ、それでも彼女達にはいい刺激になったから結果オーライだね」

「そうなっているなら幸いです」

と、まあこんな感じで柿谷さんと暫く話していた

リハも終わり向かえるは本番だけとなったアフグロの皆と合流し、本番まで待つことにした

## 16話

遂にフェスがスタートした

俺の想像してた二倍近くの観客が押し寄せ芋洗い状態になっていた

「うわあ、あんなにお客さん一杯居るんだ」

「何だ、今更緊張してきたのかつぐみちゃん」

「そ、そりやあ誰だって緊張しますよ」

フツとアフグロのメンバーに目を向けると、まあ皆揃いも揃ってガチガチになってんのよ

モ力でさえ少し固まっている

「……はあ、お前らなあ」

「だ、だっってお兄さん！あんなにお客さん居るなんて思ってたんですけどよ！」

「いやまあ俺も想定以上だったけどさ……」

「ですよね!？」

うん、はつきり言ってもっと小規模のフェスだとガツツリ思い込んでた

だから観客人数もこれの半分、若しくは三分の一程度だと思っていたんだが……とこ

ろがどっこい、これが現実

「とは言ったものの、この道を選んだのはお前らだろ」

「いや、まあそうですね……」

「いいか、お前らはどんな場所や状況下でもお前らなんだよ……それに第一、演奏者が楽しめなくて観客が楽しめるかってんだよ……お前らはお前らの演奏を彼奴等観客達に叩き付けて来ればいいんだよ」

それを言うのと、アフグロは揃って顔を見合わす

そして蘭ちゃんが

「……詰まり、『いつも通り』って事だね」

「うん！ そうそう、いつも通りいつも通り」

「いつも通り〜」

「おう、いつも通り」

「よし、頑張っちゃおう！」

仲間内で纏まったみたいだな、このノリなら充分だろう

緊張も解けたみたいだな

「アフターグロウさーん！ スタンバイお願いしまーす！」

「よし、じゃあ行ってこい……お前らのいつも通りつてのを魅せてきてやれ」



「うん……ライブ、成功させてくる」

微かに蘭ちゃんが微笑んだ、こう見ると可愛いなあ

アフグロの出番はそりや大成功してたさ、まあ俺が柄でもない事を言ったからそれなりの成果は出して欲しかったし

後に続いたパスパレも随分と大盛況でかなりの盛り上がりを見せた

と、まあここまでは良かったんだが……フェス後半戦、二つのバンドから唐突なキャンセルが入ったらしい

「どうするんだよ、流石に終了一時間前にお客さんを帰せないぞ」

「何処かのバンドにもう一回頼むか？」

「そのほうがいいと思うが……取り敢えず片っ端から声掛けるぞ！」

そんな感じの話をしていたスタッフさん達を横目に見ていた

あれだけ熱狂してテンションがハイボルテージの観客を終了一時間前には帰せねえわな

俺もアフグロの娘達に声を掛けてくるか

「あれ？若しかして貴方、DJ—MEGAさんじゃ？」

「……ええと、何方でしょうか……それで何故その名前を？」

「ああ失礼！自分は今日のフェスでDJをしていた者なんですよ、いやあくまさかこん

な所でお会いできるなんて!」

「はあ、それはどうも…然し何故俺なんかを?」

「DJ界を知る者で貴方の名前を知らない人なんて居ないですよ!ふらつと現れ数々の大会で優勝を総ナメにして突如姿を消した伝説のDJなんですから!」

聞いている自分が恥ずかしくてしようがないよ

昔に息抜き程度で少しDJを齧っている時期があつたのは確かだ、でも本当に息抜き程度にしか思っていないかつたからな?

名前からお察しだが完全に分かる人には分かるあのキャラから丸バクリする位だからな?

「そ、そう言ってもらえるとは嬉しい限りです」

「あ!後でサインお願いします!…:…:…ところで今は何故こんなに慌ただしく?」

「ああ、何でも二つのバンドが急に来れなくなつたらしくて…:…:…その埋め合わせをどうするかについていう事になってまして」

「それは大変ですね…:…あ!ならMEGAさんがDJをやればいいんじゃないでしょうか?」

「え?俺ですか?でも台も無ければ何も持つてないですよ俺」

「自分ので良ければお貸しします!と言うか是非使して下さい!」

何でこういう時に限って俺はiPodを持ってきてしまったんだろうか、俺の選曲する曲全部入ってんじゃねえかよ

「iPodとか繋がります?」

「繋がりますよ!」

「……………はあ、マジかあ…コレやらなきや駄目なヤツなのかなあ」

「じゃあ自分スタッフさんに言ってきます!」

何か勝手に話がドンドン進んで行くんだが、そんな訳で急遽飛び入り参加する形で俺はDJをやらされる事になった

最後のバンドが終わり、遂に俺の番になる

『ここで緊急参戦したDJが登場だ!!! 嘗て数々の大会において優勝を総ナメにしたが突如としてDJ界か似姿を消した男……しかし、今…此処に再び姿を現した!!! C'mon!!! DJ-MEGA!!!』

やめろよそう言け! 紹介の仕方をするの、すつげえ恥ずかしくて出ずらいじゃねえかよ  
そしてステージに立つと今までに見ない程の歓声が飛んできた

どうやらさっきのDJも言っていたのだが、割と隠れDJファンが多い様だ

こうなったらやってやるよ、完全に俺の趣味全力全開にチョイスした曲でやってやるよ

「頭振り過ぎて脳震盪起こすんじゃないやねえぞお前ら?」

そう言うのと更に歓声が大きくなった

以下選曲ダイレクト、かけた順に

FLOWER (DJ YOSHITAKA)

Garakuta Doll Play

GOODTEK

B. B. K. B. K. K.

Oshama Scramble!

Supersonic Generation

Devastating Blaster

Tiamat: F minor

怒槌

Schrecklicher Aufstand

FREEDOM DIVE

AMAZING MIGHTYYY!!!

極圈

Conflict

まあ後は割愛つて事でetc:

そして最後は:

「H A H A H A, Guys, Turn right for India.....T  
 he wheel to the right」

結局、フェスは一時間遅く幕を下ろした

ちよつと盛り上げ過ぎたわ、途中から参加者のバンドの人達も観客に紛れてたからな  
もう保々デイスコ状態だよね

「いやー楽しかったぜ本当!」

「うん! 幸貞さんのDJがすごいノリノリで楽しかった!」

「お兄さんDJ出来たんですね!」

「まあ昔に息抜き程度でちよつとばかり齧った程度だけだね」

「齧った程度でアレって……やっぱ幸貞って…」

「何?」

「……いや、何でもない」

蘭ちゃんが何かを言いかけたが、引つ込めてしまった

ああそうそう、因みに今はアフグロの皆と新逗子駅まで歩いている途中です  
帰る直前、天災に捕まりそうになったが柿谷さんが何とかしてくれたので助かった  
またここからえつちらおつちらと電車で帰るのか、面倒臭いなあ

電車に乗り数分揺られたとこでアフグロの皆は疲れたのだろう、皆寝てしまった

俺の右隣はつぐみちゃん、左隣はひまりちゃん

二人共…寝るのは良いんだが二人揃って俺に寄り掛からないでくれ

何がヤバイって両脇から凄えいい匂いが香ってくるんだよ、然もひまりちゃんに関し  
ては双丘がえらいこつちや

役得と前向きに考えるにはちよつと状況的にキツイ

「……………あと何駅だ？……………八駅…はあ」

そう言えば今日一日、精神的に参る事は無かったな…俺も成長したのかな……

まあその後は特に何もなく地元に戻ってくる事が出来た

アフグロの皆から御礼を言われ、解散した

にしても、だいぶ遅くなってしまったな：現時刻は11:55、もうそろそろ日を跨いでしまう

明日学校だっけ?……ああいや、祝日だったな

でも確かcircleはやってたよな、よし行くか

「たでーま……って、もう寝てるか」

「あ、おかえりー」

「珍しいな、晶奈がこの時間に起きてるのは」

「まあ明日休みだし、寝付きも悪いから我が弟が帰ってくるまで待つてようかなあつてね」

「どうも、そりやご苦労な事で」

「ふっふー、感謝したまえ……それでどうだった?」

「まあそれなりには楽しかったよ」



「そつ、それは良かった…：そうだ聞いてよ幸貞く、私の上司がさあく…：…」

この後、晶奈の愚痴を聞きながら華蓮が作り置きしてくれた夕飯を食べて寝た

翌日

「おはようございます」

「あ！おはよう幸貞君、別に休みの日は来なくてもいいのに」

「まあ暇なんで、今日は予約入ってますか？」

「うん、いつもの子達がね」

「そうですか…：じゃあ俺は機材のメンテナンスでもしてきます」

「了解〜」

という訳でスピーカーやらアンプやらを少し分解して中のメンテをおこなっていると、電話のバイブレーションが鳴った

今は仕事のだが……まあ暇だしいいか（良くはない）

「はいもしもし?」

『あつ、美咲です……えつと、幸貞さん?』

「ああそうだよ、珍しいね君から俺に電話とは……それでどうかしたかね?」

『今って時間ありますか?』

「今バイト中だけど……まあこれといって忙しくは無いから別にいいよ」

『だ、大丈夫なんですか?バイト中ですよね?』

「まあ暇だし、circleに居るから来てくれたら相手するよ」

『あ、分かりました……え!?circleでバイトしてるんですか!?!』

「ああ、うん……そうだよ」

『わ、分かりました……取り敢えず向かいますね』

しかし珍しい事もあったもんだな、美咲ちゃんから直接俺に電話とは……

あ、因みに何故俺が美咲ちゃんの連絡先を知っているかというのだな……偶にこころが行方不明になるから搜索の為にだ

暫くして美咲ちゃんがやって来た

「あ、こんにちは幸貞さん」

「おう、それで話って?」

「アタシって一応ハロハピの中だとDJって役割なんですよ、それで偶に有名な人の動画とか見るんですが……その中でこれを発見しまして」

「まあ何となく動画の内容は分かったよ……ほらねやつぱり、情報社会って怖いねえ」

デジャヴ過ぎてワロエナイ

俺が昨日DJしていた動画が某動画サイトにアップされていた、まあ別にいいんだけどさあ

「まあんなこつたろうと思っただけどね……それだけを伝えに?」

「あ、はい……直接言っで見せた方がいいかなって」

「そりやありがとう……ところで最近ハロハピどうなの?」

「ハロハピですか?……まあいい意味でも悪い意味でも相変わらずですよ」

「そりや良かったな、この前に此処であったLIVE以来見てないからな」

「もうあの三人はいつも通りですよ……本当、花音さんがいてくれて良かったです」

ああそっか、この娘は一年生で花音ちゃんは二年生だっけか

花音ちゃんが二年生な事をすぐに忘れてしまうなあ、イカンイカン

「まあお疲れ様」

「ありがとうございます…何かすみません、愚痴みたいになっちゃって」  
「気にしなくていいよ」

という訳で美咲ちゃんと別れ、また作業に戻っていた

暫くしてメンテが終わり、受付に座り雑誌を読んでいた…予約の時間に近づきバンドの娘達がちらほら現れた

「あ！ねえねえ幸貞！これ見た見た!?!」

「ようりサ、それ美咲ちゃんに見せてもらった」

「何か最近幸貞がT w ○ t ○ e r に回ってくる事多くない?」

「そうだなあ…現代社会のSNSって怖え」

まあ何でもいいや、取り敢えず今日も一日頑張ろう

## 17話

「ねえねえ幸貞、今度の土曜日って暇？」

「何だよ沙綾、突然そんな事を聞いて」

「何でもいいじゃん、それで暇なの？」

「まあ暇つちや暇だが……何かするのか？」

「よし、じゃあその日朝の7時にウチの店に来てね……宜しく！」

「……………ああ、バイトか」

という訳で今週の土曜日は山吹ベーカリーでバイトをする事が決定した

成る可く裏方に回りたいなあ、SNSを出回るのはもういいよお腹一杯だよ

まあでもバイトの報酬で制服貰えるし……ま、多少はね？

さて、という事で今現在は山吹ベーカーリーにてバイト中で御座います

裏方に回りはかったがそもそもパン作りとかド素人もいいところなのでレジ打ち&接客になった

「後でお父さんがパン作り体験するかって聞いてたよ？」

「お、マジで…今後の為にやらせてもらおうかな」

「今後の為って…いつ使うの？」

「さあ、覚えておいて悪い事は無いだろ」

「……まあそうだけどさ」

そうそう…さっき自分でやって驚いたのだがレジ打ちが初見で出来た

コンビニの店員さんのを見ていたのをこんな感じかな？ 的なノリでやってみたら出来てしまった

「何で初めてなのにレジ打ちそんなに早いなの？」

「やる事さえ分かれば簡単」

「…成程、流石は幸貞」

まあ俺も一応、天才の端くれではあるからな…要領さえ掴めば後は簡単作業

「……なあ、何故俺が接客する女性の方は皆滑舌が怪しくなるんだ」

「それ本当に気付いてないの？」

「え、そりや気付いてないから聞いてるんだが…」

「……ふーん…幸貞つてその内ストーカーとかやられそうだよな」

「やめてくれ、そんな面倒な事は御免蒙る」

「なら早く気付いた方がいいと思うけどなあ〜」

と、まあこんな風に沙綾と駄弁ったり接客したりとそんな感じで時間が過ぎて行く…

昼が過ぎピークを超えたあたりで沙綾のおヤツさんから呼ばれたので裏方へ

「改めて宜しくな、幸貞君」

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

「いやーしかし沙綾が男を連れてきた時は流石にビックリしたよ」

「まあお宅の娘さんとはそう言う関係じゃないのでご安心を」

「ははは、まあその辺りは基本的に心配はしてないんだけどね…娘の選んだ相手が目に余る程の人間じゃなければ文句は言わない積りだから」

目に余る程の人間か…目の前にいる俺は如何なモノなのか、まあそんな事はどうで

もいいのさ

取り敢えず紗綾のおヤツさんにパン作りの基本を教わり、生地作りや生地のおね方：オーブンの使い方や焼く時の注意等を聞いた

「…にしても、君本当に初心者か？普通の人はそこまで出来ないと思うんだが」

「まあ要領はいい方だと自分でも思ってるので」

「要領がいいだけではそこまで出来ないと思うんだが…」

「…おヤツさんは言ったものの、教えれば教える程スポンジの様にドンドン吸収していく俺を見ていて楽しいのか本当に色々な事を教えてくれた

「そうだ、新商品を出そうと思ってるんだが…何か良いアイディアは無いかな？」

「俺が出していいんですか？ド素人もいいところですよ？」

「…こういうのって素人の人から聞くのが一番良いんだよね、あと今回作ろうと思ってるパンのイメージがイメージだし…それに君は最早素人と呼んでいいのか分からないし」

「…まあそこら辺に関しては俺からはノーコメントで、時間が作り上げる才能つても存在してるから

「因みに今のところどんな感じのを考えてますか？」

「学生向けに作ろうと思ってるね、片手で簡単に食べられる物がいいと思ってるんだ…まあだから君の意見も聞きたいと思ってるね」



「成程…学生向けにですか」

「うん、それに男の子も女の子も食べれる物を考えてるんだ」

詰まりは余りガッツリし過ぎていないものか、なんか難しいなあ

もう一層の事チーズケーキとかでいい気がするんだが……チーズか、いいなコレ

「アンパンの応用で中にチーズとか入れてみたらどうですか？」

「チーズパンか？確かにそれだったら男女共に食べられるが…何処と無く物足りないよ  
うな気がするぞ」

「まあ素のパン生地とチーズだけじゃ味気ないでしょうから、少し辛味のある素材を生  
地に練り込んでおいたらいいでしょう」

「ほう、成程」

「あとはこんな感じの味付けソースを掛けておけば」

「それいつの間に作ったんだい？」

「暇を見てここにあった材料を少し拝借しながらです」

「それで味は……美味しいじゃないか、それにこれだったら割と色々な種類のパンに合  
うな」

材料？企業秘密だよ、正直な話遊び半分で作ったソースだから余り覚えてないって  
のが本当

あ、材料はここから拝借したって言ったけどちゃんと量を見て迷惑の掛からない量を  
拝借したからな

「焼き加減は強火でパリッと仕上げれば宜しいかと」

「よし、取り敢えず作ってみようか！」

「こんな感じでどうかな？」

「……OKです、じゃあ味見をしましょうか」

「……………これ、凄いな」

「ですね、自分でここまで行くとは思ってなかったですよ」

「と、取り敢えず沙綾にも味見をしてもらおう」

てな訳で沙綾を呼んできて味見をしてもらった

「これ幸貞が考えたの？」

「そう、まあ作ったのはお前のおヤツさんだけどね」

「……………本当、幸貞って何者なの？」

「と言われましてもねえ」

そして俺の考えたパンは即販売決定となった

因みに、冷めるとチーズが固まってしまう為取り敢えず限定40食で売り出した  
売上次第で変えるそうだし

「今日は助かったよ、ありがとうね」

「いえ、こちらこそ貴重な体験ありがとうございました」

「あ、待つて幸貞……………はいこれお土産」

沙綾が持つてきたのはビニール袋一杯のパン、それと紙袋

ああ、そう言えば報酬を頼んでおいていたな

「どうも、パンまで悪いな」

「いいのいいの、また暇が出来たら手伝いに来てよ」

「そのコネかこれは」

「そこら辺は幸貞の好きに解釈してね」

「……まあ暇が出来たらな」

「うん、じゃあまた学校でね」

そんな訳で帰宅、お土産のパンは晶奈と華蓮にあげた

晶奈と華蓮が絶賛するんだから確実に美味しいんだろうな、流石は沙綾のおヤツさんだぜ

翌日

学校だぜ畜生

まあ朝は特にこれといって無かったから割愛な、昼の時間になりいつも通り昼飯を食おうとしていると

「やっと思つけたぜ幸貞！」

「どちら様ですか」

「酷くねえかおい!？」

「冗談だよ裕次、唯でさえ男子生徒の人数が少なえのにお前みたいなキャラの濃い奴を忘れるかって」

「喜んでいいのか悪いのか分かんねえ……まあいいや、昼飯食おうぜ」

「別に構わんが……何処でだ？」

「屋上だよ、陽音も待つてるからよ」

との事で屋上で昼飯を食べる事に、久し振りに静かに食えそうだな

屋上に着くと陽音がこちらに手を振っていた

「久し振りだね幸貞君」

「山登り以来だからな、基本的に俺教室から出ないし」

「まあでも探すのは余り苦勞しなかつたけどな」

「そうなのか？」

「うん、幸貞君割りとこの学校じゃ有名だよ…何でも出来る人だつて」

「何でも出来る訳じゃ無いけどね」

「教室の蛍光灯一個増やしたりクーラーのメンテナンスをしたりする奴がそれを言ってもねえ」

「その話知ってたのか」

「聞いたんだよ」

まあ電工二種持つてるから問題無いよね、それに先生から頼まれてやった事だし

俺が何でも出来ると思つたら大間違いだゾ

「そうだ！二人ともこれ見て！」

「え？うおつ！そのパン買ったのか！」

「どのパン……」

「これ百食限定で全然買えないんだけど、今日やっと買えたんだ！」

「ラッキーだな陽音！だよな幸貞！」

「お、そうだな（適当）」

「何か反応薄いな幸貞、もしかしてこのパン知らないのか？」

「ええ!!今ネットとかでも有名になってるよ！」

いやこれがよく知ってんだよなあ、作ったの俺だし

まさかまたSNSにお世話になるとは思っても無かったよ、てか百食に引き上げたんですね

「生地ของ辛さとチーズのまろやかさが合って美味しいんだよ」

「だよなあ、俺も前に偶々別の学校にいる友人に一口もらったが本当に美味しいよなあ」

「へ、へえ…ソウナンダ」

「幸貞君も一口食べる？」

「いやいいよ、そのパンは陽音のдарう？お前が味わって食べな」

「そう？じゃあお言葉に甘えるよ…本当に美味しいなあこのパン、考えた人は凄いと  
思  
うよ」

「だよな！一度でいいから会ってみたいぜ」

おっと、沙綾からLINEが入った

陽音と裕次が俺から視線を外している間に内容を確認する

ええと何々…今何処にいるかって？屋上だよ…つと、丁度良かった？何が？

次の瞬間、屋上の入口が開いた

「ここに居たんだ幸貞、話がしたくて探してて丁度通りかかったんだ…って、若しかして邪魔しちやっただ？」

「いや別に、大丈夫…だよな？」

「おいおい幸貞、もしや彼女さんか？」

「残念だったなあ、違うんだよこれが」

「本当か？まあ話があるなら俺らは待つてるよ」

「あ、直ぐに済む話だから私は後でも構わないよ！」

「それは俺が面倒だから今聞く」

「いいならいいけど、あ…ウチのパン食べてくれてるんだ、ありがとう！そうそうその話なんだけども、百食限定にしたよって言いに来てね」

「ああ、そのはなs……あ」

その話をこのタイミングでするのかよ、本当に俺はタイミングというやつに嫌われてるんじゃないかって思ってきたよ

陽音と裕次がメツチャこつちを見てくるんだよ、やめろその視線





## 18話

さて、今日は一日休み…何も無い日だ、丁度いい

何が丁度いいかって？この前に沙綾から貰った制服があるだろ、その加工をしても  
らう

「……もしもし？」

『おや、君から僕へ直接連絡を取ってくれるとは嬉しいね…若しかして遂に僕との婚姻を決意してくれたのかな？それはいい事だ！それで式はいつにする？僕は何時でも構わないいや今日でも構わないさ！』

「天地がひっくり返って地球が滅びようともそんな事はありえないから安心しろ、それにお前に用がある訳じゃない」

『何だ、そうなのか…それは残念だ……それでは何用得僕に連絡を？』

「用があるのはお前の姉だ」

『ほう、詰まりは僕から連絡を取ってくれと？それぐらいならお易い御用さ…少し待っててくれ』

そう言って少しの間沈黙が流れる、暫くしてからアリアが戻って来た

『OKだそうだよ、今日中に向かうと言っていたよ…何でも「愛しの義弟の為なら何だってしたげる！」だそうだよ』

「誰が義弟だ」

『では、姉がそちらにお邪魔するから』

「はいよ」

そう言つて電話を切る、アイツ相手にするのはやつぱり面倒臭いわあ

何て事を思っていると外で車が止まる音が聞こえてきた

ああそうそう、因みに今日は華蓮も晶奈も出掛けており家は俺一人…アイツら休みの日はよく俺を一人にするな、そう言えば

まあだから何だという話だが…つと、ご到着なされたようだな

玄関の扉を開ける

「ハロー！ユーちゃん！」

「はいはいどうも、アリスさん」

「久しぶりだねえ！また一段と凛々しくなつて…義姉ちゃん嬉しいよ…！」

「アンタの義弟になつた覚えは無い、あと永遠にそんな時は訪れないから安心しろ」

「えく!!だつて今日私を呼んだのつてアリアちゃんのウエディングドレスを作る為じゃないの〜?!」

「そんな訳ないだろ、別件で来てもらったんだよ」

「ちえくなーんだ、アリスさんのモチベーションガタ落ちだよお〜」

何だろう…この人からは晶奈のそれと同じものを感じ取れる

宮代アリス、アリアとは違い金髪だが髪型は同じロングストレート

話の通りアリアの姉、この人は婚約全面肯定派なのでいつアリアと結婚するのかと毎度煩い

因みに大分前から日本に住んでいる

こう見るとアレだな、この人リリカルな何かのなのはに出てくる金髪過保護執務官の人に似てるよな

現実世界にこんなえげつないスタイルの人いるんだなあ（感心）

「ふう…それで、私に頼み事って何かな？」

「これを加工して衣装を作ってもらいたくてな」

「衣装？…まさかユーちゃんを着るって事じゃないよね？」

「勿論、着るのは俺じゃなくて女の子だ…構想は今から練る」

「成程成程、話に聞く幼馴染の子達かな？」

「ご名答、という訳でやりましょうか」

そうそう、この人は海外的にも有名なデザイナーである

自分だけのブランドを持ち、数々の賞を取っているらしい

何だかな、俺の周りは随分と才能に満ち溢れてるようで…本当、何でも天才ばかりが揃うのやら

「取り敢えずどんな色合いにしたい？」

「あの娘達はイメージ的に黒が強いから、やっぱり黒かな」

「そうなの…じゃあここは敢えて白とかはどう？」

「真反対の色か…何かそれもいい気がしてきたな、偶にはそういう色も」

「でしょ？じゃあベースは白で決定ね」

因みに元となる服は沙綾から譲ってもらった山吹ベーカーリーの制服、これをベースに作っていくつもりだ

「真っ白の中にある黒ってのもいいだろ」

「さっすが私の義弟！そのギャップもまた味なのよね！」

「誰が義弟だ…ああ、後はあの娘達は基本的にフリルとかスカートよりはズボンとかの方が似合うから」

「リョーかい、じゃあ下はスカートじゃなくてズボンで決定ね」

「…あつ、ドレスとかでもいいぞ」

「えっ！そう言う事は早く言つてよユーちゃん！もうズボンで構成立てちゃったじゃん

よ〜!」

いや、さっきの間一秒くらいしか無かったぞ…クイズの早押し並のスピードで言えと?  
?

ていうか頭の中で完成させるの早すぎなんだよ貴女

「え〜じゃあどうする? ドレスでもう一回考える?」

「いや、もうズボンでいいよ」

ほんの数分で衣装が完成した、いや本当仕事が速過ぎるこの人

アリアもそうだが流石は大企業を背負ってるだけあるな、時間が命とはこの事だな

「はいかんせい! どうぞ? いい感じに仕上がってると思うんだよねえ!」

「俺の構想通りだな、流石天才デザイナー」

「もうっ！煽ってもアリアちゃんとの婚姻届しか懐から出てこないぞっユーちゃん！」

「そんなもん要らん、今すぐ破棄しても問題あるまい」

「え〜！酷いなあユーちゃん……何でそんなにアリアちゃんとの結婚が嫌なの？逆玉だしこれから楽しんで生きていけるんだよ？」

「聞きたいかそれ？」

「うん、まあ気になるし」

「……俺の人生に不幸は要らない、その代わり幸せも要らない……唯只管に何も無い人生を歩んで行くことだ、例えば他人から見れば幸せ事でさえ俺にとっては邪魔な物でしかない」

「うわあ何その考え方、如何にも捻くれてる感丸出しじゃん」

「うるせえ放つとけ」

そんなもん散々言ってきた上に自覚してるから言われなくても分かるわい

詰まらない人生こそが俺の目標なんだよ

「もつと刺激ある人生歩んでみたら〜？そしたら何かしら価値観が変わるかもよ」

「嫌だよ面倒臭い、それにこの性格は生まれつきだ……今更どうなるもんでもないだろ」

「可愛くない子供だったんだね」

「煩せえやい」

翌日

「……………もしもし、ようりサ」

『幸貞からアタシに電話するなんて珍しいね、どうしたの？』

「今暇か？」

『え？まあバイトもバンドも無いし暇だけど…』

「よし、OKだ…あと出来れば友希那も連れて俺の家に来て」

『きゅ、急にどうしたの本当に……………取り敢えず友希那連れて行けばいいのね』

「ああ、宜しく」

それから数分後、リサと友希那が我が家にやって来た

……にしても随っ分とラフな格好ですなあ君達、リサのジーパン&パーカーが凄い似合う……友希那のブカブカパーカーも眼福だが、それが本題じゃあない

「急に済まんなお前ら」

「ううん、アタシも友希那と暇してたところだったし大丈夫だよ」

「何だ、リサの家にいたのか友希那」

「ええ……まあ、本当は作詞の筈だったのだけれどね」

「あ、あはは……全然浮かばなくて」

「じゃあ丁度いい息抜き替わりだな」

「それで何するの？」

「お前ら二人にはこれを着てもらおうか」



あゝいっすねえ、こりやいい絵だわあ

「どう？似合ってるかな…」

「似合ってるよ…既に友希那は気に入ってる様だし」

全身鏡の前で様々な角度から自分の衣装を見ていた…心做しか目がキラキラと輝いている様に見える

「お！友希那も似合ってるじゃ〜ん！」

「リサも似合ってるわよ」

いやゝゝお二人共お似合いで

親父の所から一眼レフかつぱらっっておいて良かったわあ

「でも急にどうして？」

「ん？まあ気分的にね、つぐみちゃん所でバイトしてたら『ああ、リサとか友希那にメイド服とか着させてえ』って思っ…でも気付いたらいつの間にか衣装になった」

「最初の思考が残ってなくて良かったよ」

因みにどんな衣装かと言うと

上下共通して白がベース、上のデザインは山吹ベーカーリーの制服を崩さない程度にしながら燕尾服を元として作った

左胸から背中にかけて模様刺繍が入った黒いレースが付いている

下はズボンで、白地の上ランダムで切口の様な形をした黒い線が入っている

これ白のルクハット被ったら完全にアリアだな

「幸貞、この衣装貰えるかしら」

「その衣装は元々お前らに上げる為に作ったから好きにして構わんよ」

「ありがとう……あと出来ればで構わないのだけれど……」

「何?」

「この衣装、次のライブで使わせて欲しいわ」

「……ん? 詰まりそうなるその後三着必要になるのか、まあ俺は構わんがデザインは俺がやったものの制作自体は別の人だから……取り敢えずその人に聞いて見なきゃ分からんな」

「そう、出来ればいいわよ」

「まあ待つてロツテのトツポ」

確かあの人、アリアの所に行くって言ってたし多分居るよな  
取り敢えず電話かけてみよう

「もしもし、アリス居るか？」

『おや、ユキじゃないか…姉さんか？今そこに居る、変わろう……ハイハイ！アリアちゃんから変わってアリスさんだよ』

「どうも、昨日は衣装ありがとう」

『そんな気にしなくていいよ！それでまた何か頼み事かな？』

「実は幼馴染から大絶賛を頂きまして、ライブ衣装として着たいって言うてるんだ…その許可と許可を出してくれるならあと三着作って欲しい」

『勿論OKに決まってるよ！』

「それはどうも…ああ、忘れてたが二人分は特注で作らなきゃならんから二人の写真送るわ」

『分かった、じゃあ任せときなさい！』

通話を切る、まさか友希那からは非使いたいと言われるとは…

ほぼ遊び半分で作ってたからなあ、まあ結果オーライだね

「……許可出たよ、あこと燐子ちゃんのは特注で作って貰うから少し時間かかるの思う

よ」

「ええ、問題無いわ」

「……あれ？なんでその二人だけ？」

「そりやりサ、あこは完全にお前らと一緒に衣装だと身長的に大き過ぎるだろ」

「あ、そつか…じゃあ燐子は？」

「燐子ちゃんは圧倒的胸囲の問題だよね、どう考えても君達のじゃ足りな…あの、痛いんだけどちよつと」

リサと友希那に脛を蹴られた、しかも無言だから怖いんだけど

「……幸貞のバーカ」

「何だよ、別に気にする様な事じゃないだろ…あんなもんだだけの脂肪だ」

「それでも女の子にその話は駄目でしょ」

「そんなの気にするなって、そもそも言われて気にするって事は自覚があるって事だろ友希那さん取り敢えず抓るの止めて」

さつきから無言ですつと俺の横腹を抓ってるんだけどこの人、しかも結構食込んでるから割と痛い

「幸貞の自業自得だよくだ！」

「分かった分かった俺が悪かったよ、ほら機嫌直させて」

近くに丁度友希那の頭があったので撫でておく

するとみるみる内に顔が赤くなり抓る力が弱くなっていった、照れてるの？照れてるんだね？

はあ、にしても…本当に人の心って分からんなあ

## 19話

はあ、学校って何故こんなにも面倒なのだろうか  
今スグにでも帰りてえ

因みに今はお昼休み

「あ、幸貞パンいる？昨日の売れ残った物をどうにかしたくて」

「貰う、因みに何がある？」

「えつと…焼きそばパンにピザパン、ガーリックパンとかハムチーズエッグにカレーパンかな」

「何でそんなに重いもんばっかり残ってたんだよ」

「私にも分かんないよ…それでどれ欲しい？」

「じゃあ全部貰うわ」

「重いとか言いつつ全部食べるって…まあ別にいいんだけどさ」

「よお幸貞ー、飯食おうぜ」

そうそう、陽音と裕次は俺のクラスを知ってから毎日昼飯を食べに来るようになった

「あ、二人ともこんにちは」

「何だ、また山吹さんと食べてたのか？」

「パンのお裾分け貰ってた」

「二人共仲良いよね」

「んー…まあ、そうだな」

「何よ、その曖昧な答え方」

と、まあこんな感じに駄弁りながら四人で昼食を取っていた

するとバタバタと誰かが走ってこの教室へ向かってくる音が聞こえてきた

「ゆ、幸貞くん!!お願いだから助けて下さい!!」

「断る」

「ええええくく!!お”ね”か”い”た”か”ら”く!!」

「それアイドルが出していい声じゃないですよ」

藤○竜也みたいな叫び方をするな、絶対それ女王様が聞いてたら怒られるヤツだぞ

「ほ、本当に今ピンチなの!助けて幸貞君!」

「三回まわってワンと鳴いたら考えてやろう」

「鬼畜かよ幸貞!?!」

「ワンッ!」

「あ、本当にやったよこの人」

何だこのカオス、いやまあ引き金は俺と言つても過言ではないけどね

「取り敢えず話だけ聞きますよ、何をそんなに焦ってるんですか？」

「じ、実はね…柿谷さんが熱で倒れちゃつて、それも大変な事なんだけど…柿谷さんって私達専属のマネージャーで基本的に人に自分の仕事を教えない人なの、だから柿谷さんの仕事って事務所の人達すら誰もよく分からなくて…それで臨時として幸貞君に頼みたくて！」

「いや俺に頼みに来るのは可笑しく不是吗？同じ事務所の人が分からないのに俺が分かる訳が無いじゃないですか」

「そ、それ何だけどね…前にもし私が動けなくなったら幸貞君に渡してつて言われた物があつて…」

「……………このノート？」

「うん」

ノートの表紙には『マネジメントの基本』と書かれており、中は恐らく柿谷さんの字であろう文字で色々と書いてあつた

あの人もし自分が動けなくなつた時に俺に引き継げるように色々と準備してたのかよ……………何か末恐ろしいな

「つつつてもこんなの読んだだけでマネージャーなんかは……………はあ、見返りは？」



「え？」

このノートめっちゃ分かりやすいんだけど、マジなんなのあの人……俺にやらせる気満々じゃねえかよ

あの人も仲はいいからなあ、無下には出来ないか

「見返りですよ見返り、何かそれ相応の報酬はあるんですか？」

「も、勿論だよ！」

「まあそうは言ってもまだ考えて無さそうですね……はあ、やりますよ」

「あ、ありがとう幸貞君!!じゃあ放課後迎えに来るからそのまま事務所に行こう!!」

あ、今日からなんですわね

……って待てよ、いきなりド素人をブチ込んでいいのか？

丸山先輩もう居ないし……まあなる様に成るべ

「はあ、面倒臭い」

「何だかんだ言って幸貞も優しいよねえ」

「何だよ沙綾、その反抗期の息子が見せた一瞬の優しさを慈愛に満ちた目で見つめる母

親の様な目は」

「無駄に長いし妙にリアルだね」

「幸貞君って変な所で細かいよね」

「嬉しいわ」

「……あつ、ていうか今のつてパスパレの丸山彩さん？」

本当に不意に思い出した感じで裕次が発した

丸山先輩……気付かれてないとは何か可愛そうになつてくるな

「え、今更かよ裕次」

「きゅ、急な事過ぎて反応出来なかったが……まさかお前パスパレと関係あるの？」

「いや別に、これと言つてないけど」

「あー、幸貞つて結構色んなパイプ持つてるんだね」

「パイプつて……別にそんなつもり無いぞ沙綾」

「でも事実そうじゃない？」

「もう幸貞が何なのか分からなくなってきたな」

「幸貞君つて凄いなだね」

「小並感な感想ありがとう陽音」

## 放課後

「お待たせ幸貞君っ！」

「面倒になってきたので成る可く来ない事を願ってました」

「酷い!?!」

「取り敢えず行きましようか」

「更にスルー!?!」

横で喚く丸山先輩は放っておいて歩みを進める…そう言えば事務所に行くのはこれで二度目なんだよね

前に一度、華蓮とスカウトされた時に行ったことがある

「…ここに来るのも久し振りなのか」

「そう言えば大分前だけど事務所にいたよね」

「そうですよ…そう言えば、あの状況だと盗み聞きしてたんですか?」

「あ、あははは…ゴメンね、どうしても気になっちゃう話題だったし…何よりあの千聖ちゃんに気になるっていうから」

「ああ、成程…普段なら止めそうですね」

さて、取り敢えず俺は先ず挨拶しに行かなきゃならんのか

こんなド素人が行っていいのやら

「じゃあ俺は色々挨拶とかあるから」

「うん、分かった…じゃあ後は自分達で出来る事をやっておくね」

という事で事務所長部屋を探す、壁に掛かっている案内図等を宛に事務所内を歩いて  
いると

「あれ？もしかして君、幸貞君？」

「えっと…ああ、勝山さんか」

「久し振りじゃないか、と言うか何故ここに居るんだ？もしかして気が変わってアイドルに？」

「そんな訳無いです、柿谷さんの代わりで来ました」

「ああ！柿谷さんの代わりで来る人って君だったのか！」

「もしかしてもう話行ってるんですか？」

「ああ来てるよ、柿谷さん本人が優秀な代わりを呼んでおくから心配しないでってね」

「無駄にハードルが高いんですが」

「はは、まあ取り敢えず今は所長でも探してるのかな？そしたら私でよければ案内するよ」

「助かります」

勝山さんに案内してもらい所長へ会いに行った

所長…女の人だった、しかも柿谷さんに劣らない程に美人

黒髪ロングが似合ってますよ

て言うか何か俺の周りにいる大物っていうか凄い人って女の人多くね？何か狙って

ん？

「こんにちは、君が幸貞君？私は城山きやま 朱音あかね」

「はい、素人なので足を引つ張らないよう頑張りたいと思います」

「気にしなくていいよ、それに悠香ちゃんから聞いてるけど君中々優秀みたいじゃない

…パスパレの子達を熱くさせる原動力になったって聞いたよ」

「いえいえ、そんな大それた事なんてしてませんよ…紛れもなく熱くなったのは彼女達の意志なんですから、そこに俺は関係ありませんよ」

「あらあら、随分と謙虚ね…それじゃあ早速だけど仕事の手伝いをして貰おうかしら

……と言っても私達でも悠香ちゃんの仕事って把握してないのよね」

「その辺事情は聞きました、それに何故か自分用にノートを作っていたみたいで…それを読んだので大抵の事は把握しました」

「そうなの？あの子だったら、最初から君に目を付けてなのね」

「はは、まあ複雑な気持ちですね」

城山さんへの挨拶を終えたので早速仕事を始める事に

てかマネージャーって何すんの？と思つたその貴方、そう貴方です

柿谷さん著筆の『マネジメントの基本』によると

えー…具体的にはスケジュール管理や宣伝活動、マスコミ各社への出演交渉等を行う芸能人マネージャーの場合、その人がどれだけ活躍し輝いていけるかを補佐しサポートしていくのが仕事である

と書いてある、あと因みに

※とは言つても幸貞君は素人だと思つたので交渉や宣伝活動等は他にいる代わりに人が行つてくれるので気にしないでね

この辺すつごい抜かりなく書いていて正直引くレベル

「さてと、じゃあ俺はスケジュールとかその辺をやるとしますか」

「幸貞君、これパスパレのスケジュール表ね…何か私のケータイにメールで送られてきたからコピーしておいたよ」

「用意周到ですね…何か怖いですね」

「……そうだね」

柿谷さんはアレなのか？自分が熱で動けなくなる事を予測でもしていたとでも言うのかね

因みにサポートには知り合いという事もあつて勝山さんが担当してくれることになった

「このスケジュール凄いですね、全部柿谷さんが考えたんですか？」

「そうだよ、基本的に私達は彼女の仕事内容は知らないからね」

「はあ、これは単純に凄いですわ」

二ヶ月先以上の予定がビッシリ書いてあつた

それにパスパレには現役女優の女王様もいるので調整等も抜かりなく

これ俺何もしなくて良くないか？

すると一人の男性が勝山さんの所へやって来た、中年のダンディな人だな

「勝山君、少しいいかな？……おっと、話中だったか」

「少し外していいかな幸貞君」

「ええ、大丈夫ですでお構いなく」

「悪いね…実はこの会社に交渉をしようと思ってるんだがどう思うかね？」

「この会社ですか…大手ですしいいかもしれませんね」

「あ、その会社は余りお勧めはしませんよ」

あ、やっべ…つい声に出してしまった

ポツと出の若造が余り調子こいた事はしない方がいいな

「その理由を聞いてもいいかね？」

「その会社、最近株価があまり良くないんですよね…そう言った所は絶対とは言えませんが何かしらの面倒事を抱え込んでいる事が多くて」

「…成程、取り敢えず一旦調べてみるか」

「何かすみません、見ず知らずの若造が意見を」

「いや、気にしないでくれ…様々な意見を取り入れるのは大切だ…とところで君は誰だね？」

「柿谷さんの代わりで来ました」

「ああ、君がそうなのか…何かと分からない事があつたら聞いてくれ、それじゃあ頑張れよ」

そう言つて歩いていった、何か背中が凄いかっこいい…語彙力皆無だけど凄いかっこいい(小並感)

「今の人って？」



「私の上司だよ、いい人でしょ」

「はい」

それから数分、スケジュールに関して勝山さんからアドバイスを貰いながら訂正点などを探していた

すると先程の勝山さんの上司さんがまたこちらへ来たのだ

「君凄いな…よく調べてみたらこの会社、ついこの前に社内で問題を起こしていたようだ」

「お役に立てたのなら光栄です」

「君のような若い青年が何故株価なんて知っていたんだ？」

「ええと…まあ知り合いが株に関しての仕事をしてる人でして、偶に手伝ったりとかしているのさ」

昨日、偶々アリアから頼まれてサーチしてたんだよね

調子のいい企業や悪い企業で分けて見てたから丁度覚えていた

「幸貞君、本当に何でも出来るんだね」

「何でもは出来ませんよ、俺は俺の出来る事が出来るんです」

「まあその出来る具合が人一倍凄いつてことだな、逸材だな君は…いつその事務所に就いてもらいたいくらいだ」

そんな話をしていると、パスパレのレッスンが終わるようなので顔を出しに行くことになった

## 20話

さて、そんな訳でパスパレの娘達に会いに行く

「あれー？何でユツキーがここに居るの？」

「柿谷さんの代わりだよ、て言うか丸山先輩から聞いてないのかよ」

「わ、私はちゃんと言ったよ!？」

「そうだったけー？覚えてないや」

何だこの天災、本当に天災天災なのかね

「ユキサダさん！よろしくお願ひしますね」

「自分もよろしくツス」

「はいどうも宜しくね」

「まさか柿谷さんの代わりが貴方だとは思ひもよらなかつたわよ」

「俺もビックリですよ……ああそうそう女王様、貴女再来月ぐらいまでにパスパレ以外の仕事について確認したいから後で宜しく」

「ええ、分かつたわ」

「おお、何かユツキーがマネージャーっぽい」

「ぼいじゃなくて事実代理マネージャーだよ」

そして思ったんだがこれから何すればいいの？この後についてノート読んでくれば良かったな

「因みにこの後どうするんだ？お前らは解散ってことでいいのか？」

「うん、基本的に私達はそのまま解散かな」

「了解、まあ別に俺が来た意味は無かったな…ああ、汗かいてるだろうから体冷やさないように…後もう暗いから夜道には気を付けて」

「はい分かりましたよユツキー！」

「基本的に天災と女王様については余り心配してないから他の娘達ね」

「ちよつと、こんなか弱い乙女に対して酷くないかしら？」

「か弱い？どの辺が？」

「引っ叩くわよ」

止めてくれ、そう言うのは貴方のファンである人達にやって差し上げる

半数以上が泣いて喜ぶぞ

さて、彼女達も帰った事だし…後は何をするんだ？勝山さん辺りに聞いてみるか

「あ、幸貞君…丁度良かった、少し話を聞いてくれないか」

「ああ、勝山さん…話とは？」

「これはオフレコで頼みたいんだけど……実はイヴちゃんが前から誰かに付けられてる気がするって言うんだ、若しかしたら悪質なストーリーカーに遭っているのかもしれないと思ってる」

「ほう、それはまた……それを何故俺に？」

「君ならどうにか力になって貰えそうだと思ってる」

「随分と買われたもんですね俺も、まあ策は無くは無いですよ？」

「本当かい？」

「ええ、その代わり……それを行うにあたってはイヴ自身の協力も必要になりますが、それでもいいなら構いませんよ」

と言うかそれを聞いた瞬間に保々犯人がどう言った人物なのかは用意に把握出来た後は頭出すのを狙って引っこ抜けばいい

まあ予想が当たってればの話ですがね

「という事で、イヴは今日俺と帰ります」

「本当は反対したいのだけれど：貴方が一緒なら大抵の事なら平気ね」

「イヴちゃん！何かあったらスグに幸貞くんを頼るんだよ！」

「はい彩さん！」

何か俺を肉壁に使うみたいない方なんだが：まあでもそうなるわな

「じゃあお前らもうもう帰れ、夜道には気を付けるように」

「はーい！」

「さて、じゃあ俺達も行きませうか」

「はい！よろしくお願ひしますユキサダさん！」

しかしなあ、暗い夜道をこんなスタイルすごい（語彙力）娘と歩くとなると色々危なく聞こえてくるわ

「帰り道はいつも通りでいいから」

「分かりました」

それから暫くイヴがいつも通っていると言う帰路を二人で歩いていた

そして少し住宅街から離れ、人の気配が無い所を通り掛かる

「い、いつもここで視線を感じるんです」

「だろうな、こんな絶好のスポットは無いからねえ…あと五秒位かな」

「え？な、何がですか？」

「三…二…一…：…：…：そら来るぞ」

と、次の瞬間…：パシヤツ！と音を立ててフラッシュライトが俺とイヴを照らした

「ひ、ひひひ…あのアイドルバンドの若宮イヴが男と熱愛報道とは…これは特ダネだな！」

「なっ！ち、違います！」

「何だ、唯のパパラッチか」

「証拠も取れてネタは揃ってんだよ！これで俺も一儲け…：あ、あれ？俺のカメラは？」

「はー、パパラッチの癖にいいカメラ使っなんなあ…いやだからこそ…：かな」

「な！お、お前返せそれ!!」

物体から意識を外した人間の視線を掻い潜って物を取るなんて容易い

男は慌てて俺の手にあつた一眼レフをブン取り返す

「じゃ、写真は…ひひひ、ちゃんとあるな」

「まあ別に写真の方は弄って無いからな」

「週末に出る雑誌を楽しみに待ってな！ひひひひ」

何だあの気持ち悪い生物は、UMAとして認定してもらえそうじゃないか？

「ユ、ユキサダさん！追わなくていいんですか!？」

「別に深追いする必要は無いよ、貰うもん貰ったし」

「え？ど、どう言う事ですか…？」

ピントと親指で先程取ったものを弾き、弾いた手でキャッチする

物の構造を触って理解するのは得意なんでね、三秒近く触ってれば大体分かる

「それは？」

「あのカメラに入ってたメモリーチップ、画像の保存がここにされるだけで実際見るだけならカメラから抜かれても平気な物もあるんだよね…但し画像の取り出しはできないけど」

「成程！流石ユキサダさんです！そのチップは壊すんですか？」



「甘いなあイヴ、ああ言う奴のこう言った物つてのは…案外楽しいモノが入ってたりするんだよ」

翌日、放課後

事務所のパソコンを使っているといくと許可を貰ったので早速始めるか

専用のチップ挿入機に入れ、パソコンへ繋げ画像を読み込む

因みに周りにはパスパレの皆が居る、何せレッススが終わってスグだからな

「さてさて、お宝拝見と行きましょうか」

「何だか楽しそうに見えるのだけれど？」

「実際のところ、コイツから色々と解決に繋がる物が出てくると見てるからな」

画面にはパスワードを入力して下さいの文字が出てくる

高々八桁のパスワードを解析するのに三十秒も要らない、十五秒位で終わる

パスワードを打ち込み、五回目辺りでヒットする

「…あれ？何で幸貞君パスワード分かるの？」

「パスワード解析つてのには色々とコツがあるんだよ、覚えれば誰でも簡単に解けるよ  
うになる」

「恐過ぎるわよそれ」

「御安心を女王様、正直この内容を公言した所で理解できる人間なんて居ないでしょう  
から」

「……本当に何なのかしら貴方」

「酷い言われようだな全く」

そんなことを言っていると、画像の読み込みが終わり画面一面に写真が大量に出てく  
る

「コイツはとんだ収穫だな」

「な、何これ…」

「イヴちゃんは向こうに行つてましようね」

「え？え？ち、チサトさん？」

「最低ツスね、人として」

そこにあつたのは、明らかにプライベートのイヴを隠し撮りした写真が大量に出てきたのだ

間一髪で女王様がイヴを向こう側に連れて行つてくれた、無垢な子にこれは悪影響だわな

パパラッチ兼ストーカーつて訳か……まあ予想は付いてたけど

「こんなもの早く消去するべきツス！」

「いやいや、そんな勿体無いことしないよ……活用出来るものは枯れ果てるまで使わなきゃ損だろ」

「……何をする気かしら貴方？」

「こんな面白い材料が揃つておいて揺すらない方が可笑しいだろ」

お楽しみみの時間はこれからだぜ……？まだまだこんなもん序の口だろ

「……幸貞君、貴方今結構悪い顔してるわよ」

「ん？これは失礼」

という事で、今日もイヴと帰ることになった

と言うかまだ柿谷さんは寝込んでいるらしい、お見舞いとか行った方がいいのかな？  
あまり病人の所へドカドカと行くのは良くないと思ってるんだが

「お、お前！」

「あん？ああ、お前か…また会うとは奇遇だな」

「俺のカメラに入ってたメモリーチップを返せ！」

「さあて、何の事だかな」

「と、惚けるな！」

「そうそう、話は変わるんだがこの近くで偶々偶然にもカメラのメモリーチップを拾ってなあ…そつから面白いモンが大量に出てきたんだよ」

コピーした写真を数枚、男に見せつけるように取り出す

するとみるみる内に男の顔は青褪めていく

「お、お前！その写真…まさか！」

「おや？まさかこの写真に見覚えがあるか？若しかして道端に落ちていたあのメモリーチップは貴方ので？」

「い、あ……ぐつ……！」

この場合、はいと肯定することもいいえと否定する事も出来ない

YESの場合、この写真を撮ったのが自分だと言う事になり即刻ストーカーでお縄を

頂戴させられる

NOの場合、メモリーチップは返つて来ずデータは相手の手元：そして写真の事について調べられたら時間は掛かるにしろ何れお縄を頂戴させられる事になる

さあ、君ならどうするかな？

「お、俺は『鬼牆組』の奴と知り合いなんだぞ！い、今ここで俺が電話すればいつでも呼べる……！」

「咄嗟の言い訳にしては苦しいにも程があるな、下らない」

「へ、へへへ……強がつてられるのも今の内だぞ！」

「そこまで言うなら今から確認取ってみるか」

「へ？」

携帯を取り出し電話をかける、数コール後にあの人電話をした

「もしもしおヤッさん、今暇？ちよつとおヤッさんの組に知り合いがいるだのと豪語してる奴が居るから確認して欲しくて……悪いな、場所は住宅街に入る前の細道だ」

数分後

黒塗りの高級車（笑）が到着した

中から厳ついオッサン共が数人降りてきた、そして後ろのドアを開けるとサングラスに黒スーツと激厳つい御粧ししたおヤッさんが降りてきた

「よう、久し振りだな幸貞」

「悪いなおヤツさん、突然呼び出しちまって…予定は平気だったのか？」

「ああ、あんな会合抜け出してきても問題ねえよ」

会合やってたのかよ、それ抜け出して来るって駄目じゃね？

はい、皆様…お名前からお察しかもしれんが鬼牆組組長こと鬼牆玄四郎さんです

後付けが過ぎるって？何言ってるやがる、俺は一言もおヤツさんが893じゃ無いなんて言っていないぞ

そこ、言い訳とか言わない

「そうそう、この中年知ってるか？」

「ん〜？俺は知らねえが…お前から知ってるか？」

「あ！そいつ多分俺の下にいる野郎がカメラ仲間って言ってる奴ですぜ！」

「下の下じゃねえかよ、よくそんなんで豪語出来たな」

「…おっ!?ア、アンタ若しかして若宮イヴちゃんで!？」

「ひっ!…は、はいそうです」

突然の事で咄嗟に俺の背後へ隠れるイヴ、厳つい顔してるんだか少しは控えろっての

「おいタニ、怖い顔してんだから大声出して近付くなよ」

「あつ…す、すまんな嬢ちゃん…と言うか坊ちゃんパスパレと知り合いだったんだな」

「ああ、まあそうだよ……ふう、さて……取り敢えず人さまに迷惑かけたんだ、落し前は付けないやならねえよな？」

俺がそう言うと、他の鬼牆組のヤツさん達が中年の両腕を掴み取り押さえる

「まあ一発は確定でいいよなあ？」

「おう幸貞！一発キツいのいったれ！」

「やっちまえ坊ちゃん！」

「いけ行けー！」

止めろお前ら、野次を飛ばすんじゃない

指の関節をゴキツと一鳴らしする……そして思いつ切り中年の左頬へ拳を減り込ませる

鈍い音を発しながら中年は宙を舞った

## 21話

殴り飛ばした中年は鬼牆組のヤツさん達に組まで連れていかれるそうだ

最早俺の管轄外だからどうなろうと知った話じゃない、因みに組総出でパスパレファ  
ンである

さつきも

「いやー、やっぱ間近で見るイヴちゃんはクツソ可愛ええわあ」

「そう言えばタニはイヴ推しだったな」

「そうですぜ坊ちゃん」

「何言つてやがるオメエ、日菜ちゃんが一番に決まっとるやろが」

「アアん!?!もっぺん言ってみい!!」

「あの天真爛漫系の元気っ子な日菜ちゃんが一番言うとんじやワレエ!!」

「うるせえぞテメエら!!ドジっ娘でポジティブ思考の明るい彩ちゃんこそが一番だアホ  
ンダラ共!!」

「いやこれは頭相手でもコレだけは譲れねえですぜ!清楚の中にも醸し出される女王基  
質を持つ千聖様こそが一番でえ!!」



「馬鹿言え！麻弥ちゃんこそ一番だ!!隠れ巨乳であのフへへ笑いが堪らねえだろうが!!  
なあ坊ちゃん!」

「知るか、組ん中で小競り合いを起こすなお前ら…あと此処は住宅街に近いから余り大  
声出すな」

女王様だけ様付けなのは少し笑えたが、まあ見ての通りである

おヤッさんですら丸山先輩ファンなんだからもうしようがないよね?

中年?その後キツチリ組まで護送されましたよ、嫌な護送だねえ

翌日、柿谷さんが復活した様で

「幸貞君ほんつとおにありがとおお!!!」

「いえお気になさらず、体調が戻って何よりです」

「何だか私の居ない間に問題まで解決してくれたらしくて本当に頭が上がりません!!  
本当にありがとうございます!!」

と、感謝の言葉と高級菓子折りを貰った  
家かえって華蓮、晶奈と食べるか

それから数日が経ち、ゴールデンウィークの到来である  
と言っても特にする事も無いので家でダラダラしている

「あー…：そう言えばクソ親父と母さん帰ってくるんだっけ？」

「そうよ、まあ何日に帰ってくるか聞いてないけど」

「そうなんか、まあ適当に待ってればそのうち帰って「ガチャ！」来るだろ…：」

「来たね」

「噂をすると何とやら…：だな」

玄関の鍵が開く音が聞こえたので向かう、一番に晶奈が入ってきた

「どこ行つてたんだよ晶奈」

「んー？お父さんとお母さんに迎えに来てつて言われたから行つてた」

「…そうかい」

なら全員に連絡を寄越せよ、今日帰るつてことぐらい

次に母さんが入つてきた

「ただいま、久し振りね貴方達」

「ああ、お帰り母さん」

「お帰り、お母さん」

さて、準備するか…：ドアの近くまで行く

体を大きく後へ捻る、足…腰…胴体…肩…腕…拳の順に力を移動させながら捻つた体を戻す勢いで拳を突き出す

「やあ！ただいま我が愛娘と愛息k「いつペン氏んて来い」うべらあ!」

先日中年に食らわせた殴りと同じだ、我が母直伝『全力<sup>フツバなし</sup>殴殺』だ

「あらあら、また一段とキレが増したわね幸貞」

「そりや母さんとは違つて男だから、筋肉の付き方は違うさ」

「それもそうね…秋人さん、いつまでも伸びてないで早く入りなさい」

「す、涼寧…私の心配はしてくれないのかね…？」

「秋人さんより子供達の方が大切です」

「わお辛辣う、流石我が母」

では紹介しておこう

導寺峠 あきひと 秋人、俺の親父である……この人も昔からやらずに出来る天才だったらしい

今はセールスマンとして各地を飛び回っており、一昨年辺りから海外にも行くようになった

何度か会社側から個人経営した方がいいんじゃない？と言われたらしいが『面倒臭いんで』の一言で一脚したらしい

導寺峠 すずね 涼寧、こっちは母さん

常に無表情、俺でさえ感情を読むのが難しい……簡単に言えば至極淡々としている

母さんは華蓮が受け継いだ努力の天才、凡百事柄に対して天才を努力のみで打ちのめす人だ……因みにそれを嬉々としてやる辺りは俺が引き継いだみたいだな

そしてこの人は専業主婦だ、今は忙しい親父の為に一緒について行ってサポートをしている

そこら辺を見ると矢張り母さんも親父に惚れてんだなあ……と、思う

「うう、久し振りに会って早々に息子に殴り飛ばされるとは……父さん幸貞に何かしたか？」

「今アリアが日本にいるんだよ……しかもこの街に、確かに許嫁を決めるのは親の勝手だが俺に何の報告も無し母さんへの相談も無しに……てのを思い出して腹が立った」

「おお、アリアちゃんも日本に越してきたのか……いやでもあの時は酒も進んでアリアちゃんのお父さんとも話が弾んでしまつてね？悪いとは思つてるよ」

「おう、もういつぱん殴らせろや」

「止めて！暴力反対!!」

「酒に飲まれた挙句の果てに酔つた勢いで許嫁か、いい度胸してんじやねえかああ？」

「いやああ息子がグレた！華蓮！晶奈！助けてくれ！」

「自業自得、甘んじて受けなさい」

「頑張れくお父さん」

「娘達も冷たい!!す、涼寧！君は……」

「関節までなら許しますよ幸貞、それ以上は私の仕事です」

「こつちも私の敵なのか!？」

取り敢えず背負投をしておいた、背中からビターンツていくように落とすといたよ

痛そうだね（他人事）

「あ、言うの忘れてたんだけどさ幸貞」

「何?」

「多分その内にあの娘も帰ってくると思うからね」

「それをさつきと言わんかい」

「いやーそれがねえ、折角久し振りに家族が揃うからお前も帰ってきたら？ つて聞いた  
らさつき返信が来てさあ」

うつわ面倒臭い、果てしなく面倒臭いんだけど

実の家族に言う事じゃないがあまり帰って来て欲しくない

「それより幸貞！ 友希那ちゃんやリサちゃんとの仲はどうなんだね!？」

「は？ 別にこれと言って何も無いけど、何を望んでたんだよ」

「何だあゝ詰まらんな、もっと色の付いた話を期待してたんだがなあ」

「逆に考えてみる、俺が色の付いた話をするとか気持ち悪いだろ」

「うわ気持ち悪い」

「無いわゝ」

「何でアンタらが答えんのかね Sisters」

お前ら唯単に言いたいだけだろ絶対

そう言えばさつきリサから連絡入ってたな、確か休み中にフェスへ行こうだとか

そんな気があつたらいいね

「あの子達って昔から幸貞と仲がいいじゃないか、だから少し位進んだ話しの一つでも

あると思ったんだがな」

「はいはいそうかよ」

「幸貞、今日何か食べたいものあるかしら？」

「夕飯？別になんでもいいよ、あれだったら華蓮か晶奈に聞いて」

「そうするわ」

母さんの会話への介入の仕方がピンポイント過ぎて本当に凄いと思う…スナイパーかよ

久方振りに母さんの作る晩御飯を食べた、相も変わらずクソ美味しいことこの上ない「幸貞！久し振りに私と風呂入るか！」

「断る、一人で入って来い」

「辛辣だなあ、まあいいか」

いいなら最初から声を掛けてくるな

まあこうは言っても別に俺は親父の事が嫌いな訳じゃない、ていうか寧ろ感謝してる  
仕送りは毎月三人で使い切れない程の量を送って来るし、こまめに生存連絡はしてく  
れる…まあそうそう死ぬとは思ってないがな

仕送りに関して恐らく、一緒に居てやれないのと母さんまで連れて行ってしまっ  
てるという事について親父なりに申し訳ないと思っ  
ているのだと思う

別にその程度でどうにかなる三人じゃないと親父だつて分かつてると思うが、そこは親の性なんだろう

「ん？L I O Eか、誰からだ？……え、マジか」

どうやら明日もゆっくりは出来なさそうだな

翌日



「ちよつと買物行つてくる」

「行つてらつしやい……あ、序に味噌買つてきてくれるかしら」

「分かつた……そう言えば親父は？」

「まだ寝てると思うわよ、秋人さん休みの日は中々起きないわよ」

そこら辺は俺が引き継いでるのか

さて、取り敢えずスーパーに向かうとしますか

「あれ？幸貞君じゃないか」

「おう陽音、何だお前ここでバイトしてたのか」

スーパーにて商品陳列をしている陽音に遭遇した、制服がよく似合つてるよ男の娘

「うん、結構前から働いてるんだよ」

「そうなのか、俺自身が余りスーパーに行かないからな……知らかつたよ」

「そうなんだ、それで今日は何でスーパーに？」

「ああ、味噌を頼まれてな……あとドクペを一箱」

「ド、ドクターペツパーを？幸貞君好きなの？」

「いや、俺じゃなくて身内がな」

「へえそうなんだ、ちよつと待つて今持つてくるね」

「え、いや悪……い……つて、行つちまつたか」

暫くしてダンボール箱と味噌を持って陽音が帰ってきた

「よくよく考えるとドクペダンボールで置いてる店って全然ないよな、珍しいなあこのスーパー」

「悪いな陽音、にしてもそんな細腕でよく持ってたな」

「あはは、よく言われるけど僕だって男の子なんだよ？それに今は趣味もあつて鍛えてるからね」

そう言つて力瘤を作るジェスチャーをする、あと君は男の子じゃ無くて男の娘な

「そうなのか、その趣味についても今度聞かせてくれよ」

「勿論！じゃあまたね！」

陽音スマイルを貰い店から出る

あんなに輝いた笑顔なんて俺は作れないよ、俺の笑いは殆どが嘲笑だからな

嫌な奴だなあ、自覚あるなら止めろつてね…だがコレがやめられないのが本当の屑なのだよ

「たでーま」

「おかえり、どこ行つてたの？」

「買物、晶奈これ母さん所に持つて行つて」

「はいよ」

晶奈に味噌を手渡す

さてこのダンボールどうしようかな、どこに置いておこう

……まあ取り敢えずは俺の部屋に置いておくとするか

現在正午少し過ぎ、昼飯を食べ終わり部屋でダラダラしてます

因みにお昼はラーメンでした

あ、つぐみちゃんから○INEが

ゴールデンウィーク中にアフグロで出掛けるのか……え？俺も付いてくの？

流石にそれは駄目でしょお：女の子五人の中に男一人はさあ

何かアリアからも来てるし、長期休暇だし新婚旅行ハネムーンでも行こう？

取り敢えずお前一人で逝けと返しておいた

「……そう言えば下が静かだな」

降りてみるとテーブルに置き手紙が

『何かトラブったみたいだから会社で顔出してすぐに済ませてくるね、夕飯までには帰るから』

P. S. 晶奈と華蓮は遊んでくるみたいだよ

B y 父』

左様ですか、お疲れ様ですな…と、インターフォンが鳴った

どうやらご到着の様だな

ドアを開ける

「只今帰りました、お久し振りです兄さん」

「お帰り、優珠<sup>ゆみ</sup>」

何年ぶりかはもう覚えていないが、久方振りに家へ我が妹が帰ってきた

## 22話

導寺峠ゆみ優珠、双子の……いや、三つ子の妹である

容姿は華蓮にとても似ており、これまた華蓮と同じで秀才型

背丈は俺より少し低い程度なので女性の枠で見れば高い方である

この娘は中学を卒業すると同時に親父の元で色々と学ぶ為に高校に進学しなかった、まあ早い話中卒で親父の元に就職した

勿論最初は親父や母さんは意見したが、元々ウチの親達は本人に後悔が無ければいいと思つているので優珠の意思を聞いてスグに引いた

それから一年程経つと優珠は親父と共に各地を飛び回り始めた、そして更にそこから半年程経つた頃には海外にまで着いて行つている事を知った

そこから今日まで時折連絡は来ていたものの、家には帰つて来ない日々が続いた

……と、まあ長々と我が妹について話したが、根本的なコイツが何故その様な行動に至つたのか、その原因と言うか元凶というか

まあ話し方的にお察しで俺ですよ

いや、まあ俺とは言つても優珠が勝手に解釈した所や彼女の意思決定等もあるんだが

な

まあ簡単に言えば……本人曰く『兄さんの為』だそうです

「兄さん、これ私の通帳です」

「え……ああ、そうか………どうしろと?」

「早く受け取って下さい」

「いや何故?」

「好きに使って構わないので、兄さんが持つておいて下さい」

「ええ、そんな事言われても……」

押し付けられてしまったので渋々受け取る、一応中を確認………うつわなあにこれえ

はあスゲエなおい、一般人でこんなに稼げるんだなあ（現実逃避）

「父さんが毎月仕送りをしてると思いますが、それは飽く迄三人で使う用の仕送りですよね?それだともし自分で使いたいお金がある時に好きに出すことができますから、少ないですが私の所から使って下さい」

「少ない?この額が?」

「はい、この程度ならスグに稼げます」

こいつはたまげたなあ……こんなに近くにもアリアみたいなのが居たのか

「そう言えば兄さん、今井さんや湊さんとは相変わらずなんですか？」

「ん？まあそうだな、特にこれと言って無いけど」

「そうですか、それは良かったです」

「え、何で？」

「もし兄さんが墮落しても貰ってくれそうな人達だからです、特に今井さんは面倒まで見てくれそうなので……まあ最終手段は私が面倒を見ますが」

「……あ、そう……て言うか墮落とか絶対しないから」

「それもそうですね」

確かにヒモも悪くは無いと思っただけはいる節があるのは否定出来ない

だが俺の目標である山も谷も無い平坦な人生において、ヒモ生活など言語道断

金は自分で稼ぎ自分で使う、これに限る

「ああそうだ、俺の部屋にドクペ置いてあるんだった」

「えっ？本当ですか？」

「飲むか？まあそもそもお前の為に買ってきたんだけどな」

「飲みます」

明らかにいつもより声のトーンが高くなったな

まあと言っても他人が聞いても分からない位の差だけどね

俺の部屋に到着、ドクペのダンボールを前に起き一本を手渡す

「はい、これね」

「ありがとうございます兄さん」

一本をイツキ飲みました、スツゲエなおい…それ100mlじゃなくて500ml缶だぞ

一本飲み干すと更に次の缶へ手の伸ばす、最終的に五本を飲み干した

「相変わらず好きだなそれ」

「はい、美味しいですから」

「美味しいのかあ、俺にはよく分からんなあ…」

「そうですか？」

「何か色んなモノが混ぜたってごった返してるから味が分からん」

「私はこの位ごった返してる方が落ち着きます」

「…まあ、自分から見た他人の感性なんざ分からないもんだからな」

「そうです、人の心とは常に変わり行くので特定や完全理解など到底不可能なのです」

流石は俺の妹、よく分かっていらっしやる

それが出来たら最早そいつは人間じゃないな、別の生き物だ

「にしても、いつからお前は俺の思考と似るようになったんだか」



「小学生の中学年からです、私は兄さんに教えられて来たと言っても過言では無いと思っと思っています」

「何と悪影響な、飽く迄俺は反面教師の積りでやってたんだがなあ」

「そんな事はありません、兄さんの考え方は人によつては嫌悪感を抱く人も居ますが世の中には必要です」

「それはどうも」

別に洗脳した訳じゃ無いからな？さつきも言ったが俺は飽く迄反面教師の積りでやってた

こんな人間を増やしちやアカンやろ、それに身内だから俺みたいにはなつて欲しくなかつたんだがな

「本当、何でこうなつたかなあ」

「私は後悔してません、寧ろ誇りに思っています」

「そうなつて欲しくなかつたから落ち込んでるんだよ俺は」

さて、そろそろ止めないとドクペを飲むペースがえげつない事になつて来てるんだが何本目だよそれ、体壊しそうだから兄さん心配

「なあ優珠、そろそろドクペ飲むの終わりにしたらどうだ？」

「え？……あつ……ご、ごめんなさい兄さん」

「いやまあ飲んでもらう為に買ったから別に良いんだけどさ、今飲み切らなくてもいいんじゃないか？」

「は、はい………わ、分かってます」

本当にドクペ好きなのね貴女

家じゃ優珠しかドクペ飲まないし問題は無いけどね

「さて、これから何するか………ん？リサからか………え」

次の瞬間、家のインターフォンが鳴った

マジかよ……今LINEでリサから『暇だから家行くね！』と来たのだが、まさかメッセを見て三秒で来るとは思ってたよ

「誰かお客様ですか？」

「いや、リサだよ」

「そうですか、なら私は自分の部屋に移動します」

「別にいいぞ気なんぞ使わなくて、それにお前も久方振りにあいさつしておけ」

「はい、わかりました」

「わあ！優珠ちゃん久し振り〜！」

「はい、御無沙汰しております」

「何年ぶりだろうね！あの頃と比べて大分綺麗になったねえ〜」

「ありがとうございます、今井さんも相変わらずお綺麗ですね」

「ホント〜！ありがとうございます！」

女子トークに花が咲いている様なので俺は暫く撤退しようかな

じゃあ取り敢えずもう少しばかりアイツの昔話に付き合ってくれたまえ諸君

小学生の頃…華蓮や晶奈は様々な習い事をしていて、今考えると本当に化物なんじゃないかと思う程の量だった

それでもつて親父や母さんは仕事で保々家にいない…そうなると必然的に習い事が姉達より少ない俺が優珠の相手をする事になるのは当然だ

昔から俺は今の考え方を持つてはいたが、今より捻くれては無かった

だがまあ普通の人から見たら子供の癖に奇妙な性格だと気味悪がられる事は目に見えるので妹はそうならないよう反面教師の様に俺の考え方を教えていた

まあ結果的にそれが駄目だったみたいですね、中学年辺りから保々俺の思想と同じ物を抱くようになっていたよ

「お兄ちゃんの考え方は社会的に見て受け入れてくれる人は少ないと思う、でも私はその考え方が好き」

「お、おう…：そうか」

もうこんな反応しか出来ないよね、これ小学五年生が言ってるんだぜ？信じられるか？

と、最初はこんな感じだったんだが…：何時からか俺の思想を抱くのではなく俺の思想を叶える為の思想を抱くようになっていた

まあ簡単に言えば俺の夢を叶えることが夢…：みたいな感じだな

あと気付いたことは、優珠が俺に抱く感情は尊敬や崇拜に近いことが分かった

いつからこんな事になったんだろう…：自分で原因が分かってない以上、下手に手出しは出来ないから見守るしか選択肢は無いんだよね

「幸貞…？何ボーツとしてるの？」

「ああ悪い、女子トークの邪魔しないようにしてたらつい考え込んでな」

「あ、ゴメンね？ 私達ばかり話してたみたいで」

「気にするな、久しぶりに会ってるんだから好きなだけ話しとけ」

寝ようかな、アイマスクとかあれば良いんだけど…

「兄さん、アイマスクです」

「え、あ…おう、ありがとう」

何で俺が欲しいと思った物が出てきたんだろうか…偶然だよな？て言うか偶然で

あってくれ頼むから

取り敢えず貰ったし付けて夢へ落ちるとするか

私は、兄さんの思想や歩もうとする人生：それら全ての支えになりたい

私は家族の事が好きだ：それは殆どの人が想っている事だと思う

母さんも父さんも、華蓮姉さんもアキ姉さんも：皆好きだ

でも、私が想う兄さんへ対しての『好き』という感情は：何か違うような気がする

勿論それは恋愛感情で無い：確かに兄さんは魅力的な男性ではあるけど血の繋がった兄に対して恋愛感情を抱く程、私はアブノーマルでは無いと自負している

これは……：そう、尊敬なんだと思う

小さい頃からずっと兄さんは自分の考え方について教えてくれた：しかし、兄さんはそれらの考え方をしては駄目だと執拗く私に言った

何故だか私には分からなかった、小さい私にはその考え方こそが生きる道においては最善なのではないのかと思っていた

だが歳を重ねるに連れて、その意味を理解した…それと同時に私はその考え方が好きだと言う想いがより一層強くなった

だが、考えてみて欲しい…中学二年生がそんな事を考えていると思うと、気味が悪くてしようがないだろう

それに加え、私は華蓮姉さんと同じでやれば何でもできてしまった…それらも含めて私は中学二年の頃、主に同級生の女子達から嫌がらせを受けていた

嫉妬や渴望等の様々な感情があったのだろう

やられる事と言えば、態と聞こえるように悪口を言ったり…すれ違いざまに肩を当てられたり等実に幼稚なものばかりだったので、そこまで気にはしていなかった

だがある日

「お前、前から思ってたけどムカつくんだよ!」

「少し頭と顔が良いからって調子乗りやがって、ウザイんだよ!」

学校の帰り道、質の悪い連中に絡まれてしまったのだ

数人の女子とガラの悪い男達が私の前に立っていた

「…はあ、帰りたいのだけけど…どいてくれる?」

「ああ!今の状況分かってんのかよお前!」

「帰れると思ってるの?頭湧いてるんじゃないの!」

「湧いてるのは貴女達でしょう、幼稚な事しか出来ないと思えば今度は逆上ですか…呆れて物も言えませんか」

「お、お前…今更後悔すんなよ！やっちゃって！」

ガラの悪い男達がニヤニヤと私の方へ近づいて来る、猪里なれば母さん直伝の護身術を使えばどうにでもなるのだが…生憎私は制服だった

何か問題でも起こせば彼女達が学校側に言いかねない

「何してんだ優珠」

「…兄さん」

そこへ、偶々帰りの兄さんが通りかかった



## 23話

偶然にも学校帰りの兄と出会った

「何してんだ優珠」

「…兄さん」

「あん？誰だテ…：ゆ、幸貞さん!!チーッス!!」

「「こんちわッス!!」」

突然のこと過ぎて私は唾然とした、それは同級生の女子達も同じだった  
複数人いたガラの悪い男達が一齐に兄さんへ向かって頭を下げたのだ

「あ?…ああ、お前らか…：人様の妹に何か用か?」

「え!!この子幸貞さんの妹さんだったんですか!こいつは失礼しました!!」

「声デケエよ、住宅街近いんだからあんまり大声出すな」

「はい!すいません!!」

完全に舎弟のような扱いになっっているガラの悪い男…何故兄さんがこんな奴らと知り合いなのか不思議でたまらなかった

「ちよ、ちよつと!早くやっちゃいなさいよアンタ達!」

「いや無理、この人と喧嘩するとか地雷が大量に埋まった大地に走り出すのと変わりねえ」

「はあ!? 約束が違うじゃんか!」

「だから金は要らねえよ」

「そう言う問題じゃ…!」

「……成程、お前ら雇われたのか…いくら貰った?」

「一万やるからムカつく女を痛めつけてくれて、その後は好きにしていって言われました」

「痛めつけるねえ…良かったなお前ら、ウチの妹はお前らじゃ倒せないな」

「マジっすか!? 流石は幸貞さんの妹さんツスね!」

「最早これでは男達がどちらの味方なのか分からない、と言うか完全に手懐けられてい

る  
「まあ大方…嫉妬やら羨望、渴望を抱いてイライラしたから優珠に突っかかってんだろ  
うな」

「う、煩い! ソイツが調子乗ってんのが癪に障るんだよ!」

「お前らは何を思っこの下らない世界を生きてるんだ? 他人を羨む為か? 他人に嫉妬する為か? そんな生き方しか出来ないなら早々に今持つてる夢を捨てた方がいいな、ま

あ持つてるかすら怪しいけど」

「は、はあ？何言つてんだアンタ？」

「才能ある者に嫉妬するのも羨むのも構わない、だが所詮それをする奴等つてのは決まって自分の限界を決めつけてる者達だ：『私はここ迄努力した、でもアイツは天才だから追いつかない』、こんなものは言い訳に過ぎない」

「ウチらは別に…」

「馬鹿を言え、相手に突つかかりちよつかいを出す時点で羨んでも同然だ：羨むという事はそれを自分が持つていないから羨むんだ：ああそうだ、無能者つてのは何もしい奴のこと指す：出来なくともやる根気がある奴だけが才能を掴むんだ、よく覚えておけ……お前達は見ていて実に下らなく哀れで愚かだ」

「っ………」

「…はあ、じゃあ帰らせてもらうぞ」

兄さんは言いたい事だけ言うのと、私の肩を叩いてから帰路に戻った：多分帰るぞつて意味なんだと思うので兄さんの背中について行く

家までの帰り道、兄さんと私の間には沈黙が続いた……私か耐えきれなくなり兄さんへ話しかける

「に、兄さん……あの、さつきはありがとうございました」

「ん？ああ、気にすんな…唯の気紛れだ」

「……兄さんは、ああいう事は無かったですか？」

「さあね、あつたのかもしれないし無かつたのかもしれない…一々あんな下らない事の相手をしてやれる程俺は暇じゃないし優しくない」

「…やっぱり、兄さんは私の目標です」

「止めるよマジで洒落にならないから…本当にもう何で君はそうなつちやつたかなあ」

でも私じゃ兄さんの様に自分の道だけを貫く事は恐らく出来ない、兄さん程肝が据わっていないから

兄さんに助けてもらった時、不意に疑問に思った：昔の兄さんはもつと表情が豊かだった気がするのだ

いやまあ昔から無表情で何を考えているか分からない人ではあったが、それでも昔の方がまだ感情が出ていた……………筈だ

いやそうだ、そうに違いない

まあいい、その事が少し気になりアキ姉さんや華蓮姉さんに聞いてみる事にした

「あ、あ……うーんとね、実の所私達も分からないんだよね」

「切っ掛けと言つて良いのか分からないけど、ある日突然全ての習い事を辞めるって言つた時からかしら」

「え？そんなんですか？」

「そうなんだよね、理由は一切話してくれないし何があつたかも話してくれなくて……」

「それまで嫌な顔一つせず文句すら言わなかつたから流石に驚いたわ……私達に原因があるんじゃないかって、幸貞自身は強く否定していたけれど」

「あの時……幸貞は何も思つてなかつたなあ、怒りも悲しみも苦しみも……有るべき筈の負の感情が全く無かつた、だから私にもどうしていいか分からなくて」

「……まあ一つ言える事としては、昔の幸貞はもう居ないって事ね」

「多分、なんだけどね……本当に推測でしかないけれど……あの時から幸貞の中で何かが

壊れたんだと思う」

何故私は気付かなかったのか、気付かなかったのか……その自負の念が心の中で渦巻いてどうにかなりそうだった

私は、誰よりも兄さんの理解者でありたかった……誰よりも兄さんの考え方が好きだったのに……何故、なぜ何故ナゼ何故何故何故なぜなぜ何故ナゼナゼ何故!!!

………失礼、少し取り乱しました

だから私は、もう兄さんが自分を……自分の心を壊さないで済むようにしなきゃいけない

二度と兄さんにそんな思いはさせない、だから私は……私は兄さんの為に思想を抱く兄さんの思い描く思想の為に、私は私の思想を抱き続ける………全ては兄さんの為に

ふう、よく寝たな…今何時だろう

アイマスクを外し時計を見る…5時か、結構寝たな

「おっはよ〜幸貞」

「ようリサ、まだ居たのか」

「何よくその言い方、可愛い幼馴染がまだ帰ってないんだから感謝しなさい」

「へえへえ感謝してますとも、そう言えば優珠はどうした？」

「お茶を入れに行ってるよ」

するとドアがガチャッと開き、お盆にコップを三つのせて入ってきた

「おはようございます兄さん、そろそろ起きる頃だと思ったので兄さんの分も入れてきました」

「お、おお…ありがとう」

何で分かんのか？人の意識が覚醒するのって完全ランダムなんだけど、なんで特定出来るんですかね

「……そろそろアイツらも帰ってくるか」

「はい、アキ姉さんと華蓮姉さんは五時半には帰ってくるそうです」

「そうか……どうだりサ、夕飯食ってくか？」

「え？ いいの？」

「一人分増やすのにそこまで時間も掛からないし、時間も時間だろ」

「じゃあお言葉に甘えようかな」

てな訳で今夜の夕食はりサと共に食べました……それ以外に特に無かったんだよ

翌日

暇だから羽沢珈琲店に行く事にした、そつたら優珠もついて行きたいとの事なのでつぐみちゃんに紹介しておこうかな

「いらつしやいませ……あつ！ 幸貞さん！」

「お久し振り、つぐみちゃん」

「はじめまして、妹の優珠と言います」

「あつ、羽沢つぐみです……妹さんいらつしやったんですね」

「まあ長期休暇中だから帰ってきてる感じかな」

「普段は何を？」

「父の元で手伝いや、最近では自ら売り込み等に行っています」



「えっ!?もう働いてるんですか!？」

待って、自ら売り込みに行ってるのは俺も初耳だぞ

親父の元で助手をやっているとしか聞いてないぞ

取り敢えず席に案内された

「兄がお世話になってます」

「いえいえ!こちらこそ助けてもらってばかりです!」

お前は俺の母親か、まあ確かにうちの母親はそう言った事は一切しないけどさ

「ああそうだ、前につぐみちゃんから誘ってもらった出掛けることだけどさ…流石に俺は遠慮しておくよ」

「そうですか…残念です」

「ごめんね、でも女子高生五人の中に一人男が混ざるのもどうかと思ってるね」

「そうですよね…また今度誘いますね!」

「ああ、宜しくね」

取り敢えず珈琲を注文した

「……いい人ですね、羽沢さん」

「ん?ああ、そうだな…と言うかスツゲエいい娘だよ」

「ふむ、兄さんがそこまで評価するとは…メモに加えておきましょう」

何かチラツと『兄さんが墮落した時の駆け込み口』とかいう題名の欄に羽沢つぐみと書き加えられていた

その他に今井と見えた、リサも入ってるのか……つーか心配しなくても俺は墮落しやしないからな

「お待たせしましたー！」

「お、イヴか」

「あー！ユキサダさん！この前はどうもありがとうございますとござました！」

「ああ、そういやそんな事あったな……そうだ、タニからサイン頼まれてたんだが……えーつと……あつた、この色紙に書いてやってくれないか？」

「その位お易い御用です！」

タニが泣いて喜ぶな、家宝とか言つて崇めそうだけど……これ以上は怖いから想像しないでおこうか

「はじめまして、妹の優珠と申します」

「はじめまして！若宮イヴです！ユキサダさんには妹さんがいたんですね」

「ああ、まあな」

イヴも戻つていき、再び優珠と二人の時間がやって来た

「……今のつてパステルパレットの方ですよね」

「何だ、知ってたのか」

「はい、ウチの会社でもフアンの方は多いですから」

「はーん、そうなのか…パスパレもそこまで広がっているとは、恐れ入ったな」

「兄さん知り合いなんですか？」

「まあ、ウチの学校に二人程メンバーの方が居ますからねえ」

「そうなんですか…それは是非会ってみたいですね」

おっと、多分これはまた『兄さんが墮落した（ry）』の欄に追加出来る人材を探しに行く目だぞお

「ま、まあ…また何時かな」

「よろしくお願いします」

一番有力なのは女王様だけど…あの人だと飼い殺される未来しか見えないから断固としてお断りしたい

そんなのフアンの方々喜んで譲るよ

「そう言えば優珠、この休み中は家に居るのか？」

「はい、休みが終わればまた社宅の方に戻ります」

「そうか…お前にとって、人生ってなんだね」

「私にとっての人生は私の歩むべき道であり、私の思想を叶える為の道のりです…何と

言われようと変える積もりはない道です」

「……はあ、そうかい……べつに文句を言うつもりはねえよ」

たとえ言ったところでこの娘が道を変えとは思えない、それは俺自身がそうである様に優珠もそうだ

自身の性格が分かっているからこそ、一番俺の影響を受けている優珠の性格もよく分かる

だから、俺はもう何も言わない……俺の考え方に感化された時点で最早自分の人生では無い……せめて少しでも自分の納得いく道を歩んで欲しい、兄として

## 24話

さて、長かった長期休暇も終わりに近づいてきたな……巫山戯んなよこん畜生

はあ、まあいい……長期休暇の終わりも近づいたという事なのでcircleでは『最後くらい我を忘れて弾けちゃおう!』というキャッチコピーで様々なバンドを呼び、毎日の様にライブをしていた……正直よく集まるなあという感想がある

勿論、中にはあの娘達も混ざっている……というか全員が皆勤賞である

若いつて素晴らしい

「幸貞くん!アンプのメンテナンス頼める?」

「了解しました」

そんな訳だ、俺もcircleで仕事をしている

「スタッフさん、俺のエレキが調子悪いんだが……見といてくれるか?」

「ああ、そこに置いといて下さい」

「スタッフ君!私のベース見といてくれない!」

「はいはい、ちよつと待って下さいね」

お前ら……せめて自分の楽器くらい自分で見てくれよ、何で俺の仕事がこんなに増えて

んだよ全く

しかも殆どの人達は一度ここで楽器をメンテしてあげた人達なんだよね

「ゆ、幸貞：随分大変そうだね」

「沙綾か、何故だか皆俺に楽器のメンテを頼みに来るからな」

「そりゃあ幸貞のメンテナンスした楽器を一度でも使ったらねえ、自分のメンテナンスじゃ物足りなくなるよ」

「そいつは嬉しい事だが有難迷惑な話だ」

まあこの程度、数十分で終わるから何の問題も無いけどね……いや、俺の仕事が増えるから止めてくれると嬉しいな

「そーいや、ポピパの方はいいのか？」

「うん、今休憩中だし：出番も少し先だからね」

「へえ：今日だけで何回出るんだよ」

「確か三回か四回位かな、場合によっては増えるかもしれないけど」

「一日中ライブやってるからなあ、そりゃ回すのも大変になるか」

「まあでも、何回出てもお客さん達は大きい歓声で出迎えてくれるから楽しいよ」

満面の笑みでそう言われてしまった

いやあ眩しいっすねえ沙綾さん、俺はそんな事言うの無理だなあ

「じゃあ私はそろそろ戻るね、お仕事頑張つてね」

「ああ、お前も無理すんなよ」

沙綾の背中を見送り、再び作業へと戻る

そう言えば優珠もそろそろ社宅に戻るんだよなあ……今度会えるのはいつか分からないし、何かしてやりたいがなあ

て言うか社宅つて……アイツまだ高一なんだよなあ、まあそこら辺はもう考えてもしようが無いんだよね

「やつほー！久し振りね幸貞！」

「ああ、こころ嬢か……何か用か？」

「いえ別に！そこに幸貞が見えたから声を掛けてみただけよ！」

「左様ですか、ハロハピの方はいいのかね」

「ええ！まだ出番は先だから大丈夫よ！」

「へえ、そうか……で、いつまで居る気だ」

「え？そうね……分らないわ！」

面倒くせえコイツ……いや失礼、実際そうだったからつい本音が

まあ作業も終わったから暇つちや暇なんだけどぎ

「あーいたこころ、そろそろ始まるから準備するよ」

「あら美咲！もうそんな時間だったかしら？」

「忘れないでよもう…すみません幸貞さん、ところが邪魔とかしませんでしたか？」

「いや大丈夫だよ、やるべき作業も終わってたから」

「本当にすみません、ほら行くよこころ」

「分かったわ！じゃあまたね幸貞！」

異空間が去って行くなあ

あの娘は天真爛漫な性格さえどうにかなれば唯の美少女なのに、それに人の気持ちにも気が付きやすいと言う特技を持つてるんだから尚のこといい美少女なのに

まあ、あの天真爛漫なのがいい所なんだけどね

「はあ、さて次は何を…ん？優珠からか」

え、今から来るの？しかも晶奈と華蓮も来るってか、何しに来るんだよ

忙しいから勘弁してくれないかな

「やつほー幸貞ー、お疲れ様」

「ようりサ、さつきステージに出てたみたいだな」

「あ、見てたの？」

「いや、友希那の声が聞こえてきたんでな…生憎、見に行ける程の暇は無かったんでな」

「そんなに忙しかったんだ、本当にお疲れ様」



「辛い有難く貰っておくよ」

「受付にいらっしゃるって事は大方済んだの？」

「暇になっただけだ、その内また楽器メンテしてくれやらとゾロゾロ来るだろ」

「あはは、人気者ですなあ幸貞君」

余り嬉しくはない人気だけだな、こんな人気ならいくらでも譲ってやる

「それで、君の調子はどんなんだねリサ」

「アタシ？アタシは絶好調だよ！」

「そりや良かったよ……にしても、相変わらず友希那のファンは多いな」

「それはウチの友希那ですから！まあ薫のファンも凄いいけどね」

「アレは比べちゃいけない、熱狂度が段違い過ぎる」

「だよねー」

どんなもんかって？そりや凄いよおあの娘達、黄色い声援が度を過ぎて黄金色に輝いてるよね

その内、声でレーザービームでも出せるんじゃないかな

結論、とんでもねえ

「じゃあアタシは戻るねー」

「ああ、しっかり身体休めとけ」

「ありがとうね」

さて……そろそろウチの連中が来ると思うが、一体何をしに来るんだろうかね

「来ましたよ兄さん」

「うおお、ビックリさせんなよ」

「うわあく本当に幸貞がバイトしてる〜」

「あら、ビックリね」

「何だテメエら、おちよくりに来たなら帰れ」

「あははは冗談冗談、このイベントって自由参加なんでしょ？だからほら」

まあ、見えてはいたんだけどね……敢えてスルーしてた

華蓮はギターケース、晶奈はベースケースを担いで来ていた

「参加しに来たのか、なら参加者名簿に名前書け……順番は今現在で最後に出るバンドの次だ」

「りようかい」

「……………おい待てテメエ、なんで俺の名前書いてんだよ」

「ん？そりゃあ幸貞も出るからに決まってるじゃん」

「はあ？忙しいんだから勘弁してくれよ」

「でもドラム居ないと盛り上がり欠けるでしょ？あ、キーボードは優珠ちゃんがやる

から」

「いやそれはどうでもいいんだよ、何で俺が出なきゃいけないんだよ」

「ほら、優珠ちゃんだつてそろそろ戻っちゃうんだし…最後くらい一緒にね？」

なんだとこの野郎、狙つて言つてやがるなコイツめ…：はあ、仕方ねえな

て言うか、俺がドラムなのは確定なのね

「まりなさん、何か俺も出る事になつたんで外していいですか？」

「幸貞君出るの?! いいよいいよ! ここは私にドーンツと任せて楽しんできてね!」

天使だ、天使が居るぞここに…もー本当に天使過ぎるやろこの人お

「許可取れたよ」

「おっけい、じゃあ準備しちやおうよ」

「はいはい分かりましたよ」

「幸貞、これ貴方のステイックね」

「用意周到なこつちやな、最初からやらせる気満々かよ」

「当たり前じゃない、初めから貴方が叩く前提で話を進めてたでしょう」

「いやまあそうだけどさ」

「兄さん、ここのキーボードってどんな物ですか？」

「裏方に置いてあるから後で見てこい」

「分かりました」

はあ、面倒臭いなあ……まあ、頑張るか

「そーいや何やるの?」

「ん? 決めてないよ」

「はあ? じゃあどうするんだよ」

「その時に私が気分を決める!」

「巫山戯んな」

「ええーいいでしよ別にい、ボーカルは私なんだし私がきめていいでしょうよお」

「だからお前と演奏するのは面倒臭いんだよ、お前の気紛れでやられるのが一番面倒なの(こさ)あ」

「諦めなさい幸貞、これもまた運命よ」

「厨二臭い台詞で丸めようとするな」

「兄さん、姉さん達…そろそろ出番みたいですよ」

「じゃあパーツと行っちゃいませうか！」

「はあ、これだから馬鹿の相手は疲れるんだよ」

「あの人は馬鹿じゃなくて一応天才よ」

そんな事は知つてらア、俺が言つてんのは人間性的に馬鹿なんだよつて話だ

天才は天才でも、人間性が馬鹿だと話にならない…まあ晶奈はそこまで酷いとは思つて無いけどさ

て言うか一応つて……

「ヤッホー皆！私の事はアキちゃんつて呼んでね！じゃあ一曲目行っちゃおうか！to

Labyrinth！」

またそう言うマニアックな曲を選ぶ、まあ俺も好きだからいいんだけどさあ

この後、熱狂し過ぎて長い時間俺達が演奏する事になってしまった

さて…このままじゃ尺に収まらないからお待ちかねダイジェストで行こうか  
濡れずの願いゴト

S I G N A L R O M A N C E

朧

証

M A Z E

妖仙ドライブ

R E D A N G E L

想いが歴史に変わる時

ここでボーカル交代

「私ちよつと喉疲れたから交代するねー、華蓮ちゃんよろしくっ！」

「はいはい交代しました、取り敢えずノンストップで行きますよ皆様」

瞬間エヴァーラスティング

艶でや雲海花嵐

F A K E T H E S T R O B O L I G H T S

L O S T M Y W A Y

L O S T I N T H E A B Y S S

G o l d r o p

M y D r e a m e r

P u p p e t i n t h e d a r k

t a k e a s h o t

— U K I Y O —

明らかに華蓮が歌ってる時の方が多いなおい：まあ多分、本人も歌ってて楽しくなつてきてんだろうね

でもぶっ続けてドラムを叩かされてるこっちの身にもなれ、しかも何が来るか分からないから構えてなきやいけねえんだぞ

「はあ”くづがれだ」

「お疲れ様です、兄さん」

「優珠もお疲れ…やっぱりアイツらには付いてけねえわ」

「姉さん達は特別ですからね」

「本当、天才だよねえあの人達」

若干一名に関しては人間性を置いといての話だがな、執拗い様だが何度も言うからな

「もう流石に懲り懲りだな」

「…でも私は、兄さんと思いい出が残せたので良かったです」

「らしくねえ発言が聞こえたなあ、まあどう思おうがお前の勝手だがな」

「フフツ、照れ隠しですか兄さん？」

「さあてどうだかね」

さつきから遠巻きにニヤニヤと眺めてる晶奈とリサが凄え腹立つ

華蓮は真顔でこつち見てくるんだが、偶に親指を立ててくるのが腹立つなあ野郎

はあ…いい思い出ねえ、なつてくれたなら嬉しい事だがな

翌日

「じゃあ父さん達はまた行くな、その内休みが取れたらまた帰ってくるから」

「よし、次はドロップキックで御出迎えしてやる」

「止めてくれよ本当!?!やられたら死んじやうからな!?!」



「三人共、何かあったらスグに連絡するのよ」

「まあ連絡しなくてと自分達で解決出来ると思うよ、お母さん達こそ無理しないでね」

「まあ、それもそうね」

「……兄さん、行つてきます」

「ああ、行つてらっしゃい」

そう言つて頭を撫でた……いつ以来だろうか、優珠の頭を撫でてやるのは

あの頃と変わらない程に髪の毛は綺麗だな……

「あーあ行つちやつたあ、これで私達の休みも終わりかあ」

「……そうね、また日常が戻つてくるのね」

「面倒くせえ……学校とか行きたくねえなマジで」

はあ……さて、休みも終わつちまつたなあ

これからまた、いつも通りの日常にシフトチェンジされるのか……取り敢えず頑張ろう

## 25話

長期休暇が終わった……いや、よくよく考えると何故か間の火曜と水曜は学校に行かされたな

その二日間も休みでよくね？ 巫山戯んなよ全く

「おはよー幸貞」

「…ああ、リサか」

「何か元気ないねー、もう今日から学校なんだからシャキツとしなよ」

「学校だから元気無いのに学校だから元気出せとは無理な話だな」

「そんな事言ってる青春無駄にするぞ〜？」

「もう青春は終わってるから問題無い」

「何言ってるの！ まだまだこれからだよ！」

だといいいんだけどな、俺にとつては青春なんてモノに時間を費やすなら自身の道を歩む為に時間を費やす方が効率的だな

「あー、また屁理屈考えてるなあ〜」

「さてどうだろうね、まあ少なくとも共感はしてないな」

「だから彼女とか友達が出来ないんだよ」

「要らない要らない、俺がそんなものを作ったら世界が滅びると思っていよいよ」

「またそう言う事を…」

「ほら、お前はあっちだろ…美少女様が待ってるぞ」

「むう……」

面倒見がいいんだが口煩いお袋みたいになってるな、ウチの母はそう言う事しない人だから新鮮だな

基本的に自分の信じる道を行けて人だし

リサと分かれて学校へ向かう、誰にも鉢合わずに教室へ辿り着けるといいん「幸貞くーん！」

俺は何も見えてないな、うん…ピンク色の頭をした頭の中もピンク色の人なんて見てない見てない

気の所為だ気の所為、だから俺はこのまま教室に向かうぜ

「え!?ま、待ってよ〜!」

「ええい煩い、もう精神的に疲れてるんだから俺に関わるんじゃない」

「酷いよお〜!スグに済む用事だから待っててば〜!」

はあ、仕方が無いので早歩きを止めて振り返る

「貴女からの用事ってのは大概女王様が絡んでるから余り聞きたく無いんですが」

「きよ、今日は千聖ちゃんから頼まれた訳じゃないよ…別の人達から頼まれたけど」

「別の？他にいるパスパレの娘達か？」

「ううん、違うよ」

え？じゃあ誰だ？丸山先輩の知り合いだったら…後は香澄とかだけど、香澄な訳が無いからそこでも言えばいい話

だとしたら一体誰だ？全く分からん

「それでその人達は誰なんですか？」

「えーつとね…秘密！」

「面倒くせえ」

「ねー！私に対して酷すぎるよー！！」

襟を掴み前後に揺らしてくる、だって事実だし

てかこの人めつちやイイ匂いするんだけど、流石はアイドル

「はいはい悪うござんした」

「思ってたなーいー！！絶対思ってたないでしょー！！」

「何ですか今日に限ってこんなに食い付いてくるなんて」

「私だって怒る時は怒るんだよー！！」

それで怒ってるなら可愛いもんだな

ウチの華蓮さんとかキレたらえげつないぜ？一回ナンパを執拗くされた時、ブチギレて回し蹴り顔面に入れてたぞあの人

しかもその後ゴミを見るような蔑みの目で見てから何も言わずに去ってくんだぞ？傍から見るとクツソ怖いわ

「分かりましたから、取り敢えずクラス行かないとチャイム鳴りますよ？」

「むうう…後で覚えておきなよ」

「自分そんなに記憶力は良くないので忘れてるかもしれないですね」

「むうううう!!」

「それではバイなら」

逃げるが勝ち、長期戦は面倒臭いと見た

クラスに着いたから一先ずは俺の勝ちだな…後は撤退戦をどう切り抜けるかだな  
「おはよう幸貞、朝から彼女さんと喧嘩かな？」

「あんな彼女は要らない、貰えるならつぐみちゃんとか花音ちゃん辺りがいいな」

「おお？それは何でかな？」

「楽」

「最低だよ幸貞」

「辛辣だなあ沙綾さんよ」

「いや、当たり前 의견だと思っよ」

左様ですね、ド正論ですわ

まあだから俺は絶対に彼女とか作らない、俺が作りたくないし

授業風景は特に何も無かったから放課後

未だにムスツとした丸山先輩、覚えてたのか：てつきり鳥あてゲフンゲフン、極楽蜻蛉だから忘れてると思ったよ（結局悪口）

「俺が悪いですから、そろそろ機嫌直してください」

「ふんっ、知らないもんだ」

「はいはい機嫌直して下さいねー」

「うにゆううう」

頭を撫でくりまわす、さり気なくその勢いで丸山先輩の髪型をポニーテールへと変える

「あれっ!?!私の髪型変わってない!?!」

「ほう、やっぱりどの髪型も似合いますな」

「うぐっ……ほ、褒めたって許さないんだからね!」

「取り敢えず行くなら早く行きましようよ、その人達も待つてるんじゃないんですか?」

「…何だかスッキリしないけど、分かったよ」

それで向かうはこの前に俺が臨時で働いた丸山先輩の事務所

矢張りそっち関係の人って事だけは当たってるっぽいな

「……つて、ここに来るとよく会いますね…勝山さん」

「君こそ何でそんな頻繁にアイドル事務所に来るのさ、本当になる気無いんだよね？」

「ありませんよ、巡り巡って何故かここに辿り着いてしまうんで」

「もういつそアイドルになりなよ」

「お断りします」

「言うと思った…それで、今日はどんな要件で来たんだい？」

「丸山先輩が俺を呼んでできてくれと誰かに頼まれたらしくて……そーいやあの頭ピンク

は何処に」

「頭ピンクつて…丸山さんなら受付をしに行つたよ、来客証を貰いに行つたんじゃない

かな」

ああ成程、ならせめて一言ぐらい掛けてから行つてくれよ

勝山さんは他の仕事があるとの事で別れた、暫くして丸山先輩が帰ってきた

「幸貞くん、これ持ってますね」

「どっつて」

証明書を首から下げ、また丸山先輩の案内に着いて行く

そして目的地、基案内された場所は練習スタジオ

「若しかしてアイドルですか?」

「そうだよ、二人組のね」

「ふーん、二人組ねえ」

「どうしたの?」

「いや、最近二人組で売れてるアイドルが居たなあって思いまして…顔までは覚えてませんが」

「意外だね、幸貞君がそう言う事に興味持つなんて」

「興味は無いですが、まあ二人だけでよくやってるなどおもいました」

「成程…あ、練習終わったみたいだよ」

との事なのでスタジオの中に入と、丸山先輩はスグに出ていった

中に居たのは茶髪のロングストレートの娘と、黒髪ポニーテールの娘が居た

運動後の息が上がった女の子って可愛いよね、汗もまたアクセントになって…:まあそんな話はいい

取り敢えず今俺の前にいるのは紛れもなく結構な美少女二人だ、正直な話俺はこの娘達が誰なのか分からない



「あつ！幸貞さん！ご無沙汰してます！」

「…お久し振りです」

それでいて向こうは俺に面識があるときたもんだ、こう言った場合が一番厄介だな…  
どう対処するか

「……えつと…若しかして私達の事覚えてないですか？」

「……………あつ、ああ〜」

「やけに長い間ね」

「まあまあ、髪型変わってるんだし気付けなくてもしょうが無いよ」

思い出したわ、あれだこの娘達…原田ちゃんと茅原田ちゃんだ

人の印象って髪型一つでガラッと変わるもんなんだね

「成程、デビューすると同時に髪型を変えたのか」

「そうなんです、泉ちゃんは元々ロングだったからいいんですけど…私なんて昔からポブだったので伸ばすのに苦労しましたよ〜」

「癖毛とかあるからな、ストレートに戻すのにはそれなりに時間は掛かるな」

「そうなんですよね〜」

「……それで、そんな売れっ子の君達が一般人の俺に何の用かね？」

「初めて会った時、私達が二人で成り上がれたら話でも文句でも聞いてやるって言っ

ましたよね」

「なので幸貞さんとお話したいなあ〜って思いました」

お話？ OSHANASHIとかじゃないだろうな、嫌だよそんな何処ぞの白い悪魔みたいな事されたらたまったもんじゃない

「そういや前に柿谷の代理で来た時は君達を見なかったな」

「あはは、お恥ずかしながら私達も忙しくなっちゃってしまっただけでして…あの日からライブが入っちゃって」

「ほお、そりゃ予想以上に随分と売れてるようだな」

「有難い限りです」

「……それで、俺とお話とは一体何なのかね？」

「一度ちゃんと御礼を言いたかったんです」

「御礼？何言ってるんだよ、御礼される事をして無いどころか下手したら恨まれる様な事をしたんだぞ俺は」

「いいえ、貴方からの意見を聞いていなければ今の私達は居ません…確かに最初は腹が立ちましたが、そこから長い間考えた時…初めて貴方が何故あの言葉を選んだのかが分かったんです」

「ほおう、そこまで成長…いや、ある意味悪影響か」

また二人程、感化されてしまった人が増えてしまったらしいな  
いや駄目だろ

「にしても、何故皆して俺の意見を超ポジティブシンキングで考えられるのかねえ……  
時々怖くなってくるよ」

「そうですか？ 幸貞さんって結構無自覚でいい事言ってるんですよ」

「いい事？ 何言つてやがる、俺は俺の為にしか意見はしない……それ以外は正直どうでもいい」

「なら私達に意見したのは何故ですか？」

「俺が後々面倒にならない様にだ、本当ならお前らとはもう会わない予定だったんだが  
な……そうなる言い回しや言葉を選んで言つてたからな」

「確かに意味に気が付かなければもう二度と会いたくはなりませんよ、気が付かなければの話ですけど」

えー何それー、じゃあもつと難しくさらに遠回しで言えばいいのかな？

でもそうなると傍から聞くと唯の悪口なんだよなあ

「あつ！ 折角だから私達の歌を一曲聞いていつて下さいよー！」

「いいの？ お前からこの後予定とかは」

「私と結は何もありません、貴方がいいならやらせて下さい」

「まあ俺はいいが……じゃあ聞かせてもらおうかな」

「はい！じゃあ少し準備するので待っていて下さい」

……ほう、ツインボーカルでギター&ベースか

てか茅原田ちゃんドラムやってなかったっけ？ベースも引けるのか、凄いな

「ふう……ど、どうでした？」

「前より大分いいんじゃないか？何かを掴めてるみたいだし」

「その何かとは何ですか？」

「さあ？俺は知らないよ、自分達で分かっているならそれでいいんじゃないかな……俺が知ったところでどうなる訳でも無いし」

「フフツ、そうですか……そうですよね」

そう言つて茅原田ちゃんは俺に微笑んだ……うん、可愛いね

しかし懐かしい音を聞いたな……いつ以来だろうかな、多分だが友希那達のを聞いた以来か

そうだな……敢えて言うなら、決意の音……かな

我ながらクツサイ台詞を吐いたもんだ、らしくない事はしないのに限るな

## 26話

さて、時期的に我が校でもそろそろ体育祭というものが始まる時期になってきた

だがここで一つ考えて欲しい、ここは花咲川学園：そう、元女子高だ

試験的に男子を取り入れ始めたばかりなので、前にも言った通り俺：陽音：裕次の三人だけである

詰まりだ……俺達は一体どうすればいいんだね？

「はあ、本当にどうすんだよ」

「何が？」

「ビツクリするから急に話しかけるなたえ」

「おたえ、それで何考えてたの？今日の夜ご飯？若しかしてうさぎのこと？」

「たえ、まだ朝なのになんでもう夕飯の事を考えるんだよ……あと兎は論外」

「おたえ、うさぎの事を考えないなんて幸貞大丈夫？おつちゃんの写真でも見る？」

「たえ、何故うさぎの事を考えることが常識みたいになってんだよ……どう考えても可笑しいだろ」

「おたえ、可笑しくないよ……寧ろ何で皆考えないの？」

「たえ、それを当たり前だと思ってるのはお前だけだ」

「ねえ二人共、喋る前に一々それ言うの面倒臭くないの?」

「沙綾よ、これは仕方の無いことだ…どちらか一方が諦めるまでこの下らない戦いは続くのだよ」

「下らないって言うなら自分から止めればいいじゃん」

「生憎と変な所で強情なんでね」

面倒臭たえそうな顔をするなよ沙綾、割と傷付くぞそれ

あと天然たえは兎の写真を近付けてくるなよ、序にお前も近いから…あ、めっちゃいい匂いするわ

「兎の写真は別にいらねえよ、いいから席戻れ」

「えー可愛いのに…今度うちに見に来る?」

「遠慮しておく」

「そう、残念」

女子がホイホイと男子を家に呼ぶんじゃないよ

はあ、何かメツチャ話が逸れたな

話を戻すが时期的にそろそろ体育祭が近付いて来ている訳だ、だが女子と男子では体力や筋力に差があるだろ? だからどうするんだろうと思つてな

まあ例外というモノは何にでも存在するものだ、氷川先輩に関しては男子に引けを取らないどころか勝るだろう

逆に陽音は…まあ、な？察してくれ

「体育祭かあ…面倒だな」

「ちゃんと参加しなよ幸貞、何かちゃんと男子の事も考えてやるらしいよ？」

「そうなのか？まあ、それに期待するしかないか」

さて、今日は授業がない代わりに体育祭の準備とのことだ

体育祭実行委員会が中心となつて準備を進めていくらしい、しかしまあよくそういう事を好き好んでやろうとする人がいるもんだ…俺は面倒だから御免蒙りたい

「導師峠くくん、これ持って行ってくれる？」

「分かりました、少し待ってて下さい」

「あ！裕次君！後でこっちも手伝つてくれる？」

「了解了解！ちよつと待っててね！」

男手はやはりあると便利なようで、俺と裕次は結構いい感じに使われている…え？陽音？ああ、アイツは…

「はく癒されるう〜」

「陽音くくん、私もう疲れちゃったよ〜」



「え、えつと……あの……そ、その……」

ま、まあ……何て言うんだろうな

女子の癒し係として活躍しているよ、それはもう大活躍してるさ

今の状態は複数人の女子に交代交代に撫で回されてる

やめろ陽音、その助けを求める目で俺を見るな……お前に群がる女子の中になんて行きたくない

「な、なあ幸貞……陽音の奴大丈夫かな？」

「関わらない方が身の為だぞ、唯でさえ忙しいんだから」

「……それもそうか……すまん陽音、許してくれ」

「触らぬ神に祟りなしだ」

さて、俺は別の手伝いに行くか

確かこの材料をもってきてきてくれて言ったかな、取り敢えず行こう  
これ以上ここにいと陽音に呼び止められそうだからな

「ありがとうね導寺峠君」

「いえ、この位なら大丈夫です」

「ここはどうやら入場門と退場門を作ってるらしいな、その材料か…成程ね、そりや重いわ」

「何か手伝いましょうか？」

「本当に？じゃあこの部品を作ってくれるかな」

設計図を渡された、取り敢えずこの通りに作ればいいってことだよな

どうやら門のアーチらしいな

自分、手先は器用な方だしこういう作業は嫌いじゃない

数十分経った頃

「失礼します、進み具合はどうですか？」

「あ、委員さんお疲れ様です…そうですね、今のところ順調に進んでいますよ」

「そうですか、アーチの方はどうですか？」

「ああ、それなら…ってええええ!!」

「ん？あら、氷川先輩どうも…って言うか氷川先輩って風紀委員ですよね？」

「手伝いとして各仕事場の現状確認をしているんです、それで何に驚いたのですか？」  
「ど、導師峠君にはこの部品だけを頼んだんだけど……もう九割方アーチが完成して  
るじゃん……」

あれ？この部品だけだっけ？……何か最初の方、確かにこの部品を指して喋っていた  
ような気がしなくも無いな

「そうでしたか、暇だったのでこの設計通りに作ってましたが」

「流石ですね、そのアーチは作業が一番大変なので時間が掛かると思っていました……  
それでしたら最初から貴方に頼めば良かったですね」

「まあ多分話を聞いた時点で断ってたと思いますけどね」

「でしょうね、今回は運が良かったようです……さて、一番面倒なアーチはこのまま導師峠  
さんに任せて他の作業を進めましょう」

「わかりました！」

え？引き続き俺にやれてかコレ、まあここまで来たら別にいいけどさ  
どうせ暇だしヤスリとかニスとかで綺麗にしておこうかな

「導寺峠さん、そちらはどうで……す……か」

「ん？ああ氷川先輩、どうなさいました？」

「……アーチの完成度だけがやけに高くなりますね」

「そうですね？まあ少し磨き過ぎて光沢が上げつない事になりましたが」

「何ですかそれ、最早鏡じゃないですか？」

「そんな事は……無きにしても非ずですかね」

ちよつと気合入れ過ぎたわ、何かに没頭する事なんて久し振り過ぎて抑えられなかつたな

まあいいんじゃないかな、出来がいい分には

「うわ凄い、どんな磨き方したらこんなになるんだろう……」

「何かもう逆に怖いわ」

「どれどれ？何これ……スゲエ……」

俺作のアーチに先輩方が集まってくる、自分の仕事はいいんですかね貴女方は

ていうかよくよく考えてみると、今ここにいるのって俺以外は皆年上じゃね？

まあそんな事はどうでもいいな、仕事は終わったし戻ろうかな

氷川先輩に一声掛けて、教室へ戻った

教室に着くなり陽音がジトーっと俺の方を見てきた、どうやら解放されたらしいな

「幸貞君……もう嫌い」

「機嫌直せよ、俺だつてあの中になんて飛び込んで行きたくない……その内ケーキでも奢つてやるからよ」

「……仕方ないから許してあげるよ」

チヨロい、ていうか自分で言つてなんだけどケーキで釣られるとは……女子っぽいな陽音

まあこれでお許しが貰えたからいいか

「手伝いの方はもう終わったの？」

「ああ、多分な……若しかしたらまだ何か残ってるかもしれないから何とも言えんがな」

「お疲れ様、体育祭が楽しみだね」

「楽しみ、かあ……」

「楽しみじゃないの？」

「さあどうだろうな、面倒という気持ちも無くはない」

そう言えば男の事も考えてやるって言っていたがこの場合、陽音は一体どうなるんだ？……いや、考えるのはよしておこう

そんな訳で準備だけで一日が終わった、さっさと帰ろう

ハイ到着、速い？気にす（ry

お？電話か、誰からだ……アリア？あんまり出たくないんだけど

「はいもしもし」

『久し振りだね旦那様、ゴールデンウィークの時は随分と連れないうことを言ってくれたじゃないか』

「文句言う為に電話したなら切るぞ」

『そんな訳がないだろう、実はお得意先からいい秘境の宿があると聞いてね……是非とも君と一緒にいきたいと思うているんだよ』

「へえ、因みにどんな所だ？」

『意外だね、食い付いてくるとは……ええと確か……山奥の知る人ぞ知る所だった気がするな、詳しい場所は余り教えられなくてね』

「何だ、有名人でも来るのか？」

『まあそこら辺の関係者が多くてね……そうそう、あと二人位なら連れていけるから幼馴染ちゃん達でも誘ってくれ』

「いいのか？ていうかもう行く前提になってるんだが」

『行くんだろ？』

「いやまあそうだけど…」

『じゃあ詳しい事はまた連絡しよう、ではな旦那様』

久方振りだな、アイツの誘いに乗るのは

因みに俺は秘境とか結構好きである、人目を気にせずに居られるし何より人の心を気にしなくて済む

だから俺は都会より田舎の方が断然好きだ

……と言うか、俺に幼馴染が居ることアイツに教えた記憶が無いんだが……何で知ってたんだ？

多分あいつのことだから調べたんだろうが、普通にプライバシーの侵害なんだが

まあ別にいいけど

はあ…にしても、体育祭面倒くせえ…あ？メール？

『そう言えば体育祭が近い様だね、仕事も一段落済んだから見に行かせてもらうよby君の嫁』

ええ…来んのかよ、しかも何だその最後

嫁じゃなくてお前はまだ許嫁だろうがよ、貰ってやる気はないから永遠に他人だがな

「幸貞、体育祭いつだっけ？」

「確か明後日の土曜日」

「そう、じゃあ弁当作って持ってくわね」

「そうかい…華蓮さんは体育祭いつかね？」

「私はまだ先よ、姉さんも行くって言ってたわよ」

「晶奈も来んのかよ…ああそうだ、アリアも来るって言ってるから色々よろしく頼んだぞ」

「はいはい」

ん？アリアが来るとすると…スゲエ、学校に弦巻家当主の娘と露西亞総合企業統括財体の現当主が居ることになるのか…考えてみるとえげつねえ

「そう言えば貴方の所って男は三人しかいないんでしょ？どするのかしら」

「なんかそれについては学校側がどうにかしてくるらしいが…まあ三人と言うよりは実質二人だけだな」

「そうなの？」

「ああ、女の子みたいな男…所謂男の娘と呼ばれる分類に分けられる奴がいるから」

「成程…なのかしらね」

しかもこれまた顔まで整っていると来たもんだ、下手な女子より可愛いからなあアイツ



別に俺はそつちのケがある訳じゃないから誤解するなよ？ 飽く迄外見に見たらの  
話だ

「まあ精々頑張りなさい、何に出るか決まってるの？」

「玉入れとリレー」

「何故玉入れ」

「楽だから」

「……そう、まあそんな事だろうとは思ったわよ……リレーは？」

「男子は強制参加&アンカー決定」

「成程ね……あら？ ニチームよね？ 三人じゃ分けられないじゃない」

「男の娘は応援だ」

「あっ……ふーん（察し）」

ドンマイ、陽音……お前はもう若干女の子認定されてるっばいぞ

## 27話

さあ始まつてまいりましたよ体育祭

え?この前は二日前だったじゃないかつて?そんな事きにs (ry

まあ取り敢えず、体育祭が始まりましたよ

「おお、紅組応援団にははぐみがいるのか…まあ予想通りだけど」

「だよなあ、知り合いなんだけどさ…元気が凄いよね」

「何だ裕次、知り合いなのか」

「そうだよ…ていうか幸貞がはぐみを知ってるって事も驚きなんだが」

「まあ別にいいだろ…もしかして仲良いのか?」

「まあ、うん…一方的ではあつたけど」

大変そうだなそれは(他人事)

まあこちとらには香澄とかたえとか扱いが面倒な奴が居るからなあ

「対する白組はチアガールですか…あ、丸山先輩」

「え!?マジで何処!?!」

「そんなに食い付くことか?」

「当たり前だろファンとして！」

「そいつは失礼しましたよ」

あ、何気に女王様が紅組の応援団にいる…しかも学ラン着てるし

いやあ、にしても本当に何でも似合いますな貴女は

「……ん？おお？」

「どうした幸貞？」

「いや、あれ見ろ」

「どれだよ……んん？おお?!」

先程言ったように、白組応援団はチアガールである……そう、チアガールである

なのに何故、その中に陽音の姿があるのだろうか

「いやまあ似合ってるけどさ、動きのキレもいいし」

「さつきから見ないと思ったら…まさかあんな所にいたのか」

「お前同じクラスなのに知らなかったのか？」

「全然そんな話は聞いてないぞ、確かに皆からメツチャ勧められてはいたけどさ」

勧められてたのかよ、まあ確かにこんな逸材がいたら勧めたくもなるか

しかもこれまた違和感がないと来たもんだからな

あ、氷川先輩とイヴも学ラン着てる…似合うね

「そう言えば幸貞は何に出るんだ？」

「玉入れとリレーだけだよ、お前は？」

「奇遇だな、玉入れとリレーは一緒だ：リレーに関しては強制だったけどな：後は障害物競走に出る」

「そうか、じゃあその時は野次を飛ばしに行つてやる」

「敵同士だからつてそれは止めてくれよ、距離のハンデも付いてるんだからさ」

成程、距離でもつてハンデを付けたのか

そこから辺よく考えられてるな、少し上から目線だが感心する

「あ！やつほーユツキー！」

「げえ、何でいるんだよお前」

「げえつて何さ！おねーちゃんがいるならアタシもここにいて当然だよ！」

「成程シスコンか、麻弥ちゃんも来てたのね」

「はいっす！彩さん達の応援に来たっす！」

「そうかい、因みに丸山先輩が白組で女王様とイヴは紅組だ」

「彩さんだけ違う組っすかあ、幸貞さんはどっちっすか？」

「俺は紅だよ」

「ええ！じゃあ彩さん本当に一人じゃないっすかあ」

「まあこればかりはしょうが無いよ…で、お前はいつの間にも蟬になってるんだ」  
「ここは眺めがいいねー、おねーちゃんがよく見える！」

いつの間にもやら背中に登られ、おんぶする形になっていた…まあ見やすいなら何よりですよ

「ゆ、幸貞…俺は全く話について行けないんだが」

「ああ、悪い悪い…でも紹介する必要も無いだろう？」

「いやそうだけどさ、何でそんなにお前は仲が良いんだよ」

「そりゃあ丸山先輩と知り合いだからな」

「それで済ませていいのかこれ」

「別にこれといって話すことは無いぞ？取り敢えず俺は席に戻るわ」

「お、おう」

背中から天災をひっpegし、麻弥ちゃんへ渡しておいた

席に戻る途中、何かVIP席みたいなのがあった…まあ予想はつくけどね

「おや、ユキじゃないか」

「やつぱお前だったかアリア」

「やつほーユーちゃん、私も応援に来たよ」

「姉妹でおいでなさったんですか、まあありがたいこつちやな…今は何処に行ってたん

だよ」

「弦巻家の方に挨拶しに行ったのさ、御息女が出ておられるらしくてな…流石に当主様は居られなかったが奥様が居られてな」

「成程…貴女達も大変なこったな」

「なあに、礼儀として当たり前のことだ」

「そうかい…じゃあ俺はそろそろ行くわ」

「ああ、また後で会うじゃないか」

さて、自分の組へ戻るとするか

「どうやら応援合戦が終わったみたいだな、応援団の娘達が自分の組へ帰って行ってるな」

「お疲れ様です、丸山先輩」

「あ！幸貞君見ててくれた？」

「見てましたよ…にしても、イヴも女王様も学ランがよく似合っていましたな」

「ねえねえ、私は？」

「ん？…ああ、似合っていましたよ」

「何でちよつと言わされてる感があるの？」

「冗談ですよ、似合っていました」

「ありがとっ！」

ほう、今日はポニーテールか…後で写真を撮ってタニにでも送ってやるか…字的には贈ってやるの方がしっくりくるな

「そう言えば天災と麻弥ちゃんが来てましたよ」

「え!?! そうなの!?!」

「応援に来たそうですよ、後で会ってきたらどうですか」

「うん! そうするね、教えてくれてありがとう」

「お気になさらず」

おや、どうやら my sister 達がおいでの様だからいつちよ行きますか

何か華蓮さんの手に重箱が見えるのだが…それもしかして昼飯?

「お、幸貞が体操着きてる」

「そりゃこれから運動しますからね」

「これお弁当ね、後で持っていくから」

「やっぱそうだったか・それ全部が俺のじゃないよな?」

「当たり前じゃない、私達の方も入ってるわよ」

デスヨネー、流石にそれを一人では無理だわ

お、種目が始まったみたいだな…最初は二人三脚みたいだな

確かウチの組は沙綾とたえが出てる筈だな

おお、流石夫婦…息ピツタリだな

「じゃあ俺は戻るから」

「分かったわ、まあ頑張つてね」

「頑張つてね」

「へいよ」

次の競技は何だったかな…徒競走ですか、陽音が出るとか言つてたな

これは見なくてはいけない（使命感）

あ、陽音のハンデは随分と軽いですなあ…お、始まつたな

何気に陽音も運動できるんだなあ、普通に速かつた…おお、氷川先輩とはぐみだ…  
うっわ何あれ速っ

氷川先輩とはぐみにもハンデあつた方がいんじやね？

ていうか貴女達は仲間なんだから競い合うなよ

「幸貞ー、次の競技幸貞が出るやつだよー」

「ああ、ありがとうな沙綾…随分と早く回つてきたな…後が暇になりそうだ」

入場門へ向かう、アーチがスツゲエ輝いてる…アレ俺が作ったやつやな

いい感じに光が乱反射して光ってるからあまり眩しくはないな…うん、良心設計



「お、花音ちゃんも出るのか」

「あ……ゆ、幸貞君……走ったりするのは苦手だから……」

「成程……じゃあ燐子ちゃんも同じ理由かな？」

グリーンと後ろに振り返り、燐子ちゃんの方へと顔を向ける

後ろにいたなら話し掛けてくれればいいのに

「はひっ……は、はい……そうです」

「ああごめんね、驚かせちゃったみたいで」

「あ、いえ……大丈夫……です」

「あ、幸貞君も出るんだね」

「おお陽音、お前徒競走と連チャンで出るのか……大変だな」

「まあね、でも玉入れはあんまり体力使わないから大丈夫かなって」

「成程」

因みに言うと、応援の時に気付いたかもしれないが陽音と裕次は白組である

裕次の方は既にスタンバってる、はやいっスね

何気に丸山先輩とみさきちゃんがおる……あ、そしたら向こうにはこころ嬢もいるのか

「じゃあまた後でね幸貞君、絶対負けないからね！」

「まあ健闘を祈るよ」

「むむ、その言い方だと超自信ありげにきこえるよ」

「そりやあるからな、取り敢えずさっさと持ち場に戻りな」

「うん、勝つからね」

そう言つて白組の列へ戻つて行つた

さて、ここからは玉入れのルール説明といこうか

一般的なルールは保々皆がやったことがあるであろうルールだ、3. 5 m程の高さがあるカゴにボールを入れる競技だ

そしてここからが特殊ルール、男子はカゴを中心とした半径1. 5 mの円内から球を投げることを反則とする…らしい

要は遠くから投げろという話だ

「ふむ、なかなかいいハンデだ」

「が、頑張つて下さい…幸貞君」

「花音ちゃんもね」

さて、そんな訳で玉入れの入場が始まつた

ほう…結構距離があるなあの円、まあいいハンデにはなると思うが

ボールは全部で100個、円内にも円外にも玉は散らばっている

『では…よ…い…スタート!!』

開始の合図と共に円外を小走りしながら玉を拾い上げホイホイと投げていく、投げた玉は全てカゴの中へ吸い込まれるように入って行く

ものの数秒で円外にあつた玉は最後の一つに

そしてその一つを足の上に乗せた後、蹴り上げ…籠の中へシユウウウウツ、超エキサイティング

どこのツクダさんですかね

「もう終わりか、何か詰まらなかつたな」

「ゆ、幸貞さんが…速すぎるんだと……思います」

「そうなのか…あ、燐子ちゃんそしたら玉くれる？」

「え…いい、いいですけど」

ポンと俺の手に燐子ちゃんが持っていた玉を渡してもらう、そのままポイツと投げるとカコン…という音と共にボールはカゴへ入った

「はい」

「え？ええ？…は、はい」

またポイツと投げカゴへ入れる、それをひたすら繰り返し燐子ちゃんの手持ちである玉を全部入れた

「あ…円内に入り玉を取って円外に帰るつてのは面倒だから取ってきてくれる？」

「あ、分かりました」

「悪いね」

そ言うのと燐子ちゃん以外の子達も俺の元へ玉を持ってきた、俺の周りには無数に玉が転がっている状態になった

それを拾い投げ、拾い投げを唯々続けていく、終了時間の10秒前にはラスト一個になつてた

会場は大盛り上がりである

『おおっとー!!なんと紅組は玉がラスト一つになつてしまったアアア!!白組も負けずに入れ続けているが果たして間に合うのかアアア!』

あの実況テンション高っ

『残り10秒だアアア!!紅組のラスト一つの玉は未だに幸貞君が掌で弄んでいるう!!これは白組への挑発かアア!』

「何でそんなにテンション高いんだよ、てか今幸貞君って言った?誰がやってだこの実況」

「確か…牛込ゆり先輩って、人でした」

うつそりみちちゃんのお姉さんじゃないですか、ていうかこんなにテンションの高い声出せたんだな

りみちゃんとは本当に真逆だな

さて、残り6秒…白組応援席に体を向ける、詰まりカゴは俺の背中側にある

5秒…後ろへ玉を高く投げる

4秒…3秒…2秒…1秒と、応援席の娘達に見えるよう指でカウントダウンをする

そして、一度手をグツと握り…パツと開くと同時にカゴへボールがガコン…と入り、

終了のホイッスルが鳴り響く

『……で終了ウウウ!!最後の最後にカッコよく決めてくれたアア幸貞クウウウン!!!』

本当にテンション高いなおい、キャラ的に大丈夫か？

まあ取り敢えず結果発表を聞こうか

## 28話

玉入れの結果は紅組100個、白組45個だった：圧勝だね

さて、そんな事より午前の部が終わりお昼ご飯の時間だ

因みに俺と裕次がでるリレーは最後の最後、大トリの種目である

あれだな、簡単に言えば代表リレーみたいなやつだ：俺たちはあれか、男子代表で出るのか

「幸貞、昼飯食べるよ」

「ああ、了解」

向かった先のレジャーシートには何故か宮代姉妹に加えてリサと友希那がいた  
来てたのかよお二人さん

因みに、リサと友希那は宮代姉妹と面識がある：しかも何故か仲が良い

「やつほー幸貞、応援に来たよ」

「左様ですか：いつから来たんだ？」

「晶奈さんに教えて貰って幸貞が出るタイミングで来たんだよ」

「じゃあ玉入れは見てたのか？」

「うん見てたよ！凄かったね！」

「……相変わらず、容赦無いわね」

「人間皆平等だ、誰であろうと全力で叩き潰す」

「はあ、それも相変わらずね……」

しかし友希那が来るとは驚いたな、まあ大方リサに引つ張つてこられたんだろぅがな  
「早く座つたらどうだユキ？ほら、僕の隣が空いているぞ」

「遠慮しておきます」

「もくそう連れないこと言わないでよっ！」

「ちよ、引つ張らないで下さいよアリスさん」

アリスさんに無理矢理座らされてしまったな、しかも宮代サンドなんだけど

あーあ、周りからの目が痛い痛い……お父さん方達の視線が特に痛い

アンタら子供相手にそんな嫉妬の籠つた目を向けるな、てか奥さん居るんだろ

「午後は何に出るんだユキ？」

「リレーだけ、それも一番最後」

「ほう、大トリと言うやつか……楽しみに待っているぞ」

「あ！そうだ！もしユーちゃんが一番になれたらアリスさんからご褒美あげちゃうよっ

！」

「別に要らないっす」

「ええ〜!!こんなことは滅多にない事なんだよ〜!」

「それにリレーなんで俺一人の力じゃどうにも出来ない」

「ええ〜アリスさん乗り気なのにい…」

そんな事言われましてもねえ、まあ負けてやる積りも毛頭無いけどね  
タダで負けるのはしょうに合わない

「まあ心配しなくても幸貞は勝つよね〜?」

「おいおいリサ、そんな事はなってみないと分からんぞ?」

「負けず嫌いなのは貴方も私も同じでしょ」

「負けず嫌いねえ…果たして俺はそうなのかなあ」

自分ではよく分からんな…まあ友希那がそうなのは知ってるけどね

よく蘭ちゃんの張り合ってるのをcircleで見かける

仲がよろしくてなによりです

「さて、そろそろ俺は戻るとするよ…お昼ご馳走さん」

「お粗末様…程々にしときなさいよ」

「気分による」

自分の応援席へ戻る、周りにもちらほらと戻って来ている生徒達が見えた



午後は最後まで何も無いんだよな……どうしようかな

「おや、導寺峠さん」

「おや、氷川先輩……こんな所で何を？」

「私と貴方は同じチームでしょう？ 私がここに居ても可笑しくは無いと思いますが」

「あ……それもそうですね、先程は徒競走お疲れ様です」

「有難うございます、導寺峠さんは午後何に出られるのですか？」

「大トリのリレーだけです、それまでやる事が無いので暇です」

「そうですか……私は何故かリレーに出てはいけないと言われました」

「そりゃ氷川先輩とはぐみがウチのチームにいるからなあ、一緒に出られたらたまったもんじゃないだろ」

向こうにはこころ嬢が居るとは言え、流石にはぐみ&氷川スペックには適わないだろ

「まあしょうがないですね」

「その回答だとしても納得はいかないのですが……」

「世の中納得出来ないモノの方が圧倒的に多いですよ、諦めて下さい」

「……捻くれた答えなのに正論を言われているようで腹が立ちますね」

「解せぬ上に理不尽です」

正論だろこれは

納得出来ないモノなんてそこらじゅうに溢れてる、それを納得するまで突き詰めるなんて時間が足りなさすぎる…人生諦めが肝心な時だつてあるんだ

「また捻くれた事を考えてますね」

「さてどうでしょう…とところで氷川先輩は午後は何に出るんですか？」

「明らかに話題を変えましたね…私はパン食い競争に出ます」

「じゃあもう勝ち確ですね」

「何故ですか」

「そりゃ氷川先輩とたえが出るからですよ」

「たえ？…：花園さんですか？」

「知ってるんですか」

「ええまあ、名前だけは」

流石優等生、恐らくこの流れだと全校生徒の名前は分かっているぞこの人

基本的に他人への興味が無い俺からしてみるととんでもない能力だぜ

「まあ頑張つて下さい」

「導寺峠さんも頑張つて下さいね」

「どうも…：にしても、氷川先輩は氷川先輩ですね」

「何がですか？」

「それです」

腰を指さす

半袖ジャージを短パンジャージへINしてる、まっじめー

因みに俺は出してる

「ああ、これですか…服装の乱れは心の乱れ、整えるのは当然です……そう言えば導寺峠さん、服装が少し乱れてますね」

「そうですか？自分ではそうでもないと思っておりますが」

「いいえ乱れています、私が直してあげます」

「おっとそれには及びませんよ、俺にはこれがお似合いですから」

「ダメです、先程丸山さんも直したのですから導寺峠さんも直してください」

氷川先輩の両腕が短パンの淵へ伸びてきたのでガツと掴み阻止する

つか丸山先輩力強いんだけど、攻防戦が押され気味になってきている

ていうか丸山先輩はもう既に餌食となったのか、南無三

「あ！おねーちゃん!!って、何やってるの?」

「ひ、日菜!」

「今だけはナイスタイミングと言ってやろう天災」

突如として現れた天災に氷川先輩の背中へ飛びついた事により、迫る手の力が弱

まった

その隙にバックステップで距離を取れた

「ふう、危ねえ」

「日菜！急に飛びつかないでと言ってるでしょう！」

「え〜だつておねーちゃんが居たら抱き着きたくなるんだも〜ん」

「危ないから止めなさい！」

さて、天災の相手をしている内に俺はオサラバさせて貰おうかな

気付いてなさそうだしとつとと逃げるとしますか

はあ、疲れた……あ、丸山先輩

「どうも、丸山先輩」

「あ、幸貞君」

「……本当にINしてるんですね」

「あくコレ？紗夜ちゃんにね〜…私はダサイから嫌だったんだけど」

「そうですか、俺は先程それから逃げてきました」

「え〜！何それ狡い!!」

「逃げれる力量がない丸山先輩が悪いですね、恨むなら自分の無力さを恨んで下さい」

「むうう……」

「律儀に入れてないで出せばいいじゃないですか」

「そうするとまた紗夜ちゃんに言われちゃうじゃん」

確かにそうだな、しかも二回目だから更に追加で何かを言われそうだな

流石は風紀委員長だけ

「まあご愁傷様です」

「幸貞君狡猾い」

「そんな事を言われましてもねえ……取り敢えず俺はそろそろ席に戻りますよ」

「うん、リレー頑張ってるね」

「どうも」

お、どうやらパン食い競争が始まったみたいだな

氷川先輩はつやい、そして何故かたえもはつやい……パンだからか？よく分からないけ

クツツ速い

裕次の障害物競走？なんの面白みもないからカット

はあ、さてさて……とうとうリレーの番が来てしまいましたよ

早すぎる？気にすんな

今はスタンバってます

「よう幸貞、調子はどうよ」

「そこそこ……お前はどうかなんだよ裕次」

「バツチリさ、ぜってえ負けないからな」

「そう、まあ頑張ってくれよ」

「なんかその言い方スツゲエ腹立つ」

「逆撫でするように言ってるからね」

「本当に嫌な奴だよな!？」

おいおい、今更かよ

大分前から言ってる事だと俺は思ってたんだがね

「はあ、本当は出たく無かったんだよ普通に……走るとか面倒臭いし」

「それもう末期だろ」

「だろ？自分でもそう思ってるよ」

「自覚あんのかよ……お、始まったみたいだな」

『さあレースの幕が切つて落とされたアアア!! 紅組は白鷺さん！白組は奥沢がトップ  
バッターだアア!!』

相も変わらずテンションの高いことだな

なんか美咲ちゃんも女王様も速いんだけど、てか紅組なのに白鷺って……何かめつ  
ちやコツチ見てんだけどあの<sup>女王様</sup>人、しかもあの笑い方スツゲエ怖い

女王様から俺の所まで結構離れてるぞ？この距離で心読んだのかよ、最早エスパ―超  
えてるだろ

『ほぼ同じにバトンが託されたア!! さあここからどちらが追い上げて行くのかアアア  
!?!?!』

あ、あの娘達陸上部の娘だ

何で知ってるかって？クラスでの走者決めで知った

「なあ幸貞、実況の人何でこんなテンション高いんだ？」

「さあ？前見た時は落ち着いてる人に見えたんだけどなあ」

「会った事あるのか」

「ああ、同じクラスにいる子のお姉さんだつてよ…妹ちゃんの方は大人しいんだけどね」  
「へえ、そういう事もあるんだな」

『さあ次の走者は紅組は北沢さんと弦巻さんだアアア!!これは面白い組み合わせだアアア!!』

「なかなかフェアな組み方をしてるな」

「確かにそうだな、はぐみと弦巻さんは二人して身体能力が異常だからな」

「お前こころ嬢のこと弦巻さんって呼んでるの?」

「いやだつて、知り合いじゃないしご令嬢じゃん」

「ふーん、そういうもんか」

さて、次の走者は俺達なんだよな

若干ではあるが白組の方がリードしているようだな

『さあいよいよラストバッターだアアア!!花咲川男子代表の二人だアアア!!』

うおお、牛込先輩が身を乗り出してるよ…そこまでテンション上がるか普通?

そうそう、因みに紅一点の反対語は存在しないそうです

あと男子は校庭一周と1/4(250m)走るんだつて

「悪いな幸貞、お先行かせてもらおうぜえ!!」

「はいはい」



そう言って走って行く裕次、あー思ってたより離れたな

「ご、ごめん導寺峠君！」

「気にすんなって……どうせスグ追い付く」

「え？」

バトンを受け取った瞬間に地面を蹴る、そして25m程離れていた裕次に一瞬で追い付く

「よう裕次」

「はあ!？」

「にしてもよお、男子だけ校庭一周と1/4ってキツくね？女の子達は半周か一周なのじゃ」

「何でこの速さで並走しながら余裕で喋れんだよお前!!」

「学校のマラソンとかであるさ、『一緒にゴールしようね』の一言程信じられない言葉つて無いよね」

「知るかああああ!!!」

「お、あと50mか……そいじゃお先」

「ええええええ!!？」

『ゴオオオオオ!!最後に圧倒的な差を見せつけて勝ったのは紅組幸貞クウウウン

!!!

「はあ…はあ…お前、マジでバケモンだろ…」

「化物とは失礼だな、れっき歴とした人間だ」

「う、嘘付け…絶対人の皮被った…バケモノだろ」

「お前それは俺に対して失礼過ぎるだろ」

「今のは絶対そうとしか思えねえ」

化物物呼ばわりとは…確かにそう思えなくは無いかどさ、それを言ったら華蓮とか晶奈とかは一体どうなるんだよ

あの人達俺より化物たぞ

そして俺の一位通過により、紅組は晴れて優勝を勝ち取りましたとき

## 29 話

体育祭も無事に終わり、今日は日曜日：因みに明日も振替休日との事で休みです  
なので家でゆっくりする予定、家には誰も居ないし

いつも通りですよええ、昼に起きたら見事に誰もいない：机の上にメモがあったけど  
『腹が減ったら適当に食え』としか書いてなかったよ

はあ…この扱いは何なのか、まあ楽でいいんだけどね

するとピンポンとインターフォンが鳴った、誰だ？ 晶奈が頼んだ宅急便でも届いた  
か？

ドアを開けた先にいたのは：満面の笑みを浮かべたこころ嬢だった

「……………何しに来た」

「幸貞！これから出掛けるわよ！」

「は？」

何処へ？…そう聞こうとした時には既に黒服さん達に両腕を抑えられていた  
宛ら捕獲された宇宙人の様な形で引き摺られ、車へ乗せられる

「やあ、旦那様」

「おいこころ嬢、何でこいつまでいるんだよ」

「一緒に行くからよ？」

「当たり前でしょみたいと言わないで…で、何処に行くんだよ」

「夕刻から企業が集まる会食があつてな、僕の旦那様として紹介しようと思つてね」

「はあ？止めるよ面倒臭い」

「いや止めないさ、これで既成事実が作れるというなら私は喜んでやろう」

「今スグ窓から放り投げるぞこのクソ野郎」

「はあう！御無沙汰していた所為で身体に染みるよ…」

「相変わらず仲が良いみたいね！」

HE★N★TA★Iだ、何だこいつは…たまげたなあ

ていうか普通にコイツがそうだって事を忘れてた…あとこころ嬢、これのどこが仲良  
さげに見える？

「それで、本当の所どうなんだよ」

「ふっ、全てお見通しという訳か…なに、実のところ僕と婚約をしたいと言う者が現れて  
な」

「そいつはめでたいそれでいつ式を挙げるんだ？喜んで行つてやろう」

「甘い旦那様、僕は例えどんなに魅力的な殿方が言い寄つてきても旦那様への愛情は

播らがないのさ……正直な話、旦那様以上に魅力を感じる殿方は居ないがな」

「チツ、詰まんねえな……それで俺を直接連れ出して見せつけに行く訳か……それはいいが生憎と俺はドレスアップに似合う服は持ってないぞ」

「そこは任せなさい！今かは私のお家に行つて幸貞に似合う服を探して上げるから！」  
成程、だから少し早い時間帯で迎えに来たのか……にしても、こんな変人の事を好きと言うやつが居るのか

若しくは唯単に此奴の財産へ目が眩んだか……どちらにせよ俺にとつては好都合なんだがなあ……まあ、昔の好だ……頼まれ事の一つや二つくらいは聞いてやるけどさ

そんな訳で弦巻邸

真つ黒のタキシードをお借り致しました

「お前は相変わらず白のタキシードか、それに白のサファリハットも……か」

「僕と同じ型の帽子で黒色があるが……いるか？」

「あるなら貰おう」

「幸貞幸貞！私はどうかしら！」

真つ赤なドレスか……赤が似合う娘つてのは大概、綺麗に見えるもんなんだよね

「似合つてるよ」

「ありがとう！」

着替えも終わったところで、これから出発だそうだ

会場は何かでつかいホテルだ、ここ確かミシユランか何かで星三つとか貰ってなかった？こいつはたまげたなあ

会食ってか、パーティーだな：バイキング形式で歩き回ってるよ

アリア曰く挨拶回りとかは来なくていいから呼びに行く迄は好きに飲み食い好きにしてくれだそうです

まあこの事なので本当に好きにさせてもらおうかな

歩いているホールスタッフ的な人から飲み物を貰った、匂い的に酒だろうが何も言わ

れなかつたし良いよな（16歳）……俺はそんなに老けて見えるかね？まあアリアの隣を歩いていたつてのもあるだろうけどさ

あ、こころ嬢のはちゃんとジュースだ……色的にジンジャエールかな

「げつ、シャンパンかよ……出来るならテキーラをボトルで欲しかったな」

「あらあら、随分と度数の高い物がお好きな殿方なのね……お酒は度数が強ければ美味しくじゃなくてよ？」

「高々11%ちよつとのアルコールじゃ酔えるものも酔えませんよ……失礼、お名前をお伺いしても宜しいですか？」

「私も名乗らず急に声をお掛けして申し訳ございません、私は神田かんだ茂國しげくにの娘……神田楓姫りおんと申します」

こころ名乗った美人さん……黒髪をストレートに伸ばしているのだが、これがまた綺麗な事綺麗な事

恐らく年齢は20前半だろうな、アリアとあまり変わらない

確か神田重工って企業があつたよな……しかもかなりの大手で世界にも進出してるとか

因みに、アリアのおヤツさんが現役のトップだった頃……親父の仕事について行つた口シアにて、テキーラでおヤツさんが酔い潰れるまで付き合つた事がある

俺はピンピンしてたけどね

「私は……アリアとこのころの友人、ですかね……導寺峠幸貞と言います」

「まあ、御二方の御友人様ですか」

「ええ、まあ……飽く迄私は彼女達の友人ですので私は偉いわけじゃありません」

でもよく良く考えると、ウチの親父が所持しているパイプってどれも之もとんでもない人達ばかりだよな

「あら？そうでしたの……てつきりもう自分の会社をお持ちなのかと思っていました」

「ははは、まさか……生憎ながら私は人の上に立つような器では無いので」

「かと言って誰かの下について働くって感じでも無さそうに見えますよ？」

「おや、見抜かれていましたか……出来るならこの先も一人で生きて行きたいんですがね、どうやらそうもいかなさそうなんですよ」

「ふふっ……貴方様は面白いお人ですね」

「それはどうも」

にしても、何でこの人は俺に話し掛けてきたのやら

まあコッチとしては俺も一応男ですし？嬉しくない訳では無いが、こう言う人は何を考えているか分かりづらい……特にデカイ企業なんかはそうだ

正直な話、あまり相手をしたくない



「……………貴方様は、何も感じないのですね」

「はい？何の話ですか？」

「…あまり人には言わないのですがね、私は人の感情に敏感なんです…こころちゃんもそうだけれども、彼女の場合は感情の変化に気が付き易い」

「感情の変化というより、他人の心情が手に取るように分かる…だから相手が何を考えているか分かる……つて所ですかね」

「え？な、何故私の言葉を…」

「さあ、何故でしょうかね……お互い、詮索されるのは好まないところでしよう？」

「……………それも、そうですね」

「他にも男性は居られますし、そちらへ行かれてはどうでしょう」

「……………私はあまり好きではありません、出来れば近づきたく無いのです」

成程、人の心後読める…それ故に欲望塗れや特に強く邪な感情を持った者達を嫌い、遠ざける

大方あそこら辺の奴らはこの人に邪な気持ちを抱いたり財産目当ての欲望塗れの奴らが多いって事かな

「……………別に、気にする事は無いと思えますけどね」

「それでも…それを理解していても、分かってしまうと耐えられないのです」

「まあ、俺は男ですし…女性のほうが抱く心情なんてものは理解できかねないですから」

「申し訳ありません、このような場で私情を聞かせてしまい」

「構いませんよ、それで少しでも気が楽になるのなら幾らでも」

「優しいのですね」

「…俺は別に優しくは無いですが、俺の発言なんてモノは裏を引っくり返せば自分の為にしかならない…そんなモノばかりですよ」

事実、俺はこの人に対して話を聞く事は出来る…だが実際に問題解決を出来るかと言えは答えはNOだ

結局の所、俺は傍観者であり続けるのが望みだからな

「こう言った事は、損得抜きに言葉を掛けるのと掛けないのでは大違いですよ」

「掛ける言葉にもよると思いますが…」

「先程会ったばかりの者が言うのも失礼かと思いますが、何故貴方様は自虐的なのですか?」

「自分の性格を一番わかっている上で、その性格が駄目だと理解した上で止められない自分への術無しとの感情が行き場に迷っているんですよ」

「迷っているんですか?」

「こういうもんだと割り切ってる…いや、答えから逃げているのかもな」

「勝手ながら、貴方様にいつか答えが出る事を願っています」

「そいつは光栄だ……しかし、何故俺なんかに話しかけてきたのですか？」

さつきも言ったが、それが気になってしょうがない

俺は人混みがあまり得意ではない、気になった料理と飲み物を貰ってからは端に避けて辺りを静観していた

普通なら声はかけないと思うんだがな

「何故でしょう？」

「質問を質問で返されても困るんですが……」

「私自身も何故貴方様に声を掛けたのか、その理由がハッキリしないのです」

「興味本意なのかもしれませんね」

「まあ、人つて生き物は大概そんなものですから……では、俺はアリアが呼びの様なので失礼します」

「はい……お話の相手をなさって下さりありがとうございます」

「で、お呼びかアリア」

「ああ、そろそろ言っていたのが来る頃だ…にしても、楓姫とあそこまで親しげになるとは…流石旦那様だな」

「何だ見てたのか…あの娘は俺と同じだ、だが感性が全く別物だったな」

「旦那様の様な感性を持った人間がこの世に沢山いたら凄まじく面倒な事になるだろうな」

「うるせえ…因みにお前に婚約を申し込んだ奴は何者だ？」

「日本企業統括財団という所があるのだが、その統括リーダー…詰まりはトップにあたる人の御子息さ」

成程、ボンボンの坊ちゃんですか

まあこれだけしか情報がない状態で相手を判断するのは失礼だろう、実際に会ってみたいと分らない

「おや、来られたようだぞ」

瞬間、入口の方へ人が殺到し始めた

うわスツゲエあれ：媚び売りの為に行ってるんだろなあ、滑稽に見える

「いつもあんな感じなのか？」

「まあ、ここに集まる企業の中じゃウチに次いで規模が大きいからな」

「お前ん所には来ないのか？」

「僕だつてそうさ、まあ旦那様は見ていなかったようだがな」

「まあお前にも他の奴らも興味が無いからな」

「ははは、相変わらず辛辣だな」

おや、人がはけていく

おん？……超爽やかイケメンさんじゃないですかヤダー

「宮代さん、また会えて光栄です」

「またお会いしましたね、諒英さんりょうえい」

うっわあ、しかもこう言うタイプの人間は俺が一番苦手としてるタイプなんだよ

心の底から本当の優しさを醸し出す人間は裏表がない分、人の気持ちを理解すること

があまり得意では無い

だからこそ、その優しさが刃になっている事に気付かない

## 30話

『日本企業統括財団』：日本に住んでいれば何処かしらで一度は耳にすることがあるであらう、巨大な財団である

俺さ、財団って聞くとSCP財団しか出てこないんだよね

因みに好きなのはSCP-682ことみんな大好きクソトカゲとか、『さ　わ  
や　か』で有名なSCP-076とかね

如何にも『ぼくのかんがえたさいきょうのえすぴーしー』感がある奴らだが、設定や実験資料などを見てると面白い

ヤツベエ話かともんでもない方向に逸れたな、戻そう

それでもつてこの日本企業統括財団を纏め上げているのが、諒英りょうえい 篤あつしという男である  
それでもつて今俺の前に立つこの男、巨大財団を一人で纏め上げる男の一人息子である

名前は確か諒英　椿つばきだったかな

諒英とか完全に名前だと思った奴、残念だったなあ苗字だよ

「ええと、君は宮代さんのご友人かな？」

「まあ……そんな所ですかね、初めまして諒英さん……導寺峠幸貞と申します、導寺峠と呼びづらければ幸貞で構いません」

「ではお言葉に甘えて幸貞と呼ばせてもらうよ、私は諒英椿……椿と呼んでくれて構わないさ……それと、無理に敬語を使わなくていいよ」

「そいつはどうも、硬っ苦しいのはどうも苦手だね」

「はは、その方が私も気が楽だね」

あゝこの人マジで苦手だわ、最近は慣れてきているもの……こうも『優しさ』なんて感情に当て続けられるとキツイ

この諒英椿という男……背丈は俺とほぼ同じ、容姿はさつきも言ったが爽やかイケメンである

それでもつて優しさを兼ね備えている、確実に俺なんかよりこの人と婚約した方がいいでしょ

「諒英さん、紹介が遅れたが……彼が僕の許嫁なのさ」

「おお！ そうなのか……君が彼女の許嫁か」

許嫁……ねえ、コチラとしては腐れ縁にしか思っていないんだけどねえ

まあ今は話を合わせておきますか

「そうだ、少し幸貞と話していいかい宮代さん？」



「ああ構わないさ、僕はあちらでこころと話しているとするよ」  
ええ〜…二人きりですか、まあ別にいいけど

そんな訳でアリアは向こうにいるところの方へ歩いて行った

「……………君が宮代さんの許嫁だと思つと、私は羨ましいよ」

「別に欲しけりゃくれてやるよ」

「おいおい、許嫁がそんな事を言つて良いのか？」

「許嫁なんてのはただの口約束だ、婚約するかどうかなんてのは本人次第だろ…現に俺はする気は無い」

「そうなのか？てつきり私は両想いだと思つていたんだが」

「別に嫌いでは無い…だがな、俺と婚約したところでいい事なんて一つも無いぞ」

寧ろこの爽やかイケメンと婚約した方が断然いいに決まつている

恐らくこう言つたタイプの人間は、相手に尽くす事を幸せと認識している人が多い

愛する人の幸せな顔を見れるだけで私は幸せだ……みたいなクツサイ台詞を吐くんだぜ？俺には無理だね

「そんな事は無いと思うよ…心から好きな人と婚約出来るなんて、こんな幸せな事は他に無いさ」

「それは両想いの間柄であるからこそ現れる感情だ、残念だが俺はアリアの事をそこま

で特別扱いしてはいないしする積もりも無い」

「何故そこまで彼女を拒むんだ？聞くとところによるとかなり前からアプローチをされるらしいじゃないか」

「何故かって？アイツの為だよ」

「宮代さんの……為？」

「ああそうさ、もし仮に俺とアリアの婚約が成立したとしてだ……いつかアイツは壊れる」  
「こ、壊れる？それは一体……」

「鈍器を振り回す者の近くに物を置けば壊れるのは当然だ……俺は時偶、気が付かない内に凶器（狂気）を振り回す事があるからな……知らぬ内に壊してる事がある」

黙り込んでしまう椿、まあこんな返し方されたら誰だって黙り込む

だってこの人達からしてみれば俺の内心事情なんて知った事じゃないんだから

「……でだ、椿……君にとって幸せとは一体なんだ？」

「きゅ、急に何を……」

「いや、聞き方が悪かったな……君の思う、アリアに与えたい幸せとは何だ？」

「彼女への幸せ？」

「君はアイツと婚姻を結びたいんだろ？それはアイツを幸せにしたいって気持ちの表れじゃないのかね、だからそれを聞かせてくれと言っているんだ」

今は昔と違う

『君を幸せにしたい』何てドラマの様な台詞を言われたところで、その人を信用できる訳が無い

物理的且つ合理的に理解を得ないと、人間というものは簡単に信用しない

「…私は、彼女に普通の家庭を持つ幸せを上げたいと思ってる…若くして大きな組織のリーダーになったんだ、そんな事を考えてる暇は無いと分かつてはいる…それでも、その幸せを彼女に与えてあげたいんだ」

「成程、それが君の思うアイツへ与えたい幸せか…君は優しいな」

「いや、婚約するならこの位は当然だと思ってるよ」

「そうか…確かに君は優しいな、凡その人が君の優しさに癒され心を掴まれるだろう…だがな、それは99%の人間がという話だ…残りの1%は何も思わないのさ」

「まさか…その1%が宮代さんだとしても言うのか?」

「ご名答、まさにその通りだよ」

まあ、これはアリアと長く付き合ってきた俺だからこそ分かったことだ

まだ付き合いが浅い樁が分る筈が無い話だ

「いい事を教えてやる、アイツが本当に求めているのは…自分自身だけを見てくれる人だ、言い方が悪いがそれだけあればアイツは満足する」

「それはどういう事なんだ？」

「俺は君がアリアの資産目当てだなんて勿論思っていない、だが君は組織や名誉なんかを全て引つ括めてアリアの事を好きだと言っている」

「確かにそうだ、私は彼女の持つ組織や名誉…そしてその権威、全て纏めて彼女が好きだ」

「残念だがアイツはそんな事を求めていない、何も無しに純粹に自分だけを見てくれる人を求めている…組織も名誉も権威も何もかも全てを抜き取り本当の自分自身だけを見てくれる人をな」

「…何故君はそれを私に教えてくれるんだ？こう言つてはなんだが、もし彼女と婚約すれば一生遊んで暮らしていけるんだぞ？」

「生憎と権力や金には興味が微塵も無くてね、そういうモノは面倒事を呼ぶだけだ…アイツを射止めたいなら気長に付き合う事だな、時間から知り得る事もある」

「…そうか、彼女が君の事を好きな理由が分かった気がするよ」

「あつそう…じゃあ、そろそろいいかね？」

「ああ、長々と付き合わせて悪かったね」

そう言つて椿と別れ、アリアの方へ向かう

ん？（）この嬢と話していると云つたが…肝心のこの嬢が見当たらないな

「ようアリア、こころ嬢はどうした？」

「おや、話は終わった様だね……こころは他の方へ挨拶をしに行ったよ」

「ほう、そうなのか……」

ん？何だあれ

会場の済に恐らく飲み物であろう液体が零れておりますが、その近くにそれが入って  
いたであろうグラスが落ちていた

会場を歩いていたスタツフを呼んだ

「あ、済みません……ここに飲み物が零れているんですが」

「も、申し訳ございませんお客様！今スグに片付けを致しますので！」

「ああいえ、さつきまでこんな所に零れていたかなあと疑問に思っていました」

「私があそこを見たのは確か数分前です、その時は見受けられませんでした……」

「そうですか……ふむ、ジンジャエールか」

零れた飲み物を指で掬い、匂いを嗅ぐ

この会場でジンジャエールを飲んでいたのはこころ嬢だけだったな……何で分かる  
かって？子供が他にいないからだよ

「じゃあ取り敢えずこれは片しておいて下さい」

「畏まりました、すぐに片付けを致します」

俺はジンジャエールの匂いを辿りながら会場の外へ出る……コッチは確か御手洗があつた方だな

誰だ今犬とか言つた奴、言つておくがコレに関しては何蓮がダントツにスゲエからな匂いだけで人を見分けるとかマジで犬かよ

男子トイレの前に着いたのだが

「清掃中……か」

一応ドアノブを捻るが、鍵がかかっている様で動かない……仕方が無い、強行突破で行こうか

思いっ切りドアを蹴り、ブチ抜く……扉はくの字に大きく曲がり外れる

「何だ!?!」

「なっ!?! 気付かれたのか!?!」

「だ、誰だ!」

「お、ビンゴ」

中にいたのは布で顔半分を覆い、サングラスを掛けて顔を見えない様にした如何にも怪しい男三人

そしてトイレの真ん中には、恐らくクロロホルムとかそこら辺で眠らされたであろう縛られたところ嬢がいた

「何する積もりか知らねえが、止めておいた方が身の為だぞ」

「うるせえ！見られたからにはお前もタダじゃ済まさねえぞ！」

一番近くにいた奴が俺に銃を向ける、残念ながら飛び道具が無いんだよねえ

ここは大人しく両手を上げておくか

「へっ！素直じゃねえか、動くんじゃねえぞ」

そう言つて近づいてくる男……阿呆め

射程圏内に入った瞬間、男の手首に左手でチョップを叩き込み銃を落とす

ノンストップでそのまま右拳で顔面を撃ち抜く、この表現が一番状況が分かりやすと

思うぞ

「なっ!? テメエー！」

落ちた銃を足で蹴り上げ、キャッチする…そして銃を抜こうとした男の頭へ投げる

もう片方は腹を蹴り飛ばし、壁に激突させておく

頭に銃が当たり、ピョッてる奴の顔面を掴み個室のドアへ叩き付ける

やつベドアにヒビ入っちゃった

良い子は真似しないでね、危ないから

「全く、世話の焼けるお嬢様な事だな」

「ここは様！ここに居られるのですか！」

「おや、黒服さん達の声が聞こえてきたな……あまり大事にならないようさっさと済ませるか」

「こころ嬢の縄を解き、その縄で馬鹿三人を縛り上げておく

俵担ぎでこころ嬢を持ち上げ、御手洗から出る

「お嬢様抱っこ？そんなロマンティックな事を俺がすると思つたのかお前から

「どうも黒服さん」

「導寺峠様！丁度良いところに……こころ様!？」

「お探しのお嬢様ですよ、あと男性用の御手洗に面白いものが転がつてるんで拾つおいて下さい」

「は、はあ……分かりました、誠にありがとうございます……また何か御礼をさせて頂きます」

「そうかい、じゃあ期待してるよ」

「そう軽口を叩いて会場にいるアリアの所へ戻る

「どこへ行ってたんだい旦那様」

「まあ少し野暮用がね……」

その後、発見された馬鹿三人はそのまま御用

「誘拐未遂だが恐らく公にはしないだろう、ホテルの面子的にも不味いものがある



まあその方がコッチとしても楽だからワインワインだな

## 31話

とある日…学校が終わり帰りの準備をしていると、リサからLINEで『今日はバンドの練習があるから、先に帰ってね☆』と来ていた

元から君と帰る予定は無かったんだがこれ如何に

バイトも無いし珍しく一人で帰れたので覚醒楽奏メタフィクションを口ずさみながら帰っていた、分からなかったらググツてね

「♪…ん？猫？」

帰路のど真ん中にちよこんと黒い子猫が座っていた、因みに俺は猫派です（唐突）

まあ基本的に動物は好きだね…人間みたいに脳内でゴチャゴチャと考えてから動く訳じゃなく、気紛れで動いてくれるから楽しい

じつとしてるので、少し撫でてから抱き上げる

何だろう、この猫誰かに似てるな…：気怠げでやる気の無さがヒシヒシと伝わってくる

「…あつ、モカか」

「呼ばれて飛びでてジャジャジャジャーン」

「お呼びでない今スグ帰れ」

「オ、ワタシニホンゴワカリマセ〜ン」

「I did n' t ask the lady hurry up go away」

「そもそも、呼んだのは幸貞さんじゃないですか〜」

「はあ…それで、お前だけってことは無いんだろ」

「モチのロンですとも〜、皆向こうの方にいますよ〜」

自分の後ろを指さすモカ、目を凝らしてみるといつものメンバーが息を切らせながら走って来ていた

「モ、モカちやくん！急に走って行かないで〜！」

「モカ！急に走り出すなよ！」

「ご苦労なこつたな、こんな幼馴染に振り回されるとは」

「あ、幸貞…何でモカといえるの？」

「よう蘭、どこからともなく急にこいつが出てきた」

「ふーん…とところで何してたの？」

「何かこの猫が誰かに似てる気がしてな」

すると抱き上げていた猫は俺の掌からすり抜け、腕を伝って俺の頭へと登った  
頭の上でぐでつ、と落ち着いた

「ん〜…あつ！幸貞に似てるんじゃないか？」

「俺？巴にはそう見えるのか…」

「いや、私もそう見えるけど」

「蘭ちゃんもかよ…俺こんなにする気のない目してる？」

「…してます（ね）」

「ハモらなくてもいいんじゃないかな…」

頭の上にいる猫を撫でながらそう言う…この猫、絶妙なバランスで俺の頭から落ちて

こない…やりおるな

「じゃあ俺は帰るから、またね」

「…え？」

「さよ〜なら〜」

何かまたハモってる気がするが、早く帰りたいのでスルーしていくスタイル

「まさか頭に寄せたまま帰るとは思わなかった…」

「同意するぜ蘭…と言うか、何であの猫も落ちないんだらうな」

「ん…爪を立ててるとか？」

「ひまりちゃん、流石にそれは無いと思うけど…」

「お腹空いた、今からパン買っていくいく？」

「何でモカは無反応なんだよ…まあそれがモカらしいんだけどさ」

「幸貞だったら夜ご飯の事を考えてるかもね」

「ブエッキシッ」

誰か噂してやがるな……そう言えば今日の晩飯何かな？

「たでーま」

「お帰り、そろそろ夕ご飯にするから着替えてきて」

「へいへい」

自室に行き、制服から部屋着へ着替える

そう言えばアリアから秘境界宿に誘われてたんだな……リサと友希那だけじゃいつも通りだし、アリア頼んで裕次と陽音達も行けるか頼んでみるか

「たっだいまー！」

「早かったね姉さん、もう夕ご飯出来るから序に幸貞呼んできて」

「おっけ〜」

と、着替えている内に晶奈も帰って来た様だ

チャチャツと部屋着のパーカーに着替え、晶奈が扉の前に来るタイミングを見計らって思いっ切りドアを開けた

「ゴンツ！と鈍い音が鳴り響く、おでこ痛そ〜」

「あべし!?!」

「あ、スマン態と」

「わ、態とでもね…やっていい事と、やっちゃダメな事があるんだよ…幸貞」

「扉の前に立つ貴女が悪い」

「私と呼んできてって言われたの聞いてたでしょ!? 扉の前に立つって分かってたでしょがー」

「だから思いつ切りドアを開いたんだろが」

「この愚弟が……」

「なんだとこの愚姉が」

「喧嘩しないで早く下に降りて来てくれる? もうご飯出来てるんだけど」

「はーい」

まあ、こんな事では喧嘩にはならない…そこそこ仲は良いと思ってるからな

それに晶奈も華蓮と同じであまりキレる事が無い、と言うか怒らない

しかし全く怒らないという訳では無い、数年に一度ブチギレる…勿論それは完全に相手に非があり殴つても問題ないような状況の時だけだ

それはもう凄まじい…男勝りの怒号を飛ばしヤツさんの様な言葉遣いになり、終いには母直伝『全力殴殺』を放つ

だからこそ滅多なことが無い限りは怒ることがない

「「いただきます」」

今日は回鍋肉に餃子と炒飯か…随分と高カロリーなものばかりですな、さては学校で腹が立つことがあつたな華蓮

「……ねえ、幸貞」

「なんだい華蓮さん」

「さつきから気になってたんだけど、そのフードに入ってる猫は何？」

「……………あつ、忘れてた」

なんかすつごい馴染んで普通に猫の存在を忘れてたわ、いい感じに俺のフードに収まってるし

「あ、本当だ…：フードに猫入ってるじゃん、拾つて来たの？」

「どうだろう、そうなるのか？何か抱き上げたら腕伝つて頭の上に乗られてさ…：それから完全に存在を忘れてた」

「最早鈍感とかそう言うレベルじゃ無くなって来てるわよ」

「それでどうするの？今更外に出させてのは可哀想じゃない？」

「飼うなら飼うで別にいいわよ…：仕送りは余る程あるし、子猫一匹なら余裕で養えるわよ」

「じゃあ猫の用品やら用意するものは俺が買ってくる、餌やりとかはもし俺が忘れてた



やつといってくれ」

「丁度明日休みだし行つてきなよ」

「ああ、そうする」

という訳で、今日から我が家に黒猫が一匹増えました

翌日

ウチの姉妹達は基本的に休みの日は必ず家にいない、という訳で俺は用品を買いに出かけるか

出かけようとすると、フードへうちの猫が入ってきた…え？一緒に行くの？まあ別にいいんだけどさ…黒フードに黒猫だからもう分かんねえなこれ

てな訳で買いに行くか

えーつと先ずは…キヤットフードかな、でもコイツ子供だしどうなんだろう…

まあいいか

低塩分の煮干しも買っておくか、水とか餌の皿はいくつか皿をかつぱらって代用すればいいし

後はトイレとそれ用の砂だな…結構な荷物になるなこれ  
取り敢えず会計を済ませる

「一度に買おうとか思わなければよかったな…やけに荷物が増えてしまった」

まあ致し方なし、さっさと帰って色々と準備しなくちゃな

「あれ〜？こんな時間に外に出てるなんて、珍しいね幸貞」

「おやりサさんですかい、まあちよつと買い物にね」

「そうなんだよ……つて、うわっ！何その量!？」

「二度に済ませようとか思ってた自分を殴りたいね……そう言えば友希那とは一緒じゃないのか？」

「今待ち合わせしてたんだ、これから友希那とお買い物だよっ」

リサはまだ分かるが……あの友希那が買い物と言うと音楽関係しか思い付かんな服とか買ってる姿が想像出来ない、まあだからリサが連れて行くんだろうな

「お待たせしてしまつてごめんなさいリサ……あら、幸貞？」

「おっ！来たね友希那、今幸貞と喋つてたんだよ」

「そうなの……それで、幸貞の持つてるその大量にある荷物は一体何かしら？」

「そう言えばアタシも聞いてなかった」

「ペット用品だよ……それも猫用ね」

「猫……!？」

流石は友希那、ねkと言いかけた辺りで既に目の色が変わっていた

本当に好きだよね君

「へー！猫飼いはじめたの？」

「ん……拾った、と言うかついて来たつて言い方が一番しつくり来るんだが……まあ飼いはじめたのは事実だな」

「じゃあ今度幸貞の家に見に行つていい？友希那も見たがつてるし」

「猫なら俺のフードに入ってるぞ」

その瞬間に友希那が俺の背後を取った：何だコイツ、暗殺でもする積りかよ

「焦るなよ…ほら」

フードから抱き上げ、友希那へパスする

「猫…いやーん」

「おうふ…」

「ゆ、友希那が尊い…」

友希那はリサと俺に会心の一撃を放ってきた、尊さ的に最早瀕死レベルまで追い込まれたんですが

鼻から尊さが溢れ出しそう

「リサ、写真撮っておけ」

「分かつてるよ、こんな貴重で激レアな瞬間を逃してたまるもんですか」

しかしあつちの猫友希那はにやーにやー言っているが、うちの猫さんは全然鳴かないな

多分鳴くことすら面倒なんだろうね、何となく分かる

「ああそうだ、アリアが旅館に泊まりに行かないかつて誘われたんだが…お前達もついて来るか？」

「え? いいの?」

「別に、寧ろアイツから誘ってきたらどうだって言われたからな…行くなら日程とか後で教える」

「じゃあ折角だしついて行つちやおうかな、友希那にはアタシが後で聞いておくよ」

「そうかい…予定ではあと二人程男友達を誘う積りだから」

「えっ…幸貞って、友達いたんだ…」

「おう何だ文句あるのかよりサさんよお」

「てつきりアタシ達とか他のバンドにいる娘達だけと仲が良いと思つてたから」

「別にアイツらとも仲が良い訳じゃないぞ、花音ちゃんと燐子ちゃんは別だがな」

「なんで変なところで素直じゃない上に変に素直なの…」

「だつてそれ以外のヤツらは大概相手にするだけ面倒だから」

「ふーん…幸貞は大人しい娘が好みと」

「まあ出来ればその方が好ましいな…友達付き合いとしてだけどね」

「だろうと思つたよ」

「そろそろ友希那呼ばなくていいのか? 出掛けるんだろこれから」

「それもそうだね…ゆつきなー! そろそろ行くよー!」

すると友希那の腕の中に収まっていたうちの猫さんは、飛び降りて俺の方へ寄つてき

た

何故か猫さんにめっちゃ見つめられたので抱き上げると腕を伝ってフードに戻った……自分じゃ届かないから手伝えって事だったのか

そういう名前決めてないな……帰ったら決めるか

「じゃあまたね幸貞」

「ああ」

「そ、その……幸貞……ま、また……」

「はいはい分かかってるって、機会があつたら触らせてやるよ」

「あ、ありがとう」

「どんだけ猫好きなんだよこの娘、普段のクールさから一転してるギャップが凄まじいよな本当に」

「まあ友希那も女の子ってことか……こう言うと友希那を女の子扱いしてないみたいな言い方になるがそういう訳じゃないからな？」

「取り敢えず俺もさっさと帰らねば」

## 32話

さて、時期はそろそろ夏……太陽の陽が照りつけ大地が焼ける季節

「……で幸貞にもんだーい！」

「急になんだよりサ」

何故かりサが俺の家に押しかけてきた、まあ今日は休みだし姉二人もいつもの様に居ないので別にいいが

「今からアタシがやろうとしてることは何でしょーか！」

「水着買いに行くとか言うんだろ？絶対嫌だからな」

「幸貞なら一瞬で答えるだろうな〜って思ったけど、やられてみると案外詰まんないね」  
「それを俺に言わんで」

するとリサはどこかに電話を掛け始めた、アリアか？いや確かアイツは夏に本国へ帰るとか言ってたし

どうもあの姉妹は暑いのに弱いらしい、まあ生まれがロシアだし仕方ないね

「……うん、うん……じゃあ今からね〜」

「終わったか？で、誰と話してたんだよ」

「ふっふっふっ…日☆菜」

「は？」

次の瞬間にはインターフォンが鳴っていた

ガタツと二人して立ち上がると同時に、俺はリサの両肩に手を置き押え付けるように力を掛ける

てか来るの速スギイ

「まあまあお客様、ゆっくりここで座っていればよろしかろう？」

「いやいやいや、押し掛けたのはコツチだしこれくらいはアタシがやるよ」

「何言つてやがるリサ、そんなのいつもの事だろ気にすんな」

「でもこのまま幸貞行かせたら絶対追い払うでしょ、折角呼んだのに意味無いじゃん！」  
「お前本音がダダ漏れになってんぞ、て言うか当たり前だろそんなの追い払わない方がおかしい」

リサと格闘していると、急かすようにインターフォンを連打し始める訪問者

インターフォンでマリオを演奏するな、つか出来んのかよそんな事

「…：はあ、取り敢えず出てくる」

「追い払っちゃダメだよ？」

「分かったよ」



ドアを開けると、案の定天災がムスツとした表情で待っていた

「もー遅い！待ちくたびれちゃったよ！」

「なら別に帰ってもよかつたんだぞ、寧ろその方が俺的に嬉しい」

「それは絶対やだもーん、りさちーがユツキーと水着買いに行くつて言うから来たんだもん」

「それでいいのか女子高生……で、氷川先輩的にそれは如何なんですか？」

何故か氷川先輩も来ていた、ストツパー係としては持つてこいなんて寧ろいて欲しかったから丁度いい

「わ、私としては……その……つ、付き合つてもいない人とそのような場所に行くのは……あ、あまり良くないと思います」

「ええー!!おねーちゃん一緒に行くようよ!!」

「おい、なんで行く前提で話を進めてんだよ」

「え?ユツキー行かないの?」

「行かねえよ、何でも不思議そうに聞いてくんだよ」

「だって女の子が水着選ぶんだよ?嬉しくないの?」

「いや全然、家でダラダラしてる方が数倍魅力的」

と言うかまず外に出たくない、こんなクソ暑中で態々外出する理由が見当たらない

そもそも何故海に行く前提で話してたんだリサは

「ねーいいこーよー!!」

「嬉しい、行きたいならリサと氷川先輩がいるだろ」

「それじゃ全然るんって来ないの!!」

「知るかよ」

「何、まだ言い合ってるの?」

俺の肩に顎を乗せ、後からひよこつとりサが顔を出す

すっごい密着してるんですが、コイツ割とデカいんだよな…本当に高2かよ

「いいじゃん幸貞く行こうよ」

「このクソ暑い中外に出るって? 論外だね、俺は家にいる」

「幸貞さー、休みの日って全然外に出ないじゃん」

「今のは聞き捨てなりませんよ導寺峠さん、休みの日だからといって一日中家で寝ているのは体良くありません…適度に外へ出て運動しなくては学生としての健康を損なうかもしれません、いいですか? もう導寺峠さんも高校せ（ry）」

「あつ、狙いやがったなりサ」

「ふっふっくん、狙い通り」

「聞いているんですか導寺峠さん?」

「分かった分かった、行けばいいんだろ行けば」

リサと日菜は『イエーイ』とか言っつてハイタッチをする、テメエら後で覚えておけよ

さて、そんな訳でショッピングモールまで出てきましたよ…超不本意だけどな

「なあ、本当に俺も一緒に入らなきゃ駄目なの？」

「幸貞に感想貰おうもしてるのに本人が来なくてどうするの」

「その役割は俺でなくてもいい気がする」

「ダーメ、ほら行くよ」

男一人、何が悲しくて女性物の水着売り場へ入らなきやアカンのや

こういうのは燐子ちゃんとか花音ちゃんに着させて恥ずかしがる姿を見る方が楽しいだろ

そこの君達もそうだろ？

何の話かつて？別に気にする事はない、ただのメタだ

「ねえねえ！ユツキー的にこれとかどう？」

「ん？…ああ、いいんじゃない？」

「えーなんかテキトー」

「正直な話、お前から何でも似合うからどれがいいとか困るんだが」

「ねえユツキー、それ素で言ってる？」

「はあ？何の話してんの？」

「幸貞つて唐突に凄いこと言うからねー、日菜も気を付けておきな」

「うん、そうするよりさちー」

さつきから何の話してんのコイツら？全くついていけないんだが

因みに氷川先輩はあつちの方で顔を赤くしながら水着うぶを見てる、初はつか貴女は

「うん…どれがいいかなあ」

「日菜だったらく…これとかどう？アタシ的に日菜のイメージカラーが水色なんだよね」

「あ！これるんって来た！」

「ホント？よっかた」

因みに未だに顔を赤くしながらその辺にある水着を見て回る氷川先輩、恥ずかしいけど気になって見て回ってしまう初な女の子だね

「買うもの決めたからお会計済ませてくるね」

「楽しみにしててよユツキー！」

「はいはい、分かったからさっさと行ってこい…俺は外にいるぞ」

「分かったら、じゃあパパッと済ませてくるね」

店を出る前に氷川先輩にも声を掛けてくか

「氷川先輩、俺はもう外に出てますが…まだ見えますか？」

「わ、私も外に出ます」

「氷川先輩は買わなくていいんですか？」

「別に私はいりません、夏休みは遊びに行く時間など無いので」

「バンドですか？」

「それもあります、勉強や自主練習もありますので」

さつきリサはウキウキ気分で水着を買いに行ったのだがこれ如何に

まあ詰め込み過ぎるのも宜しくないし、時偶の休養も大切だぞ

友希那とかも同じこと言いそう、てか絶対言う…そしてリサに引つ張られて海に連れ  
てかれるんだらうな

「お待たせー!」

「来たか…で、この後どうするんだ?」

「そろそろお昼の時間だし、どうせなら食べていく?」

「アタシさんせーい!おねーちゃんもいいでしょ?」

「私はどちらでも構いません」

「そう、じゃあ食べてくか」

という事なので、お昼は某イタリアンファミリーレストランに入った

めっちゃ安いよねここ

と言うか氷川姉妹の食べる量がえげつない、一人で2000円分位の量を平らげてた  
まあ俺もそのくらい食べたけど、男子と女子じゃ食べる量は違うじゃん?俺と同じ  
量食べるとかヤバいだろ

リサは pasta 食ってた

「はーお腹いっぱい!」

「ゲーセンで使う金が残ってくれるから安くて助かる」

「幸貞ってそれ以外にお金使わないの？」

「使わん、別に欲しい物がある訳でもないのに無闇に使うか」

「男の子ってそう言うもんなのかな？」

「知らんな」

さて、買い物も終わって飯も食ったし…もう帰りたいんだが

「すみません、御手洗に行ってもいいでしょうか？」

「あ、俺も行くわ」

「分かったら、じゃあアタシ達はあっちで待ってるね」

あくスツとしたぜえ、取り敢えず氷川先輩待つてよう

「あつ、待つていたんですか導寺峠さん」

「まあ一応、変な奴に絡まれてもこつちが面倒なんで」

「ふふつ、そうですか」

待つて、何かデジャヴ：大概リサとか友希那辺りを女の子だけで待たせるとアレなんだよね

「おつ、2人とも可愛いね：俺達と遊ばない？」

「あのく友達待つてるんでそう言うのはちよつと：」

「いいじゃんいいじゃん、友達つて女の子？だったら皆で遊ぼうぜ」

出 た

な

D

Q

N

ほら見ろこうなつてんだろ全く：はあ、面倒臭いなあもう

「導寺峠さん、あれ：」

「分かってますよ、俺がどうにかしてきますから」

「：：：すみません、頼みました」

「頼まりました」

リサと天災の方へ歩み寄る、すると逸早く天災が俺に気が付いた

なんかこう、パツと表情変えて尻尾振つてる様に見えるな：犬だ、まさに犬だな



「あ？誰だお前、いきなり出てきやがって」

「悪いがそいつらは俺のツレなんだわ」

「はあ？おいおい横取りは感心しねえなあ」

「それに…そんなに遊びてえなら俺が相手になるぞ？顔面戦闘力共」

その一言だけで3人いた男達全員が青筋を立てた

馬鹿は扱いやすくて助かる、簡単にこつち<sup>喧嘩</sup>方面へ引きずり込める

解決（物理）が早くて楽だわあ

「ああ!?!舐めてんのかよ teme エ！」

「ハイハイ御託はどうでもいいからさっさと済ませね？丁度そこにいい感じに人が来ない場所があるんだ」

「上等じゃねえか！」

数分後

「はあ〜つつかえ」

「あれ？あの人達は？」

「随分とあそこの床が気に入ったみたいでな、気絶するように眠ったよ」

「それ普通に気絶したんじゃないの？」

「知らん、根性の無い奴らだったけどな…もう帰ろうぜ」

という事で帰宅

家に着くとこの前拾った猫が俺の足元へ駆けてきた、因みに名前は『ユキ』になった黒猫なのに雪って…と思ったが、正直他に考えるのも面倒なので決定した

しかしアリアは俺の事をユキと呼んでたよなあ、まあいいか

抱き上げると腕を伝って頭の上へぐでつと落ち着いた

「ただいま…あら、貴方も今帰ったの？」

「ああ、少しリサ達の買物に付き合わされてな」

「その買物水着と見た」

「何で分かんだよ怖いわ」

「時期的に夏に近付いてくるし、リサちゃんならそうだろうなあとおもってね」

「さいですか」

「あら、ユキはまた頭の上に鎮座してるのね」

「どうやらお気に入り様ですよ」

「そう…じゃあ夕飯作るから待ってなさい、姉さんもそろそろ帰ってくると思っわよ」

「へいよ、部屋で待ってる」

部屋に戻って音ゲーをしているのだが、ユキが全く落ちてこなくてスゲー

どんなバランスで俺の頭に落ち着いてるんだこの猫

しかも一回も起きないし、こいつはたまげたなあ  
まあこの後は特に何もなく、夕飯食って寝て終わり  
明日学校やんけえ…さっさと夏休みに入らんかなあ

## 33話

クソあちい今日この頃……まだ梅雨が開けていないにもかかわらず、何処も彼処も高気温を叩き出していた

「あつっっい……幸貞くっんあつっっい」

「丸山先輩、存在が暑苦しいです」

「えっ!? 私そんな暑苦しい!?!」

どこかの太陽擬きもどよりは暑くないけどね

もつとお、熱くな r ( r y

まあそれはどうでもいい、俺は今何故か丸山先輩と昼飯を食っている……よく分からんが連れてこられた

因みに女王様は飲み物を買に行つた

「はい、飲み物買ってきたわよ」

「わあ! 千聖ちゃんありがとう!」

「ほら、貴方にも」

「ああ、悪……」

こいつホットコーヒー買ってきやがった、くそやられた

通りでニヤニヤしながら自ら名乗り出た訳だ：狙ってやがったなこの野郎

「本当、いい性格してるよなアンタ」

「え？ちよ、ちよつと！何で少しづつ私のほっぺに近づけてくるの!？」

「そういう貴方もいい性格してるじゃない」

「待つて幸貞君！熱い！ほっぺ熱いからあ！」

丸山先輩の頭を鷲掴みして、逃げれない様にしながら頬へ熱々のコーヒーを押し当てる

「冗談よ、こつちも買ってきてあげたから」

「最初からそれを渡して下さい」

押し当てていたコーヒーを離し、受け取った炭酸飲料を丸山先輩の頬へ当てる

「ひやつ！はあく冷たい」

「そのコーヒーは要らないなら貰うわよ」

「別にいいですよ、飲みますから」

「そう、律儀ね」

「無料タダほど美味しいものはない」

「前言撤回するわ、とんだ屑ね」

ひでえ言われようだなあ全く、誰しも人から奢ってもらう飯は美味いと感じるだろ？  
人間なんてそんなもんだぜ

「で、何故俺を昼に誘ったんですかね」

「相変わらず嫌に鋭いわね…変な所で鈍感の癖して」

「大概貴女方に誘われる時は何かしら面倒事を持つてくるんで」

「あら、酷い言われようね」

「事実ですし今までの経験上、そんな事しか無かったんですよ」

「そうだったかしら？あんまり覚えてないわね」

すつとぼけてんなこの人、確信犯じゃないですかヤダー

満面の黒笑を浮かべながらこつちを見るんじゃないよ、笑顔が黒く輝いてるから

「冗談よ、いつも助かってるわ」

「左様ですか…で、今日呼ばれた理由は？」

「まあザックリ言えば仕事のお手伝いをして欲しいの」

「まあいつもの事ですね…何のですか？」

「撮影の付き添いよ…ほら、柿谷さんも女性じゃない？そうになると男手が足りなくて」

「要は荷物持ち兼雑用か、まあ別にいいけど」

「ありがとうね、幸貞君」

次の休みに朝から事務所へ集合らしい、どうやら撮影場所は少し遠い様なので柿谷さんの車で向かうそうです

一体どこまで行くんでしようねえ、姉達は休みの日家にいないからユキを家に残していくのは少し不安なのだ

てな訳で日は過ぎ去り休みに突入

「あ！おはよう幸貞君、毎度の事ながらごめんね」

「どうも柿谷さん、別に気にしなくていいですよ…もう慣れてきたんで」

「もういつその事マナージャーになる？」

「やめておきます」

超輝く笑顔で言われたので俺も満面の笑みで返しておいた

柿谷さんの車デツカイワンプックス、まあパスパレ5人と俺が乗れるんだもんな

「やつほー！おはようユツキー！」

「はいはいおはようさん、朝から元気だねえ君」

「ユツキーも一緒に来るって言うから昨日からるんって来てたんだ！」

「左様ですか」

そう言えば座席の組わせはどうするんだろうか

いやもうここは俺が前に座って後部座席にあの娘達を座らせればいいだろ

寧ろそれ以外ありえないよな、当たり前前だよなあ

そんなことを思っていたら全員が揃ったように

「じゃあ揃ったみたいだし、皆車に乗っちゃって〜」

「あら？どこに座ろうとしてるのかしら幸貞君？」

「何処って、普通に柿谷さんの隣だろ」

「ええー!!一緒に座ろうよ〜!!」

「ええ、何だよ」



「一緒にすーわーろーうーよー!!!」

「ほら、日菜ちゃんが言うんだから早く後部座席に座りなさい?」

「ええ……(困惑)」

そんな訳で何故か一番後ろの席にイヴと天災に挟まれる形で座らされた

因みに女王様が柿谷さんの隣、真ん中は丸山先輩と麻弥ちゃん

この座席組み合わせで車が動き出した

「ねーねーユツキー、最近のおねーちゃんどんな感じ?」

「氷川先輩? そうだな……」

何かそういえば最近、これまた何故かリサと友希那に連れて行かれ強制的にRose  
liaのアドバイスをする事になった時があつたな

確かその後いつものファミレスに寄って飯食って帰って…隣が氷川先輩とあこに  
挟まれてたなああの時は、前の席に友希那とリサと燐子ちゃんが座ってた

それで本題なんだが、氷川先輩は頼んだハンバーグを綺麗に平らげていたのだがポツ  
ンと人参だけが残っていた

「あれ? 氷川先輩、それ食べないんですか?」

「つ…え、ええ…もうお腹が一杯になってしまったので」

「そうなんですか…じゃあ食べましょようか」

「いいんですか?」

残った人參をフォークに刺し、持ち上げ……スツと氷川先輩の口へと運んだ

突然の事で氷川先輩は一瞬何をされたか分かっていなかったが、みるみる内に顔が青ざめていった

そして急いでコップを手に取り、勢い良く水で流し込んだ

笑つてない目をしながら満面の笑みで俺を見てきた

「……………導寺峠さん?」

「いやほら、言つたじゃないですか……『食べましようか』つて、イントネーションだけで意味が変わるつて日本語は難しいですねえ」

「そう言う問題ではありません」

思いつ切り俺の両頬を引っ張る氷川先輩、結構痛いんだが

流石に力で女の子には負けないので、両頬から氷川先輩の手を引っぺがす

「ちよ、痛いですよ……しかし意外ですね、氷川先輩にも苦手なモノがあつたとは」

「べ、別に苦手なモノの一つや二つ私にだってあります」

「いやくしかし風紀委員長様にまさか嫌いな食べ物があるとはなあ、出されたモノは食べなきや作つてくれた人に失礼では?」

「うっ……そ、それは……そうですが……」

「じゃあこれも食べなきゃダメなんじゃ無いですか？」

満面の笑みを浮かべながら人參を刺したフォークを氷川先輩に近づける

一瞬で青ざめ、俺の腕を掴み抵抗する

「幸貞く、もうその辺にしといてあげなよ」

「いやー、ね？氷川先輩を弄る事ってあんまり無いから楽しくてつい」

「相変わらずの性格をしてるわね、幸貞」

「ていうかお前ら二人分かっているんなら助けてやれよ」

「やってる本人が言うことかしら？」

ド正論でございますね、とまあこんな事があつたなあ

「いや、別に特に無いけど」

「えーそうなんだ、何かあると思っただけだなあ」

「その割には随分と長いこと考えてなかったかな幸貞君……」

まあ言いませんけどね、言ったら言つたで面倒臭そうなんでね

そして丸山先輩、それは言わないお約束

しっかしかれこれ1時間程車は走っているのだが、目的地につく様子は無い

結構遠い所なんだな

そしていつの間にか俺の膝には天災が横たわっていた、寝てるわこの娘

「なあイヴ、これ今どこに向かっているんだ？」

「チサトさんから聞いてませんか？」

「いや何も」

「これから海で撮影があるんですよ！」

「へえ………ん？海？」

「はい！」

あつ……（察し）ふーん

読めたぞこれ、さては水着撮影だな……あの<sup>女王様</sup>人自分が楽しむ為に俺を呼びやがったな

まあ女の水着どうこうで俺がどうなるとも思えんが、一杯食わされたのはしてやられ

た

という訳で海に到着致しました、荷物降ろしをして海辺目をやる  
どこの海だか知らないが超綺麗だな

「幸貞くん！こっちだよー！」

「はーい」

柿谷さんと呼ばれたのでさっさと向かいましたよかな

「まあ予想通りだな」

「詰まらない反応ね、もう少し慌ててもいいんじゃないかしら？」

「俺が慌てると思うか？」

「想像できないから見てみたいと思うんじゃない」

「はいはいそれで御座いますか」

予想通りパスペレの水着撮影会でした、全員イメージカラー通りの水着を着てるから笑ったけど

いやーしかし流石はアイドルだわ、健康的な肉体をしていますわ

そしてやはり麻弥ちゃんが一番だな：何がとは言わないけどね、まあ女性はそこだけが大事という訳じゃないし

しかしこう見ると本当ひまりちゃんえげつないモン持つてるよなあ、何食ったらあんなに育つんだか

「みてみてユツキー！これ前に一緒に買いに行ったやつなんだよ！似合ってる？」

「似合ってる似合ってる、だから取り敢えず飛びつこうとするな」

「ありがとユツキー！」

「だから飛びついてくるなって言ってるんだろが」

頭を抑えて飛び付けないようにしてはいるが：ていうか水着の状態で男に抱きつこうとするなよ

「ていうかさっさと撮影に行つてこい」

「ほら日菜ちゃん、早く行かないとスタッフさんが困ってるわよ」

「はい」

パスペレの娘達が撮影に入ったので暇になった、しつかし海が綺麗だなあ

そして何より暑つつい、ひたすらに暑い…マジ溶ける

「お疲れ様、幸貞君」

「ああ、お疲れ様です柿谷さん」

「毎度付き合ってもらってごめんね」

「まあ暇なんで構いませんよ、やる事も無いんでね」

「そうなの…それで、皆の水着はどうだった？」

少しニヨニヨしながら聞いてくる柿谷さん、そう言えばこの人ってこういう人だったなあ

「どうも無いですよ、皆似合っていましたし」

「あはは、流石は幸貞君…あれじゃ動じないか」

「何を期待していたんでしょうね、全く」

「いや、幸貞君もお年頃の男子高校生だから、何かあるかなあってね」

「生憎と俺は普通では無いんでね、そこら辺の男子高校生と比べられちゃ困りますよ」

「自信満々に言うところじゃ無いと思うんだよねそれ」

知ってますよ、だがこれが俺の個性だ

誰にも無い…ていうかこんなの量産されてたまるかかって個性だからな

因みに撮影が終わった後、時間が余ったららしくパスパレの娘達は海で遊んでいた

そして相変わらずの女王様、全員に日焼け止めを塗っていた辺り流石ですわ…抜かりなし

そんな感じで俺の一日が終わった……しかし夏かあ、何するか全然予定決めてないな

まあ家で適当にゴロゴロしてるか、多分優珠も帰ってくるだろうし……何だかんだで予定埋まりそうだな畜生



## 34話

さて、俺にも夏休みという名の長期休暇がやってきた訳だ

だが俺だつて男子高校生、有り余る体力を程々に使いたいなあと思う今日この頃……だが面倒なのはお断りだ

そんな訳で *circle* でバイト中、まりなさん曰く『夏休みなんだから皆と遊んで来なよ〜!』らしいが……はてさて皆とは誰の話かな? (すつとぼけ)

「にしてもあつちいですねぇ……」

「ホント暑いよねえ〜」

「まあここはクーラー効いてますから涼しいですけど、外は半端ないツスね」

「だねえ〜:あつ、今日はポピパに *Roselia* と *after glow* して幸貞君の知り合いが沢山来るからね」

「うーわマジですか、面倒くせえ」

「相変わらずだねえ幸貞君……」

だつてねえ、こんなクソ暑い中であんな面倒な奴らと……特に香澄とか花園とかさあ、ポピパの奴しか上げてないのは別に悪意じゃないからな?

いやまさかね、俺がそんな事をね

「幸貞君は夏休みに予定とかないの？」

「いや、特に無いですね」

「そうなの？ てつきりあの娘達と出掛けるのかと思つてただけだなあ」

「まあ若しかしたら連れ出されるかもしれないませんがね」

「あ……成程ね」

そんな事を話していると、どうやらアフグ口の娘達が到着したようだ……一番にひまりちゃんが駆け込んできた

あんまり走らない方がいいと思うよ、うん……何故つて？ そりやあなあ、あんなデカいもん持つてたらねえ？

あと汗とかで服透けた（ry

「涼し……」

「こんにちは、相変わらず元気いいねえ」

「あ！ お兄さんこんにちは！ まりなさんもこんにちは！」

「ひまりちゃんこんにちは」

「これ予約の鍵ね、クーラー効いてるとはいえ水分補給は忘れんなよ」

「は……」

つぐみちゃんとひまりちゃんが元気な返事を返してきた

あゝ癒されるねえこの娘達

アフグロの娘達が行ったあと、若干ニヤニヤしたまりなさんが話しかけてきた

「やっぱり仲良いねえゝ幸貞君」

「そうですかね…まあ、仲が悪い訳じゃないんでそうかもしれないですね」

「素直に仲良いって言えばいいのに…捻くれてるよねえ」

「それが俺なんでね」

「まあ確かに幸貞君らしいと言えばそうだけどさ」

そうだよ（便乗）

まあこれがなかったら最早俺の個性なんてものは無いと思うね

次にやってきたのは *Rosealia* の娘達、燐子ちゃんが大丈夫じゃなさそう

「ようお前ら、水分補給給ちゃんとしとけよ」

「やつほー幸貞、相変わらず変な所で気が使えるよねゝ」

「何だよ変な所って…まあ自覚は無きにしても非ずだけどさ」

「多少はあるんだ…」

「幸貞、早く鍵を頂戴」

「ああはいはいこりや失礼……はい、これな」

銀髪美少女様に急かされてしまったよ

友希那へ予約されていた鍵を渡すと、全員に声をかけてさっさと行ってしまった

「あ！そうだ！」

「おん？どうしたあこちゃん」

「幸貞さん幸貞さん！夏休み中に一緒にゲームしましょうよ！」

「ゲームってアレのこと？別にいいよ、連絡くれればいつでもするよ」

「わーい！やったねりんりん！」

「いいん…ですか？幸貞さん、予定とかは…」

「別にこれといって無いし、偶には廃人になるのも悪くない」

「そ、そう…ですか…」

「じゃあ今度やりましょうね！」

ご機嫌にスキップしながら友希那達が入っていった部屋へ向かったあこちゃん

そんなに嬉しい事なのかそれ…

「幸貞君、そのゲームって何？」

「ネットのオンラインゲームですよ、名前まではしつかり覚えてないんですがね」

「へえ、幸貞君もネットゲームとかするんだ」

「まあ正直アレは別物と考えてますよ…何しろ俺を廃人にまで至らしめたゲームですから」

「そ、そうなんだ…面白いの？」

「詰まらないゲームをやり込む程暇じゃないですよ」

「だよね〜」

最後にご登場はポピバだ、香澄がひまりちゃん同様に駆け込んできた

その後からいつものメンバーが来て……ん？何でりみちゃんのお姉さんが一緒に居るんだ？

「幸貞君にまりなさん！こんにちはー！」

「はいはいこんにちは、そんなデカい声出さなくても聞こえてるよ」

「あはは…こんにちは香澄ちゃん」

「はいこれ予約の鍵ね、ちゃんと水分補給しとけよ」

「幸貞つて変な所で気が使えるよねえ」

「沙綾、それリサにも言われた」

「ふふ、そうなんだ」

少し微笑み、部屋へと向かっていく沙綾…と、それについて行くポピバ一行

そして何故かここに残るゆりさん

「久し振りく幸貞君っ」

「どうもゆりさん、にしても何でここに？」

「幸貞君に夏に合うハーブティーを作ってもらおうかなって思つて」

「それだけだったらりみちゃんに頼めば良かったんじゃ？」

「後はまあ暇だからかな、幸貞君とお喋りでもしようと思つて」

チラツと隣を見ると、いつの間にかまりなさんの姿が消えていた

あの人こういうの好きだよねえ…二人きりになつたらからって別に対して変わらな  
いけどさ

「何かまりなさん居なくなつたんで、そちらの椅子を使つても構いませんよ」

「え、でも帰ってくるんじゃ」

「いや、当分帰つてこないんで」

確信を持つて言えるね、ゆりさんが帰ると同時にひよっこり顔を出すと予言しておこ  
う

「そ、そう？ならお言葉に甘えて〜」

「それでゆりさん、何を話しに来たんですか？」

「実はこれといつて無いけど…あ、そうだ！文化祭あるのは知ってる？」

「ああ、まあ先生が言つてましたから…多少の事は」

「お、なら話が早いね…その文化祭でライブをやろうと思ってるんだけど、幸貞君出てみない?」

「俺がですか?でもメンバーはどうする積もりですか、俺一人じゃ出来ませんよ」

「そこなんだよねえ、弱る所は…幸貞君の腕前はりみから聞いているから知ってるんだけど…」

あれりみちゃんいつ聞いてたの?ああ、ゴールデンウィークの時か

ていうか何でお姉さんに言っちゃったかなりみちゃん…

「あー……因みに他校から呼ぶのはありますか?」

「それなら大丈夫だよ、出張演劇で瀬田薫って娘が来るらしいし」

「え?来るんですか?」

「うん、何でも白鷺千聖ちゃんとロミオとジュリエットをやるとか何とか…それで、それがどうかしたの?」

「羽丘に姉がいて、姉なら組んでも大丈夫かと…それに多分成人した姉も来ると思いますし」

「おお!そうなんだ!ならお二人に頼んでおいてくれる?」

「構いませんよ、助力出来るなら光栄です」

「うん!りみがあれだけ絶賛するんだから間違いないと私は思ってるよ!」

「ただけ絶賛したんですかねりみちゃんは…」

「そんなにハードルをガン上げされても困るんだが、まあやれるだけやるけどさあ」

「あつ、私はそろそろ時間だからこれでお暇させて貰うねっ！お喋りしてくれて有難うね幸貞君！」

「暇が潰せたなら何よりです、ハーブティーは早いうちに作ってりみちゃんに渡しておきますね」

「うん！宜しくねっ！」

ウインクをして去って行くゆりさん、最後の最後であざとさを残して帰って行くかやりますねえ

「お話し終わった？」

「予言通りひよっこり現れましたねまりなさん…って、そのクーラーボックス何ですか」

「いやあ何かね、外に出てたら急に強面の方に声を掛けられて『幸貞への差し入れだが、みんなで食べてくれ』って」

「……因みに名前聞きました？」

「確か鬼牆？って言ったかな」

「あーやつぱおヤツさんかあ、ていうか何であの人俺がここで働いてるの知ってるんだ？まあ調べ様なら幾らでもあるけどさ」



「幸貞君のお知り合い？」

「そんな感じですね、中身なんですか？」

「あつ、まだ確認してなかった」

クーラーボックスを開けると、中には大量のアイスがドツサリと入っていた

流石おヤツさん太っ腹ア、ていうか本当に優しいよなあおヤツさん

「おおアイス！皆も呼んで食べよつか！」

「そうですね、時間的にもいい休憩時間になりそうですし」

「じゃあ私が呼んでくるね」

「わかりました」

数分もしない内に今日来ていた全員がフロアに集まった

飛びかかろうとしていたモカの首根っこを掴み、並ぶように全員へ指示した

分配が終わったので一休みしていると

「幸貞あーん」

「ん？おぐつ……」

「美味しい？」

「うん、美味しいな」

リサがアイスを口へ突っ込んできた、結構冷たかったから柄にもなくビックリしてし

まったな

「幸貞は食べないの?」

「俺は別にいいかな」

「そう? 冷たくて美味しいのにな」

そう言つて隣へ座るリサ

しかしまあこう改めて見回してみると…美少女ばかりだなあ、ここには居ないがパ  
スパレだつてアイドルだし…ハロハピのアイツらだつて可愛いからなあ

花音ちゃんと美咲ちゃんは可愛いからか(確信)

「いや〜こう見ると幸貞も友達増えたよね〜」

「まあそうだな、知り合いは大分増えたな」

「む〜…素直じゃないなあ幸貞〜このこの」

「捻くれて者ですから…ていうか頬を突くな」

「お兄さくん、もう一本いいですか?」

「何だモカ、もう食つたのか…別にいいが食い過ぎると太るぞ」

「幸貞…あんまりそういう事を女の子に言わないの」

「こういうのははぐらかさずにストレートに言つた方がいいんだよ」

するとモカは「ふっふっふ〜」と含みのある、そして何処と無く態とらしい笑いを浮

かべて

「大丈夫ですよ、カロリーは全部ひーちゃんに送ってますから」

「ちよつとモカ!？」

「……ほう、成程」

「お兄さん!？」

それならその育ち過ぎた双丘の説明がつかぬ、モカから送られたカロリーを全部吸い取っていると考えればまだ納得は出来る

と、ひまりちゃんが半泣きで俺の方へ駆け寄ってきた

「お、お兄さん……私ってやつぱり……ふ、太って?」

「いや全然」

「で、でも……最近体重が……」

いや、多分それ双丘が育ってきてるだけなんじゃ……

あとその体型で太ってるとか言う世の中全ての女性を敵に回すと思うぞ

「そこまで気にしなくていいと思うがな……ていうかその気持ちがあるならアイスの二本目を食べるなよ」

「あつーいや、これは……その……」

「おいモカ、誰が三本目食っていいって言ったよ」

「えくダメなんですか〜?」

「駄目だ、食い過ぎ」

「そんな〜」

モカからアイスを取り上げる

そのまま戻すのもアレだし、俺が食うか：アイスなんて何年ぶりだろうか

買ってはいるが、晶奈が殆ど食べちまうからなあ

さて、取り敢えず今日の残りも頑張りますか

## 35話

「幸貞、海行くわよ」

「……………は？」

只今の時刻8時を少し過ぎた頃……………寝起き一発目に我が姉の華蓮から言われた言葉がこれだ

何を言ってるんだこいつは

「何言ってるんだこいつみたいな目で見ないでくれる」

「起きてすぐにそんな言葉を投げられてもそんな感情しか湧かねえよ」

「まあ確かにそうかもね…でも事実は事実よ、早く準備しなさい…因みに貴方の海水浴道具は準備済みだから着替えて顔洗って朝ごはん食べて来なさい」

既に準備万端なのかよ、用意周到にも程があるだろ

ベッドから起き上がりパパッと着替えと顔洗いを済ます、下に降りると晶奈が朝食を食べているところだった

「にしても、何でまた急に海なんて言い出したんだ」

「あーそれ私が会社から『海の家使い放題券※ドリンク飲み放題、食べ物別料金』を

貰ってきたからだよ……因みに券があれば人数関係無しだつてさ」

「成程ね、しかも期限が今日までつて……悪意しか感じないんだが」

「まあそれはしょうが無いじゃない、そんな訳でこの券が有効な内に行こうつてなつてね」

「因みにそれ何時決めた」

「昨日の23時」

もつと余裕を持つて言つてくれmy sister……まあ券を貰つたのが昨日らしいし、仕方が無いと言えば仕方が無いか

「何で行くんだ？」

「私が車出すよ……ああ、因みにリサちゃんと友希那ちゃんも一緒に行くから」

「……あ、そう……」

「そろそろ来ると思うよ」

まあそんなこつたらうとは思つたよ

晶奈の言う通り、数分したら家のチャイムが鳴つた……勿論の事リサと友希那がドアの前に立っていた

「おつはよー幸貞！」

「おはよう、幸貞」

「ああ…おはようさん、お二人共…：…て言うかお前ら昨日23時まで起きてたのか？」  
「まあ色々とやることがあったからね〜」

「私も少し歌詞を考えていて、遅くなっちゃったわ」

「成程ね…それで良くOK出したな、特に友希那」

「…：…リサに無理矢理連れて来られたのよ」

「はい乙」

「因みに友希那の水着はこの前出掛けた時にこのアタシ監修だから期待しておきなよ  
！」

まあ、んなこったろうとは思ったけどね

そして水着までリサに選ばれたのか、まあそういうセンスはこの娘に任せておいた方が  
がいいと思うけどね

「揃ったー？」

「あつ！晶奈さん今日はよろしくお願いします」

「気にしなくていいよ、こう言うのはお姉さんに任せときなさい」

「華蓮はどうした」

「もう来るから先に車乗っちゃって…おつ、相変わらずカツコイイねえ友希那ちゃん」

「あ、ありがとうございます」

「はよ車開けろや」

何してんだよこいつ、車乗せるなら早くドアを開けろつての…その後華蓮も揃い家を出た

座席順は俺が助手席、後ろに華蓮とリサと友希那を座らせた…生憎とウチの車はワンボックスじゃないんでね

そう言えばどこ行くか聞いてないな

「どこの海行くんだ？」

「葉山だよー、私の友達がそっちに住んでるしシャワー借りようと思つてね」

「…友達つてまさか、アリアじゃないだろうな」

「さっすが許嫁分かってるう〜」

「ぶっ飛ばすぞ teme」

「酷い！」

「てかアイツの場合、住んでるんじゃないやなくて別荘だからな…えげつねえわ」

予想はついてた、だがこいつに言われると何故か途轍もなく腹が立つ

葉山ですか…俺は二回目だな、アフグロの娘達と遠征ライブに行つて以来だな

アリア達はどうかやらこつちに居るらしいな、夏はいつも本国に帰つてたと思つたんだ

がな



「そんな訳だからえっちらおっちら行くよ」

「葉山か…この前は春先だったし、夏場は初めてか」

「取り敢えず楽しみにしときなつて」

楽しみにねえ、俺としては家でダラダラしてたかったんだがな

「ここ最近は何だかんだと連れまされたし、バイト先でアイツらの相手したりしてんだから俺は

「あ！そう言えば今日は浜辺の方で小さいフェスがやってるらしいよ！因みに自由参加  
！」

「そうなの……これなんて読むのかしら……いつしよく？」

「一色いっしきな」

「……す、少し忘れてただけよ」

やつぱポンコツだなこの銀髪美少女、歌とか音楽に関しては良いんだが…どうも他の事はポンコツだよな

あと必死に笑いを堪えてるリサが面白い

「んで、出るのかね友希那」

「私は、そうね……リサが出てくれるならやりやすいわね」

「勿論アタシは友希那が出るなら出るよ〜！」

「幸貞はどうするの」

「華蓮、語尾が上がってないからクエスションが付いて無くて威圧感があるんだが？」

「別にそんな積りは無いわよ？ 唯、幼馴染二人が出るのに我が弟はどうするのか気になっただけよ」

嘘吐け絶対出させる気だゾ

このクソ暑い中なのに何でフェスなんかに出なきやいけんの

俺は出ないよ、疲れる」

「あつそう、まあそんな事だろうとは思ったわよ」

「なら最初から聞かんでくれ」

そんな訳で葉山にあるアリアの別荘へと到着した

執事さんが出迎えてくれ、アリア達がいる部屋まで案内をしてくれた

「やあ、久し振りだね皆様」

「荷物はその辺に置いていいよー」

「何だ、姉妹揃って居るのか…：てつきり本国に帰ったのかと思つてたんだが」

「ふふ、僕も最初はそうしようかと思つたんだが…：今までに旦那様へ水着を見せたことがないと思つてな」

「因みにアリスさん特製水着だから期待してなよユーちゃん！」

「ハイハイ左様ですか…」

「それでは女性の方々は僕に付いてきてくれ、更衣室まで案内しよう」

俺以外は全員女性なんで俺は一人部屋に残されたんだが、どうしろと？

そう思っていると執事のお爺さんが対応してくれた

「幸貞様はここでお着替えになつて下さいませ」

「ああ、どうも」

用意周到に華蓮が準備した水着へ履き替える

て言うかこの別荘凄いな…：浜辺まで歩いて行ける距離にあるとかマジかよ、流石は口

シアの財閥

「……それにしても幸貞様、かなり鍛えてらっしゃるんですね」

「いや、過去にやってたモノの名残ですよ」

「昔に何か嗜まれておられたのですか？」

「まあ少し、興味本意で武道系に手を出してた時期がありました」

「それで御座いましたか…今はもう？」

「はい…まあ何と言いますか、飽きましたかな」

「成程、左様で御座いましたか」

確かに、あんまり自分の体とかジロジロ見ないから気が付かなかつたが…割と筋肉付いてるな

何か人を上に投げて落ちてきたところにラシヨオモオオンとか出来そうだな

ネタが分からない？グーグル先生に聞いてきなさい

「お連れの皆様も準備が出来た様なので向かいましょう」

「そうですか…え、アイツらもう海に居るんですか？」

「先に向かつてしまった様です」

アイツら……はあ、まあどうでもいいけどさ…置いてかれると何か腹立つな

執事さんに案内され、砂浜へと向かう

「あー！幸貞おっそ〜い」

「お前らが置いていったんだらうがよ、遅いと言われる筋合いはねえ」

「旦那様、僕の水着はどうだい？」

「あん？……ああ、いいんじゃない」

「可愛い？可愛いよね？そりゃアリスさん特製だから可愛いよね！」

「貴女がそう言わなきゃ素直に言ってみましたね」

いやまあ素直に言えば可愛いと言うよりはエロいわ、コイツ体型えげつねえ

あとアリスさんも中々の体型してるからな……何だあこれは、たまげたなあ

「ねーねー幸貞、アタシはどうよ？」

「ギョルっぽい」

「何か酷くない？」

「冗談だよ、似合ってる……それで友希那はどうした」

「あー……恥ずかしいんだってさ」

「成程、まあそんなこつたらうとは思ったよ……それで何処にいるんだ」

「アタシの後ろ」

あ、ホントだわ……縮こまって全然気が付かなかつた

白い水着に黒パーカーですか……水着パーカーってセンスいいよね

「へえ、パーカーか」

「な、何よ…変かしら」

「いや、似合ってると思うよ」

「……そ、そうかしら」

うん、いいね

ウブな感じがまたいいね、流石は銀髪美少女だわ（?）

さて、来たはいいんだが何をやるのやら…正直海遊びとかピンと来なさすぎて困ってるんだが

「取り敢えず泳ごー!」

「あ、おいりサ…まあいいか、お前らはどうするんだ」

「僕はその辺を散歩しているよ」

「アリスさんはリサちゃんと言いでくるー!」

「私は……す、少し歩いてくるわ」

アリスさんとリサは元気だなあ…俺は無理だわ

友希那は何か猫みたいだな、怖いけど興味本意でビクビクしながら波に触ってるの可愛いわ

「お前らは?」

「私は泳ぐ!」

「私は…そうね、どうせだから泳いでこようかしら」

「おや、華蓮は珍しくアウトドアスタイルですか…折角だから楽しんでこよう精神なんだろうな」

さて…俺はどうしようかな、俺も適当にその辺を歩いてるか

「見て見て蘭ちゃん！カニ！カニいたよ！」

「わ、分かりましたから日菜先輩…少し落ち着きましょう」

「わあ！彩先輩の水着可愛いですね！」

「ひまりちゃんありがとう！ひまりちゃんのも可愛いよ！」

「夏はやっぱ海だな！暑さ忘れて遊びまくるぜ！」

「流石お姉ちゃん！あこも張り切っていつちやうぞー！」

何だあのカオス、見た事ない組み合わせの面子だなおい

まず蘭ちゃんと天災に関わりがあったことが驚きなんだが…確かに高校同じだけどキヤラと性格が全く逆じゃん

まあそこは天災スベックなんだろうから気にしないでおう

あと巴はいつでも熱いんだな、松岡○造みたいだな…今日から君は、富z（ry

「あれ？幸貞さん？」

「おう、つぐみちゃんもやつぱり居たか」

「あ！ユツキー！みてみてみて！カニ捕まえた！カニ！」

「うるせえ、何でそんなにテンション高いんだよお前」

「だってー仕事以外且つ友達と海に来るなんて初めてなんだもん！」

「はいはいそうですか…宇田川姉妹は揃ってご参加か」

「おうよ！本当はアタシがアフターグロウの皆から誘われてたんだが、あこがどうしてもって聞かなくてな」

矢張り妹には甘いのか巴よ…一応妹は居るが、あの娘は既に自立して最早俺が甘やかされそうになってるからイマイチ分からん気持ちだな

……いや、兄としては駄目なのは…だがあの娘を止める権利は俺にないからなあ

「そうですねい…因みに向こうにリサとか友希那達がいるぞ」

「え？もしかして来てるんですか!？」

「ああ、まあな…そうだ、お前らは一色のフェスには出るのか？」

すると全員が頷いた、いや頷くのはいいんだけど天災とか丸山先輩はどうするの

まあそれはどうでもいいか、取り敢えずcircleでのバイトとあまり変わらない予感がしてきた



## 36話

天災達と別れ、また適当に浜辺を歩き始める

フエス何時って言ったかな、3時だったかな

まだ2時だし時間はあるな……いや、時間があると暇なんだがな

「あら、幸貞君じゃない」

「……おや、女王様ですか……ってよく見りや麻弥ちゃんとイヴも居るじゃねえか」

「はは、こんにちはっス」

「こんにちは幸貞さん！」

パスパレが勢揃いしたなこれで、どうせ多分この娘達もフエスに出るんだろうし  
にしてもこの娘達もスタイル凄いやなあ、うん

「……幸貞君って割と……いや、結構筋肉質なよね」

「まあ服の上からじゃわからないですからね、昔にやってた習い事の残り香ですよ」

「人一人を殴り飛ばすのも納得出来るわね」

「何かあまり褒められてる気がしないんですが、気の所為ですか？」

「気の所為じゃないかしら？」

「おお……！サムライですね幸貞さん！」

「あ！ちよつ！イヴさん！」

「別に侍では無いんだがなあ……あとイヴちゃん、余り男の人をベタベタ触るのは良くないよ」

腕やら腹筋やらを触り始めるイヴ……そういう事をするとは勘違いして爆死する男の人って多いから止めようね

「どうせ貴女達もフェスに参加するんですよ？」

「どうせって何かしら、文句でもあるの」

「まさか、丸山先輩や天災達が来てたのってやっぱそういう事かと納得しただけですよ」

「あら、二人にあったの？」

「会いましたよ、一緒に来たんですか？」

「まあそうなんだけど……日菜ちゃんが彩ちゃん連れてどこかに行っちゃってね」

「成程、まあフェスの時間には戻ってくると思いますよ……じゃあ俺はまたその辺をフラフラして来ますわ」

「そう、じゃあまた後で会えたらね」

後会ってないのはポピパとハロハピに燐子ちゃんか……何か普通に居そうだなあ

でも燐子ちゃんはどうか、あこちゃんと一緒に居なかつた所を見ると家

に引き籠もつてると思うんだが………あ？

「…何してるの」

「た、助けて下さい……！幸貞さん……！」

「あつ……幸貞君」

「何で人混みダメコンピで纏まつてるの、こころとか美咲ちゃんは？」

「それが……その……弦巻さんは着いたらスグにどこかへ行つてしまつて、奥沢さんはそれを追いかけて」

「はぐみちゃんと、薫さんもどこかに行つちやつて……」

何してんだよあの人達、まあ美咲ちゃんはしょうが無いとしてそれ以外よ

よりによつてこの娘達を置き去りにしちや駄目でしょうがよ

「成程ね……さて、どうしたもんかな」

「うう……人が、多い……おうち、帰りたい……」

「り、燐子ちゃん……折角来たんだから」

「……にしても、二人共水着姿とは……珍しくアウトドアスタイルでこれはこれでいいな」

しかも燐子ちゃんは黒のワンピース型水着か、いいねえ……黒つてのがセンスを感じる

花音ちゃんは水色か……まあイメージ通りというか、しかしそれでもいい

「あら……幸貞じゃない！」

「はあ、はあ…あ、幸貞さん」

「お帰り美咲ちゃん、お疲れさん」

「いや本当、疲れました」

「毎度毎度ご苦勞様だな、この破天荒お嬢様のお世話とは」

「私がやらないと誰も出来ないじゃないですか」

「ご最も」

それもそうだな、花音ちゃんはそういうの向いてないし…それ以外の2人は論外だし

結果的に苦勞人役が美咲ちゃんに回ってくるのか…ご愁傷様

「じゃあ俺は適当に歩いてくる、お疲れ美咲ちゃん」

「うわつと…あ、ありがとうございます」

スポドリを美咲ちゃんへ渡しておいた、勿論俺の飲みかけじゃねえぞ…新品だ

まあ実際の所は自分用に買ってたんだがな

このペースだとポピパの娘達にも会うな絶対、俺の勘がそう囁いてるぜ

「あれ？幸貞じゃん、やつほー」

「よう沙綾、お前が居るって事はアイツらも居るってことか」

「正解、アツチで遊んでるよ」

「あ！幸貞君こんにちは」

「ようりみちゃん、お姉さんは元気か」

「はい！幸貞君のハーブティー楽しみになりましたよ」

「そうかい、尚の事気合い入れて作らなきゃな」

「幸貞は何でここに？」

「姉に連行された」

「あゝ…成程」

あ、香澄達がかつちに向かって来たな

そこに居たのか有咲…詰まり香澄達の面倒を見ていたんだなご苦労なこつた

「ああ！幸貞君やつほー！」

「よう、相変わらず元気だな…そのツイントは元気なさそうだが」

「あ、当たりめえだろ…コイツらの相手にどんだけ体力使うと思つてんだよ…」

「マジお疲れ」

やつぱ変人の集団には苦労人が一人は居るんだな…ご愁傷様としか俺は言えんがな

「幸貞も来てたんだ、なんか意外」

「俺は来たくて来た訳じゃ無いがな…やつぱお前達もフェスに参加するの？」

「おたえ、香澄が出るって言っし…面白そうだから出るよ」

「たえ、こんなクソ暑い中ご苦労なこつた」

「おたえ、幸貞は出ないの？」

「たえ、俺は出ないよ…疲れるし面倒臭い」

「おたえ、出ればいいのに…絶対楽しいと思うよ？」

「たえ、俺は別に楽しさは求めてないんでな…楽な方を選ぶ」

「毎度思うんだけどさ、二人共それやって飽きないの？」

「何だ、珍しく止めないんだな沙綾…別に楽しくはないが恒例じゃないか？」

多分その天然は楽しんでるんだろうけどな

何となくコイツをそう呼ぶと負けた気になるから絶対呼ばないというなんか知らん  
面倒なプライドが働いてる

「その方が面倒だと思っただけぞ…」

「気にすんな、気にするだけ損するぞ」

「…：はあ、それもそうかもね」

「んじや俺は戻るわ、じゃあな」

来た道を引き返して行く、時間的には…あと30分でフェスがスタートか

会場はどうやら近いようだし、歩いて帰ればいい感じの時間になるかな

そんな訳で

「ただいま」

「あら、お帰り幸貞」

「よう華蓮さんや、そろそろ移動するの？」

「そうね、時間もいい感じだしそろそろ行こうかしら…皆を呼んでくるわね」

「はいよ」

リサとアリスさんは遊びっぱなしだったのか、晶奈とアリアはいつの間にか用意されたパラソルの下で休んでるし

まあ多分あの執事さんが用意したんだろうが、さすがに有能過ぎだろ

友希那は……よく見たら浮き輪で寛いでるな

華蓮が全員に声をかけ終わり、会場へ向かう…その途中でアフグロとあこちゃんに合流した

因みにピンク頭と天災はもう居なかった…が、その代わりと言ったら変だが…意外な人を見つけた

「あれ…氷川先輩、意外ですねこんな所にいるなんて」

「どうも導寺峠さん……わ、私だつて来たくて来た訳じゃありません」

「にしては水着まで着てやる気満々ですね」

「こ、これは日菜が勝手に！そ、それにここへ連れてこられたのも日菜の所為です！」

「まあいいじゃないですが、フェスあるみたいですし…それに何の因果か知りませんが

貴女のバンドメンバーも揃ってますよ」

「そうなんですか？ 湊さんが居るのも意外ですね」

「そっちはリサに連れてこられたんですよ」

「ああ、成程…理解出来ました」

「これから会場に向かいますが、一緒にどうですか？」

「私も向かう所なので丁度いいですね」

という訳で Rose lia 組も揃ったんだな…何というか、何だこれ（語彙力）

どんな運命の周り方だよ全く

会場は既に大勢の観客で賑わっていた、受付は別の場所でやってるらしいので暇だし着いていく事にした

あとは勝手に俺の名前を書いていないかの確認も含めて

「まだ受付はやってるみたいだな」

「開始時間ギリギリまで大勢の参加者を募りたいんでしょうよ、盛り上げり為にも」

「まあだろうよな」

「どうせなら貴方も出たらどうよ」

「そうだよ幸貞ー私達も出ようよー」

「嫌だよ面倒臭い、そもそも俺のステイック…あんのかよ」



「当たり前じゃない、私の抜かり無さに平伏しなさい」  
「うるせえよ」

本当なんなんだこの姉、なんか怖いわ

どうせ晶奈もこの後引きずると駄々こねるからなあ…やるのかあ面倒臭いなあもう  
「分かったよやればいいんだろやれば」

「諦めついたのね、じゃあ受付してくるわ」

因みにあの娘達は無事全員が合流してバンドごとに分かれて受付を済ませたようで、  
控え室に行っている

さて…面倒臭いけど、やりますか

結構いろんなバンドが来てるみたいだな

まあ規模的には結構大きめらしいし、それなりに人は集まるのかな  
確か順番はポピパ、パスパレ、ハロハピ、アフグロ、Roselia、俺達か…最後に縦ノリ系を詰めた感じだな

「で、今日は何するんだね晶奈」

「私の気分!」

「またかよ…別にいいけどさあ」

そんな訳で演奏してきました、え?早い?何言ってるか知らないね  
因みにやったのはafter light (HYDE)

Roseliaは熱色スターメインやってたけど、あれいいよねえ

おい、熱盛スターメインとか言ったの誰だよ

今回のフェスは長引くこと無く、トラブルなく順調に進み終わりを迎えた…取り敢えずチカレタ

「じゃあ帰ろつか、アリアありがとね!」

「構わんさ、またいつでも言ってくればシャワーや更衣室程度貸すさ」

帰り道、疲れが溜まった様でリサと友希那は車で眠りについた

晶奈はドライバーだから当たり前だが、俺と華蓮も起きていた…まあ基本的にうちの

家系は馬鹿みたいに体力と能力があるからな

「楽しかった〜?」

「お前がやけにアツペンポな曲を選んだお陰様で疲れたわ」

「いいじゃん別に〜、雰囲気的にノリのいい曲がいいと思っただもーん」

「ああいう曲つてのは大概ドラムスタートなんだよ、気まぐれで選ばれるこっちの気にもなれ」

「それでもついてこられるんだから良いじゃない」

「俺を貴女達みたいな化物と一緒にしないでくれ、精一杯なんだよ」

「姉を化物呼ばわりしないでくれるかしら」

「同じ様なもんだろ貴女達」

「それ幸貞も人のこと言えないからね〜」

俺はまだ端くれだから十分人間の内だろ

え? 銃で武装した人間を三人同時に制圧出来る時点で人間じゃない? ちよつと何言ってるか分からないな

まあ確かに、化物の端くれも化物の内か……

にしても、何故今日だけでcircle使用バンドの娘達全員と鉢合わせたのやら  
リサと友希那は仕方ないとして他は何の因果だよ本当

俺の夢は叶うのかねえ、平穩で静かな日々か……今の状況じゃ程遠いわな、まあでも……俺は俺の今を生きる

## 37 話

夏休みが終わってから少し……いや、結構経つたな

もう気が付けば9月の中旬になってるよ…本当、面倒臭い

今は昼休み、沙綾からパンを貰いながらブーツとしていた

「あ、そう言えばそろそろ文化祭の時期か…」

「急にどうしたの、まあ確かにそうだけど」

「いやまあ、ゆりさんにバンド出ないかって言われたのを今思い出した」

「え？そんなの？」

「ああ、華蓮と晶奈を呼んでいいからやってくれないかってね」

「へえそうなんだ…ポピパは香澄がやる気満々だから、りみりんからゆりさんに通して

もらって出ると思うよ」

まあ大体予想はついてた、香澄ちゃんは元気だねえ本当

そう言えば何かアリアも有志として店舗を出すとか何とか言ってた気がするな

別にいいんだが一体何をやる積もりでいるのやら、金持ちに有志をやらせると怖いん

だよな

ウチには既に弦巻家というデカいのが居るんだよなあ

「このクラスは何やるんだ？」

「一応もう決めたんだけど……幸貞その時寝てたよね」

「寝てたな」

「はあ……メイド喫茶だつてよ」

「うつわどテンプレ……まあそれはいいんだが、当日つて男子は入れるのか？」

「共学化の節もあつて完全フルオープンだつてさ、だから男子問わず入れるし丁度いいんじゃないかってさ」

「へえ……それ俺はどうすればいいの、流石にメイドは嫌だよ」

「流石にさせないよ、でも執事服は着てもらうつてさ」

「マジかよ」

確定事項なのかよ……いやメイド服じゃないだけいいけどさ……あ、そうだ（唐突）

陽音にメイド服を着させよう（名案）絶対似合うと思うんだよね（確信）

「メイド服はどうするんだ？……ああいや、何となく予想ついたわ」

「こころの家から借りるのよ」

「ですよねえ」

知　　つ　　て　　た

まあそうなるよね、なんならアリアも来るんだし俺から言えば貸してくれるよなあ  
……て言うかガチもんのメイド服を借りれるって異常だよな

さて、そんな訳で確か来週から文化祭の準備だったな……多分また男手が足りないから  
あつちこつちで働かされるんだろうなあ、氷川先輩に頼んで時給でも貰おうかな

そんなこんなで文化祭の準備期間へ突入しました……速い？メタな事は置いておけ  
準備期間中は午前で授業が終わり、午後の時間全てを準備に当てて良いそうだが  
適度にサボりたいのが本心だが……そうもいかなさそうなんだよなあ

「そうです、貴方にサボる時間はありませんよ導寺峠さん」

「ナチュラルに心読むよ止めていただけませんかね、氷川先輩」

「貴方の考えてる事は大体予想が付きまます、前回の体育祭準備での反省を活かして導寺峠さんには特別日程を作りました」

「ええ…（困惑）マジですか」

「本当です、なのでこの通りに動いて下さいね？もしサボるなら……今井さんと湊さんにチクリます」

「それは卑怯ですね氷川先輩、特にリサにチクる辺りかなり卑怯です」

「それが嫌でしたらしっかり働いて下さい」

「分かりましたよ、じゃあ行つてきます」

「はい、お願いしますね」

何でリサにチクられるのが嫌かだつて？何かにつけてアイツは俺を説教してくるからな、それに友希那が加わるとさらに面倒臭い

お前らは俺の母親か…まあそういう気質はあるよな、うん

「取り敢えず頑張つてね幸貞、後でパンあげるからさ」

「俺の労働力は随分と安いもんだ…パンは貰うけど」

「言うと思った、じゃあ行つてらっしゃい」



「へーい、行つてきますよ」

ええつと、先ずは二年の先輩達か

日程表に書いてある場所は……教室か、おおここかあ

「あ！やつほー幸貞君！」

「そう言えば二年生でしたね、丸山先輩」

「そういえばつて何!? 私ちゃんと幸貞君の先輩だよ? て言うか先輩だよ? もつと優しくしてくれても……」

「無理です、敬語使つて貰えてるだけ有難く思つて下さい」

「酷くない!？」

「相変わらずね、幸貞君」

教室から女王様が顔を出す、でもこの人達確かクラス違うよな……何で丸山先輩ここに居るんだ?

「女王様と丸山先輩つてクラス違くないですか?」

「ええ違うわよ、彩ちゃんが少し遊びに来てただけよ」

「左様ですか……こちらら何故か勝手に日程組まれてるつてのにいい御身分ですなあ」

「えつ……日程なんてあるの?」

「氷川先輩に組まれてました」

「流石は紗夜ちゃん、抜かりないね」

本当、止めていただきたい

まあ立ち話もこの辺にして、女王様のクラスではコスプレ喫茶をやるらしいので外に出す看板作りと道具運びをお手伝い

て言うかコスプレ喫茶も一步道逸れたらメイド喫茶なんじゃ……

「……本当、何でも出来るわよね貴方」

「一応天才の端くれなんでね、まあ工作は元から好きでしたし」

そんな感じで看板が十分足らずで完成した、本来なら四十分とか何とか言ってたけど……まあこの大きさならそこまでかからないだろ

「じゃあ俺は次の所に行っていくんで」

「ええ、お疲れ様」

「うい、どうもー」

女王様がいるクラスでの仕事を終え、次は隣のクラスだな

確かこつちに丸山先輩居るんだよな……って事は氷川先輩も居るってことか

「丸山先輩、このクラスは何やるんですか？」

「ビンゴ大会やるんだ」

「ほう、そうですか……それで俺はなんの準備をすればいいんですか？」

「えつとね、高い位置に装飾品付けるからそれを手伝って貰える？」  
「了解です」

氷川先輩も割と背は高い方だと思つたんだが、あの人風紀委員会だし他にも色々やる事があるんだろうな

「あ、燐子ちゃん」

「幸貞君……こんにちは」

「前から思つてただけどき、何で幸貞君は燐子ちゃんの事は呼び捨てなの？」

「何ででしょうね……何となく？」

「わ、私は……先輩っぽく、無いですか？」

「いや、そういう訳じゃ無いんですがね、なんかこう……自分でも分かりませんね」

「試しに私の事も彩つて呼んでみてよ」

「ピンク頭」

「ひくどくいっ!!」

華麗にスルーしながら装飾品をつけて行く、そう言えば花音ちゃんって女王様と同じクラスだったか

さつき見なかったけどどっかに出てるのかな？流石に学校内で迷子つてのは無いだろうけど………無いよな？

「さてと、じゃあ俺は次の所に行つてきますね」

「うん！ありがとうね、頑張つてね〜」

丸山先輩に見送られ、教室から出る

ええつと……次は三年生か、あんまり知り合い居ないから少し肩身が狭いな

「……ん？何してんの花音ちゃん」

「ふえ!?あ……ゆ、幸貞君」

「どうも、それで何してるんですかね」

「あ、えつと……その……第三準備室って何処だっけ……」

「………三年教室側を見て一番奥です」

「あ、ありがとう」

マジで迷つてたよ……今時は携帯という物があるんだから女王様に連絡取つて聞けば良かったのに

て言うかまさか今の今まで彷徨つてたのか？

「………まあいいや、取り敢えず行こう」

「あ！幸貞君じゃ〜ん！」

「ああ、そう言えばゆりさんって三年生でしたね」

「そう言えばって何さー、私は先輩だぞ？」

「これは失礼しました」

「ふむ、よかろう！ところで何しに来たの？」

「氷川先輩からの御達しで色んなところを手伝って回ってる次第です」

「あく成程、いい様に使われてるね…」

「そこら辺は言わんといて下さい」

あんまり気にしたくない部分だから

ゆりさんのクラスはれか、見るからにお化け屋敷だな…なんかこう、女の子しか出てこないお化け屋敷って…アレだよな

まあそれはいいさ

「お化け屋敷ですか？」

「ピンポン！……って、まあ見れば分かるかな」

「じゃあ取り敢えず俺は何を手伝えればいいですかね」

「そうだな……じゃあ道具作りの手伝いしてちょうだい」

「了解です」

「どうやら、と言うよりやはりと言ったほうがいいのか……この仕切り役はゆりさんみた  
いな

既に作業をしていた先輩に挨拶をし、手伝いを始める

何処と無く香澄に似た喧しs……いや、元気を持つ先輩と共同しながら小道具を  
作っていった

途中、その先輩から『君名前は？……導寺峠幸貞君？そうだな……じゃあ君はダークマ  
ター幸貞君だ！』

たえと同じソレを感じた、何その売れなさそうな芸名

「何ですかダークマターって」

「ほら、宇宙にある真っ黒の暗黒物質」

「いやそれは知ってますけど……何故ダークマター？」

「うーん何でだろう……君からはそんな感じがするからかな？」

……意外と鋭いじゃないか

あと真つ黒の暗黒物質だと頭痛が痛いみたいな感じで変ですよ

「取り敢えず小道具終わりましたよ」

「あつ！ありがとー…つて、凄いいねこれ」

「まあ少し気合い入っちゃいまして、クオリティ高いですよねこれ」

「自分で言うのもどうかと思つたけど、確かにこれは凄いわ」

貞子の飾り物が凄いいクオリティで出来上がったな…うん、まあ俺は満足満足

そんな訳でその先輩に挨拶をし、ゆりさんへ報告しに行つた

「終わりましたよ」

「おお、早いねー…あの子なんか変な事言わなかった？」

「何かダークマター幸貞君って芸名付けられました」

「あはは…やつぱり言つてたか、一応渾名だから芸名じゃ無いよ？」

「にしても中々のセンスだと思うんですが」

「まあひなちゃんワールドだし仕方ないかな」

なんぞやそれ、花園ランドみたいなソレを感じるんだが…香澄の元気さとたえの天然

を持つているとは、強いな（確信）

「じゃあまあ、あまり気にしないでおきますね」

「うん、そうしといて」

「それじゃあ俺の仕事はこれで終わりなので、では」  
「ありがとね」

「はあく疲れた」

「お疲れ様、はいこれパンね」

「おう、有難う」

沙綾から貰ったパンを齧りながら椅子にだれていた

うちのクラスは大分飾り付けなんかは済んだみたいだな、あとは当日に机を並び替えて弦巻家からメイド服を借りれば万事OKか



「そう言えば有志でアリア出すって言ってたな…」

「アリアって？」

「俺の知り合い、こころ嬢並に金持ち」

「へえ、そんな人が有志出すんだ」

「本人から聞いたからな、まあ何をするか聞いてなかったから怖いんだがな」

本当、金持ちの感覚ってよく分かんねえからな

まあいいや、それより当日はどうやって過ごそうか…執事服着させられるって言われたな、まあいいや、あーめんどくせーマジで

適当にパツパツとやって終わらせたいな（願望）

## 38話

さあということでもうそろそろ始まりますよ文化祭

え？何？時間が経つのが早いって？ちよつと何言ってるか分からないですね、んな事気にすんな

現在は最終準備中

「ふむ……いいね」

「そう？ありがとう」

「山吹ベーカーリーの制服とはまた違っていいね」

よくよく考えるところのクラス顔面偏差値高い、高くない？

ポピパの娘達もそうだけど、クラス全体的に可愛い子多いと思うんだよ

全員メイド服が似合うの何の

「て言うかこのメイド服スゲー、こんな造りしてんだな」

「あんまり間近で見ること無いもんね」

「ああ、て言うかそんな機会ある方が怖い」

まあ執事服は見たけどねこの前、それはそれで怖いな

ああそうそう、俺のシフトはお昼あたりからだそうだ……まあ理由は一番客が入る時間だからだよ

『えー長らくお待たせ致しました、文化祭スタートの……って、ゆりさん!?!いきなりなんですか!?!』

『硬い硬い!折角の文化祭なんだからもつとテンション上げてかなきゃ!じゃあ文化祭スタートするぞ〜!!』

またあの人か、本当にりみちちゃんのお姉さんかあの人……性格が真逆過ぎて怖いんだけど

そしてりみちちゃんの顔が面白いくらいに真っ赤っか

「お、お姉ちゃああああん……!」

「まあ、何だ……ドンマイ、りみちちゃん」

「うううう……恥ずかしいよお……」

その場で蹲ってしまったりみちちゃん、有咲と沙綾が慰めに入った……天然っ娘は頭を撫でてる

香澄?メイド服ではしゃいでるよ

「……お、どうやら開園のようですね」

「よーし!張り切って頑張っちゃおうぞー!!」

勢いだけで香澄がそう叫ぶと、何故かクラス全員がそれに反応するように『おー!』つと拳を突き上げた

やつばあれだな、こういう時つてのは勢いが大切だな…うん

「さて、俺はどうしようかな…出番まで暇だし、ライブも午後からだつたな確か」

「あ、そう言えば幸貞も出るんだつたね」

「その言い方だと沙綾も出るのか？」

「まあ私つていうかポピパかな」

「成程…さて、どうしようかなあ」

「……あ!なら裏方手伝つてよ!」

「裏方?まあ、簡単な料理くらいなら作れるぞ」

「それで十分、あと幸貞のクオリティは知つてるから期待してるね」

変に期待しないで頂きたい…という訳でお仕事開始の時間だ

沙綾と香澄は呼び込みで表に出ていき、たえと有咲はなかで接客を始めた

ていうかスツゲエ人が来る来る、しかも男女問わず…俺も裏方やりますか

「俺も裏方手伝うよ」

「あつ!幸貞君ありがとう!」

「は…成程、ガスコンロとかでやるのか」

「そうそう、あんまり大きい料理は出せないけどある程度は出来るからね」

メニユーは市販のホットケーキとかなのかと思つたら、どうやらうちのクラスに居る娘達は女子力が高い様でシフォンケーキとかプレーンオムレットとか作るらしい

凄いな君達…いや本当

「幸貞君つて何か料理出来たりするの？」

「まあ基本的になんでも出来るかな、作り方さえ知つてればね」

「おお…流石だね」

喋りながらフライパンだけで生地をひっくり返していい貴女も凄いなと思うよ

料理方面は女の子達で普通に間に合つてるので俺は飾り付けや盛りつけを担当する事になった

て言うかガスコンロでよくそこまで出来るな

「昼前だつてのに結構入るな」

「予想以上に受けが良いみたいだね、買い出し組も動き出してるとし」

「まあ何よりこの学校自体可愛い子多いからな、それに本場のメイド服がプラスされれば人も来るだろ」

「呼び込みやつてる沙綾ちゃんも香澄ちゃんも可愛いよねえ」

「沙綾に関して言えばパン屋の手伝いしてるから接客には慣れてるってところもあるん

だろうな」

裏方組のクラスメイトと表組を見ながら話していた

たえや乗り気じゃ無かった有咲、恥ずかしがっていたりみちちゃんも慣れてきたのか客を捌く捌く

「さて、私達もうかうかしてられないね！裏方も裏方で頑張るよー！」

「「「おー!!」」」

よくよく考えると俺昼辺りから表出るのが：その後ライブって中々ハードスケジュールだな

まあ裏方仕事じゃ俺はあんまり動いてないけどね

「幸貞君って確か昼から表組だよ？そろそろ上がっておく？」

「飾り付けと盛りつけしかやってないし、まだこっちで手伝う積もりでいる」

「ありがと、助かるよ」

さて、そんなこんなで時間は流れ……

「こ、これは……中々」

「予想以上というか、予想外というか……」

今何してるかって？ 執事服に着替えてきたんだよ、因みにこれも弦巻家から借りてきたそうだ

「俺のシフトは確か二時までか……二時半からライブがあつてそれまでに着替え終わらせなきゃならんのか、面倒臭い」

「じゃあ幸貞君には呼び込み頼もうかな、香澄ちゃんと交代してきて」

「沙綾はどうするんだ？」

「沙綾ちゃんには引き続き呼び込み、慣れてるみたいだから頼んじゃった」

「さいですか、じゃあ行つてくるわ」

という訳で香澄と交代すべく教室の外へ出る、キャピキャピしながら通る人通る人に

声を掛けてる姿が見えた

女子高生って言うか元気のいい小学生に見えるのは俺だけか？

「香澄、交代だとよ…中でお客の相手してくれ」

「おお！幸貞君すつごい似合ってる!!」

「そいつはどうも、ところで沙綾は？」

「さーや？見てないけど」

「マジか…まあいいや、取り敢えず交代な」

「はーい！」

どこ行つたんだ？俺じゃあるまいしサボるなんて事は無いだろう、と言うか沙綾だし先ず無いな

あつ……（察し）DQN？DQNなのか？まあこの際そんなことはどうでもいいか、取り敢えず男に絡まれてるな

「なくいいだろ少しくらい、一緒に案内してくれって〜」

「あの、困りますって…私まだ仕事なんで…」

「まあまあそう言わずにさ」

「勘弁してくれ、俺の仕事が増えるだろうが」

「あつ、ゆき……さ、だ……」



「誰だよお前、折角いい感じだったのに台無しじゃねえかよ」

何で一瞬間まったの沙綾さん

よく今のでいい感じとか言えるなコイツ……やっぱDQNみたいですね

いつの間にか沙綾が俺の後ろへ隠れていた、やけに動きが早いな君……そんなに嫌だったの？

「困りますよお客さん、この娘が居ないと俺の仕事が増えるんで面倒なんですよね」

「ああ？ 知るかよ、俺はその子に用があるんだよ……執事さんには用はねえ」

「と言うか、貴方自分がカツコイイとも思ってるんですかね？」

「はあ？ 何だとテメエ……」

「いやいや、まさかご自分のお顔を……存知ないのではと思ひましてね……その顔で誘って乗る女の子が居ると思われてるのですか？」

「……おい」

「ああそうだ、貴方にピッタリの小道具でもお教えしましょうか？ 鏡って道具なんです  
が、それで一度……ご自分のお顔を……確認なさってみて下さい」

「舐めてんのかテメエ!!ぶっ殺す!!」

はい乗った、勝ったわ風呂呂入ってくる

なんて馬鹿な事をやってる暇は無いのが現実、さてどうしたものか

とは言ったものの流石に校内暴力沙汰はかなり宜しくない、ならここは

「よっ、はっ……と」

「え?…いっだっ!」

馬鹿正直に顔面ストレートで来てくれたから楽に出来たな

何したって? 飛んできた拳を往なして、腕掴んで胸ぐら掴んで反対側に殴る勢いに乗せて背負い投げしただけだよ

これぞ正に当て身投げ、どこ総帥様だよ…ダメだコレSNKネタが知らない人はマジでわかんねえや

え? もう暴力起きてるって? 殴り飛ばしてないから多少はね?

「沙綾、先生呼んできて」

「……あ、うん! 分かった!」

「さてと、ここをこうして…あれ、こうだっけか? それでこうして」

「いっだだだだ!!」

「よく覚えてねえや、素人がやるもんじゃねえな」

護身術の固め技をやるうと思っただがどうもうろ覚えだったから止めておいた

下手にやると骨の一本とか行くからね

その後、駆け付けた先生(生徒指導)の手によって別室へ連れて行かれた…因みに女

の先生だけど空手の黒帯な、おお怖っ

「幸貞は怪我不い？」

「無いよ、怪我しないようにアイツを取り押さえたんだから」

「そう、良かった」

一時的に場は騒然としてしまったが、雰囲気は戻ったからまあ問題無いべ  
て言うか見た事のある銀髪がコツチに来たんだが

待って、そう言えば俺知り合いに銀髪ロングって二人居たな……まあいいや

「流石だね旦那様、しかし君が殴り飛ばさないと珍らしい事もあるもんだな」

「TPOを弁えて殴り飛ばしてるからな、その辺は他の馬鹿共と比べられちゃ困る」

「いや、殴り飛ばしてる時点で違和感持とうよ……て言うか旦那様？」

「ああ……そう言えば会うの初めてだっけか、コイツが有志出すって言ってたアリアって  
奴だよ」

「宜しくね、可愛いメイドさん」

「凄い薫さんっぽさを感じる」

薫さんからシェイクスピアを取ったらこんな感じかな、まあ薫さんより女性としての  
主張が激しいがな

何の話？男なら察しろ

「結局どんな有志出したんだ？」

「簡易的な配給をさせて貰ってるよ」

「……へえ、因みにメニユーは？」

「国産和牛を使ったスープを振舞ってるさ、旦那様も気になったら行ってみてくれ」  
「んな事だろうとは思ったわ：思ってたよりはスケールが小さかったがな」

「ははは、僕だつてその位は弁えるさ」

まあ国産和牛を無料で提供する辺りは既にどうかしてるけどな

話聞く限りじゃ寸胴っぽいし……何キロ必要なんだ？やっぱ頭おかしいわコイツ  
「しかし……良く似合っているよ、旦那様」

「そいつはどうも」

「おっと、そう言えばメイドさんの名前を聞いてなかったな」

「あつ、山吹沙綾です：宜しく御願います」

「改めて、アリアだ：以後お見知りおきを」

その後、アリアは有志の方に戻るとの事で帰って行った

さて、俺はこの後はライブに出なきやならんし：そろそろ仕事に戻らんと  
て言うか華蓮達ちゃんと来るよな？心配になつてきた

一応そういう伝えは送つただけだなあ……まあ大丈夫だよな

「綺麗な人だね〜」

「見た目はな、中身は薫さんからシエイクスピアを抜き取った残念さんだな」

「そう言えば結局どういう関係なの？」

「クソ親父が勝手に決めた許嫁」

「このご時世で許嫁とか初めて見たよ…本当にいたんだそうなの」

「俺もビックリだわ…まあこの話はこの辺にしておくぞ、さっさと仕事しなきゃならんからか」

「そうだね、じゃあ行こうか」

「そんな訳で呼び込み頑張りますか」

## 39話

さて、そんな訳で呼び込みをやっているとあつという間に時間が過ぎていたようだ

「俺はそろそろ上がるけど、沙綾はどうするんだ？」

「私も上がるよ、午後のライブもあるし流石に疲れちゃった」

まあ午前中からぶっ通しで呼び込みやってるからな、流石に疲れるだろうよ

さてと、俺はチャッチャと着替えて正面のステージに行かなきゃならんだっけか

「じゃあステージまで一緒に行くか？」

「いいよ、ついでに他のクラスも見てみようよ」

「おお、良いな」

ていう事で沙綾と他のクラスも回ることにしたので着替えて待つ事にした

「お待たせ」

「おう、じゃボチボチ行くこうか」

はえー、他のクラスはこんなんやってんのか……縁日に休憩所、的当てはまあ縁日に被ってなくはないが

あとはお化け屋敷にお化け屋敷、お化け屋敷……お化け屋敷……

何だこのお化け屋敷地帯、どんだけ密集してんだよ

「幸貞、あれって……」

「ん？……あ、友希那とリサ」

「お、ヤツホー幸貞」

「あら、こんな所で奇遇ね」

「お前から来てたのか……で、何でこの地帯に居るの？ 確かりサ、お前お化けとか苦手じゃなかったか」

「え？ あつ、ああうん……た、たまたま通りかかったただけだよ」

「折角だから入るか、序に沙綾もな」

「「え？」」

綺麗にハモったなお前ら

正直な話、俺はお化け屋敷が苦手ではない……いやまあ得意かと言われると答えはNO  
何だがそれは一人の時に限る

周りに人がいるとその人達が悲鳴を上げる為、俺は驚くタイミングを逃してしまふ……  
結果的に残るのは周りへ向ける生暖かい視線と苦笑いだけである

「どうせまだライブまで時間あるし、時間潰しには丁度いい……どれにする、よいどりみどりだぞ」

「ま、ままま待って幸貞！」

「はいはいちよままちよままま、さっさと決めてくれ」

「何で行く前提なの!?そこからおかしいと思うんだけど!」

「だって暇だろ?それに決して俺はお前をお化け屋敷に入れて楽しもうとか思っていないからな、安心しろ」

「思ってるじゃん!絶対思ってるやつじゃんそれ!!」

「ほら見ろあの二人、もう腹括ってるぞ」

友希那と沙綾の目が据わっていた、なんか怖いけど取り敢えず覚悟は出来たみたいで  
す

「リサ、諦めなさい…もうこれは運命なのよ、幸貞にここで捕まった時点で決められた  
運命さだめなのよ」

「リサさん、諦めましょう…もう無理ですよ」

「ふ、二人共々!」

「リサ…覚悟は出来たか?俺は出来てる」

「アタシは出来てない!!」

「つべこべ言わない」

「いゝやゝ!」



「うう…：嫌だつて言つたのにいゝ」

「大丈夫だつて安心しろよ、沙綾も友希那も居るんだからさ」

「怖いものは怖いのに！」

因みに今の状況、リサは俺の右腕にガツチリしがみついている

友希那は左腕の袖を掴み、沙綾は友希那の隣を歩いている…：入って十秒も経ってないが既にこの状態だと先が思いやられる

「ほら、歩かないと終わるもんも終わらんぞ」

「……目瞑ってる」

「はいはい、足元にお気を付けて下さいいよお嬢様」

そんな感じで歩み出す我ら一行、しっかし良くできてるなあこのお化け屋敷

小道具なんかも完成度が高いし、マネキンとか使ってるっぽいな

まあ俺作の貞子には劣るがな

「ギヤアアアアア!!」

真つ黒のカーテンに隠れていたお化けがバツと姿を表し、叫び声を上げる

「キヤアアアア!!」

「っ!?!」

「うわあビツクリしたあ…」

「ああ、ビビったな」

リサが思いつ切り腕に抱きつき、友希那は声は上げていないものの腕に抱きついてくる

俺と沙綾はケロツとしている

「あんまりビツクリしてなさそうだよな沙綾、もしかして得意?」

「割と好きな方だよ、ここのお化け屋敷結構面白いね…て言うか幸貞の方こそ驚いて無さそうじゃん」

「これでも結構驚いてんだぞ、一応」

友希那さんは腕から離れる様子がありませんね…これは最後までこのパターンかな？

因みにお化けはカーテンの中に戻って行った

「うううくらめしやあああ〜!!」

「ヒイヒイ!!」

「ヒッ!」

「うらめしやか…じやあ表はパン屋か雑貨屋だな」

「何の話してるの幸貞…て言うかパン屋か雑貨屋って、何でそのチョイス…」

「なんとなく」

「うヴァアアア!!」

「イヤアアア!!もう嫌!!」

「!!…っひうつ!!」

「あのゾンビ…中々の特殊メイクじゃなかったか」

「通り過ぎた後だけどよく平然とそう言う事言えるよね」

「俺はどこに居たって俺だ、やる事なんて変わりはない」

て言うか友希那の悲鳴が可愛すぎる件について、しかもその度に腕に抱きついてくるから尚可愛い

さて、そんなことを思っている内にもう出口が見えてきた

「出口!?!早く出よう幸貞!」

「分かつてるよ……ん?これ開かないんだが」

「え?な、何で……」

「あ、本当だ……開かない」

まあこういう仕様なんだろうな、見事に友希那とリサは引っかかって盛大にビビってるけど

だからと言って教える気は無いけどね、詰まらないし

心做しか沙綾も少しビビってる希ガス

「まあ慌てんなよ、たかがお化け屋敷だぞ?」

「苦手だつて言ってるじゃん!!」

「そうでした」

「ゆ、幸貞……湊さんさつきから喋らないんだけど……」

「気にすんな、相当ビビってるから放っておいてやれ」

しかし手が込んでるなあ…因みに今後ろからゾンビメイクのお化け役が近付いてきてる、気配で分かった

「うヴアアアアアアア!!」

「いやああああ!!!」

「つにやう!?!」

「お、開いてんじやーん」

ギリギリに開ける演出か、中々面白いな

結果はリサと友希那がノックアウトされて沙綾が結構ビビったか…うん、面白いね

「どうだったよ沙綾」

「最後のやつは結構驚いたよ、面白かったね…それで、えつと…お二人は大丈夫ですか?」

「ひつぐ…も、もうやだあ」

「ほら、もう終わりだから泣くなよりサ」

「だつてごわがっだんだもん!」

「て言うか友希那、最後にやうって言わなかったか?」

「言っていないわよ」

なら目を見て話してくれますかね友希那さんや、俺は間違いなくこの耳で聞いたからな

そして一生忘れることは無いと思え

「さて、暇潰しも出来たしステージに行くか」

「そうだね、ポピパの皆も着いたって連絡来たから」

「随分お早い到着だな、俺らも早く行くか」

「もしかして幸貞、ステージ出るの？」

まだ少し赤い目を擦りながらリサが聞いてきた、泣き顔の美少女もいいが泣き終わったあともいいな……何言ってるんだこいつ

「ああ、先輩に頼まれてな」

「そうなんだ……じゃあ私も見に行く、友希那も行く？」

「ええ、折角だし見て行こうかしら」

「そうかい、じゃあこのまま向かうか」

それはいいんだが、そろそろ腕を離してくれないかねお二人共……周りの視線が痛い  
主に男子勢からの視線が

そんな訳でステージに到着、リサと友希那とは一旦別れ裏方へ沙綾とやって来た  
それでウチの姉さん達は何処に居るのやら

沙綾は早々にポピパの娘達を見つけてそっちへ行つたが

「あ、幸貞来た」

「ここに居たのか晶奈、華蓮」

「執事服、似合ってたわよ」

「何だ見たのか……それで、役割分担はどう為さるお積もりで」

「いつも通り私がボーカル兼ギターやって華蓮にはベース、幸貞はドラムで優珠ちゃんにはキーボードをやってもらおうよ！」

「まあいつも通りだな………ん？優珠？」

「お久し振りです兄さん」

背後から声が聞こえたので振り返るとかなり近くに我が妹が立っていた、流石にビツクリして少し後ずさってしまった

てか君仕事はどうした

「うおい、ビツクリさせんといて下さいな………て言うか何で居るの」

「兄さんの文化祭があると聞いたので、父さんに言ったら行って来て良いよと言われたので」

「そ、そうかい」

会うのはゴールデンウィークぶりか、夏休みはなんだかんだで帰って来れなかったらしいし

親父が言っていたが、仕事を立て続けに立て込んだらしい

「まあいいか、それで何やる」

「私の気分！」

「出たよまたそれか……まあもういいよ」



「何歌おっかなあ〜」

「毎回毎回、本当に勘弁してくれっての」

「諦めなさい幸貞、これも運命よ」

「前にも言つてなかったかそれ」

そんな訳で今回も晶奈の気分セレクトになりました、激しいやつとかマジ勘弁して欲しいんだよね

大概ドラムから入るから曲名聞いて速攻で動き出さないといけないから神経削られるんだよ

早押しクイズ並の反射速度でドラム叩き出しか鬼畜以外の何者でもないだろマジで

「あ、出番だつてよ」

「分かった、じゃあ行くわよ貴方達」

「了解、優珠キーボードは？」

「借りれるそうなので、此処に有るのを使わせて貰います」

「成程、さつさと行つてチャチャツと終わらせますか」

ステージに上がつてみると、割と観客は集まつてるみたいだ

まあ俺たちの前にポピパやつてたからな…あの娘達もそこそこに有名になってきた

らしいね

さて、何をやるのかな……うちの姉さんは

結局やったのは閃光のブリューナクだったよ、よくあんな声出せんな

まあピアノ始まりだから今回無茶振られたのは優珠だった様だな……まあアイツなら余裕だと思っけどね

て言うかアレにドラムって存在しないから何気に一番の無茶振りは俺か巫山戯んな

「この後はどうするの幸貞」

「まあ別に特に無い」

「そう、まあ私達はやる事やっただし帰るわね…ああ、アリアちゃん所のスープ美味しかったわよ」

「あつそう、まあ気が向いたら行く」

「そう、じゃあ帰るわね」

晶奈と華蓮は帰って行った……で、優珠はと言うと俺と見て回りたいらしいので案内する事にした

「兄さんのクラスは何をしているのですか？」

「メイド喫茶だよ、行ってみるか」

「はい、是非」

という訳で優珠を連れて行ったのは良いんだが

「やだ幸貞君ったら！こんなに可愛い妹さんが居たなんて…！」

「ねえねえ優珠ちゃん、ちよつとこつち来て」

「あ、あの…えつと」

そんな感じで衣装班に捕まって連れて行かれた…アイツの戸惑う顔って初めて見た気がするな

数分後、可愛らしくメイド服に着替えさせられた優珠が帰ってきたのは何となく予想

はつくだろう

そして何を仕込まれたか知らないが、俺に対してお帰りなさいませご主人様を言わなくても良かったんじゃないか：あと満更でも無さそうな顔しないで、君本当に墮落させに掛かりかねないから

まあそんな事もあつたが、文化祭も終わりを迎えた

## 40話

文化祭も終わり、皆のテンションもほとぼりが冷めて来た

いつも通り学校に行つて帰つての繰り返しをしていた……いや、て言うか俺の望む日常ってこんな感じだよな

面白くなくていいんだよ、詰まらなくていい……不幸せは要らない代わりに幸せも要らない

そう、これこそ理想的だな

「嗚呼、いい日常だ」

「何言つてるの幸貞」

「まあ少し想う所があつてね」

「ふーん……パンの余りいる？」

「貰う」

今日という日もまた過ぎていく、そして明日がやつて来てまた過ぎて……何も無い日常が身に染みるぜ

……ここ最近本当に忙しかったな本当……あと相変わらずだがパン美味しい

「本当によく食べるよね」

「まあ男だし、食べ盛りだからじゃないのか」

「にしても結構な量だと思っただけどね……」

「そうか？ まあいい、もう放課後だがお前は帰らないでいいのか？」

「うん、今日はポピパは無いし店の手伝いも遅いし」

「そうか、じゃあ俺は帰るわ」

「分かった、じゃあまた明日ね」

沙綾と別れて昇降口から外へ出る

今日も学校楽しかったなー、早く帰って音ゲーしなきゃ（使命感）

と、校門に見知った奴が居た

「や、やつほー……幸貞」

「何してんだリサ、こんな所まで来て」

「いや………じ、実はね？」

校門の横にリサが立っていた……のは良いんだが、何故かバツの悪そうな顔で言い淀む  
すると

「お前が導寺峠幸貞って奴か」

見知らぬ奴の声が後ろから聞こえたので振り返る……黒髪の短髪でそこそこイケメン

な男が立っていた、因みに背は俺より少し低い

「ああそうだが、お前誰？」

「俺は貴島きしま 隆人りゆうと、お前からリサさんを奪いに来た…！」

「は？何つったお前？」

「だから、お前からリサさんを奪いに来たんだよ！」

……何言ってるんだこいつ、頭大丈夫か？

唐突に出てきたと思えばお前の女を奪います宣言、そもそもリサは俺の女じゃなくて友希那の正妻だからその辺は友希那さんに聞いて

「おいリサ、こいつ誰だよ」

「いや…何かこの文化祭に来た時に会った人なんだけどね、何かその後から執拗くつて」

「それはいいが何で俺の所に来た」

「そ、それは…アタシしが苦し紛れに気になる人がいますって言っちゃって…」

「ほう…それで俺の名前を出したと、いい度胸してんなお前」

「ご、ゴメン！親しい男友達なんて幸貞くらいしか居なくて…」

うわ超面倒臭いんだけど、絶対に関わりたくないレベルで俺の思う面倒臭い人種なんだけどコイツ

「えーと、貴島君とか言っちゃったっけ」

「そうだ」

「結局、君はリサの事を好きになつて事でいいのか?」

「そういう事だ、花咲川の文化祭で一目惚れしちゃったのさ……俺はお前なんかには負けるつもりは無いからな」

「知らねえよ、そもそも俺とリサは付き合つて無い」

「?を吐け、結構親しげな様子だったじゃねえかよ畜生」

「幼馴染だから多少はね」

「何!? 幼馴染だど!? 何だその羨まポジションン! 代われ!」

「コイツ面倒臭い」

マジ何なん? 何しに來たのこイツは

さつきから言つてるけど奪うも何も俺の女じゃないって言つてるやん

「結局お前は何がしたいんだよ、用がないなら帰るぞ」

「ふつ、帰つてもいいがそれは敗北を認めることになるぞ?」

「好きにしろ、俺には関係無い」

「え、ちよつとマジで帰るつもり?」

「何なんお前、帰るつつってんだろ」



「自分の彼女が取られそうなんだぞ？」

「違うつて言つてんだろ阿呆」

「リサさん！こんな薄情者よりおれを選んで下さいよ！」

「人の話聞けよ馬鹿野郎」

あゝ面倒くせーマジで…何て事を思っていると、聞き慣れた声が後ろから聞こえた

「お、久し振りだな幸貞」

「うん？どちら様？」

「久し振りだからつて扱いが酷くないか？」

「冗談だよ裕次、陽音はどうした？」

「バイトがあるつて先に帰つたよ、て言うか幸貞はこんな所で何してるんだ？」

「まあ何て言うか、面倒なのに絡まれてね」

親指でリサへ猛烈アタックを仕掛けている貴島を指す、見事に苦笑いで返されてるのにそれに気が付けない残念頭さんだな

「何だアレは…もしかして修羅場とか言うやつだったのか？」

「全然、唐突に出てきたと思つたらお前の彼女奪う宣言をかまされてね…正直な話俺も何を言われてるか分からない」

「なんじゃそりゃ」

「導寺峠幸貞！」

裕次と話していると唐突に名前を叫ばれたのでそちらに目を向ける、何故か覚悟を決めた貴島が居た……何だお前

て言うか学校の正門に近いんだから余りデカイ声を出すなよ全く

「何、どうするか方針は決まったか？」

「ああ決まったさ……導寺峠幸貞、俺と勝負しろ！」

「勝負つたって何するんだよ、ゲーセン行つて格ゲーでもやるか？」

若しくは音ゲーのスコア対決でもいいぞ、最近ウニのレートが右肩上がりだ調子がいんだ

「ふん、そんな事はしない……男なら拳で十分だ！」

「殴り合いの喧嘩がお望みで？OKやろうじゃないか」

「おい待て幸貞！何で嬉しそうに即決してんだよ!？」

「や、やめといた方がいいよ？」

「大丈夫ですよリサさん……知らないかもしれませんが、俺ボクシングでそこそこ強いんですよ」

何その誰得情報、別に知りたくなかったんだが……あと多分、リサが心配してるの  
はお前が喧嘩出来るかじゃないと思うぜ

しかし血の気が多い奴で良かった、楽に片付く

「じゃあ場所を移そうか、此処じゃ不味いだろ」

「ああ、そうだな」

という訳で近くの公園へ場所を変える、この時間帯なら人は通らない…居たとしても猫と戯れる銀髪美少女が偶に出没するくらいだからな

「んじゃ場所はここでもいいか」

「ああ、俺が相手だった事を恨むんじゃねえぞ」

「はいはいそうですねー」

「ふん、その余裕っ面を歪ませてやる……!」

ファイテングポーズを取る貴島、なかなか様になつてるじゃないか…そう言えばボクシングやってんだっけ? そりゃ似合うわな

「……シッ!」

「危なっ」

右のジャブをスルツと躲す、急に動き出すのはどうかと思うよ君……まあもう勝負は始まつてる的な感じだろうな

次は右か…それで左拳のボディブロー、続けて右ストレート

恐らくそこそこのボクサーでも反応出来るか怪しい速度で今のを的確に打ち込んで

くる、確かにこりや素晴らしい才能だわ……まあ、天才つてのはその上を行くんだがな

何せ、天が与えた才だからな

今のを全て捌き、往なし……躲しきる

「て言うか容赦無さすぎだろ、こちとら素人だぞお前」

「……お前、本当に素人か？」

「ああ素人だとも、ボクシングの経験なんて微塵も無いね……疑問か？己の拳が全て避けられた事が」

「……何者だ」

「唯の一般ピーポーだよ……少し根性と性根が腐ったな」

次の攻撃はさっきの速度より更に上がってラツシュを打ち込んできた、一応あれでも手加減してくれてたのね

そしてラツシュの最中、ウィービングで避けながらちよこちよこ腕や脇腹や水月の辺りに軽く拳を当てていた……何かって？唯の嫌がらせだよ

「どう言う積もりだ、何故本気で打ってこない」

「今の全部俺が本気で打つたら瞬殺だぞお前……それじゃお前の格好がつかんだろ」

「……成程、煽っているのか」

「よく分かっているじゃないか、俺の性格はそういう性格なんだよ」

「腐ってやがるな」

「言つただろ、俺は少し根性と性根が腐つた一般ピーポーだつて」

「お前のような一般人が居て堪るか」

だよね、俺もそう思う

まあ御本人がお望みならば……少し本気を出してあげようかな、正直に言えば俺が飽きてきた

飛んできた右ストレートを捌き腕を掴む、そして右腕を振りかぶつて………思いつ切りぶん殴る、これぞシヨート版『全力ぶっぱなし殴殺』

「結構効くだろこれ」

「っ……ああ、かなり効いた」

「で、どうするよ……まだ続けるか？」

「はっ、今は腕を掴まれたからくらつただけだ……普通に動けばお前のノロマな拳なんぞ躲せる」

ほお……ならちよいと本気を出しながらおちよくるか

俺は基本的に見て覚える人間だ

大概のスポーツはアスリートのプレイを見て、見様見真似で動けば出来てしまう

詰まり、今俺の前にはボクシングのプロが居る……俺はこいつを見れば見るほど強くな

る

相手は俺を指定ターン以内に倒さなければ超絶強化されてしまうというハンデを背負っていると言う訳だ、どんな鬼畜ゲーだよ

それから6分程度が過ぎた、貴島は肩で息をしている一方：俺は以前として余裕を保っている

別に見栄っ張りではない、普通に疲れてないだけ

「な、何なんだよお前…化け物か」

「人聞きの悪い事を言うな、俺は列記とした人間だ」

そろそろ可哀想だしクリーンKOでも取ってやるか

貴島が力を振り絞って右ストレートを打つ、右側へ身体を逸らして拳を避け…元の位置へ戻す勢いで左頬へ強烈なフックをお見舞いした

顎を狙わなかったただけ良心的だと思ってくれ

俺の一撃をくらった貴島は身体が倒れるのに抵抗せず、そのまま地面へ堕ちた

まあよくよく考えると顎を狙わずにただのフックでKO取るほうが相手にとっては

痛いんだけどねH A H A H A

「ま、マジかよ幸貞…」

「まあこんなもんだろ、取り敢えずこいつが目を覚ますまで待つか」

「幸貞!」

「ハイなんでしようリサさん」

「やり過ぎちゃダメでしょ!!」

「えつと…はい、すみませんでした」

「もう、気絶させるまでやらなくてもいいでしょ…」

だってコイツ無駄にやる気満々なんだもん、答えてやるのがスポーツマンだろ

え？どの口が言うかって？ちよつと黙つてなさい

「でもまあ、取り敢えずありがとう…幸貞、元はと言えばアタシが悪いんだし」

「まあ気にするなよ、取り敢えずこの馬鹿をベンチに寝かせるぞ」

それから三分程経った頃、貴島は意識を取り戻したようだ

取り敢えず状況説明をしてやると、見てからに落ち込んだ…まあ素人に負けたんだからそらそうよ

「は、はは…素人に負けたのか俺は……」

「相手が悪かったな、まあこれも運命だと思つて受け取れ」

「はあ……何か今までの俺が馬鹿みたいだな」

「実際のところ実力のある馬鹿だからなお前、相手の力量も分からないままじゃどんな事であろうと長続きしないぞ」

「忠告どうも……」

そんな訳で、取り敢えずの所この件は終わりを迎えた



## 41話

さて、リサの一件も終わり年も越して冬休みも終わった……いやーこの期間何してたんだろうな俺

まあ実際の話、遂にP〇4買って滅茶苦茶やり込んでたんですよねー作者様？

AZAZEL

『やめろお前メタい話を振るな、て言うかお前キャラが俺作者に話しかけるな…そういう作品じゃなかったろ』

おおこれは辛辣、まあ柄にもないことやったな確かに……さてと、冬休みも終わったし学校始まったちやっただよ畜生

「おつはよー！幸貞君！そして明けましておめでとー！！」

「ああおはよう、明けましておめでとー…こんなクソ寒いのに相も変わらず元気だなお前」

「冬ってなんかキラキラドキドキしない!？」

「しない、て言うかお前いつもしてるじゃん」

「えー？そんなことないよー」

保護者有ど有こ有い有った保護者有、俺だけじゃ対処しきれないぞこのお星様

ていうか多分全員おいて走ってきたなコイツ、何でこんなに元気ハツラツなんだよ  
「待ってよ香澄〜！」

「は、早いよ香澄ちやくん！」

向こうから三人が息を切らしながら走って来るのが見える、因みにあと一人は余裕な顔してるな…：なんでお前はお前ですんなに体力あるんだよ

「お前急に走り出すんじゃないやねえよこのバカ！」

「ご、ごめんね有咲〜」

「やつほー幸貞、あけおめ〜」

「ことよろたえ」

「おたえ」

「たえ」

「おたえ」

「たえ」

「おたえ」

「たえ」

「久し振りに聞いたねそれ、て言うかまだやってたんだ」

「俺は絶対に折れんぞ…あと明けましておめでとう」

「うん、今年もよろしくね」

という訳でポピパ勢とはあけおめことよろを交わした、さつさと教室に避難しないとピンク頭とか女王様とかが来ちゃうな

金色は金色でも異空間が来るかもしれないな、それはそれで面倒臭いから逃げるけど

「あら、誰から逃げるって？」

「読心やめてもらっていいですかね女王様」

「大体予想つくのよ貴方の思考…はあ、明けましておめでどう幸貞君」

「これはどうも、今年はあまり宜しくしたくないですが宜しくお願ひ致しますね」

「千切るわよ」

何を千切るんですかね…ああ、ナニをか

まあそんな下ネタは置いておいて…：：：ピンク頭が見えないなそう言えば

「丸山先輩はどうしたんですか」

「彩ちゃんは寝坊したそうよ」

「新年早々、氷川先輩に絞られるとは…御愁傷様なこったな」

「まあ自業自得よね」

「仰る通りで」

さて、今度こそ教室に行こうつと

始業式は早々に終わり、序に言えばホームルームも直ぐに終わった

今日は始業式って事なんで授業は無く、そのまま下校

暇だしcircleに行くか

「明けましておめでどう御座います、まりなさん」

「うん！明けましておめでどう幸貞君！今年も宜しくね！」

「はい、今年も頑張らさせて頂きます」

さて、今日の予約バンドは…まあいつも通りだな

準備はまりなさんがしてくれてくれたそうなんで、俺は受付をやる事に

小説片手に暇していると

「幸貞ー！明けておめでとう！」

「おう、明けておめでとうリサ」

「明けておめでとう幸貞、今年も宜しく」

「どうも友希那、明けておめでとう」

Rosealia様が御到着なされたよ、因みにまだこの二人しか居ないから御一行様じゃないけどね

「他のメンバーはまだ来てないのかい」

「うん、燐子は生徒会で紗夜は風紀委員の色々があるから遅れるって…あこはまだ終わってないってさー」

「……貴方、燐子と紗夜と同じ高校じゃ無かったかしら」

「俺が知ってるわけないだろ、て言うか燐子ちゃん何故に生徒会？」

「何か先輩に次期生徒会長に指名されたとかなんとかでね」

マジか、はー世界は予想外な事が起こるなあ…て言うか予想外過ぎるわ

あの燐子ちゃんが生徒会長って…マジかよええ… (困惑)

いやこんな事言ったら本人に失礼だけどさあ

「すみません、遅れてしまいました」

「す、少し長引いてしまつて……すみません……！」

「お待たせしましたリサ姉！友希那さん！」

「お、来た様ですよお二人さん……三人共明けましておめでどう」

「明けましておめでどう御座います導寺峠さん、今年も宜しくお願ひします」

「あ、明けまして……おめでどう御座います、幸貞さん」

「開けましておめでどう幸貞さん！」

三者三葉とはまさにこの事か、まあ皆様年明けも元気なようでは有り……そんな訳で友希那に鍵を渡すとスタスタとスタジオへ向かつていった

さて次は……アフグロか

「明けましておめでどう御座います幸貞さん！今年も宜しくお願ひします！」

「明けましておめでどう！今年も宜しくな！」

「明けましておめでどうお兄さん！」

「三人共元気だねえ、お兄さんそんなに元気出ないよ……明けましておめでどう」

「あけおめくことよろく」

「八文字だけで済ませられるって略語って凄いいね、あけおめ」

「……明けましておめでどう」

「こりやどうも、明けましておめでどう蘭ちゃん」

て言うか流石モカ、年明けでもそのだらしなさはブレないな……まああんまりこの娘と関わってないけど

蘭ちゃんとは相変わらずクールな様です、つぐみちゃんは天使で巴は熱い……背後に元プロテニスプレイヤーが見える気がしなくもない

心做しかひまりちゃんの双丘が大きくなつておっと、誰か来たようだ

さて次は……ハロハピか

「やつほー幸貞！明けましておめでどう！」

「はいはい、あけおめこころ嬢」

「ゆーくん明けましておめでとーう！」

「おおはぐみか、明けましておめでどう」

「明けましておめでどう幸貞、年明けの挨拶というのは何とも……嗚呼、儂い」

「何言ってるか分からんが明けましておめでどう」

何でもかんでも儂いんだなこの人は……さて、ハロハピ屈指の苦勞人様がお見えになられたな

「お疲れ美咲ちゃん、明けましておめでどう」

「あ、幸貞さん……明けましておめでどう御座います、はい……まあ、疲れましたね」

「ゆ、幸貞さん……明けましておめでどう御座います」

「おお花音ちゃん、明けましておめでとう」

使  
あ〜花音ぢやんはがわいいいなあ〜、相変わらず天使ですわ天

美咲ちゃんは新年早々から振り回されてるみたいでね、まあドンマイ

「幸貞幸貞！もう新年の抱負は考えたかしら！」

「ええ？いや全然考えて無いけど」

「あたしはね！今年も世界中に笑顔が溢れるように頑張るって抱負にしたの！！」

「ああ、そうですか…：て言うかそれが目標なんじゃなかったか」

「ええそうよ！でもあたしの抱負でもあるの！」

「へえ、そう…：で、なんで俺に言ってきた」

「幸貞は何か抱負は無いのかしら？」

「考えて無いってさつき言ったでしょうが…：まあ敢えて言うなら、静かで平穏な日々を過す、かな」

「あらそうなの…：なんだかつまらなそうじゃないかしら、もつと面白くて楽しい方がいいわよー！」

「はいはいそうかい、余計なお世話だよ」

面白くも楽しくも無ければ辛くも苦しくも無い、そんな日々を手に入れるのが俺の夢



何だかなあ…自ら地雷を踏みに行ってる感があるな

でも俺だってそこまで極まった屑じゃない、向こうからコミュニケーションを求められれば反応するさ

唯求めてくる相手に変人が多いだけだ、うん俺悪くない

「ねーねー、ゆうくんっていつつもなんかの本読んでるよねー…なんの本?」

「ああこれ?この前に取った電験三種ってヤツの参考書、暇潰しに読んでる」

「でんけんさんしゅ?はぐみわかんないや」

「まあ取るのは難しいが取ったらこっちのもんって資格だよ」

「ゆうくんって頭いいんだね」

「まあそれなりにね」

これでも天才の端くれですから……お前これまではぐみと全然喋ってなかったらとか思ってる奴ら、言っておくが俺は北沢精肉店の常連なんだよ

休みの日とかでもコロッケ買いに行く位に常連なんだよ、だって美味しい花蓮と晶奈も好きだからな

そこで店番してるはぐみにエンカウントするから普通に喋る仲だ

さて、残るはパスパレか……まあでも女王様とイヴにはもう挨拶済ませたんだよね、女王様と会った後にイヴとも会ったし…丸山先輩は見えないけど

「て言うかあの人達って基本的に事務所で練習してるから、来ないだろ」

「ところがどっこい、これが現実」

「何でお前がその台詞知ってるんだよ」

「アタシ結構好きだよ？カ○ジ」

「女の子が観るようなアニメじゃ無いだろ……」

「ユツキー、アタシのこと女の子って……やっさしー！」

「さいですか、明けましておめでどう」

「あけおめユツキー！」

本当、神出鬼没だよなこの天災……て言うかパスパレって今日予約入ってたっけか

するとヒーヒー言いながらピンク頭が入って来た

「もう急に走らないでよ日菜ちゃん！」

「遅いぞ彩ちゃん！」

「て言うか貴女達って今日予約入れてたっけ？」

「いえ、入れてないわよ幸貞君……空いてるかしら？」

「おや女王様、まあ空いてますが……何故急に」

「気分よ気分」

いやまあ正直なんでもいいんだけどさ、もし空いてなかったらどうする積もりだった

のかねこの人達……なんか無理にでも空けるとか言いそうだけどなこの人

女王様

「あ！明けましておめでどう幸貞くん！今年もよろしくねっ！」

「ああどうも丸山先輩、あけおめことよろ」

「何か酷くない？」

「明けましておめでどう御座いますッス、幸貞さん」

「おう明けましておめでどう、麻弥ちゃん」

さて、取り敢えずこれで全員に新年の挨拶は出来たか……律儀？まあ付き合いがある人にはしておかなきゃなあ

アリア？年越した瞬間に電話が飛んできたよ、『初旦那樣だね』とか意味不明な事言うてたけどな

因みにアリスさんにも済ませてある、アリアの後に掛かってきた

はあ……俺の静かな日々は何処に……自業自得な部分はあるが、それでもここまで酷くなるとは思わなかった……別に嫌いじゃないけどさあ

まあこれも運命と言うやつなかね、俺はこういう星の元に生まれてきたという訳なのか

「……あ、おヤッさんに言うの忘れてた……後でメールしておこう」

なんだかんだお世話になってるからな、あの人にも

さて、今年も一年…そして今日という日も頑張つて行きますか…面倒臭いがね

## 4 2 話

さて、この季節になると一つの大きなイベントがある…そう、進級と卒業だ

三年生にとっては進学か就職か…まあ殆ど進学だろうが、それでも大きな分かれ道にぶち当たる時期

俺達は学年が一つ上上がり、新たな事が始まる時期だ

そんな訳で俺も二年になりました…え？原作は二年になるまでに三年掛かってないか？原作とかちよつと何言ってるか分からないな

まあいい、そんな訳で二年生になりましたとき

「本当に燐子ちゃんが生徒会長になったのか…はー、世界は分からんな」

「導師峠さんおはようございます…：雰囲気はやる気が無いのに服装だけはしっかりしてますね」

何か校門の近くで受付？的な事をしてる氷川先輩に出会った、開口一発目からかなり辛辣

「まあ自分真面目ちゃんなんで」

「どの口が言いますか、今年からは一年生が入ってくるんですからしつかりして下さい」

「善処します」

後輩が出来たからって変わる俺じゃないがね

ああそうだ、ここで一つ途轍も無くどうでもいい話をしよう：あれだったら聞き流してくれて構わない

とある友人とこんな話をしたんだ、学園系ギャルゲーに最も適している学年とは何年生か……もう既にどうでもいいかもしれないが話し続けるぞ

まあそこで考えた結果、主人公を高校生として考えた場合は高校二年生が一番適しているという結論に至った

理由としては、より多くのシチュエーションを味わえる所だ

高校は三年間、二年生とは丁度真ん中……詰まるところ後輩・同級生・先輩、そして幼馴染にぶっ飛んで先生という視点も有りだ

更に他校に手を伸ばせば後・同・先の三点セットが更に着いてくる

上記の理由から高校二年生という立ち位置が最も適しているだろうと成った

………何でこんな話したかって、自分が高二になってその話を思い出しただけだよ  
「そう言えば氷川先輩、一年生に男子生徒は居るんですか？」

「残念な事に今年はゼロ人です……どうやら試験を舐めていたらしく、受けた人数は多かれど全員が合格点に満たないそうです」

「そりや馬鹿ですね…そう考えると俺達の代はそこそ優秀ですね」

「まあそうですね…導寺峠さんも他のお二人も、余裕の合格点超えだったらいいですか  
らね」

「あんなの参考書見れば解けますよ、寧ろ何処に間違う要素があるんだか」

「天才は出来ない人の苦勞を知らないものです」

「正にその通りですね…まあ他人に興味なんて有りませんがね」

「余りそういった事は人前で話さない方が良いでしょう…呼び止めて長話に付き合わせ  
てしまつて申し訳ありません」

「お氣になさらず、話に乗つたのは自分ですので」

それに話を振つたのも俺だからな、本当に律儀だよなこの人…悪く言えば堅物、良く  
言えば優等生…か、難儀なものだね

「…まだ話を続ける様ですが、燐子ちゃんはそので何をしているのかね？」

「ひやつ！…あ、幸貞さん…おはよう、ございます」

机の裏に体育座りをしている燐子ちゃんを発見した…まあさつきから氣になつては  
いたんだけどね

「おはようございます、何でこんな所に座り込んでるの」

「こ、この後…み、みみみ皆の前で話すんです…だから、その…失敗しないように、練

習……してるんです……」

「ああ成程、まあ頑張ってください」

「はい……頑張れり、ます」

大丈夫じゃない未来しか見えないな……うん、本人には失礼だけれども

お？向こうから走ってくるのは……金髪ツインテールでツンデレと言うどテンプレ少女の有咲ちゃんじゃないか

「よう有咲、おはよう」

「ああ、おはよう……て言うか何でここに居るんだ？」

「氷川先輩と少し話してたんだよ」

「へー……って、白金先輩は何でそこに……」

「全校生徒の前で話すんだからな、まあ緊張して当然だろ」

「あー……そっか、朝会で話すんだったな」

「じゃあ取り敢えず俺は教室に行くわ、仕事頑張れ有咲と氷川先輩……後燐子ちゃんは……取り敢えず頑張れ」

無責任だが今の俺からはこの言葉しか掛ける励ましの言葉が見つからないんだ、スマンね

そう言えばうちの学校もクラス替えがあるらしい、まあ今日じゃなくて明日らしいが



…まあ正直何でもいいんだけどね、出来れば裕次と陽音と一緒にのクラスになりたい想いはあるがな

「あ、おはよー幸貞」

「おはよう沙綾さん…その紙袋はあれかね」

「あはは、まあ…うん…余ったパン要る？」

「有難く貰いますよ」

そんな訳で朝の定型文を交わした、そして珍しい事に香澄が遅刻又はギリギリに登校せずに普通にやって来たのだ

いやー驚きですわ、有咲と一緒にじゃないから下手したら学校来ないんじゃない無いかと思つてたよ

「おつはよー幸貞くん！」

「ああ、おはよう…今日は遅刻ギリギリじゃないんだな」

「うん！今日は有咲と一緒に来れないし、早く来てみんなに会おうと思つて！」  
「成程ね」

そういう原動力で動いるのか…流石香澄と言うかなんと言うかな、まあ友達想いの娘なんだよね

まあキラキラドキドキとか素で言つてなければもつといいんだけど

さて、結果から言うとな案の定燐子ちゃんは詰まってしまいました……まあしょうがないね、皆生暖かい目で見てたよ

まあそんな事もあつたがその後は普通にホームルームやつて下校になりましたよ

「ねーねー幸貞ー」

「どうしたりサ、てか他の娘達は？」

「休憩中、それでさ幸貞！今度アタシ達主催ライブする事になったんだ〜！」

「へえ、そりや凄いな」

「むく…返事が冷たいく」

「そんな事言われても…しかし主催ライブするの、大変だな」

「そりや大変だよ…って、主催ライブにするか知ってるの？」

「別に知ってて悪い事じゃないだろ…企画の制作と進行、運営の管理にゲストを呼ぶならゲストの勧誘と対応…チケットの値段設定に枚数と売上把握、会場決めと交渉とホームページの作成…それに何より学生の持てる金額で金を回すのが大変…：…何見てんだよ」

久方振りに見たな、コイツのω

知ってるか皆、この記号ギリシャ文字Ωオームの小文字なんだぜ…因みに使う時は抵抗値の値を示すときに使う単位オーム（工業高校感）

「ねえねえ幸貞く」

「絶対に嫌だからな、マジで面倒臭いからこれだけは本当に嫌だぞ」

「まだ何も言っていないじゃん!?ねくお願い幸貞!手伝って!」

「こういうのはやり始めちゃうと凝り性だから果てが無いんだよ、だから嫌なんだよ」  
「勿論タダとは言わないからさ!アタシ達を助けると思ってるね?お願い!」

俺の手を両手で握り、カウンターから身を乗り出してこちらへ前のめりになるリサ

近いんだよなあ貴女、何処からか漂う女の子特有のいい匂いとかが色々ともう……

「ああもう分かったよ、やりやいいんだろやりや……はあ、幼馴染みの好つてことのでやつてやるよ」

「本当!? ありがとう幸貞!!」

満面の笑みが眩しいねリサさん……あとサラッと抱き着かないで貰えますかね

貴女結構、色々と育つてるからあんまり密着されるとさあ……

そういうのは天災で間に合ってるから

「会場は決まってるのか?」

「うん、おおよその目処は立ててるよ……まあほぼ決まりかな、あとチケットももう考えてはあるけど値段がね」

「そこはお前のコミュ力に任せる、会場は後で俺も見ておくから教えてくれ……後はHPの作成とゲストはどうするんだ?」

「HPは隣子があらかた作ってくれたよ、ゲストさんも決まったから後は練習とチケットかなあ」

なんか大分出来てない? 俺の出る幕は無いような気がするんだが

……いや、俺の本領は当日か……裏方に技術&照明なんかは全部俺がやる羽目になると思うからな

何せウチの銀髪美少女様は大層我儘でね、願わずともスグにご指名がはいるだろうさ  
…まあそれだけ信頼されてると考えれば嬉しいのかね

「さて、久方振りにやる気出しますか……徹夜が続きそうだなあ」

「アタシ達もアタシ達で出来る事はやるからさ、幸貞一人に背負わせる気はないよ！」

「それはどうも……まあ、君達は当日出演するんだから練習もしなきゃいけないんだろ  
？」

「うっ……ま、まあ……そうだけど……」

「当日にバテられても世話無いからな、程々にしとけよ」

「うん、ありがとう……じゃあアタシは戻るね〜」

幼馴染みからの頼み事は断れないか……俺も甘いねえ、まあそんな事を考えてる時  
点で厨二臭いな

まあ与えられた仕事はキツチリ熟す主義なんでね、そこら辺はご心配無く

さて、そこから更に日は経った

チケツトについてはリサのコミュカで片が付き、会場との交渉に資金の運用…更には企画関連全てを俺がやった

あの娘達には練習に励んでもらう様に手を回しまくった、端くれとは言え天才が本氣出したらこんなもんよ

「え？ポピパをゲストに呼ぶって？」

「ええ、急遽なのだけれど…大丈夫かしら？」

「まあ全然大丈夫だけど、取り敢えず会場の方に聞いてみてからだ…大丈夫だろ」

「彼女達は本気だったわ…出来れば出して上げたいの」

「君にそこまで言わせるか…：…ならもし駄目と言われたら、無理矢理にでも振じ込んで

やるよ……その辺は任せとけ」

「ま、まあその……程々にしなさいよ」

「安心しろ、別に法に触れるような事はしないさ……要は触れなければいいんだ」

「……………凄く心配なのだけれど」

「冗談だよ、本気にするな」

にしてもポピパなあ……色々頑張ってるんだねえ、沙綾には世話パンのおお褌褌分け分け一肌脱ぎ  
ますか

てな訳で交渉してみたら、寧ろ歓迎されたので余裕でした

現在俺は家でパソコンをカタカタと打っています……何してるかって？チケツトの状  
況整理とHPの更新やらなんやらですわ

「……………ん？どうしたユキ」

パソコンの横に my cat 基、うちの猫？であるユキがチョココンと座った

なにもせずじーッと俺を見つめてくる……何がしたいの君は

腕を出すと伝って俺の頭へ落ち着いた、成程そういうとこだったのね

因みにこの子は俺の部屋で寝ている……ある時は枕の横に、またある時は腹の上で寝て  
いる事もあった

基本的に俺は寝相が悪い訳ではないし、寝てしまうと何があっても基本的には起きな

いのでユキも好きに寝ている様だ

「さてと……こんなもんにして寝るか」

Roseia

アイツらのライブまで残り少しか



## 43話

時間が経つのは早いものだ……来週だと思つてたものがもう今日になつてしまつた  
さあ、Roseliaの主催ライブが始まつて参りましたぞ

会場入りは一番早く、リハマまでの時間を準備に費やす……キツついよなあこれ

今日に限つては流石に俺一人では出来ないのでRoseliaの娘達にもやつてもらつている

「友希那、照明とかのセッティングはリハマの時でいいのか？」

「ええ構わないわ……それに、貴方がやるんでしょ？」

「え、まあ……そうなるのかな？」

「そう、なら何の心配もしていないわ」

その信頼は有難く受け取つておくが……やっぱりそうなりますよね、俺がやるんだよね  
知つてました

という訳でスタッフの方々に説明を少々……と、している間にどうやらポピパが到着したらしい

控え室に戻つてみると

「何だねこの大惨事は」

「え？何で幸貞ここにいるの？」

「幸貞君だ！おはよう！」

「ああ、おはようお前ら…で、何がどうなってこの大惨事だ」

俺の目に広がっているのは、Roseliaの面子が屍のように倒れているという光景だ

まあ俺が殆どをやったとはいえ、コイツらはコイツらで動いてたみたいだから…

まあ疲れたんだろう

「…う、うう…やばい、寝ちゃってたのか」

「わ、私とした事が…」

「おはようリサと友希那、お疲れのところ悪いがポピパが到着してるぜ」

「あ、ああ！ごめんね！」

いつのにか起きていた氷川先輩が話し掛けてきた

「導師峠さん、確か私達より仕事の数多かったですよね…何でそんなにケロツとしてるんですか」

「まあ基本的なスペックは天才なんでね、この程度で音は上げませんよ」

「やっぱり……凄い、ですね…幸貞さん」

「それはどうも燐子ちゃん、それよりリハをそろそろ始めるんで寝起き早々悪いですが、準備よろしく願いますね」

「はい、わかりました」

さて場所は変わってステージ、リハをやる為に移動して参りました

まあ俺は表じゃなくて裏側にたつて照明を弄つてる最中なんですけどね

いや然しこここのライブハウスは照明の機器と音響の機器が近くにあつてよかつたよ、行つたり来たりしなくて済むからな

まあ勿論スタツフの方々にも手伝つては貰うが、殆ど俺一人でやる…やるんなら徹底的にやるからな

それから時間が少し流れ、遂に本番だぜ

流れるにはゲストバンドが最初にやって締めにRoseliaを持つてくる感じだ

因みにゲストバンドのトリはポピパに設定しておいた

しかし、前まではこういうライブハウスとかは感情に当てられるから苦手だったんだが…数熟す内に慣れたのか

人間の適応力は凄まじいねえ…まあだからといって嫌悪感は無くならないがね

さて、ポピパの出番も終わり大本命のRoselia様達のご登場だ…Roseliaの時間を見計らつて会場入りする人も居るみたいだな

しかし、何か足んねえよなあ?と言うか何かモワモワする、最近徹夜続きで昨日に至ってはオールしてるからな、深夜テンションが抜けてない

「あ、すみません…今いいですか?」

「はい、どうしましたか?」

「俺達が最後の予約だった気がしたので、少し延長をさせて頂きたいのですが」

「全然いいですよ!寧ろ歓迎です!…しかしお客様のの中には学生さんも多くいるので、あまり遅くまでは」

「その辺はこちらで調整します、延長の件有難う御座います…あともう一つ、頼みたい事が」

「何でしょう?」

さて、準備は整った……何するかって？久方振りにテンションが高いからな、少しばかり俺も前に出ようと思ってるね

「おお、お疲れさん……そんな所に突っ立ってどうしたお前ら」

「え？あ、ああ……お疲れ様幸貞」

「おう……で、なしてそこに立ってた訳」

「まあ、ちよつとね」

ほう？成程、詰まるところステージから帰ってきたところで友希那……と言うよりは *Roselia* と *poppin' party* の違いみたいなのを感じたかな

「お前らが何を思ってるかは知らないが……まあなんだ、少しばかり延長するから見行きな」

「え、延長って……何するんだよ？湊さん達が終わったら終わりじゃないのか？」

「まあまあ有咲、そう焦るな……お楽しみにしてあげ」

「幸貞が自分からなにかするって珍しいね」

「おう言ってくれるなたえ……まあ間違いないなら否定はしないが、最近徹夜続きだ」

し昨日に限ってはオールナイトしたからな……テンション高いんだよ今」

「夜遅くなるかと急にテンションが高くなるってやつ?」

「そう、所謂深夜テンションってやつだ」

「じゃあ……今の幸貞君はスーパー幸貞君って事!？」

「ネーミングセンスが皆無だが、まあそういう事だな」

「激レアだぞ激レア、やる気を出した俺なんて五年に一度見れるか見れないかだからな  
何だつたらツチノコ並にレアだぞ

「じゃあそういう事だから……時には思い詰めるのもいいが、今はライブだ……せめて楽しんで帰れ」

「………うん！ありがとう幸貞君！」

俺のプライドでもあるからな、やるんだつたら徹底的に……観客に心残り一つ残さないで最後の最後、燃え尽きるまで楽しませるまでだ

Rosealiaの出演が終わる……だがライブはまだ終わらない

「あれ? 幸貞どうしたの?」

「何、少し柄にも無く高ぶってるんでな……俺も久方振りに前に出るだけさ」

「え? でも時間が……」

「安心しろ、延長済みだ」

メタリックな質感のピエロ面を被り、ステージへと出る…会場じゃチラホラ気が付いてる人達も居るようだが…まあ分からなくても雰囲気でノれるだろ（適当）

まあ選曲は俺なんでね、いつも通りですよええ

しっかしこのライブハウス珍しいもんを置いてある、ピアノ付きDJブースなんて久しぶりに見たな…やってた頃に自作したのを見た以来だ

さあ、ダイジェストの時間だ

Goodbye Boss

極圏

our obros }twin stroke of the end }

Gate of doom

Schrecklicher Aufstand

foler n

Lost Civilization

Carmine: scythe

Sheriruth

Tiferet

混沌を越えし我らが神聖なる調律主を讃えよ

Grievous Lady

World Vanquisher

因みに今回はピアノパートがあるものをチョイスした、折角ピアノ付きDJブースなんだから存分に使わなきゃなあ

ピアノパートは俺が全て演奏しましたさ勿論

「相変わらず出鱈目みたいな器用さね、貴方」

「歌姫様からお褒めに預かり光栄の限りですわ」

「それにしても、そのお面は何なの？」

「ああコレか？俺の出たてたDJの大会って服装自由なのが多くてな、覆面やら仮面やらを付けてるやつも居たからな…まあ俺もそれに肖ってみようと思ってるね」

「幸貞さんのお面カッコイイ〜!!あこもライブの時に付けてみようかなあ〜…ふっふっふっ、我が闇の力を封印せし仮面…え、え〜と」



「やめとけ、ドラムなら特にな…視界は見えづらいわ酸素少ないわでいい事ないぞ」  
「ちえー…分かりましたー」

それに俺の仮面はお手製だし、ちゃんと鉄板から加工してるからまんま鉄だぜこれ  
家庭用工具だけで加工すんのかなり大変だったな…まあ普通こういうのつて専用  
の機器を使うのが当たり前なんだけどね

そんな話はどうでもいいか

「取り敢えず俺はポピパ達を見送ってくるわ」

「分かったわ、私達は裏方で待ってるわ」

「いや別に悪いし先に帰ってもいいぞ」

「いいのよ、今日一日で貴方がどれだけ仕事をしたか…せめてお礼をさせて頂戴」

「…左様ですか、じゃあ俺も早めに帰ってくるようになりますよ」

そう言つて正面ドアの方へ向かった

どうやら、まだポピパ達は自動ドアの前で固まって話をしている様だ

「よう、お疲れさん」

「ああ！幸貞君もお疲れさまー!!」

「お、お疲れ様でした…幸貞君」

「おう…それで、その娘達は誰かね？」

ポピパ達に混じって青髪の娘と茶髪の娘が居るんだが、俺完全に初対面なんだが

「初めまして、私は戸山明日香と言います…姉が毎度ご迷惑を掛けてるようで、すみません」

「あ、へえ…香澄の妹さんで、導寺峠幸貞です」

姉と性格が真反対…俺と晶奈みたいだな

て言うかこの姉にしてこの妹は一体どこから生まれてくるんだろうか、姉がこうだからこうなったってのも有り得るか

「わ、私は朝日六花と言います！よろしくお願いします！」

「ああ宜しく、さっきも言ったが導寺峠幸貞だ」

後から沙綾に聞いたが、二人共羽ヶ丘らしいな

あと朝日六花ちゃんは最近こっちの方へ越してきたとか何とか、それも音楽をやりた  
いからって素晴らしいね本当

「じゃあ俺は戻るわ、Roselia達を待たせてるんでね」

「分かった、じゃあまた学校でね」

「ばいばい」

裏口で待つてるって言ってたよな、通り過ぎるスタッフさんへのあいさつも忘れずに  
しながら裏口を目指す

裏口から出ると、友希那が誰かと喋っていた…他のメンバーは見当たらないところからまだ何かやってるんだろな

「おや友希那、取り込み中か」

「……いいえ、もう切り上げようと思ってたところよ」

「ちよつと待って！私はまだ……！」

「ようネコミミヘッドフォン、これで自信を折られるのは二回目かな」

「うっさいわ！ネコミミヘッドフォン言うな……っってお前はピエロ野郎!!」

「久方振りだな、相変わらずの自信家のようで何よりだ」

因みにネコミミヘッドフォンってのは、コイツが何故か常に付けてる猫耳付きヘッドフォンから取った渾名だ

因みにピエロ野郎は俺が大会でやる気がある時に限って付けてたピエロの鉄仮面から取られた

確か聞いた名前はチュチュ、本名は知らんが以前にとあるDJ大会で優勝した時に声を掛けられた

「何でお前が…そう言えばライブの最後にも出て来てたな」

「と言うかこのライブにおける企画作成と運営に予算管理…更に果ては音響&照明全て

俺がやったからな、居て当たり前だろ」

「本当に化け物だなお前」

「酷い言われ様だな…それで、今回は友希那を勧誘してる訳か…それで断られたとな」

「…まだ私は諦めた訳じゃない」

「何度も言ってるでしょ、私達は私達の音楽で上を目指す」

「っ…」

ああ、二人の話に全く関係ないが言い忘れてた事があった…俺、自信家ってのは嫌いなんだよね…俺自身がクズになるから

どうもその自信をへし折りたくなる、とてもね

## 44話

Rosealiaの主催ライブが終わり、若干仕事漬けだった日々からおさらばした  
帰り際に出会ったネコミミヘッドフォンは諦め悪く友希那にメモリースティックを  
渡していた、突っぱねられてたけど

何かそこだけ見るとヤバい取引みたいだよな、てかコイツのやる音楽ってデスクトップ  
プミュージックだったのか…分からなかったらググってね

という訳で普通に学校です

「やつほー幸貞、おっはよー」

「おはよう、幸貞」

「ああ、おはよう……何でここに居るの君達」

家出たところにリサと友希那が立っていた…基本的に俺は家を出る時間が早いので  
一緒になる事はなかった、時偶二人が早起きして登校する事はあった

「途中まで一緒に行こうと思ってね」

「はあ、さいですか…まあ行くか」

えっちらおっちらと学校に向けて歩き出す、2月なのでまだまだ寒い…雪とか降られ

でも困るんだよね

はしやぎ出しそうなのは奴等は心当たりあるが

「……ねえ幸貞……今日なんの日だか知ってる?」

「は? 今日? 2月14日だろ……ああ、成程」

「気が付いた?」

「バレンタインか、もうそんな時期になったのか……」

「せいかーい! という訳で、はいあげる!」

「え、えつと……私からも、はい」

なん……だど……? リサから貰えるのは何となく分かるが、まさか銀髪美少女様から貰えるとか予想外過ぎる……マジか

しかも手作り感が半端ない

「態々悪いな、ありがとう……にしても友希那がくれるとは思っても無かったんだが」

「アタシと一緒に作ったんだよく、友希那が自分から言ってくれたら張り切っちゃった!」

「ま、まあ……貴方には最近色々とお世話になったから、そのお礼よ」

「そりやどうも、有難く貰うよ」

二人してクオリティ高つけえ、これお返し頑張んなきや駄目なやつですかね

まあこんな美少女様達からチョコ貰えるとは男冥利に尽きるんですがね

「それじゃあアタシ達はこつちだから、またね〜」

「ああ、そこそこにお返し用意しとくから…期待はするなよ」

「幸貞が作るなら期待しとくよ〜」

「人の話を聞け……」

リサ達と別れ、学校に着いた

ああそうそう言い忘れてたことがあった、Roseliaの主催ライブで色々と立て込んですっかり忘れてたがクラス替えを行ったんだ

するとどうだろう、学園長の計らいか陽音と裕次と同じクラスになったのだ

「おはよう幸貞君」

「おお陽音か……て言うか席順までお前達と近くって、最早狙ってると思えねえな」

「あはは…だよね〜」

「おーす、おはよう」

「あ、裕次君おはよう」

「……その右手に持つ紙袋は何なんだね」

「ああコレ？まああれだよ、所謂バレンティンってやつだよ」

モテるだろうなあとは思っていたが、まさかここまでとは思ってもよらなかったな…紙

袋いっぱいの子ヨコとか初めて見たよ

「裕次君食べ切れるの?」

「まあ頑張るしかないよな」

「精々頑張れよ、食べ過ぎの鼻血には気を付けとけ」

「はいはい、そう言う幸貞は貰ってないのか?」

「幼馴染から貰ったよ、それだけさ」

「嘘吐け、絶対山吹さんとかからも貰えるだろお前」

あーそう言えばそうだな、沙綾とクラス一緒だし貰えるかもしれんな

確かただだけがクラス離れたんだっけか……まあドンマイとしか言い様がないから  
何とも言えんが

「陽音はどうだ? 貰ったりしたか?」

「あ、うん……まあ裕次君よりは貰えなかったけどね」

「こんなに貰っても逆に困ると俺は思うんだがな」

「まあそんな事言うなって、折角くれたんだからな」

「ヒュー、イツケメエン」

「お前にだけは言われたくない」

そんな感じに駄弁っていると、ポピパの娘達が登校してきた……そしていつもの様に沙



綾がパンが入った袋をくれた

「幸貞ー、はいこれあげる」

「おお、ありがとう……チヨコパンが多いなおい」

「バレンタインだからね、勿論手作りだから期待してね？」

「そりやどうも、美味しく食べさせて頂きますわ」

「因みに、ポピパのメンバーで一人ずつ作ったから五個なんだよ」

「え、マジで？」

愛されてますなあ……いや有難い限りですけどね、天然<sup>たえ</sup>とかお星<sup>香澄</sup>様だとは言えかなりの美少女だからな

男としては好かれて悪い気はしない、面倒臭いけど

「後で食べるわ」

「うん、お返し期待しとくよ」

「変にハードル上げるな、やりずらいわ」

「あはは」

チャイムが鳴り、沙綾達は自席へと座った

さて……今日は特にとこれと言って用事は無いな、授業終わったらすぐ帰ろ

お昼、教室にて

「幸貞くーん！ハッピーバレンタイン！」

「そう言うのって良いんですかね、アイドルとして……」

「まあ千聖ちゃんも渡すみたいだし、良いんじゃないかな？」

「ええ……（困惑）、毒とか入ってないよな……女王様の事だから神経毒とかやりそうなんだが」

「へえ、そう見える？」

「居たのかよ怖っ」

満面の黒笑いを浮かべてる女王様が居た、この人だから致死性の毒は入れないだろ……

どっちかと言うとジワジワくるやつ選ぶだろうな

「失礼しちゃうわね本当、私がそんなことやる人間に見えるかしら」

「見えなかつたら言つてないんですけどがそれは」

「喧嘩を売つてるのなら買いますよ？」

「止めときます」

「あ、あははく…と、取り敢えずはい幸貞君！」

「いつもお世話になつてる御礼も兼ねてよ」

「はいはいどうも」

現役アイドルが一般男子高校生（自称）にチヨコとか渡して問題にならないのかな

てか（自称）って何だよ、一般人だろ俺…ええ？違う？ウツソだろお前

「何かそこそこ貰えるな、チヨコ」

「お、おとお前丸山先輩にチヨコ貰つてなかつたか!？」

「そう言えばファンだったなお前、まあ御愁傷様」

「その言い方スゲエ腹立つ」

「別に紙袋いっぱい貰つてんだから良いだろ、我儘言うな」

「別に我儘言つてるわけじゃないよ、ただ一ファンとして何かこう…複雑に色々ある

んだよ」

「そうかい……まあ俺がどうこうできる問題じゃないから勘弁な」

てな事があり、放課後に至る

裕次や陽音とは遊ぶ事もある……が、大概二人揃ってバイトが入っていることが多いので  
そこまで頻度は多くない

そんな訳で帰ります

「あつ……ゆ、幸貞さん……」

「おや燐子ちゃん、生徒会は？」

「今日はお仕事が無いので、このままcircleに行こうかと……それで、その……」

あんまりこう言う雰囲気にはしないで頂きたい、凄く勘違いしそう……多分と言うか十中  
八九でバレンタインだろうけどそこまで恥ずかしがられると色々とクる

しかも燐子ちゃん美少女だし、デカいし（説明不要）……俺じゃなきや落ちてたゾ

「こ、これ……普段の御礼です……」

「ああ、バレンタインね……有難く貰いますよ」

「で、では私はこれでっ……!」

駆け足で昇降口へ向かって行く燐子ちゃん、何だかんだとチヨコ貰えるなあ……て言う  
か知り合いに女の子多くね俺、男子の友達なんて裕次しか居らんやん

陽音？あの子は陽音と言う性別だか、多少はね

「……何だか告白されてるみたいでしたね、導寺峠さん」

「うおっ、居たんですか氷川先輩」

「ええ、私も今日は仕事が無いので…それに、私も貴方に渡そうと思っていましたし」

「それはどうも、燐子ちゃんのアレは天然って所が罪深いですよね…何人の男子がアレで勘違いを起こすのやら」

「……導寺峠さんは恋愛に興味無いのですか？」

「恋愛ですか？まあ別に興味ありませんが、一般男子高校生並の性欲や感情は有りますよ」

「ま、まあそうならいいのですが…あまり感情的になりませんし、そういうったものも表に出すことがないのでたまに心配になるのですが」

「……気にかけて頂いて有難い限りですな、まあ気にしなくても大丈夫ですよ…て言うか思ってたんですが何でチョコ二個なんですか」

「日菜からの分です、渡しておいてと言われたので」

「ああ、成程」

本当にいいのか、それでいいのかアイドル…事務所的に大丈夫なのかよこれ

所長の城山さん辺りに聞いてみるか、勝山さんでもいいけど

さて、本当に帰りますか

「たでーま」

「あらお帰り：随分とチヨコ貰ったみたいね」

「え、ああそうだけど：何で分かるの？」

「結構匂うわよ、カカオの香り：あと全部手作りみたいね」

「チヨコはまだしも何で匂いだけで手作りか分かるんだよ、怖いわ」

「私の鼻を舐めない事ね、ちゃんとお返ししなさいよ」

警察犬とかそのレベルだよな最早、手作りと市販じゃカカオの香りが違うってか？まあ俺は分かんが

しかしこのチョコどうしようか…いやまあ食べるけどさ、量がね

「そろそろ晩御飯にするから着替えてきなさい」

「ウィツス……そう言えば華蓮はチョコ貰ったのか？」

「何よ急に、と言うか女の私に聞くことかしらそれ」

「いや、そもそも前提としてバレンタインに女性が男性にチョコを渡すってところから間違ってるだろ……本来贈り物をする的な風習なんだから男女関係ないし、あとチョコも関係ないし」

「大元を辿ればね……まあ確かに貰ったけど、それが何よ」

「いや、唯単に貰いそうだなと思ってるね」

「今の時代、日本じゃ友チョコなんてものも有るんだし不思議じゃないでしょ」

「まあね」

それ本当に友チョコ何だろうか、コイツ薰さんとはまた違うイケメンだしモテるからな……同性に

多分俺の見立ては数個本命と見た、まあ俺家族だけどその辺ノータッチなんで同性でもいいと思いますよ

「なあ華蓮さんや……貴女恋愛とかに興味ある？」

「生憎、色恋沙汰は面倒なだけだから手を出す気にはなれないわね」

「流石姉弟、同じ意見か」

「にしてもこれまた急に何よ」

「いや、氷川先輩に少し聞かれてね……まあ俺も興味は無いけど」

「………そう、まあ早く着替えて来なさい」

「へーい」

恋もまた感情、愛情という名の感情

本当にその愛は俺へ向けた愛なのか？その感情に嘘偽りは無いのか？ああもう色々  
と面倒くせえな、本当に

愛情なんて、感情なんて……信用するだけ疲れるだけだろ、だったら最初っから信頼も  
信用もしなければいい

本当、いつからこうなったのやら……まあ、俺が腐ってるのは今に間に始まった事  
じゃないし今更だ

今を作るのは今の俺だ、だから俺は俺として生きるだけだ



## 45話

ヴァレンタインが終わって月日が大分経った、ホワイトデー？そら俺の手作り菓子折りを貰った全員に渡したさ

どうやら学校の方は羽丘と共同で文化祭をやるらしく、それに向けて着々と準備が進められていた：こちとらの生徒会長が隣子ちゃんなのも驚きだが向こうは天災か……

ま、つぐみちゃん頑張って（他人事）

「そろそろ文化祭の時期だね〜」

「ああ…唐突に何だよ陽音」

「いや特に意味は無いけど、今年は僕も出ようかなって」

「出る？一体何にだね」

「フッフッフー……バンドだよ」

その笑い方パン好きの超絶マイペース野郎、若しくは最年少厨二少女みたいな笑い方だな

て言うか陽音バンドなんてやってたのか…そう言えばいつぞやか趣味がある的事を言ってたな、いつだったか忘れるくらいに前だが

夏休みくらいか？

「バンドって事は、何かしらの楽器が演奏出来るって事か」

「あー、陽音はドラムメツチャ上手いぞ」

「あー！言わないでよ裕次君！」

「悪い悪い、陽音が珍しくバンドの話してるから気になってな」

「何だ知ってたのか裕次」

「おう、俺も陽音と同じバンドだからな」

まあ裕次は弾けそうな気がする、しかし陽音がドラムか…世の中何があるか分かったもんじゃないな

しっかし、俺の周りは楽器が弾けるやつが多いな全く

「因みに他は？」

「ううん、二人だけだよ」

「詰まり裕次が歌うのか…まあお前基本的に何でも出来そうだよな」

「お前にだけは言われたくないな、因みにギターボーカルだから」

ギターとドラムだけのバンドか…いつぞやか俺と華蓮がやったな、勝山さん元気かな（唐突）

そう言えば文化祭では寄せ集めのバンドが披露されるとか何とか聞いたな

丸山先輩  
ピンク頭に家庭的ギヤルと小動物、後大天使ツグミエルと超絶マイペースだったかな  
まあ当日分かるだろ

「まあ頑張れ」

「幸貞は出ないのか？前みたいにお姉さんとお出ればいいのに」

「俺は極力出たくないんだがねえ、あの人達がなんと言うかによるな」

「じゃあ俺は今年も出るに一票だな」

「僕もかなあ」

「まあそうならない事を俺は祈ってるよ」

「ねえねえ幸貞、今大丈夫？」

「どうした紗綾、パンか？」

「いや違うんだけどさ、幸貞って確か R o s e l i a の主催ライブを手伝ってたなあって思ってる」

「自分達がやるから教えて欲しいってか？」

「まあ…そんなところかな、でも基本的に自分達で作りたいからアドバイス…：…みたいなな？」

「まあ別にいいけど…：『場所、資金、内容、チケット、ゲスト、時間』後はこれらを掘り下げる、掘り下げ方は自由だ」

「わわっ!?! ちよ、ちよつと待って!」

慌ててメモを取る紗綾、取り敢えず今言った事をやるときや何とかなる

掘り下げるってのは例えば『時間』ならば開始時間とか、他には全体でどれだけかかるのか…：みたいな感じに掘り下げればいい

まあ敢えて言わないけど、自分達でやりたいと言ったんだからそこまで口は出さな  
「まあ何かあつたらまた聞け」

「うん、大分参考になったよ…これ御礼のパンね」

「はいはい毎度あり」

そう言えばGalaxyでライブした時に香澄が口走ったとか有咲が愚痴ってたな…ポピパが主催ライブか、まあ頑張れよ

他人事風なのは何度も言うが『自分達でやりたい』と言ったからだ、向こうから言ってくる分には良いが、俺が全てやってしまつては元も子も無い

…ここはポピパの力量とやらを魅せて貰おうかな

てな訳で放課後、とある奴に頼まれて高級そうな高層マンションへ来ていた

「ういーす」

「来たわねピエロ野郎」

「来なくていいなら来ないぞネコミミヘッドフォン…それで、俺にデスクトップミュージックを習いたいとはまた急だな」

「ここへ来てアンタに会ったのも何かの縁だわ、私のperfectなmusicの為に…私自身も力をつけなきゃ元も子も無いの」

「へえ…まあ別にいいが授業料は高いぞ」

「幾ら取る気よ」

「生憎と現金は腐る程持つてるんでな、金は要らねえ」

「What!?! アンタ High school student じゃないの!?!」

「高校生ですが何か、知り合いに株が大得意の奴がいてな…手伝った御礼に三割程な」

「アンタ本当に何者なのよ…て言うかそしたら何が欲しい訳よ」

「別に、何も要らね」

「…: Really? それじゃあアンタに何の得も無いじゃない」

「特損でお前の依頼を受けたと思ったのか? 心外だな、俺は基本的に人間に対して期待はして無い」

「理由を聞いて余計にアンタが捻くれてるってのが分かったわ」

「何で依頼を飲んだかって? 気分だよ気分、言われりゃ誰であろうとどんな奴であろうと大抵のお願い事は飲む」

「だが命令はNGだ、命令されると逆らいたくなる性でね」

「それで、他のメンバーはまだ来てないのか?」

「そろそろ来ると思うわよ」

「こんばんはチュチュ様ー!」

「…: 様? お前いつからそんなに偉くなった」

「Don't mind…: 彼女が勝手に呼んでるだけよ、パレオよ」

パレオ…: て言うかこの娘頭スツゲエ色してんな、カラー的に見ればパスパレっぽい

けど…普通にそんな髪してたら奇抜以外の何者でもないぞ

「……………チース」

「ヤンキーだな、紛うことなき」

「彼女はマスキング、Drumの担当よ」

「……………誰だアンタ？」

「そのネコミミヘッドフォンにデスクトップミュージックを教えに来た人間だよ」

「へえ、チュチュが教わるねえ……………アンタ、導寺峠幸貞だろ」

What? 何故この娘俺の名前知ってるん、ビックリし過ぎてネコミミヘッドフォンの嗜みル〇語みたいになっちゃった

藪からステイツ (ry

んなことあどうでもいい、何故俺の名前を知ってるかだ

「何故に君は俺の名前を知ってるのかね？」

「業界だと有名だぞ、結構な……………ところでアンタ、ケーキなら何が好きだ」

「ケーキ? また唐突に……………チョコ系統かな」

「……………あつそう、覚えとく」

何だったん? てか目付き悪いなおい、なんて思っているとまたドアが開く

入って来たのは黒髪ロングのクールビューティ、友希那と同じ…では無いな、コッチ

の方がまだ元気が有る

「チュチュ、その人は？」

「私のアドバイザーよ、悔しいけどコイツの腕は確かね」

「アドバイザーと言うより教師だな、お前より圧倒的に俺の方が技術がある」

「精々吠えてなさい！いつか私の perfect な music でアンタを抜く！」

「やれるもんならやってみな」

「仲が良いのか悪いのか…アタシは和奏レイだ、チュチュはレイヤとか呼んでるから適当に呼んでくれ」

「ああ、まあ宜しく」

和奏レイねえ…友希那よりは喋るし人当たりもいいが、何処と無く友希那に似たクルさがある……か

友希那に対人スキル身に付けさせたらこんなことになるんじゃね

「あれ？何で幸貞居るの？」

「俺も何でおまえがここに居るか知りたいんだが、お前ポピパの方はどうしたんだよ？」

何故か花園がこの場に居た、まあ大方臨時で入ったサポーターみたいな感じじゃないかとは思うけど

理由は正直どうでもいい



「ポピパは……勿論続けてる」

「そうかい、まあ別に好きにすればいいと思うけど」

「ハナゾノと知り合いだったのアンタ？なら紹介は不要ね、このメンバーで私達の p e r f e c t を創るのよ」

「ほーう……まあ別にどうでもいいけど、さて…時間は有限、さつさと始めるぞ」

しかしここスゲエなおい、個人のスタジオがあるマンションとか見た事ねえよ

確かコイツ飛び級した帰国子女だったか？まあ頭が良いのはいい事だが…まだまだ子供だな

「そこ、もう少し上げろ」

「Why?ここの音程は変化させたら変になるでしょうが!」

「馬鹿おつしやい、楽器全体を見て音程を考えてから文句を言いなさい」

「うぐつ……わ、分かったわよ」

「いいか?ここをこうすると……あら不思議、完璧だろ?」

「成程……」

そんな感じで講義をしている

まあ元の腕はその辺に転がってるデスクトップミュージシャンよりは遥かに上だ、言えは直ぐに理解する

「えっと…幸貞、だっけか？楽器も弾けるんだってな」

「ああ…まあ弾けることには弾けるが」

「試しに何か弾いて見せてくれよ」

「…………アタシのドラム使うか？」

「良いのか？ならちよつと叩くか」

不良少女…基マスキングのドラムセットを借りて少し叩く事にした、何を叩こうかしら

よし、pretty girlにしよう…誰のかつて？ラルクのだよ

「マジで気持ち悪いな、なにより何でそんなに叩けんだよ」

「体が勝手に動くからなあ、まあ慣れだな」

「じゃあ次ギターやって」

「何サラツと混じってんだお前、別にいいけどさ」

という訳でたえのリクエストにより引き続きギターを弾くことになった…ウニラーとしてギターと言えばGodspeed、Godspeedと言ったらGate of

fate

これしか無いだろ（偏見）

「今のは何？」

「何とは何？普通に音ゲーの曲だけど」

「へえ、やつぱ幸貞つて凄いな」

「ではキーボードも弾いてみて下さい！パレオの物を使っているのよ！」

「またやるの？次はキーボードかあ……まあ無難に（？）World Vanquisherでいいか、うんそれがいい」

「まあ俺の好みですけどね、ドイツ人でも良かったけどやつぱバンキシャかな」

「……マジで何でも出来るのな」

「これでも天才の端くれなんぞな」

「端くれねえ……そんな枠組みで収まると思っているのかしら」

「そりゃあ、俺以上の天才が身内に居るからな……アイツらと比べたら端くれもいいところ」

「Really？アンタより出来る人間が居るなんて思えないんだけど」

「いやいや、アイツらの方が出来てるよ……やる事成す事、人間性もな」

「……まあ、アタシは深く聞かねえよ」

「存外に察しが良いなマスキング、人間誰しも黒い部分は持っているものなんだよ」

「……佐藤ますきだ、マスキングはチュチュが勝手に付けた」

「そいつは御丁寧にどうも」

どうもこの娘は不良少女じゃないらしいな、まあロングスカートにスカジャンとかいつの不良だよって感じだな

だけど着てるスカジャンの背中に刺繍された可愛らしいウサギがまたなんとも……ギヤツプがエグいつす

さて、学校では文化祭もある訳だ……色々とやる事があるな、面倒臭い

## 46話

文化祭の準備も着々と進んで来ている、て言うか開催日って何時だったけ

「という訳で導寺峠さん、これは貴方の工程表です」

「今年もですかそうですね」

「男子生徒は三人しか居ませんから、予定を組まないで引つ張りだこかサボる人もいますので」

「裕次君はモテモテだねえ、羨ましくないけど」

「喜んで下さい導寺峠さん、貴方もこんなにモテモテなんですよ」

「嬉しくないんで結構です」

そんな感じで氷川先輩から工程表（強制）を貰った、なんてこったパンナコッタ…予定がぎつしりじゃねえかコノヤロウ

「あーはいはいやればいいんでしょやれば」

「ええ、サボる様なら今井さんに言いますので」

「又それですか…別にいいですけど」

そんな訳で工程表によると最初は三年生から手伝う事になっている

そう言えばピンク頭も女王様も三年生か…そしてりみちゃんのお姉さんことゆりさんは留学か、てか留学って凄いな

「あ！幸貞君きた！」

「どうも丸山先輩、今年は何んの出し物をするんですか？」

「今年はメイド喫茶なんだ」

「随分と在り来りなのを選びましたね、女王様のメイド姿か…：属性を付けるならドSだな、て言うか支配する側じゃねよくよく考えれば」

「あら、何かしら幸貞君？」

「いえ別に、特に変わったことはありませんよ女王様」

背後に立たないで頂きたい、刺されそうで怖いから

後ろへ振り向くと満面の黒笑を輝かせた女王様が立つておられた

「どうも女王様、丸山先輩とはまた隣のクラスですか」

「ええそうよ…それより、幸貞君がここに居るって事は今年も紗夜ちゃんに引つ張り出されたのね」

「不本意ながらそうですよ」

「でも幸貞君が居てくれるとすぐに終わっちゃうからすごく助かるんだよね！」

「そりやどうも丸山先輩」

「それじゃあ高い位置の飾り付けとかお願いしていい?」  
「了解です」

ぱつぱと終わらして帰りたい……あつ、次たえのクラスや

しかしメイド喫茶か……あれ、去年ウチやらなかったつけ……しかも弦巻家から借りてきたガチモンのメイド服使ったような気がするけど

「あ、あの……幸貞さん、これもお願いします」

「へーい……あれ? 隣子ちゃんって丸山先輩と同じクラスでしたつけ?」

「そうです……幸貞さんは今年も、氷川さんにお問い合わせされたんですか?」

「お願いっていうか脅迫っていうか」

「ま、まあ……去年と同じ、ですね」

選択肢が二つある様に見えて実質的に答えが一つしかないモノはお願いとは言わな  
い、お願いしている皮を被った命令だね

そもそも  
抑々、何故リサに言いつけるといふ答えに至ったのやら……まあ傍から見れば確かに俺  
の保護者はリサみたいなどころはあるけども

「あ、幸貞さん……少し、お願いがあるんです……」

「お願い、と言いますと」

「今回の文化祭は、羽丘と合同で行う……という事は知っていますか?」

「まあ天災から直接聞きましたし、リサからも聞きました」

「それでなんですが、羽丘に持っていく物があるんですが……その荷物が少し重くて……幸貞さんに頼めたらな……って」

「ああ、成程……まあ別にいいですけど、その辺は氷川先輩に聞いてみないと」

俺の工程管理してるのあの人だし、まあ羽丘に届けに行く間は合法的にサボってるも同然だしいいか……二駅だけど

「あ、幸貞くん！これちよつとお願いでいいい〜？」

「なんだピンク頭、ちよつと忙しいから待っててくれますかね」

「うえーん！幸貞くんがいじめめるよ隣子ちゃん！」

「お、女の子に意地悪はダメですよ……！」

「善処しましょう」

さてと、取り敢えず氷川先輩を探して聞いてみますか

と思つてたけど割と早く見つけました

「羽丘に届け物ですか……分かりました、導師峠さんの分は何とかしますので白金さんの依頼をお願いします」

「了解です、まあなるべく早く帰ってくる気ではいますけど……アツチには貴女の妹様がいらつしやるんでね」



「はあ……日菜がすみません」

「別に氷川先輩が謝る事じゃないと思います……取り敢えず行つてきます」

荷物は生徒会室にあるみたいなんで取りに行く……だが何だろうか、すごく厄介そうな気配が生徒会室からプンプン漂つてくる

あんまりこの扉開けたくないな……ええいままよ

「あゝ!! 幸貞くんだー!」

「何でお前が居るんだよ……よう有咲、羽丘に持つていく荷物取りに来たんだがどれだ?」

「燐子先輩が言つてた助つ人つて幸貞だったのか……ここに置いてあるダンボール全部だよ」

「これはまた多いな……それなりに重いし」

「何往復がするつもりだけど……手伝いの方は大丈夫なのか?」

「まあこつち優先でいいと氷川先輩は言つてたから、いいんじゃないか? それに荷物を届けてる間はサボつても怒られないから俺としては役得なんだが」

「ブレねえなホント」

「当たり前だ、俺は俺でしかないからな」

すると嫌に静かだったお星様突如机をバン! と鳴らしながら立ち上がった、急に音を

立てるなよビックリするだろ

「……………ああ！そうだ幸貞くん！幸貞くんって歌詞作りしたことある？」

「急に立ち上がったと思えばまた唐突だな……………歌詞作り、した事ないな……………基本的に俺が作る音楽はボーカル無いからな」

「え？お前曲作るの？」

「ああ、まあ今は作ってないが昔趣味で少しな」

「へえ〜そうなんだ！どんな曲作ってたの？」

「端的に言えば音ゲー曲のアレンジ、これがまたよくウケたんだよなあ」

今も偶に音ゲー曲を勝手にアレンジしてみたりはするが自分の中だけに留めてる、あんまりDJ MEGAだった自分の全盛期を思い出したくないから

黒歴史とまでは行かないけど若気の至りってのは怖いなあ

「と言うか、何で急に歌詞作りの事なんて聞いてきたんだ」

「今度のライブに新曲を歌おうと思ってるんだけど、みんな忙しそうだから今回は私が歌詞を作ってみようと思ったんだけど……………難しくくて〜」

「いつもは誰が作ってるんだ」

「いつもはおたえが作ってるんだけど、おたえは今修行中だから私が頑張ろうと思って  
！」

「ふーん、修行中ねえ……まあ頑張るのもいいが張り詰めすぎんなよ、取り敢えず俺はこれ運ぶか」

「え、一人で行くつもりか？」

「ん？だつて箱は全部で5つだろ、片手に3個と2個を持てば往復せずに済むぞ」

そう言いながら箱を上に乗ね、3個持上げる

まあそこそこ重いがバランスさえ崩さなければ苦にはならない程度だな

「……これ結構重いんだけど」

「まあ男子と女子じゃ筋肉量が違うからな、じゃあ俺はもう行くがこれだけで大丈夫か

？」

「あ、ああ……うん、大丈夫だ」

さて、じゃあさつきとこの荷物を羽丘にお届けしに行きますか

そんな訳で電車を使いえつちらおつちらと向かう………そして到着しました、早い

？気にすんな

こつちはこつちで準備にで忙しそうだな

「で、この荷物はやつぱ生徒会室に運ぶものだったのか……」

「やつほーユツキー！ユツキーが羽丘に居るっていうのもなんかるんっ！てくるね！」

「俺は全然こないな」

「ゆ、幸貞君それ一人で運んで来たの？」

「ああつぐみちゃん、この量で何往復するのも馬鹿らしいからな」

「この量って…そこそこあると思うんだけど」

「気にするな」

して、荷物も届け終わったし俺はさっさと帰りたのだが…この天災が帰してくれ  
るのやら

まあ帰してくれないなら帰してくれないでここに居座ってサボるけどな

「じゃあ俺はこれで帰るぞ」

「あ、待つてユツキー…これから文化祭ライブの公開リハやるんだ、折角だから見てい  
てよー」

「誰が出るんだそれ」

「えつとね…リサちーと彩ちゃんに花音ちゃん、モカちゃんにつぐちゃん！」

「ふーん…見事にバイトしてる娘が揃ったな」

「流石ユツキーそこに気がつくとは！だからバイトの応援ソング歌うんだつて〜！」

「成程…まあ聞くだけ聞いていこうかな、どこでやるんだ」

「あつちの講堂！」

「…いつに道を聞いたのが悪かったな、羽丘なんて来た事ねえのにアツチとか言われて

も分かるわけないだろ……まあいいや適当に歩いていけば見つかるだろ

「……と、こんな所で会うとはな銀髪美少女」

「貴方その呼び方がいい加減どうにかならないの……それに何故ここに？……ああ、文化祭の準備」

「ビンゴ、まあそんなところだ……ところで講堂がどこにあるか分かるか？」

「講堂ならその道を真っ直ぐ行けばあるわ……それじゃあ、私は帰るわね」

「どうも、お疲れさん」

友希那に教えて貰った道を歩いて行くと人だかりができてるのが見えてきた……アレだな

あの集団に紛れる度胸はないわ、もう少し人が掃けたら入るか

さて、入れたはいいけどどこに行こうかな……こんなに女の子達が居るとマジで居ずらいな

「あ、幸貞……荷物運びお疲れ様」

「おお沙綾……にポピパ達か、何で居るんだ？」

「幸貞が行ったあとに追加で荷物が来たんだよ、それで届けに来たら公開リハやるとか言ってたからな……見ていこうって香澄がうるせえから」

「え〜！有咲も見たそうにしてたじゃん〜！」

「あ、アタシはそんな事思ってたねえかな〜！」

「はいはいツンデレ乙、そういう事ね……たえはどうした？」

「サポートギターで行ってるバンドの練習だつてさ、ライブが始まるまではずっとあるみたい」

ふーん、ネコミミヘッドフォンの所か……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～  
てか普通に忘れてたけど俺もまた来いって言われてんだつたな、面倒臭いしバックレ  
ようかな……：：：：：それはそれで面倒だから止めとくか

「あ、始まるみたいだよ」

「みたいだな……断言しよう、丸山先輩は必ず噛む」

「嫌な予言しないであげてよ」

「これは予言じゃない、今から起こりうる事実だ」

ほら噛んだ、まあ愛嬌があつていいんじゃない（適当）

しかしこう見るとすごい揃つてるな、アフグロにRoseliaにハロハピにパスパレか……まあ上手くやつてるみたいで何よりだが

「ライブよかつたね〜！」

「うん！ 私達も文化祭ライブ頑張ろうね！」

「あと主催ライブもだかんな」

「流石有咲〜！」

「抱き着くな！」

「じゃ俺は帰るぞ、お前らも程々に頑張れよ」

「うん！ 幸貞くんも主催ライブ来てね〜！」

あんだだけ元気があれば多少は大丈夫だろうが……問題はたえか、まあ本人はポピパはちゃんと続けるとは言っていたが

レイヤだっけか、あのクールっ子……確か幼馴染だったな、一緒にバンドやつちやうと何かしらあるんじゃないかな

まあ俺が気にしてもしようがないし、後は成るように成るだろう……こんな事俺が考  
えたってどうにもならないしな



## 47話

「ようネコミミヘッドフォン、また来たぞ」

「アンタその渾名どうにかならない訳？」

「他にないくらいお前にピッタリな渾名だと俺は思うんだが？」

「どこがよ！……もういいわ、今日も頼んだわよ」

「はいはい」

そんな訳でネコミミヘッドフォンに今日もデスクトップミュージックを教えていく……流石に飲み込みが早い、最強を作るとか言ってるだけはあるな

「なあ幸貞、お前確かチョコ系等のケーキ好きだったよな？」

「おうビックリするから唐突に声掛けんでくれるかますきさんや、確かにそうだけどもうしたんだ急に」

「いや、これお前にと思ってたな」

「おおガトーショコラ……これどうしたんだ、態々買ってきたのか？」

「いや、アタシが作った」

「ふーん……え、作ったの」

「……なんだ、文句でもあんのか？」

「いや全然、取り敢えず頂きますわ」

うん、美味しい（ガチトーン）

本当に美味しいなこれ……やっぱ、人は見た目で判断しちやいけないんやな

「どうだ？」

「美味しいぞこれ、クオリティ高いな」

「……………そりやどうも」

「あらあら、マスクングさんが照れてますよ」

「うるせえ」

おお、珍しくカラフル頭の娘がますきをからかいにきたな

しかしいつ見てもこの娘すごい髪の色してるよなあ……ツートンカラーでシマシマって、どうやって染めてるんだそれ

香澄もそうだが、不思議な頭してる娘多いよな……二重の意味で

「男の人にケーキを振る舞うのは初めてなんですかー？」

「おい、うるせえぞ」

「その辺にしてやれよカラフル頭、そろそろますきさんの堪忍袋が爆発するぞ」

「アタシはそんなに短気じゃねえよ」

「私はカルフル頭じゃないです〜！パレオです〜！」

「はいはい鳩原れおなちゃんごめんなさいね」

「幸貞さんって絶対私達をあだ名で呼んでくれませんよね〜、何ですか？」

「何でと言われてもなあ、気分としか」

「私の事パレオって呼んでみてくださいよ、もしくはチュチュ様でもいいですよ」

「ようネコミミヘッドフォン、調子はどうだ？ダメそうだなそれじゃあ綺麗な音は出ないぞ」

「うっさいわ！パレオ！こいつに私の話題を振るんじゃないわよ！絶対皮肉で返してるんだから!!」

「ご、ごめんなさいチュチュ様〜！」

皮肉とはなんだ、俺は優しきで教えてやってるのに…このネコミミにはその有り難さが分からないのか

これぞまさに猫に小判ってやつか……………我ながら寒いな

「いいからさっさとそのキー直せ、それでもつかい聞き直してみろ」

「ぐぬ…………分かったわよ」

「幸貞は相変わらずだね、でもチュチュを言いくるめられるのは幸貞くらいじゃないかな」

「お疲れ様レイ、まあこのネコミミヘッドフォンは自信家なだけあって実力はあるが俺程じゃないからな……まあ俺が教えてんだからお前の目指す最強の音楽ってやつは作れる様にはなるよ」

「頭を叩くんじやないわよ！……見てなさい、絶対アンタなんか抜かしてやるんだから」  
「楽しみにしてるよ」

「あはは、本当に仲が良いのやら悪いのやら……と言うか、幸貞は本当になんでも出来るね」

「何でもなんて出来ないさ……俺は俺の出来ることをやってるだけ、俺以上に出来る奴を嫌ほど見てきたからな……ま、俺も天才の端くれですからね」

しかし、この和奏レイという人物……本当によく出来た性格をしているよ……俺が自分の事を「天才の端くれ」という度に悲しそうな顔をする

だが敢えて何も言っていないだろうな、それを言ったところで俺が救われる訳じゃない事をよく分かっている

「よし、じゃあ、そのノリで私の事もおたえって呼んでみよう」

「ハナゾノ」

「むう、何で私だけそつちで呼ぶの……」

「そうですよーズルいですよー！私の事もパレオって呼んで下さいー！」

「ええい黙ってる頭不思議っ娘共め」

「頭不思議っ娘……それどっちの意味で言ってるんだ？」

「なあますき、お前はどっちだと思う」

「……………ノーコメント」

逃げたな見た目不良っ娘、まあ正解はどっちもだがな

因みに頭不思議っ娘の中にはネコミミヘッドフォンも入っているゾ

「あははは、本当……幸貞は面白いね」

「そいつはどうも」

……だからその悲しそうな目で俺を見るのはやめて下さいませんかね

「文化祭当日になりました、晴れました」

なんだその挨拶……そして最後はるんでしめるんだろ分かります

今日は花咲川と羽丘の初合同文化祭当日である……そしてスイレンの初ライブだったか

なんかネコミミヘッドフォンが友希那にチケット渡したけどブンカサイとかいうので行かないとか言った……て、喚いてたな

まあ友希那、猫カフェ楽しみにしてたし……多分自分が思ってる猫カフェと違うだろうけど

さて、そんな訳で文化祭始まりました

「ゆっきさっだくーん！一緒にまわろう！」

「おう元気だな香澄、まあ別にいいけどお前受付あるんじゃないのか？」

「あ！そうだった！」

「忘れんなよ……あと俺は午前中でいなくなるからな、クラスの出し物は任せたぞ沙綾」  
「私に投げるのね……でも午後からいなくなるって、どこ行くの？」

「どこぞのネコミミヘッドフォンに今日だけでもいいから来てくれって言われたんだよ、文化祭があるから嫌だって言ったんだが他の奴らからも頼まれたからな」

「ああ、おたえがサポートで行ってるバンドの……そうなんだ」

「そう……それまでなら付き合ってる、それに俺には行かない所がある」  
「行かない所？」

そう、それは3年A組……このクラスは猫カフェを出し物にしたらしい、あと分かってる人は分かっているだろうがこのクラスが誰のクラスか覚えているか？ 詰まりこういう事だ

「いらつしや……あ、幸貞」

「ようリサ、友希那……うん、似合ってるぞ」

猫耳を付けた我が幼馴染が二人並んでいた……いやー似合ってるよー二人共

しかし猫カフェに一票に入れた筈が、まさか自分が猫になるカフェだとは思わなかっただろうな

「なんかこう、それっぽい格好とかない？」

「ほほーん？ならこんな感じはどう？」

「あーいいねえそういうの、その銀髪美少女も同じ格好をしてくれたらもつといいんだがな」

「……いやよ、絶対」

「そうか、ならこうしよう……主催ライブの借りはこれで済ませよう」

「っ………そ、それは卑怯よ……幸貞」

「卑怯で結構、俺は外道の道を歩いてでもその写真撮る」

それが男のサガってやつだろう、相変わらずリサはノリノリでやってくれるけどな

そして友希那……いや、ゆきにやも渋々ながらリサの隣に並び……リサと同じポーズ……猫の手をして胸の前に寄せる、そして上目遣い

いやーこの構図は素晴らしいね、猫耳カチューシャを考えた人は天才だよ

「いい写真が撮れた、お疲れさん二人共」

「もう二度としないわ」

「どんな写真になった？……わくお、凄いねこれは」

「この写真どうしようか……何だったら *Rose lia* グループに流すか」

するとビクツツと友希那の肩が揺れた……まあ恥ずかしいもんねこの写真、写ってる姿

すら顔真つ赤つかだもん

久方振りにこんな友希那の顔みたな、眼福眼福

「………何が望みのよ」

「そんな外道を見る様な目でヒロインが悪役に負けた時の台詞を吐くなよ……まあ外道なのは否定しないけど」

「あははは、なんかホントに幸貞って悪役みたいだよね……」



「よしそんな事を言う悪い猫達は俺が撫でてやろう」  
「うにゅっ!？」

友希那とリサの頭をわしつと掴み、わしやわしやと撫で回す  
ちゃんと髪が乱れないように気を付けながら、そしてコイツらが気持ちいいように撫で回す

よし、俺も満足した

「じゃ、頑張れよお前ら」

「う、ん……じゃあ、また……幸貞」

教室から出る前にクラスの先輩に声を掛けられた

「あ、あの二人ふにやふにやになってるけど大丈夫?」

「まあ大丈夫じゃないですかね、そのうち元に戻ると思いますよ」

「……リサちゃんの言ってたな年下の幼馴染って君だったんだね、本当に仲良いね」

「そう見えましたか……まあ、腐れ縁もいとこですからね」

さて、ここで時間を潰していたらそろそろいい時間になつてきたな……俺と出るか  
廊下を歩いていると、ふと見知った顔が横を通り過ぎた……ゆり先輩、帰国してたのか

その他にもグリグリだっけか?その先輩達が居た……そしてあの先輩に唐突に肩を

掴まれ捕まった

「おお!?その横顔は、ダークマター、幸貞君だな!!」

「あべしつ……よく分かりましたね、ひなこ先輩」

「わっはっは!どうだ凄いだろ!」

「へーへー……ゆり先輩も帰ってらっしやっただんですね」

「うん、これから香澄ちゃん達にサプライズしに行くんだ」

「ほーう、それはまた……まあ俺はこれから少し用事があるんで学校から居なるんで、今挨拶できてよかったです」

「え?そうなの?」

「ええ、少し頼まれ事がありましたね」

「そっか……君ともゆっくり話したかったけど、残念」

「すみません、では俺はこれで」

「今のがゆりの気になってた後輩って子？中タイケメンじゃない」

「別にそういう意味で気になってたって訳じゃないからねリィ……りみが男の子を話題に出した事が珍しくて気にかけてただけだよ」

「ふーん？……まあいいけど」

「乙、温まつてるかお前ら」

「なんだかんだ言つて来てくれる幸貞さん…私大好きですよー!」

「はいはいそうですか…ネコミミヘッドフォンはどこ行った」

「チユチユなら会場で準備してるよ、手伝つてきてくれないか」

「まあその為に来た様なもんだしな、そりや行くよ」

「ああ、頼んだよ」

と言つたものの、会場の準備はネコミミヘッドフォンが済ませてるんじゃないのか？

まあ二人で確認することも大事だしな

会場に着くとネコミミヘッドフォンが最終確認らしきことをやっていた

「よう、出来栄えはどうよ」

「やつと来たわね…出来栄えは完璧よ、ライトも音源もステージも…あとは私達が最

強のmusicを奏でるだけよ」

「そうですかい…それで、何で俺を呼んだんだ」

「アンタには照明と音響の最終確認をして貰いたいのよ、ハナゾノから聞いたわよ…R

oseliaの会場設営はアンタがやったらしいじゃない」

「まあな…幼馴染から頼まれればやってやるのが幼馴染つてやつよ」

「アンタ…本当に何でも出来るわね」

「俺は俺が出来ることしかやってないよ……それが多いか少ないかなんて誰かが決められる事じゃないだろ、俺への頼み事はそれだけか？ならさっさと終わらせるぞ」

## 48話

「もう最高だったわ！ perfect！それ以外の言葉は要らないわ！」

「ハイハイ凄かった凄かった」

「私達RASの初ライブに相応しいライブだったわ！」

「おーそりや良かったな」

「……………なんかお前、機嫌悪いか？」

「別にいい？機嫌はよろしゅうございますけれども何か」

「それ絶対嘘だろ…………」

別にいい？アンコール2回も受けるなんて聞いてないからって怒ってないですしい？  
無駄に俺の仕事を増やすんじゃないやねえよとか思ってますんしい？

「それよりたえ…………お前明日間に合うのか」

「……………間に合わせる」

「あつそう…………まあ好きにしろ」

俺は明日コツチに来る積もりはサラサラない、呼ばれようが何しようが絶対にこつちには来ないということ全員に話してあるから大丈夫だろうけど

まあたえが間に合うかどうかとも正直な話、俺には関係ないんだがな

さて、という訳で文化祭二日目は一日居られるゾ

と言つても特に見て回るものも無いし、適当にフラつきますか  
「おお、幸貞君はつけくん」

「あらゆる先輩、昨日ぶりですね」

「昨日のお仕事はどうだった？上手くいってた？」

「上手くいきましたよ、俺が行かなくても大丈夫そうなくらいに」

「そっか……今日は一日いられるの？」

「はい、折角の文化祭ですからね……二日目は一日参加するから絶対に行かないと断つてきましたから」

「良かった、じゃあ今日はゆっくりお話できるね」

ゆっくりお話できますね……一体なんのお話するんですかね、て言うか俺ゆり先輩とそんなに仲良かったっけ

りみちゃん経由で知り合って少し話したただけだと思っただが……まあいいか、ゆり先輩美人だし

「それに今日は学祭のライブもあるから、見れてよかったね」

「ああ、そう言えば……今日でしたね」

「ライブは午後からだから、午前中は私に付き合ってたね」

「勿論構いませんよ、俺も暇ですし」

そんな訳でゆり先輩とキャツキャウフフ……はしてないが、世間話をしながら屋台を歩き回った

所々ゆり先輩が奢ってくれたので、お返して俺も奢り返したりした

「おや、旦那様じゃないか」

「随分と久しいなアリア……また有志か」



「旦那様も一つどうだい？……おや、隣の女性は？」

「ああ、このOGだよ……今は海外留学してるんだが帰国中なんだとよ」

「成程……では二人分だ、受け取ってくれ給え」

「ハイハイどうも……すっげえなこの肉」

凄く高そうな肉（小並感）が入ったスープを貰った……なんかゆり先輩が固まったまま動かないので取り敢えず呼び掛けてみる

「ゆり先輩、何固まつてるんですか」

「……あつ……ご、ごめんね幸貞君……なんか凄いオーラの人を目の当たりにして固まっちゃった」

「凄いオーラの人……此奴がねえ……なあ、少し思ったんだがお前は許嫁が他の女性と歩いていて良いのか？俺が言うのもなんだがさ」

「別に構わないさ、それだけ旦那様が魅力的という事なんだろう？僕としても嬉しい限りさ」

「え、許嫁……？」

「ああ、此奴と俺は許嫁なんですよ……まあ俺は認めた覚えはないんですがね」

「許嫁ってまだあるんだ……」

て言うかアリアのポジティブシンキングは凄いな……その発想に行き着くとは、流石

と言うか何と言うか

さて、取り敢えず貰うものは貰ったしそろそろ行くか

「じゃあなアリア、またどこかで会えたらな」

「ああ、勿論さ…僕は旦那様の居る場所へなら何時だつて行こう」

「や、来なくていいです」

「嗚呼っ…！久々の辛辣な返し、身に染みるよ……！」

ダメみたいですね

早いとこ立ち去ろう、長居してもゆり先輩に悪影響だな

「いやはや、なんかすみませんねゆり先輩」

「いやいや…ちよつとビックリしたけど、なんか刺激的だったよ」

「なら良かったですけど…：…なんか時間もいい感じになってきましたね、そろそろライ

ブが始まるんじゃないですか」

「そうみたいだね、じゃあ講堂に行こうか」

さて、講堂にやってきたがまあ凄い人が居る

確かポピパの前はバイト組だっけか…：…トリだが、たえは大丈夫か？

昨日の様子からじゃアソールは二回以上受けてもおかしくはないと思うんだがな、それだと間に合わないんじゃないか

「……ゆり先輩、すみませんが少し裏見てきますね」

「え？う、うん……何かあったの？」

「いえ……まだ何も起きてないと思いますが、起きそうな気がして」

「……うん、分かった……何かあったらあの子達を助けてあげてね」

「……分かりましたよ」

ステージの裏方へと向かう、そこには燐子ちゃんと天災<sup>日災</sup>……そしてたえの居ないポピパ  
がいた

まあやはりと言うか……まだ来てないのか、そろそろバイト組の曲も終わるぞ

「よう、問題発生か」

「あ、幸貞……うん、おたえからまだ連絡が来ないんだ」

「おーおー……だと思っただよ、そろそろバイト組が終わるぞ……どうするんだ」

「おたえが来るまで待つてもらおうとか！」

「いつ来るか分からないのにー？」

「まあ天災の言う通りだな……まあ、ある程度なら伸ばせるかもな」

「じゃあ時間稼ぎしなきゃね！行ってくるー！」

「わ、私も……！」

でも時間稼ぎするって言ったって、丸山先輩にトークを任せるのはちよつと……囁ん

で愛嬌を出して伸ばせるだけ伸ばすか（ゴリ押し）

「あ、あのっ！私もなにか手伝えないでしょうか！」

「ん？……ああ、君は確か…朝日六花ちゃんだっけ？」

「は、はい！ライブハウス以来です！」

「何かって言われてもねえ、ていうか俺に言われてもねえ……朝日ちゃんって何出来る」

「はい！ええと…ギ、ギターが出来ます！」

「ほう、成程……そこそこ出来そうだな…よし、ギターパフォーマンスは出来るか？」

「できます！」

「OK、じゃあギター持ってステージ出て…あんまり待たせると丸山先輩のキャパがオーバーしちゃうから」

「分かりました！」

さて、これで1分と少しはもたせられるな……その後はどうするかな、我が幼馴染に頼むか…やってくれるかなー友希那

頼めばやってくれそうな気はするけど……リサにもお願いするか

「さあさあ耐久戦はこれからだ、どこまでいけるかなあ」

てか朝日ちゃんのギターしゅごい……ちよつと甘く見てたわ、ごつつ上手いやんけあの娘

「リサ、少しお願いがあるんだが……」

「大丈夫だよ幸貞、分かってるって」

「……そうか」

「うん、大丈夫……幸貞、あんまり張り詰め過ぎないで」

「……張り詰めてる積りは無かったんだがな、急かしてるみたいで悪かったな」

「ううん、そうじゃないよ……無理し過ぎないでね」

「へいよ、善処しまする」

幼馴染にはなんでもお見通しってか、別に無理してる積もりも無いんだがな

朝日ちゃんのギターパフォーマンスが終わるとアンコールの嵐が巻き起こる……あら

あら、目を回しちゃってるよ

と、あこちゃんとは隣子ちゃんがスタンバってるな

「じゃ、アタシも行ってくるね」

「悪いな、頼んだ」

「アタシ達に任せなつて」

そう言つて笑いながらステージへ出て行く……幼馴染には敵わんな、全く

友希那と氷川先輩も出て来てくれた……よし、これで3分はもたせられる……これで来なかつたらどうするか

「沙綾、たえからはまだ連絡は来ないのか」

「うん……まだ、来ないかな」

「そうか……」

「……ねえ、幸貞……もし、おたえが来なかったら……」

「さあな、俺に聞くな……俺がどうにかできる問題じゃないだろ」

「そう、だよね……ごめん」

Roseliaの曲もそろそろ終わるな……まだ相変わらずたえからは連絡が来ない、か

さてはて、どうしたもんかな

「ユツキー……」

「……なんだその目は」

「ここにピアノ付きDJブースがあるんだけど……」

「なんであるんですかねえそんな物……何、俺にやれと」

「お願い！ユツキー！」

「ええ……（困惑）」

「幸貞……お願い」

「幸貞くん……」

「……………分かった分かったやればいいんだろやれば……………4曲だ、『掴み、中、ラストスパート、フィニッシュ』言つとくが会場の雰囲気からしてそれが限度だ」

「ありがとう、本当にありがとう…幸貞」

「俺はお前らにとつて最高の終わり方も最高の始まり方も用意してやる、それを活かすかどうかは……………まあたえ次第だな」

さて、じゃあ行きますか……………Rosealiaが終わり会場が沸く

いつものピエロ仮面を持ちステージへ出る…中曲は長くしてやるか、そこだけで5分くらいは稼げそうだ

「……………あら、貴方も出るのね…幸貞」

「ああ、お疲れさん友希那…取り敢えず引き延ばせるところまで引き延ばすよ」

「……………そう」

さあ、ダイジェストの時間だ

混沌を越えしプラスターに希望と涙を添えるゾク（怒槌）このFinite、電撃イ！終焉、FDいいっすか？ドイツ人だからinfernoのリトハにぶち込んでやるぜーいきなり炎上してすみません！神威してください！ガラクタシminor！（Original Remaster）

Climax

最強STRONGER

中曲長くするって言ったよなあ？当たり前だなあ？

混沌（以下略）だけで4分48秒も稼げたゾク、さて…これでもたえは来れないか  
「……ふう、やれるだけはやったさ……これもまた一つの経験だろうさ」

「……ごめんね、幸貞」

「別にお前が謝ることじゃないだろ、誰が謝ることじゃない……これも一つの経験だ」

沙綾の頭をぼんつと叩き、俺はステージから出て行く……ここから先は俺の出る幕じゃない、彼女達が解決すべき問題だろう

裏方の道を歩いていると、ゆり先輩が居た

「……ポピパ、出来なかったね」

「バンドの掛け持ちなんて上手く行くとは思いませんがね……まあ、こういうのも経験しておいて損はないと思いますけどね」



「何だか幸貞君は、いつも大人だね」

「さあどうでしょうね……大人と言うよりは、じじ臭いだけだと思いますよ」

「……でも、そんな君だから私は少し心配かな……何でもかんでも一人で抱え込んでい  
そうで、それでいて黙っていいそうで」

「心配される程、弱々しい精神はしてないですよ……それに面倒事を抱え込むなんて事、  
態々しませんからね」

「……だといいんだけどね……私はこれで帰るよ、ポピパの子達にヨロシクね」

「はい、またいつか会える日まで……」

何でもかんでも抱え込む……ねえ

1人で解決できやしない事を抱え込むなんて無責任な事しませんよ……俺は俺の出  
来る範囲のことをやってるだけですよ

出来ない事を率先的にやれる程、俺は出来た人間じゃない

## 三周年記念

おはよう諸君、突然なんだが一つ聞いてもらいたい事があるんだ……朝起きてら何故か布団が膨れ上がってるんだ

何を言ってるか（ry

もう何回目だろうね……そろそろ俺も疲れたんだけど

「おはようさん、いつになったら俺の布団に潜り込むのを止めるんだ……友希那」

「貴方が私に振り向く日までよ」

「生憎と永遠に訪れないな、その日は」

「なら私も永遠に続けるわ」

平行線って怖いな、でも俺は折れんぞ

俺の幼馴染である銀髪美少女こと湊友希那……何故だか知らないがどうも俺を振り向かせたがる

別に誰を好きになろうが知ったこっちゃ無かつたんだが、まさか今の自分になるとはな……絶対やめといった方がいいと思うよ

「はあ……休みの日だったのに無駄に早く起きたな」

「ところで幸貞、貴方今日も暇よね？」

「今日も言ったな貴様、それは聞き捨てならんぞ……まるで春休み中俺が暇人の様に過ごしているかのような物言いだな」

「事実じゃない」

「確かに外へ出掛けてはいないが暇人ではない、俺も俺でやる事はあるんだよ」

「ゲーセンとか家でゲームとか吐かしたらキスするわよ」

「いやーキツいっす」

という訳で友希那と出掛ける事になりました

晶奈にそれを言ったらサムズアップしてきたので取り敢えず蹴り飛ばしておいた

休みの日なのに家の外へ出るなんて……何でそんな事しなくちやいけないんですか

「それで、どこ行くんだ」

「(い)いよ」

「何のチラシだそれ……ほう、猫カフェが近くにできたよ」

「ええそうよ、一度行ってみたいと思ってたの」

まあ貴女猫好きだもんね、ていうか一人で行ってきたら？そんな事言ったら怒られ

ちやうだろ (自問自答)

別に俺ついて行かなくても良くないか……もういいや

「にゃーちゃん……」

「おーおー相変わらずだな……こここの珈琲美味しいな」

めっちゃモフモフしてますやん幼馴染さんや……しかしいつもああ感情豊かならもう少し友達も増えるんじゃないか

「でも友希那あなつちやうと止まらないからね、それはそれで制御が難しいかも」

「かもな……で、何で居るんだねリサさんや……と言うかナチュラルに心読まないでくれ  
ます」

「幸貞が何考えてるかなんて大体分かるよ……てか出掛けるならアタシに声掛けてくれて  
もいいじゃん、水臭いなあもう」

「それは友希那に行ってくれ、と言うか何で分かった」

「昨日から友希那がすっごいソワソワしてたから簡単に予想がついたよ、それにここに  
猫カフェができたことは知ってたし」

「流石は幼馴染さんですな、お見通しですか」

「まあね……このコーヒー美味しいね」

「おいそれ俺の珈琲、まだ半分くらいしか飲んでないのに……まあいいや、もうやるよそ  
れ」

「流石に幼馴染とは言え女の子が口付けたカップを使う気にはなれん……てかコイツ

よく俺の使ったカップ平然と使えるな、本当によく分からね

「あらしサ、いつの間に……」

（私はリサを呼んだ覚えはないのだけれど？）

「友希那が猫と戯れてる間にだよ」

（友希那だけに抜け駆けさせるとは訳ないじゃん）

「なんか目線で別の会話してるなこの二人……まあ何話してるかなんて興味は無いけど」

この娘達たまに目線で会話し始めるからこれもう分かんねえな

「おん？メッセージか、誰からだ……燐子ちゃんからか」

「幸貞、誰からのメッセージよ」

「幸貞く？アタシが居るのに、他の子から来たメッセージなんて見てるのかなあ？」

「うおつ、ビックリするから急に近くに現れんといて」

友希那は俺の膝に顎を置き、リサは俺の背後から肩に腕を回して頭に顎を乗つけてきた……お前ら距離が近いんだけど

「それで誰からよ」

「燐子ちゃんからだよ……なんか今暇かって聞かれたただだよ」

「燐子……ふうん、それで何で答えたのよ」

「勿論暇じゃないって返したよね？」

「え何その庄は……幼馴染二人に捕まってるから暇ではないって返したよ、今は返信待ちかな」

「ふむ宜しい」

お、返信返ってきた……今どこにいるか？近くに出来たって言う猫カフェに来てますよ……つと

しかし何で唐突に居場所なんて聞いてきたんだか

「幸貞、もしかして隣子に場所教えた？」

「何で？」

「今隣子からメッセージ来たんだけどね、笑顔の顔文字に今から行きますってだけ来たからさ」

「え何それは、怖」

すると猫カフェのドアが開く音がした、隣子ちゃんってそんなに早く移動できたっけ？そんなまさかね

と思っていた頃もありましたよ、何故かニッコニコの隣子ちゃんと若干青ざめ気味の幼馴染二人

何これ

「あ、幸貞さん……こんにちは」

「ああ隣子ちゃん、何か機嫌悪い？」

「いいえ、悪くありませんよ？」

「そう……まあ、ならいいけど」

「幸貞さん、これから少しお二人とお茶をさせていただきます……宜しいですか？」

「別に構わんよ俺は……じゃあお先に帰るよ」

代金だけ置いてそそくさと逃げてきた

何せ幼馴染二人の顔が真つ青になってるし、視線は窓の外に逃げてるし……何か隣子ちゃんの雰囲気怖いし

あの場に留まる理由が全く無い

よし、パンでも買いに行くか

「いらつしやいませ……つて、幸貞か」

「俺で悪かったな」

「あはは、ごめんごめん」

何パンを買おうかな……ピザパンにガーリックトースト、照焼チキンなんていつの間  
に作つたんだ

この辺を買っていこう

「相変わらずカロリーの高そうな物ばかりだね……」

「いくら摂っても身についてるんだから分らないんだよ」

「今の言葉は全ての女子を敵に回したよ……はいこれお釣り……と、オマケね」

「オマケ?……チョコパンか」

「うん、新作を作ってみようと思つてね……少し装飾とかしてみたんだ」

「へえ……この葉っぱか?」

「そうそう、なかなかいい感じじゃない?」

「まあ悪くは無いな……有難く貰つておくよ」

さて、家に帰つて食べるとするか



「あ、おかえりー…早かったね」

「ああ、なんかよく分からんけど用事が出来たみたいでな…先に帰ってきた」

「ふうん、そうなんだ」

「……晶奈、何ニヤニヤしてんだよ」

「べつつにいく？」

「折角お前にパンを買ってきてやったのに、残念だがこれは全部俺が貰うとするか」

「ごめんごめんって!! 謝るからパン頂戴く!!」

本当ガリーリックトースト好きだなコイツ

俺はピザパンと照焼チキンを食べるか…あと沙綾からオマケで貰ったチョコパンも

あつたな

「……ん?そのパンどうしたの」

「ああ、なんかオマケで沙綾がくれたんだ…新作を試したただかなんだかで」

「へえ……まあ、なんて言うか…頑張りなよ幸貞」

「は?なんだよ急に………あつ(察し)」

この葉っぱアイビーじゃないですかヤダー……いやーキツイっす(本音)

なんやろね……何でこんな………もういいや(諦め)

もうどうにでもなれと思いつながらパンをヤケ食ひした

パンを食べながら少し考えていた……何時からこんなガツツガツに来るようになったっけ、アイツら

全然覚えてないんだけど……てかガツツかれる理由も分からないんでがそれは

「……………何だよ晶奈」

「ん？全く分かってない様な顔してたから」

「サラツと人の心を読むの止めてもらいませんかね」

「姉弟なんだから大体分かるわよ、ひとつづ教えてあげる……貴方が例えそう思っていないくても、相手からしてみれば捉え方が違うかもね」

「そう言うもんか……まあ、価値観が違えばそうなるか」

「この一言だけで察せるなら苦労しないと思うんだよねえ、まあ貴方そういう性格だししょうがないか」

「ただいま、何の話してるの」

「幸貞が面倒な性格してるって話」

「ああ、それ不治の病みたいなものだから諦めた方がいいわよ」

「言ってくれんな華蓮さんや」

私の幼馴染は不思議な人間である

高校生のくせに無駄に達観して物事を見ている様な、はたまたどこか諦観しているよ  
うな……正直全く分からない

友希那は友希那で何考えてるか分からない様に見えるけど、割と分かりやすい……まあ  
幼馴染だからって言うのもあると思うけどね

中学の時、友希那のお父さんが音楽を辞めてから少し経った時……幸貞に相談をした  
『リサか……珍しいな、電話掛けてくるなんて』

「ああ、うん……ちよつと幸貞に相談したい事があつて」

『相談？俺にか？止めといた方がいいと思うんだがそれは』

「幼馴染で友希那とアタシの事を知ってる人じゃなきゃダメなの……話だけでもいいからさ、ね？」

『……後で後悔するなよ、俺に相談なんて持ち掛けた事』

「あはは……それでえつとね……」

そこから今までであった事を幸貞に話た

友希那のお父さんが音楽を辞めた事、友希那が変わってしまった事……幸貞はまるで他人事のように相槌を打ちながら聞いていた

『へえ……親父さん、バンド辞めたんだな』

「うん、それで友希那も……アタシ、どうしたらいいか分からなくなっちゃって」

『別に特別することは無いだろ……寧ろ変に刺激して友希那が変な方向に行く方が怖いんじゃないか、励ましたい気持ちは分からなくないが下手に言葉を掛けるなよ』

「じゃ、じゃあどうしたら……」

『どうしたらって言われてもな……お前は先ずお前の事を考えたらどうだ、人の事を気に掛けるのもいいが自分のケアもしとけよ……先にお前が参っちゃまうぞ』

「でもっ……！今の友希那、見てられなくて……」

『はあ……そう、じゃあ友希那とは俺が話してこようか？』

「えっ……?」

『何だ、俺じゃ不安か……なら別にいいんだけど』

「あつ……う、ううん! 違って! め、珍しいなって思つて……幸貞がそんな事言うの」

『……まあ確かにそうかもな、唯の気紛れに過ぎないだろうけど』

でもそんな気まぐれが私にとっては……いや、私達にとつては唯一の救いだった

そこまで言うとは過剰と思うかもしれないけど、アタシにはそれぐらいの事だと思つて  
いる

幸貞なら何か友希那へいい刺激を与えられるんじゃないかと、どこか心の中で思つて  
いる

幸貞と電話をしてから数日経った日、友希那が少しだけ前の友希那に戻っている気が  
した

幸貞……前に、人の感情が嫌いだと言っていたよね……そんな捻くれてるそんなど  
うしようも無い貴方の事を……アタシは一番信用してる、一番想つてる、一番考  
えてる、一  
番心配してる

そして、一番愛してるよ……幸貞